東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 10

東京大学本郷構内の遺跡

教育学部総合研究棟地点
インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点

2011

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 10

東京大学本郷構内の遺跡

教育学部総合研究棟地点
インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点

2011

東京大学埋蔵文化財調査室

口絵１　教育学部総合研究棟地点　SU83 出土　「仁清」印水指

口絵２　教育学部総合研究棟地点　SU84

例　言

1．本書は、東京大学本郷キャンパス弥生地区内の教育学部総合研究棟、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．教育学部総合研究棟地点（本郷 18）（以下、「SK 地点」と略す）は、調査、整理時において、「総合研究棟（略称「SK」）」と称していた地点であり、既出の年報、論文などには「総合研究棟」または「農学部総合研究棟」と記載されている。本報告の作成にあたり、現在の施設名称である「教育学部総合研究棟地点（略称「SK」）」に改称した。

　また、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点（本郷 41）（以下「IML 地点」と略す）は、調査、整理時において、「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（略称「ベンチャー」）」と称していた地点であり、既出の年報、論文などには「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー地点」と記載され、出土遺物には「VBL」と注記されている。本報告の作成にあたり、現在の施設名称である「インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点（略称 IML）」に改称した。

3．両地点は、東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学本郷キャンパス弥生地区内に所在している。

4．両地点は、東京都遺跡地図「文京区 47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平] 住居・[近] 礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣 [旧][縄][弥][古][平][近]）」内に位置している。

5．各地点の調査面積は、SK 地点 1,007㎡、IML 地点 626㎡である。

6．各地点の調査・整理期間は以下の通りである。

ＳＫ地点

試掘調査	1993 年 4 月 28 日
事前調査	1993 年 11 月 18 日～ 12 月 28 日
整理作業	2008 年 10 月 7 日～ 10 月 14 日、2009 年 3 月 5 日～ 5 月 7 日、 2009 年 8 月 5 日～ 10 月 28 日、2009 年 12 月 24 日～ 2010 年 4 月 19 日
報告書編集	2010 年 4 月 5 日～ 8 月 31 日

ＩＭＬ地点

事前調査	1996 年 4 月 15 日～ 6 月 20 日
整理作業	2008 年 10 月 5 日～ 10 月 21 日、2009 年 3 月 3 日～ 3 月 18 日、 2009 年 7 月 28 日～ 8 月 4 日、 2009 年 10 月 29 日～ 2010 年 2 月 5 日
報告書編集	2010 年 4 月 5 日～ 8 月 31 日

7．両地点の発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は堀内秀樹である。

8．銭貨の分類・鑑定は、流山市立博物館の川根正教氏にご教示いただいた。

9．石材鑑定は、旧石器時代の遺物は伊藤恒彦氏、近世・近代の遺物はパリノ・サーヴェイ株式会社の石岡智武氏にご教示いただいた。

10．動物遺体は阿部常樹氏に依頼し玉稿をいただいた。

11．本報告の編集は、堀内秀樹、小林照子が行った。

12．執筆分担は以下の通りである

第Ⅰ章、第Ⅱ章第１～３節、第Ⅲ章第１～４節、第Ⅳ章第２節　堀内秀樹
第Ⅱ章第３節、第Ⅲ章第４節　石井龍太（瓦）、大貫浩子（近代遺物）
第Ⅱ章第４節、第Ⅲ章第５節　阿部常樹（動物）
第Ⅳ章第１節　原　祐一

13. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場 4-6-1）、 工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡 414）内において、運用、保管している。

14. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を表したい。
（敬称略、五十音順）
今村啓爾、池田悦夫、石岡智武、岩淵令治、大貫静夫、小川　望、梶原　勝、梶山博史、
加藤元信、川根正教、小池　聡、佐藤宏之、鈴木裕子、滝澤　亮、樋泉岳二、西田宏子、
宮崎勝美
人文社会系研究科文学部考古学研究室、施設部、株式会社 三浦工業、加藤建設 株式会社、文化財 COM、株式会社 盤古堂、パリノ・サーヴェイ株式会社

15. 発掘調査・整理作業参加者

発掘調査

ＳＫ地点
三浦大司、飯田浩子、汲田紀男、佐藤一男、佐藤正美、四家英道、鈴木行雄、高根五郎、
立川信夫、銅家弘道、中村晴信、成田竹夫、西川高雄、長谷川一哉、古家正美（株式会社 三浦工業）

ＩＭＬ地点
国武貞克、山田　哲（東京大学）、田中麻子（江戸東京博物館）、久保虎一、大泉恵裕、
池野一哲、佐藤和仁、鈴木藤浩、高木　明、戸賀崎珠穂、戸賀崎智乃、西畑　太、増田　英、
松田泰典、宮台純二、横田龍介（加藤建設 株式会社）

整理作業　SK 地点、IML 地点
松野武彦（文化財 COM）、伊藤恒彦、小池　聡（株式会社 盤古堂）、青山正昭、安芸毬子、
石井龍太、今井雅子、大貫浩子、香取祐一、小林照子、坂野貞子、田中美奈子、中村和子、
山田くりか、渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）

凡　例

１．本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。

SB：建物址　　SE：井戸　　SK：土坑　　SP：ピット　　SU：地下室

２．本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に旧石器時代の遺物は１／1、江戸時代の遺物は１／３である。

３．出土遺物の写真は、基本的に添付したCD-ROMにjpeg形式に圧縮して記録した。

４．遺物番号は本文、挿図、観察表、CD-ROMの写真で共通の番号を使用した。

５．遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。

・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。

・├──┤は、口唇部の口銹を表している。

・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。

・－ －は、断面を表している。

・擂鉢の ├──┤ は、体部擂目の範囲を表している。

・口唇部の├──┤ は、敲打痕を表している。

６．本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報２　別冊　東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1)』に準拠している。

両地点からは、コンテナ箱にして80箱ほどの遺物が出土している。これは調査時に必要と判断された出土状況などの記録以外に、遺物の取り上げは行わなかった瓦の細片、礎石や石垣などに使用された石やその後込めに使用された割石、壁土、漆喰、炭化物、火山灰あるいは取り上げる際に崩壊するような一部の遺物を除外した出土遺物の総量である。この中には､胎質別に陶磁器･土器類、人形・ミニチュア、瓦、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、自然遺物等が含まれ、ここでは自然遺物については人工遺物と分けて記述を行った。人工遺物については遺構別に遺構番号降順に記載した。

実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを代表すると考えられる遺物を中心に、完形率、希少性などを含めて図化選択の判断とした。

遺物観察表は、本編総ページ数の関係で、掲載できなかった陶磁器・土器類を含めて全て添付のCD-ROMにxlsファイルにて、保存・記録している。

遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを1280 × 850ピクセルでjpegに圧縮し、添付のCD-ROMに保存・記録している。

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器
- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ

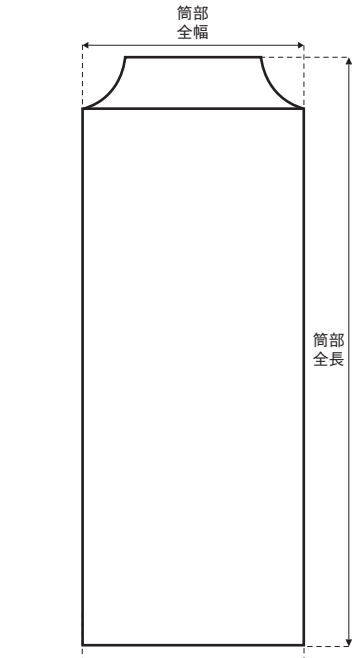
B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－萬古系
J－大堀･相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子･笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Z－不明

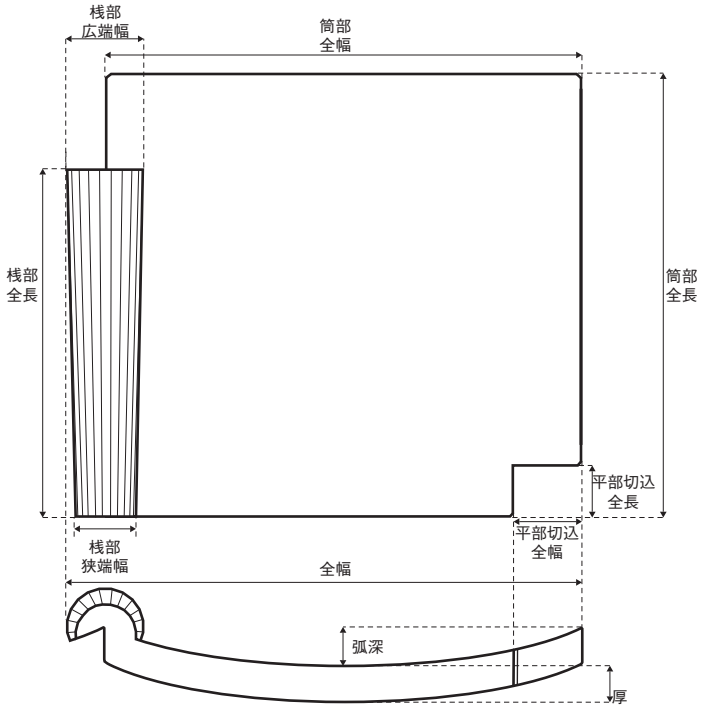
○器種

1. 碗	2. 皿	3. 大皿	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉･火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺･甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 溲瓶	29. 擂鉢	30. 餌入
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	55. 泥面子･芥子面
56. 碁石形製品	57. 玉	58. 鈴	59. 笛	60. 人形
61. ミニチュア	62. 面型			00. 蓋

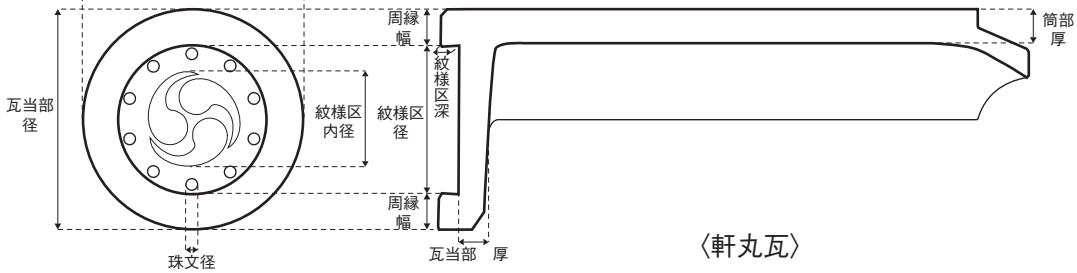
東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類

瓦模式図

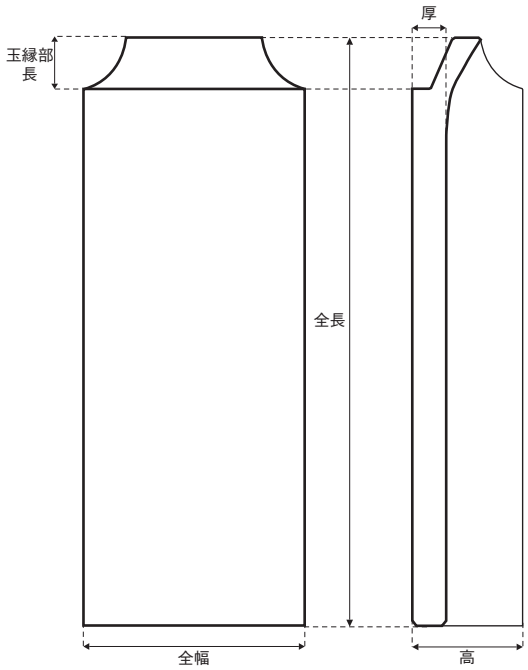




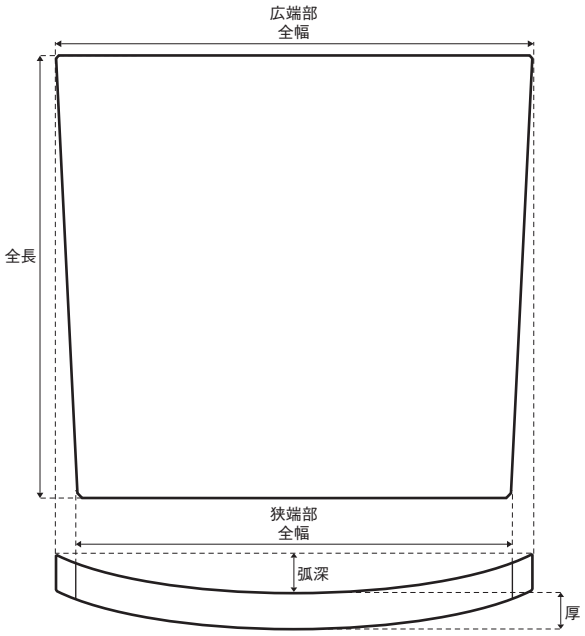
〈蝋燭桟瓦〉



〈軒丸瓦〉



〈丸瓦〉



〈平瓦〉

東京大学本郷構内の遺跡
教育学部総合研究棟地点
インテリジェント･モデリング･ラボラトリー（IML）地点
発掘調査報告書

目　次

例　　言
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
第１節　遺跡の位置 …… 1
第２節　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2
（１）　地理的環境 …… 2
（２）　歴史的環境 …… 2

第Ⅱ章　教育学部総合研究棟地点
第１節　調査の経緯と概要
（１）　調査に至る経緯 …… 5
（２）　調査の方法と経過 …… 5
（３）　調査の概要 …… 5
第２節　江戸時代・近代の遺構 …… 14
第３節　江戸時代・近代の遺物 …… 53
第４節　動物遺体
（１）　貝類 …… 94
（２）　脊椎動物 …… 96

第Ⅲ章　インテリジェント･モデリング･ラボラトリー（IML）地点
第１節　調査の経緯と概要
（１）　調査に至る経緯 …… 99
（２）　調査の方法と経過 …… 99
（３）　調査の概要 …… 100
第２節　旧石器時代
（１）　遺跡の層序 …… 103
（２）　調査の概要 …… 103
（３）　出土遺物 …… 106
第３節　江戸時代・近代の遺構 …… 108
第４節　江戸時代・近代の遺物 …… 121

第５節　動物遺体 …… 136

第Ⅳ章　教育学部総合研究棟地点・IML 地点の成果
第１節　『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読と描かれた施設の検討
（１）『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読 …… 138
（２）各区画の分析 …… 142
第２節　教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点の土地利用の変遷
（１）発掘調査によって確認された遺構・遺物 …… 145
（２）両地点の年代別景観 …… 145
（３）小結 …… 153

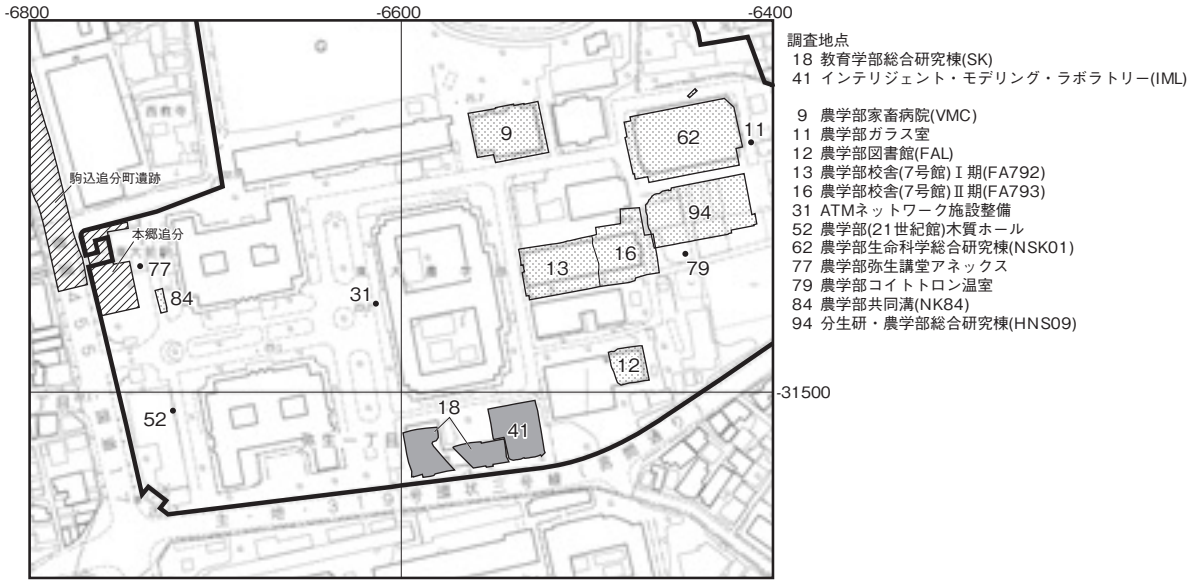
引用・参考文献
報告書抄録

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

調査地点は、東京都文京区弥生 1-1-1、東京大学弥生キャンパス南側ほぼ中央にある南門に接する位置にある。弥生キャンパスは、現在、東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部校舎が主として利用しているエリアで、本郷キャンパスの北側に位置する。

東京大学本郷構内は、ほぼ全域を「文京区 47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 28 弥生町遺跡群」として周知の遺跡として登録されている。調査室では 1983 年以降、事前調査、試掘調査、立会調査など含めて現在までに 90 地点の調査を行っている。本調査地点が位置する弥生キャンパスでは、東京都が行った本郷追分（東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994）の他、埋蔵文化財調査室によって、9 農学部家畜病院地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1997）、13、16 農学部校舎（7 号館）地点（同 2004）、12 農学部図書館地点（同 2004）、33 地震研究所テレメタリング地震観測施設地点（同 2004）、41 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点（IML）（本書掲載）、62 農学部生命科学総合研究棟地点（同 2011）、71 地震研究所総合研究棟（同 2006）、84 農学部共同溝（同 2008）、94 分生研・農学部総合研究棟（未報告）など本例を含めて 11 回の事前調査が行われている（Ⅰ - 1 図）。また、地下鉄南北線の東大前駅建築に伴って調査された駒込追分町遺跡（地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会 1996）が西隣して存在する。これらの地点からは旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が出土しているが、これらについての詳細は上記の報告書、年報を参考にされたい。



Ⅰ - 1 図　調査地点の位置

第２節　遺跡の地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

本郷キャンパスの地理的様相については、これまで理学部７号館地点の報告（鈴木 1989）、浅野地区Ｉの報告（橋本 2009）などで触れられており、詳細は参照されたい。これらと江戸期における改変を略述するとキャンパス内は武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台地（神田台）上の M2 面上に存在する。このうち標高約 20 ～ 22 mの上位面と 15 ～ 17 mの下位面とが存在するが、このうち本地点は上位面に位置する。本郷台地の東は上野台地を挟んで、滝野川、千駄木、根津、湯島にいたる旧石神井川によって開折された谷が存在する。旧石神井川は、従来不忍池から南流して江戸湾に注ぐものであったが、加賀藩下屋敷のある滝野川付近より人為的に東流させ、荒川に流入するように改変されている。また、台地東斜面は小河川による谷が複雑に入り込んでおり、この状況は、東京大学本郷構内の発掘調査によっても確認されている（東京大学遺跡調査室 1990、東京大学埋蔵文化財調査室 2005 など）。

（２）歴史的環境

発掘調査で出土した遺構、遺物は、近代～江戸時代にかけて構築、使用、廃棄されたものであるため、当該期における本地点の歴史的環境について略説したい。

江戸時代

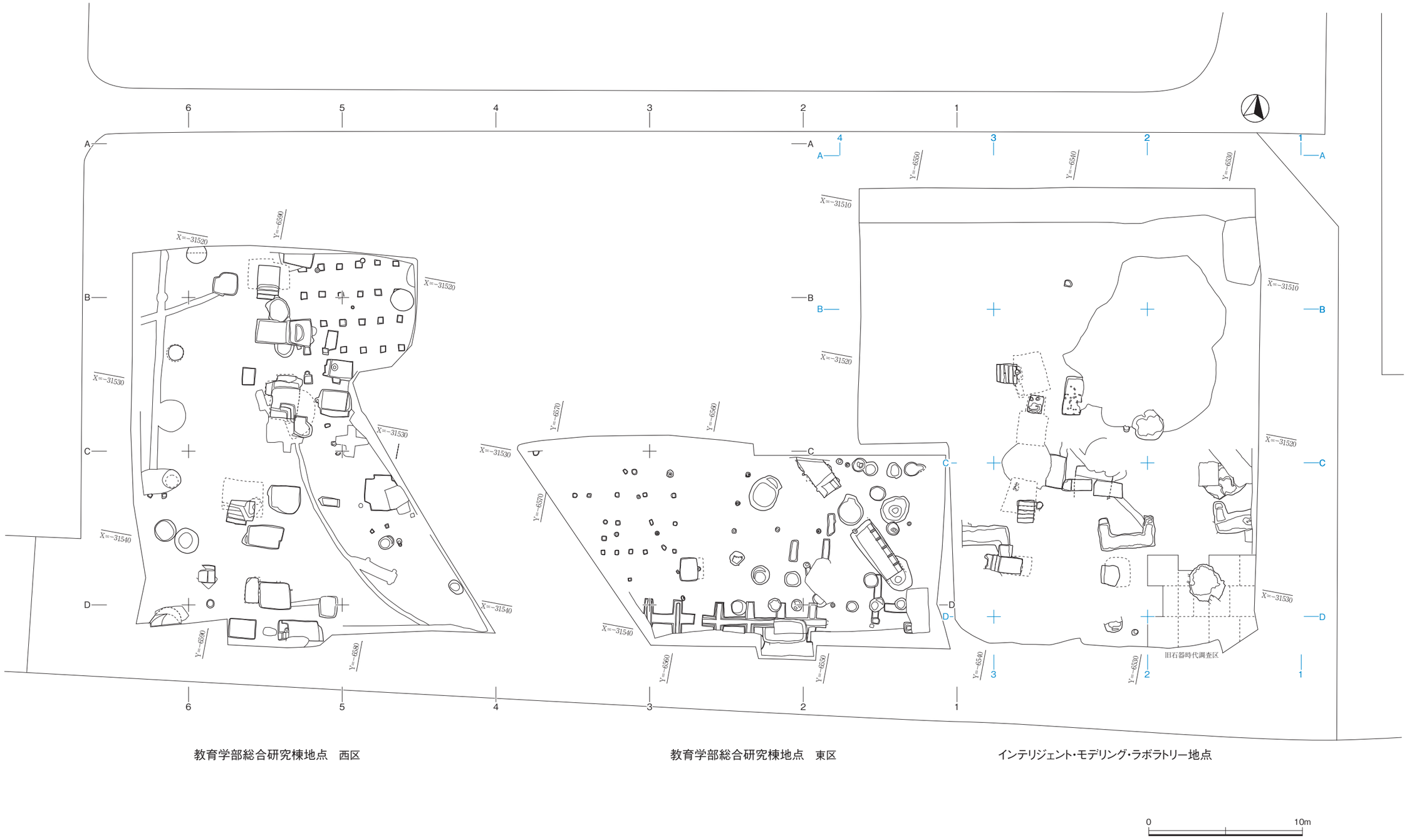
当該地点は、江戸時代を通じてほぼ水戸徳川藩駒込邸であった。このあたりの歴史的環境は、上屋敷であった小石川邸が中心ではあるが、地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査報告書６（坂詰 1996）、春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点の報告（小川・岩淵 2000）、駒込邸では東京大学浅野地区の調査報告（原 2009）に詳しい。

水戸藩駒込邸は、元和８（1622）年に下屋敷として 54,200 坪を拝領以降、明治２（1869）年に明治政府に収公されるまで当該地にて経営されている。この間、元禄６（1693）年には本所小梅屋敷を新たに得たことを契機に駒込邸を中屋敷、小梅邸を下屋敷とした。また、天保６（1835）年に播磨安志藩小笠原家下屋敷と相対替えと抱屋敷の購入によって駒込邸北側に 9,693 坪が増加されている。

駒込邸内の様子は、これまで絵図面などが確認できなかったことなどから不明確な部分が大きかったが、絵図面の発見や史料調査によって邸内の土地利用や状況が少しずつ明らかになってきた（原・堀内 2006、原祐一 2009 など）。明暦３（1657）年のいわゆる振袖火事の際には、被災した上屋敷小石川邸から頼房、光圀が駒込邸に避難しており、「火事小屋御殿」、「書楼」などが建てられたことが記されている（常盤神社・水戸史学會 1978）。また、長崎に亡命した明の遺臣朱舜水は寛文５（1665）年以降、駒込邸に居住し、天和２（1682）年に同邸で死んでいる。これらから本地点から確認された遺構の年代の中心である 17 世紀後半には相応の殿舎が建っていたことが類推できる。

近代

水戸藩駒込邸は明治２（1868）年に明治政府に収公され、その後、明治前期には地域によって東京府用地、警視庁用地、射撃場などに分割される。当該地点付近は、東京府用地→東京府癲狂院（明治 14 ～明治 19）→第一高等学校（明治 22 ～昭和 10）→東京帝国大学（昭和 10 ～）と変遷している。



Ⅰ-2図　教育学部総合研究棟地点・IML地点　全体図　(1/250)

第Ⅱ章　教育学部総合研究棟地点

第１節　調査の経緯と概要

（１）調査に至る経緯

平成５（1993）年度、東京大学施設部から埋蔵文化財調査室に弥生構内に予定された総合研究棟新営に伴う、埋蔵文化財の調査に関する照会があった。新営予定地は東京都遺跡地図によると文京区47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、［平］住居・［近］礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣［旧］［縄］［弥］［古］［平］［近］）内に位置しており、周知の遺跡として認知されている。当該地区においても遺跡の遺存状態を事前に確認する必要があった。

試掘調査は、平成５年４月28日に建築予定地域内にトレンチを合計15㎡設定し、行った。その結果、江戸時代の水戸藩徳川家中屋敷に関連すると推定される遺構・遺物が、良好な状態で遺存していることが確認された。以上の経緯より、建築予定地域内全域について埋蔵文化財発掘調査を行うことが確認された。

（２）調査の方法と経過

調査の方法（Ⅰ - ２図、Ⅱ -1、２図）

発掘調査は、建物建築に伴って根切りを行う範囲を対象にした。調査区は中央を斜行する人道部分を隔てて東側を東区、西側を西区と命名した。対象面積は1,007㎡である。調査は、グリッド法を用いて行い、調査区全域を周囲の建物軸に合わせて10 × 10 ｍでグリッドを設定した。軸は世界測地系に対してN-10° 33’ 36.8” -W 振れている。グリッドの名称は、南北をアルファベット、東西をアラビア数字で表し、それぞれ東から西へ、北から南へ若い番号から付した。この交点に対して、A1、A2･･･とし、交点より南西の10 × 10 ｍの範囲をA1区、A2区･･･のようにグリッドの設定を行った。

調査の経過

発掘調査は、平成５（1993）年11月18日から開始した。調査対象面までの機械掘削は、東区より開始し、西区を含めて、11月24日には、全域の機械掘削が終了した。

遺構の確認は、近代以降の盛土層を除去した後に確認された関東ローム層上面（武蔵野標準層位Ⅲ層）にて行った。その結果、調査区全域から近代から江戸時代の遺構が確認され、11月24日から東区、12月２日から西区の発掘調査を開始した。江戸時代の遺構の一部は、近代の帝国大学、第一高等学校、東京癲狂院などに伴う遺構に撹乱されていたが、おおむね遺存状態は良好でであった。12月は初旬に降雨によって調査の進行が遅れたが、12月13日に東区、12月22日には西区の全景写真、遺構測量が終了し、現場での発掘調査は完了した。

（３）調査の概要

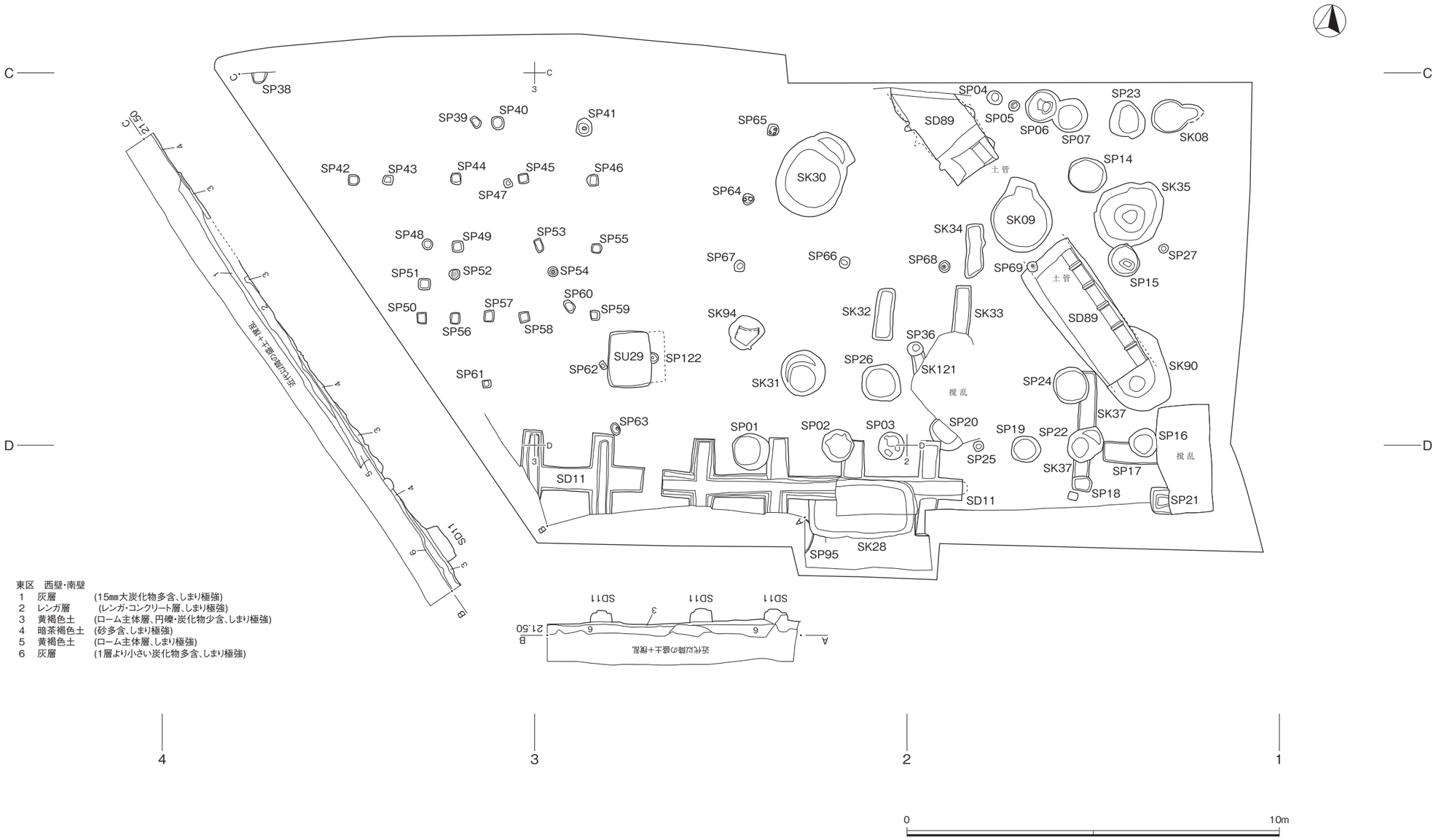
本調査では、江戸時代水戸藩駒込邸に伴う遺構・遺物、近代第一高等学校に伴うと考えられる遺構・遺物が確認できた。

江戸時代水戸藩駒込邸に伴うと推定される遺構群は、西区と東区とでは様相が異なっていた。

東区は年代の不明な遺構が多く、明確な復元はできなかった。群として捉えられた遺構はなく、地

下室 SU29 が単独で確認できた。また、SK30、SK35 など植栽痕と推定できる遺構が認められ、江戸期を通して活発な活動の痕跡はない。空閑地であった可能性が強い。近代以降では SD11 は柵状の施設あるいは鉄棒など運動に使用する遊具の痕跡と思われる遺構と SP01、SP02、SP03、SP19、SP22、SP16 などの列状に配された土坑などがあり、一定の利用が確認できる。

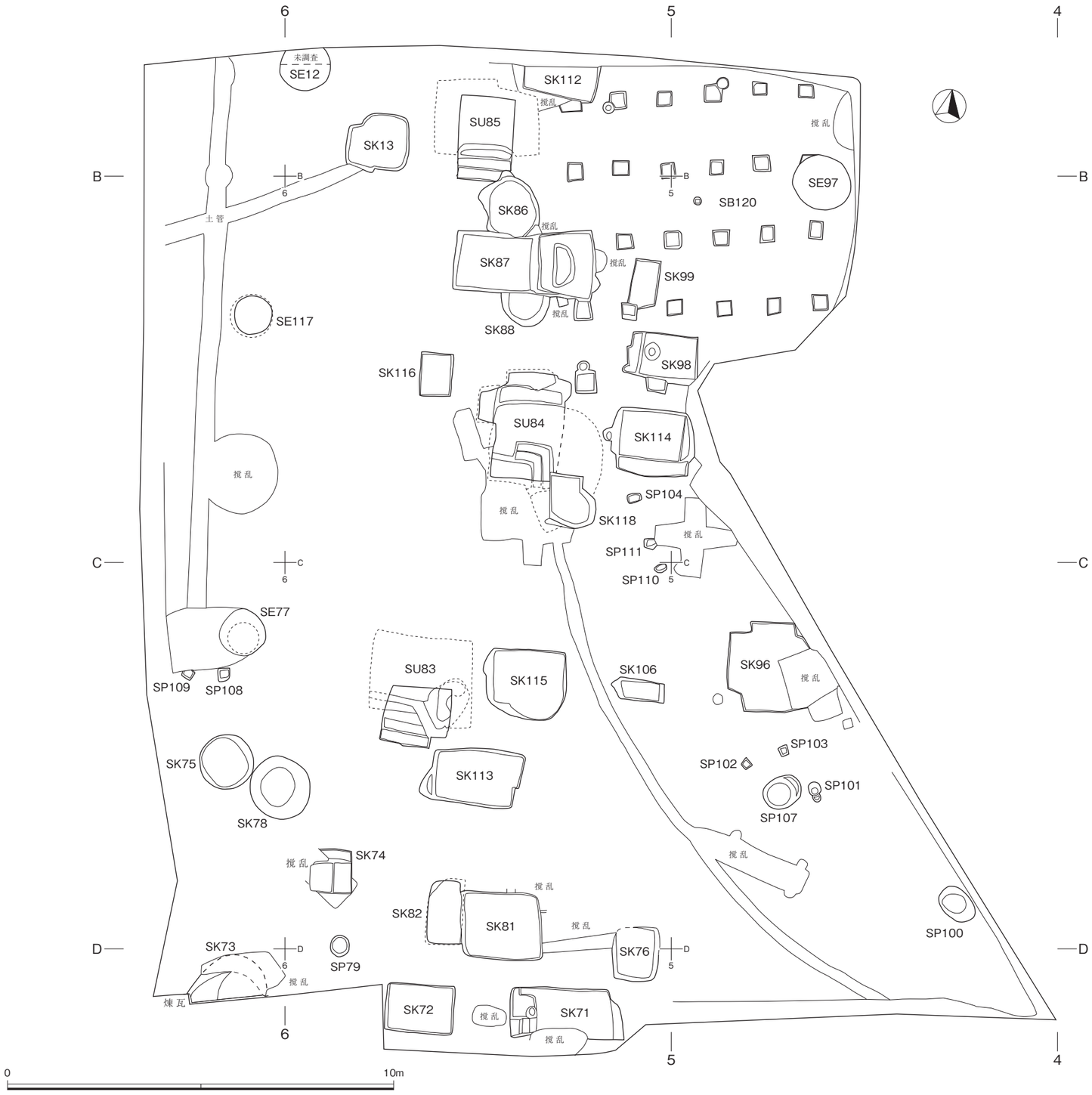
西区は比較的多くの遺構が確認できた。明確な規則性は窺えなかったが、主軸を一にし、南北方向に構築された遺構の一群は、その廃棄年代が 17 世紀末～ 18 世紀前葉と考えられるものに限定された。これらの遺構群は地下室、土坑、井戸などで、こうした遺構群で構成されているエリアは、長屋が主たる建築物である詰人空間に多く認められることが、加賀藩邸の調査成果から明らかにされている。その後、18 世紀後半以降に比定される遺構は、19 世紀前葉に比定される SE97、SK81 のみであった。文献では、文政年間に描かれた『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』には、当該地付近は南北方向に主軸を持つ長屋建物が描かれているが、調査ではこうした痕跡は確認できなかった。近代以降では北東側に第一高等学校時代と推定できる建物基礎が広がっており、それに接続する土管溝などが確認された。



東区　西壁・南壁

1	灰層	(15㎜大炭化物多含、しまり極強)
2	レンガ層	(レンガ・コンクリート層、しまり極強)
3	黄褐色土	(ローム主体層、円礫・炭化物少含、しまり極強)
4	暗茶褐色土	(砂多含、しまり極強)
5	黄褐色土	(ローム主体層、しまり極強)
6	灰層	(1層より小さい炭化物多含、しまり極強)

Ⅱ-1図　教育学部総合研究棟地点　東区全体図　（1／120）



Ⅱ-2図　教育学部総合研究棟地点　西区全体図　（1／120）

種別	番号	地区	遺構図版（Ⅱ - @）	遺物図版（Ⅱ - @）	動物遺体	遺物年代	切り合い	火災	備考
SP	1	東	1、3				11 より新		01,02,03 は一連
SP	2	東	1、3				11 より新		01,02,03 は一連
SP	3	東	1、3						01,02,03 は一連
SP	4	東	1、3						
SP	5	東	1、3						
SP	6	東	1、3				07 より新		
SP	7	東	1、3				06 より旧		
SP	8	東	1、3						
SK	9	東	1、3						
欠番	10	－					－		
SD	11	東	1、4				01,02 より旧、28 より新、20 と重複		
SE	12	西	2、5	26		1703 下限		○（元）	
SK	13	西	2、5	26		1703 下限		○（元）	
SP	14	東	1、5						
SP	15	東	1、5				35 より新		
SP	16	東	1、6				17 より新		16,19,22 は一連
SP	17	東	1、6				16 より旧		
SP	18	東	1、6				37 より新		
SP	19	東	1、6						16,19,22 は一連
SP	20	東	1、6				11 と重複		
SP	21	東	1、6						
SP	22	東	1、6				37 より新		16,19,22 は一連
SP	23	東	1、7						
SP	24	東	1、7				37 より新		
SP	25	東	1、7						
SP	26	東	1、7						
SP	27	東	1、7						
SK	28	東	1、7	26、27		18 後下限	11,95 より旧		
SU	29	東	1、8	27、28		18 初下限	122 より旧		被熱した遺物多
SK	30	東	1、8			18			
SK	31	東	1、8			近代			
SK	32	東	1、8						
SK	33	東	1、8						
SK	34	東	1、8						
SK	35	東	1、10			18	15 より旧		
SP	36	東	1、10				121 より新		
SK	37	東	1、10				18,22,24 より旧		
SP	38	東	1、10						
SP	39	東	1、9、10						
SP	40	東	1、9、10						
SP	41	東	1、9、10						
SP	42	東	1、9、11						
SP	43	東	1、9、11						
SP	44	東	1、9、11						土層図は 44 と 52 のみ
SP	45	東	1、9、11						
SP	46	東	1、9、11						
SP	47	東	1、9、11						
SP	48	東	1、9、11						
SP	49	東	1、9、11						
SP	50	東	1、9、11						
SP	51	東	1、9、11						
SP	52	東	1、9、11						土層図は 44 と 52 のみ
SP	53	東	1、9、11						
SP	54	東	1、9、11						

Ⅱ-1 表　検出遺構一覧（1）

種別	番号	地区	遺構図版（Ⅱ - @）	遺物図版（Ⅱ - @）	動物遺体	遺物年代	切り合い	火災	備考
SP	55	東	1、9、12						
SP	56	東	1、9、12						
SP	57	東	1、9、12						
SP	58	東	1、9、12						
SP	59	東	1、9、12						
SP	60	東	1、9、12						
SP	61	東	1、9、12						
SP	62	東	1、9、12						
SP	63	東	1、12						
SP	64	東	1、9、12						
SP	65	東	1、9、12						
SP	66	東	1、12						
SP	67	東	1、9、13						
SP	68	東	1、13						
SP	69	東	1、13						
欠番	70	－					－		
SK	71	西	2、13	28、29		18 前			
SK	72	西	2、13	29、30、31		18 前			
SK	73	西	2、14						
SK	74	西	2、14	31、32					被熱した遺物多
SK	75	西	2、14	32、33		17 後			
SK	76	西	2、14			17 末～ 18 初			
SE	77	西	2、14	33、34		17 末			
SK	78	西	2、15	34		17 後			
SK	79	西	2、15						
欠番	80	－							
SK	81	西	2、15	34、35、36		19 初	82 より新		
SK	82	西	2、15	36		18 前	81 より旧		
SU	83	西	2、16	36 ～ 40		17 末			被熱した遺物多
SU	84	西	2、16	40 ～ 44		17 末～ 18 初			被熱した遺物多
SU	85	西	2、17	44、45		17 末～ 18 初	86 より旧		被熱した遺物多
SK	86	西	2、17			17 末～ 18 初	85,87 より新		
SK	87	西	2、17			17 末～ 18 初	86,88 より旧、120 より新		
SK	88	西	2、17			17 末～ 18 初	87 より新		
SD	89	東	1、18、19				90 より新		POINT 位置図 21,33,（25）
SP	90	東	1、20				89 より旧		
欠番	91	－							
欠番	92	－							
欠番	93	－							
SK	94	東	1、20						
SP	95	東	1、20				28 より新		
SK	96	西	2、20						
SE	97	西	2、21	46 ～ 49		18 後～ 19 前			
SK	98	西	2、21	49、50		17 末～ 18 初	120 より旧		
SK	99	西	2、21				120 より旧		
SP	100	西	2、21						
SP	101	西	2、21						
SP	102	西	2、21						
SP	103	西	2、22						
SP	104	西	2、22						
欠番	105	－					－		
SK	106	西	2、22						
SK	107	西	2、22						

Ⅱ - 1 表　検出遺構一覧（2）

種別	番号	地区	遺構図版（Ⅱ - @）	遺物図版（Ⅱ - @）	動物遺体	遺物年代	切り合い	火災	備考
SP	108	西	2、22						
SP	109	西	2、22						
SP	110	西	2、22						
SP	111	西	2、22						
SK	112	西	2、23	50		18 前	120 より旧		
SK	113	西	2、23						
SK	114	西	2、23	51		18 前			
SK	115	西	2、23	51		17 末			
SK	116	西	2、24	51					
SE	117	西	2、24			17 末			
SK	118	西	2、24	52		17 末～ 18 前			
欠番	119	－					－		
SB	120	西	2、25				87, 97, 98, 99, 112 より新		
SK	121	東	1、24				36 より旧		
SP	122	東	1、9、24				29 より新		

Ⅱ-1 表　検出遺構一覧（3）

第２節　江戸時代・近代の遺構

本地点からは、江戸時代から近代に比定される遺構が 114 基確認されている。内訳は、地下室 4 基、土坑・ピット 103 基、井戸 4 基、溝 2 基、建物跡 1 基であった。

SP01、SP02、SP03（Ⅱ - 3 図）

東区南側に東西に並ぶ小土坑群である。遺構の並び、形態などからこれら 3 基の遺構は、同時期に機能していたと推定される。また、これより東に SP19、SP22、SP16 が同一軸上に存在し、これらを含めて一連の構造物であった可能性が高い。SP01 と SP02 は SD11 と重複しており、共に SD11 より新である。SD11 は、後述する明治 22 年にこの地に設立される第一高等学校に伴う施設と推定されることから、本遺構群は近代に比定される遺構であると推定される。平面形は 3 遺構ともほぼ円形を呈し、規模は SP01 が径 100cm、SP02 が 85cm、SP03 が 70cm を計測する。確認面からの深さは、最大で SP01 が 20cm、SP02 と SP03 が 30cm を計測する。いずれも壁や坑底には凹凸を有し、坑底から壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、SP01 が黒褐色土、SP02 が褐色土、SP03 が 2 層に分層されるが、いずれもロームを含むしまりの弱い層である。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。

SP04（Ⅱ - 3 図）

東区北東側に位置する円形の小ピットである。規模は径 40cm、確認面からの深さは 40cm を計測する。坑底は丸底を呈し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 2 層に分層されるが、全体にしまりは弱い。

遺物は出土していない。

SP05（Ⅱ - 3 図）

東区北東側に位置する円形の小ピットである。規模は径 30cm、確認面からの深さは最大 15cm を計測する。坑底はやや凹凸を有し、破砕礫が置かれている。壁は坑底から緩やかに立ち上がる。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SP06、SP07（Ⅱ - 3 図）

東区北東側に位置し、ほぼ円形を呈する土坑である。両者は重複しており、新旧は SP06 が新である。規模は SP06 が径 90cm、SP07 が径 100cm、確認面からの深さは SP06 が 40cm、SP07 が 30cm を計測する。坑底は SP06 がやや凹凸を有しているのに対し、SP07 は比較的平滑である。壁は坑底から緩やかに立ち上がる。

両遺構からは共に遺物は出土していない。

SK08（Ⅱ - 3 図）

東区北東隅に位置する遺構である。平面形はひょうたん形を呈しているが、土層の堆積状態から単一の遺構であると推定された。規模は長軸が 130cm、短軸が 90cm、確認面からの深さは最大 25cm

を計測する。坑底は比較的平滑で、壁は坑底から垂直に立ち上がる。

遺物は出土していない。

SK09（遺構Ⅱ - 3 図）

東区北東に位置する遺構である。平面形は円形に一部張り出しを有しているが、土層の堆積状態から単一の遺構であると判断された。規模は径 160cm で、北壁側に 30cm 程度の張り出しを有する。確認面からの深さは最大 45cm を計測する。坑底は比較的平滑で、壁は坑底から垂直に立ち上がる。覆土は褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SD11（Ⅱ - 4 図）

東区南側に位置し、東西の長い溝とそれに直行する短い溝とで構成されている遺構である。ブリッジを境に西側と東側とに分かれるが、西側の一部が調査区域外であるため、遺構の全容は確認できなかった。東側は全長 330cm、幅 30cm の東西溝に 80cm 強の間隔で、南北両方向に長さ 40cm、幅 20cm の溝が連結されている。深さは、東西、南北溝ともほぼ同じで、確認面から最大で 40cm を計測する。溝底は、一部を除いて中央部が一段低く平滑に構築されており、壁は溝底から垂直に立ち上がっている。SP01、SP02、SP20、SK28 と重複しており、新旧は SK28 より新、SP01、SP02 より旧、SP20 とは重複部分がわずかであったため新旧は確認できなかった。覆土は 2 層に分層され、上層はロームを中心としたしまりの強い褐色土であった。

遺物の出土はないため明確な年代は不明であるが、18 世紀後半の遺物が出土している SK28 を切って構築されていること、関東大震災後に構築されたと思われる硬化面にパックされていること、江戸期の遺構に類例が確認できないことなどから近代に比定される遺構であろうと推定している。当該地は水戸藩邸の後、東京府用地（明治 4 ？～）→東京府癲狂院（明治 14 ～明治 19）→第一高等学校（明治 22 ～昭和 10）、東京帝国大学（昭和 10 ～）と変遷している。関東大震災以前には東京府癲狂院と第一高等学校の可能性が考えられるが、両者の建物配置図からの検討から第一高等学校の運動場に伴う施設の可能性が高いと考えている。一方、こうした類例は世田谷区騎兵山遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡から出土した近代の遺構に確認できる。騎兵山例は長い溝に対して直交する溝が 2 本、尾張例は 5 本存在し、これらを騎兵山の報告では「近世の筏基礎の系譜を引くと思われる近代の所産の建物」（加藤建設株式会社 2006）、尾張では「戸山学校を構成する施設、もしくは戸山学校での訓練に関連する施設の可能性が高い」（東京都埋蔵文化財センター 2008）と推定している。

遺物は出土していない。

SE12（Ⅱ - 5 図）

西区北側に位置する円形を呈する井戸である。北側が調査区域外にあり、危険のため北半の調査を行うことができなかった。井戸の調査は確認面から 210cm の深さまで行った。規模は直径 130cm で、以下はほぼ垂直に構築されている。壁面は、平滑に整形されており、足掛け等の付属施設は確認できなかった。覆土は 5 層に分層されるが、調査した深度の範囲では、井戸枠などの痕跡は確認できなかった。また、覆土には焼土粒子が多く含まれていた。遺物の状況などを含め、火災の後始末に廃絶した遺構で、遺物群の年代観から火災は元禄 16（1703）年の「水戸様火事」である可能性が高い。

陶磁器、土器、瓦などコンテナ 1 箱出土している。

SK13（Ⅱ - 5 図）

西区北側に位置するやや不整な方形を呈する土坑である。遺構の上部の一部を近代の土管溝によって撹乱されている。規模は南北 140cm、東西 160cm、確認面からの深さは最大で 30cm を計測する。坑底や壁には細かい工具痕のような凹凸が認められ、壁は坑底から垂直に立ち上がる。覆土は 3 層に分層されたが、中層には焼土、焼けた漆喰や瓦が多量に廃棄されていた。遺物の状況などを含め、火災の後始末に廃絶した遺構で、遺物群の年代観から火災は元禄 16（1703）年の水戸様火事である可能性が高い。

遺物は陶磁器、土器など約 20 点ほど出土している。

SP14（Ⅱ - 5 図）

東区東北側に位置する円形を呈する土坑である。規模は径 110cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。坑底や壁は凹凸が激しく、その境も明瞭ではない。覆土は 2 層に分層されるが、しまりは弱い。

遺物は出土していない。

SP15（Ⅱ - 5 図）

東区東北側に位置する円形を呈する土坑である。遺構の北側で SK35 と重複しており、SP15 が新である。遺構の規模は径 90cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。坑底には中央やや南東寄りにやや不整楕円形の小ピットが伴っている。小ピットの規模は長径 40cm、短径 25cm、坑底からの深さは 20cm を計測する。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SP16、SP19、SP22（Ⅱ - 6 図）

東区南側に東西に並ぶ小土坑群である。遺構の並び、形態などからこれら 3 基の遺構は、同時期に機能していたと推定される。また、これより西に SP01、SP02、SP03 が同一軸上に存在し、これらを含めて一連の構造物であった可能性が高い。したがって、SP01、02 の切り合いから、本遺構群は近代に比定される遺構であると推定される。SP16 は SP17 と SP22 は SK37 と重複しており、新旧はそれぞれ SP16、SP22 が新である。平面形は、SP16 と SP19 がほぼ円形、SP22 は楕円形を呈し、規模は SP16 が径 80cm、SP19 が 80cm、SP22 が長径 110cm、短径 80cm を計測する。確認面からの深さは、最大で SP16 と SP22 が 20cm、P19 が 25cm を計測する。いずれも壁や坑底には凹凸を有し、坑底から壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は SP19、SP22 が褐色土、SP16 が 2 層に分層されるが、いずれもロームを含むしまりの弱い層である。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。

SP17（Ⅱ - 6 図）

東区東南側に位置する長方形を呈する遺構である。遺構の東側は撹乱によって、中央部は SP16 によって切られており、遺構全体の様子は窺えない。遺存している遺構の規模は、長辺 150cm、短辺 55cm、確認面からの深さは 10cm を計測する。坑底はフラットで、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SP18（Ⅱ - 6 図）

東区東南側に位置する長方形を呈する小ピットである。遺構の北側で SK37 と重複しており、SP18 が新である。遺構の規模は、長辺 50cm、短辺 40cm、確認面からの深さは 10cm を計測する。坑底は凹凸があり、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SP20（Ⅱ - 6 図）

東区南側に位置する円形を呈すると思われる小土坑である。遺構の北側を撹乱によって切られている。また、南西側で SD11 と重複しているが、重複部分がわずかであったため新旧は確認できなかった。遺存している遺構の規模は、長径 100cm、短径 60cm、確認面からの深さは 35cm を計測する。坑底は凹凸があり、壁は北側では垂直に、南側では傾斜を持って立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SP21（Ⅱ - 6 図）

東区南東隅に位置する方形の小土坑である。遺構の東側を撹乱によって切られ、全体の様子を窺うことができない。また、SD11 と坑底や壁や覆土の状況、深さなどが類似しており、ほぼ同一軸上に位置することから、SP21 は SD11 類似遺構の西端である可能性もある。遺存している遺構の規模は、南北 70cm、東西 50cm、確認面からの深さは最大 55cm を計測する。坑底は SD11 同様に中央部が一段低く平滑に構築されており、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SP23（Ⅱ - 7 図）

東区北東隅に位置するやや不整な円形を呈する土坑である。遺構の規模は、南北 100cm、東西 100cm、確認面からの深さは最大 25cm を計測する。坑底は丸底様で平滑に構築されており、壁は坑底から緩やかに立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。

遺物は出土していない。

SP24（Ⅱ - 7 図）

東区東側に位置する円形を呈する土坑である。東側で SK37 と重複しており、SP24 が新である。遺構の規模は、南北 100cm、東西 95cm、確認面からの深さは最大 35cm を計測する。坑底はほぼフラットで平滑に構築されており、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。遺構の規模や配置より SP26 や SK31、あるいは南側に並ぶ SP01、02、03、19、22、16 と共に群として機能していた可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SP25（Ⅱ - 7 図）

東区中央部に位置する隅丸方形の小ピットである。遺構の規模は、一辺 25cm、確認面からの深さは最大 10cm を計測する。坑底は丸底様で平滑に構築されていた。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SP26（Ⅱ - 7 図）

東区中央に位置するやや不整の円形を呈する土坑である。遺構の規模は、南北 95cm、東西 100cm、確認面からの深さは最大 35cm を計測する。坑底はほぼフラットで平滑に構築されており、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。遺構の規模や配置より SP26 や SK31、あるいは南側に並ぶ SP01、02、03、19、22、16 と共に群として機能していた可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SP27（Ⅱ - 7 図）

東区東側に位置するやや不整の円形を呈する小ピットである。遺構の規模は、径 25cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。坑底、壁は平滑に構築されており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は褐色土単層である。

遺物は出土していない。

SK28（Ⅱ - 7 図）

東区中央南側に位置する隅丸長方形を呈する土坑である。SD11、SP95 と重複しており、両者より旧である。また、遺構の東側上部を撹乱によって削平されている。遺構の規模は、南北 160cm、東西 280cm、確認面からの深さは最大 90cm を計測する。坑底は凹凸を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層され、中央に向かって傾斜を持っていた。

18 世紀後半の陶磁器、土器、瓦などが、コンテナ 1 箱出土している。

SU29（Ⅱ - 8 図）

東区中央に位置する地下室である。開口部は南北に長辺を持つ長方形を呈し、室部は東側のみに張り出している。東側で SP122 と重複しており、SU29 が旧である。遺構の規模は、開口部は長辺（南北）150cm、短辺（東西）110cm、確認面からの深さは最大 110cm を計測する。室部は確認面から約 40cm の深度で東側に 40cm の奥行きを持って張り出し、奥壁の高さは 60cm である。坑底の規模は南北 140cm、東西 150cm を計測する。坑底はやや凹凸を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 6 層に分層され、西側から東に向かって傾斜を持っている。中層には焼土、炭化物などが多く確認され、遺物にも二次的被熱の痕跡が認められた。

18 世紀初頭を下限とした陶磁器、土器、瓦などが、コンテナ 2 箱出土している。

SK30（Ⅱ - 8 図）

東区中央北側に位置するやや不整の楕円形を呈する土坑である。遺構の規模は長径 240cm、短径 180cm、確認面からの深さは最大60cm を計測する。坑底、壁は凹凸が激しく、壁は南側ではほぼ垂直に、北側ではやや緩やかに立ち上がっている。覆土はロームを多量に含む褐色土単層である。規模、形態、覆土の状況から SK30 は植栽痕であろうと推定できる。

遺物は 18 世紀の陶磁器が 1 点出土している。

SK31（Ⅱ - 8 図）

東区中央に位置する円形を呈する土坑である。遺構の規模は径 120cm、確認面からの深さは最大

50cm を計測する。遺構の北側にはテラス状の段が確認された。坑底は比較的平滑で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。規模、形態、遺構の配置から SP26、SP24 などと同時期に存在していた可能性がある。

遺物は近代の陶磁器が 3 点出土している。

SK32、SK33、SK34、SK37（SK32、SK33、SK34 Ⅱ -8 図、SK37 Ⅱ -10 図）

東区中央に位置する長方形を呈する土坑群である。これらの遺構の位置にあまり規則性はないが、主軸方位、規模、覆土、形態などに類似性が高く、併存していた可能性も高い。SK37 は SP18、SP22、SP24 と重複しており、そのすべてより旧である。また、SK33 は南側を撹乱によって削平されている。

遺構はいずれも南北方向を主軸に持つ長方形を呈しており、規模は SK32 が長辺 140cm、短辺 50cm、SK33 が遺存している長辺 120cm、短辺 50cm、SK34 が長辺 140cm、短辺 50cm、SK37 が遺存している長辺 180cm、短辺 50cm、各遺構は浅く、確認面からの深さは最大 15cm を計測する。坑底は丸底風でやや凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。

SK35（Ⅱ - 10 図）

東区東側に位置するやや不整な楕円形を呈する土坑である。遺構の南側で SP15 と重複しており、SK35 が旧である。遺構の規模は長径 200cm、短径 180cm、確認面からの深さは最大 70cm を計測する。遺構の中央は小土坑状に一段下がっていた。坑底、壁は凹凸が激しく、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は小土坑状の落ち込みを含めて、ロームが主体の褐色土を呈している。本土坑は、壁や坑底の状況、覆土の堆積などから植栽痕であろうと推定される。

遺物は 18 世紀の陶磁器が 3 点出土している。

SP36 ～ 69（Ⅱ - 9 ～ 13 図）

東区に位置する小ピット群である。各ピットの規模などの規模、切り合い関係などの詳細は、第Ⅱ - 1 表を参照されたいが、このうち西側に位置する一辺 25 ～ 30cm 程度の方形ピット群（SP42 ～ 59）は、その中央に明瞭な柱痕が確認でき、2 × 2 間あるいは 2 × 3 間程度の掘立柱建物の存在が推定できる。

東京癲狂院あるいは第一高等学校に比定されると思われるが、断定はできない。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。

SK71（Ⅱ - 13 図）

西区南側に位置する方形と推定される土坑である。遺構の南側は調査区域外にあり、全体の様子は窺えない。西壁には階段と坑底からテラス状の施設が構築されている。階段は一段 30cm ほどの段差を有する二段のステップが遺構内に構築されており、最下段脇には階段補強のためと推定される径約 30cm、深さ約 30cm のピットが構築されている。遺構の確認面（武蔵野標準層位Ⅳ層上位）から勘案すると階段は数段程度上部に存在していた可能性は考えられるものの、地下室様の天井などの施設はなかったと推定される。遺存している規模は、東西 300cm、南北 130cm、確認面からの深さは最大 90cm を計測する。坑底や壁はやや凹凸を有し、壁は坑底から東はやや緩やかにそれ以外はほぼ垂

直に立ち上がっている。覆土は6層に分層されるが、ロームを含む褐色土から暗褐色土が主体で、焼土は含まれていない。

遺物は、18世紀前半の陶磁器類がコンテナ1箱出土している。

SK72（Ⅱ-13図）

西区南側に位置する長方形を呈する土坑である。主軸は真北からやや東に振れるSU83、SU84、SU85をはじめとする西区に南北に連なる遺構群と同一であり、これらの遺構群が17世紀後葉から18世紀前葉にかけておそらく長屋に伴う遺構として構築されたものと推定される。詳細は後述したい。規模は、東西180cm、南北120cm、確認面からの深さは最大100cmを計測する。坑底や壁はやや凹凸を有し、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は5層に分層されるが、ロームを含む暗褐色土が中心で、各層には焼土は含まれていない。

遺物は、18世紀前半の陶磁器類がコンテナ4箱出土している。

SK73（Ⅱ-14図）

西区南西端に位置する円形を呈すると思われる土坑である。遺構の東半を近代以降の撹乱によって削平されている。また、南側は調査区域外に及んでおり、遺構の遺存状況は不良である。遺存している規模は、東西120cm、南北70cm、確認面からの深さは最大20cmと浅い。推定では2m程度の径を有する遺構であったと思われる。比較的フラットな坑底から、壁はやや傾斜を有して立ち上がっている。

遺物は、確認されていない。

SK74（Ⅱ-14図）

西区南西側に位置する方形を呈する土坑である。主軸は真北からやや東に振れる西区に南北に連なる遺構群と同一である。遺構上部を斜めに撹乱されており、北側のやや浅いテラス部分が壊されている。遺構は、北側の浅いテラス状の部分と南側の深い土坑部分とで構成されるが、土坑部分の中央から西側は一段低くなっている。規模は、東西110cm、南北はテラス部分は30cm、土坑部分は90cmを計測し、土坑部分の西側約60cmが一段低く構築されている。確認面からの深さはテラス部で10cm、土坑部分東側で70cm、西側で90cmを計測する。坑底、壁、テラスはやや凹凸を有するが、各施設の壁や坑底は垂直に構築されている。覆土は4層に分層され、1、3層には焼土粒が含まれている。

遺物は、18世紀前半の陶磁器類がコンテナ1箱出土しており、この中には被熱している遺物も多く確認されている。

SK75（Ⅱ-14図）

西区南西側に位置する円形の土坑である。規模は、径140cm、確認面からの深さは最大50cmを計測する。壁周囲の外周部がやや凹んでいる。坑底や壁は凹凸が顕著で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は2層に分層されるが、ロームブロックなどは多く確認されていない。

遺物は、17世紀後半の陶磁器類がコンテナ1箱出土している。

SK76（Ⅱ-14図）

西区南側に位置するやや歪な方形を呈する土坑である。近代以降の撹乱によって北側を削平されて

いる。規模は、東西 120cm、南北 140cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。坑底や壁はやや凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土を主体として 4 層に分層される。

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀初頭の陶磁器類が 30 点ほど出土している。

SE77（Ⅱ - 14 図）

西区西側中央に位置する井戸である。調査は安全を考慮し、確認面以下 230cm まで行った。確認面より約 150cm 以下では、径 80cm の真円形を呈しているが、以上では漏斗状に開き、確認面では径 120cm の規模を有する。調査時には遺構を覆うように上部に撹乱があり、上部の様子は窺うことができなかった。また、調査を行った深度までには桶状の施設やその痕跡を確認することができなかった。壁は比較的平滑に調整されていた。覆土は暗褐色土を主体として 2 層に分層される。

遺物は、17 世紀末を中心とした陶磁器類、石製品、金属製品などがコンテナ 3 箱ほど出土している。

SK78（Ⅱ - 15 図）

西区西南側に位置する円形の土坑である。西方で SK75 と隣接している。規模は径 160cm、確認面からの深さは最大 70cm を計測する。遺構の坑底や壁は凹凸が激しく、鍋底状の坑底から壁は直立して立ち上がっている。覆土は 2 層に分層されるが、上層から遺物の出土が多い。

遺物は、17 世紀後半を中心とした陶磁器類、石製品、金属製品などが出土している。

SP79（Ⅱ - 15 図）

西区西南側に位置する円形のピットである。規模は径 50cm、確認面からの深さは最大 65cm を計測する。遺構の坑底や壁は平滑で、フラットな坑底から壁は直立して立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SK81（Ⅱ - 15 図）

西区南側に位置するやや歪な方形の土坑である。西方で SK82 と切り合っており、SK81 が新である。また、東側上部を近代以降の撹乱によって削平されている。規模は、東西 210cm、南北 180cm、確認面からの深さは最大 100cm を計測する。遺構の坑底や壁はやや凹凸を有し、フラットな坑底から壁は垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層されるが、堆積・埋没途中で掘り返しが行われたような 1 層の堆積状況と多く遺物が出土している状況から、ゴミ穴として利用していた可能性を考えている。

遺物は、19 世紀初頭を中心とした陶磁器類が、コンテナ 3 箱出土している。

SK82（Ⅱ - 15 図）

西区南側に位置する長方形を呈する土坑である。東方で SK81 と切り合っており、SK82 が旧である。遺構の主軸は真北からやや東に振れる西区に南北に連なる遺構群と同一である。規模は、東西 90cm、南北 170cm、確認面からの深さは最大 150cm を計測する。遺構の坑底や壁はやや凹凸を有し、壁は確認面からオーバーハングするように狭ばりながら立ち上がっている。覆土はロームを多く含む暗褐色土あるいは、黒褐色土 4 層に分層される。

遺物は、18 世紀前半を中心とした陶磁器類、金属製品などがコンテナ 1 箱出土している。

SU83（Ⅱ - 16 図）

西区中央付近に位置する階段を伴う地下室である。遺構の主軸は真北からやや東に振れており、SU84、SU85、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。南側に構築される階段部分と北側にやや歪んだ方形の室部とで構成される。階段、坑底、壁、天井など全体の構築・整形状況が不十分であり、構築途中で廃絶された可能性も考えられる。階段に続く入り口は、室部では階段幅より東方に拡げられており、拡げられた部分の坑底付近の状況から、天井を支える施設の構築途中で天井が崩落したことも考えられる。また、階段は室部外側から入るが、室部に張り出して構築された下二段はステップの比高差もまちまちで、東側を斜方向にカットされている。坑底は、凹凸が激しく、階段近辺を除いて一段下がっていることから、さらに深く掘削する途中であった可能性が高い。

規模は、入り口開口部が、東西 170cm、南北 160cm、階段部が幅 130cm、一段のステップ幅は 25cm、比高差は一、二段目が約 30cm、三段目が 60cm である。室部は東西 270cm、230cm、確認面からの深さは最大 150cm を計測する。階段部分と階段周辺の壁は、比較的平滑に整形されているが、その他の坑底、壁などは凹凸が激しい。覆土は 8 層に分層されるが、4 層以下には遺物が多く含まれている。

遺物は、17 世紀末を中心とした陶磁器類、石製品、金属製品がコンテナ 4 箱出土しており、その多くが二次的火熱を受けている。

SU84（Ⅱ - 16 図）

西区中央付近に位置する階段を伴う地下室である。SK118 と切り合いを有するが、重複部分がわずかであったため新旧は確認できなかった。遺構の主軸は真北からやや東に振れており、SU83、SU85、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。遺構の上部を近代以降の撹乱によって削平されている。南西側に構築された階段部分と階段を中心に扇形に広がる室部とで構成される。室部に至る開口部は、階段部と室部の一部にかかっており、天井は遺構の東から東南部にかけて存在している。階段は最上段がやや広いテラス状を呈し確認面より 140cm 下に存在することから、使用時には最上段に降りるはしごなどが必要であったと思われる。以下のステップは、最上段北東側に矩形に二段構築されている。室部は矩形の階段を中心として北から東南に拡がる扇状を呈するが、壁、坑底とも平滑に調整されていることから、この形状が完成形であると考えられる。また、室部北壁はひな壇状の二段、西壁北側上部に一段のテラス状の張り出しが弧状の壁に平行して設けられている。

規模は、開口部が、東西 170cm、南北 270cm、階段最上部が東西 120cm、南北 60cm、一段のステップ幅は 20cm、比高差は約 25 ～ 35cm である。室部は東西最大 300cm、南北 330cm、確認面からの深さは最大 230cm を計測する。北壁テラスは下段で幅 160cm、奥行き 35cm、上段で幅 130cm、奥行き 35cm、西壁テラスは幅 100cm、奥行き 40cm を計測する。

覆土は 8 層に分層されるが、上層を中心に遺物が多く含まれている。

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類、石製品、金属製品などがコンテナ 2 箱出土しており、その多くが二次的火熱を受けている。

SU85（Ⅱ - 17 図）

西区北側に位置する階段を伴う地下室である。南側で SK86 と重複しており、SU85 が旧である。

遺構の主軸は真北からやや東に振れており、SU83、SU84、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。遺構の上部を近代以降の撹乱によって削平されている。南側に構築された階段と北東隅を一部変形させた方形の室部とで構成される。室部に至る開口部は、階段部、室部に中央に大きくかかっており、天井は南側を除く室部に数 10cm ほどかかるのみである。階段部は室部南壁中央から室部外にかけて構築され、三段分遺存している。各ステップは矩折り状に丁寧に整形され、最下段は室部にアーチ状に張り出している。室部は階段から東、北、西に方形に張り出しているが、北東隅はクランク状に内側に切り欠いたような形状をしている。同時期に存在していた SK112 と地中での貫通を避ける意図があった可能性が高い。

規模は、ステップを含めた開口部が、東西 140cm、南北 220cm、階段の各ステップは幅 140cm、奥行き 25cm、比高差は約 40cm である。室部は東西 270cm、南北最大 210cm、確認面からの深さは最大 120cm を計測する。また、天井部は 10 ～ 20cm 程度しか遺存していないこと、天井が遺存していた層位が武蔵野標準層位Ⅵ層下位であることなどから、遺構上部は 1 m程度近代以降に削平されている可能性がある。覆土は 6 層に分層されるが、上層を中心に遺物が多く含まれている。

遺物は､17 世紀末～ 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類､金属製品などがコンテナ 1 箱出土しており、その多くが二次的火熱を受けている。

SK86（Ⅱ - 17 図）

西区北側に位置する不整な円形を呈する土坑である。遺構の南側で SK87 と北側で SU85 と重複しており、SK86 が新である。本遺構周囲の切り合い関係にある SU85、SK86 ～ 88 などの遺構群は出土遺物から廃絶年代が近接している。また、遺構の主軸は真北からやや東に振れている西区に南北に連なる遺構群はいずれも 17 世紀後半から 18 世紀前半までの遺物が出土しており、当該時期に南北に軸を有する長屋建物が存在していた可能性が高い。坑底、壁は凹凸が激しく、壁の立ち上がりも緩やかである。規模は東西 140cm、南北 190cm、確認面からの深さは最大 45cm を計測する。覆土はロームを多く含む暗褐色土単層である。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類が 10 点程度出土している。

SK87（Ⅱ - 17 図）

西区北側に位置する土坑で、方形の遺構が連結したような形状を呈している。遺構の南側で SK88、北側で SK86、東側で SB120 と重複しており、新旧は SK86、SK88 より旧、SB120 より新である。遺構は西側の長方形の土坑とやや東側に開いた台形状を呈した土坑とが連結するような形状を呈するが、土層の堆積状況から単一の土坑であると判断された。東側台形状の土坑はやや深く、坑底は凹凸を有するが、東側の壁、および西側の坑底や壁は平滑に整形されている。規模は東西 370cm、南北東側で最大 180cm、最小 150cm、確認面からの深さは西側で 60cm、東側で 90cm を計測する。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類が十数点出土している。

SK88（Ⅱ - 17 図）

西区北側に位置する円形を呈する土坑である。遺構の北側で SK87 と重複しており、新旧は SK88 が新である。遺構の坑底や壁は凹凸が激しく､特に壁の立ち上がり際には工具痕が明瞭に確認できる。規模は東西 130cm、南北最大 160cm、確認面からの深さは最大 35cm を計測する。覆土はロームを多く含む黒褐色土単層である。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類が 40 点ほど出土している。

SD89（Ⅱ - 18 ～ 19 図）

東区東側を南北に斜行する近代の土管を埋設する溝である。SK90 と重複しており、SD89 が新である。調査区内では 2 基の長方形の縦坑とそれを地下でつなぐ横坑が構築され、径 35cm の土管が埋設されていた。調査時（1993 年）には農学部から学外本管に流下する配水管として機能していた。縦坑は垂直に掘られているものの、正確に矩折状を呈してはいない。縦坑の規模は、開口部で長辺 390cm、短辺 170cm、坑底で長辺 360cm、短辺 130cm、確認面からの深さは最大 420cm を計測する。調査区域で確認された 2 基の縦坑の間隔は 290cm であった。壁には昇降あるいは土留めなどのために付けられたと思われる人為的な凹みが確認できる。土管を埋設する横坑は、人が這って入れる程度で断面かまぼこ形に掘られている。横坑の規模は、幅 130cm、高さ 120cm を計測する。埋設されていた土管はマンガン釉が施されている円筒形の先端に一回り大きなジョイント部を持つ一般的な製品で、外径 35cm、使用時におけるジョイント部の間隔が 70cm、ジョイント部にはセメントで補強が施されていた。縦坑はロームを多く含む暗褐色土、褐色土を中心とした埋土によって充填されていたが、土管を設置した横坑は空洞の状態であった。

SK90（Ⅱ - 20 図）

東区東側に位置する楕円形を呈すると思われる土坑である。遺構の西側を SD89 に切られている。遺構の坑底や壁は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長径 230cm、短径 170cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SK94（Ⅱ - 20 図）

東区中央に位置する石を配するピットである。遺構の上部西側を近代以降の撹乱によって削平されており、全体の様子を窺うことができなかった。石は定型的ではないものの自然面をカットした切石で、平面を上に向けて置かれていた。遺構の規模は東西 100cm、南北 100cm、確認面からの深さは 60cm ほどであった。

遺物は、出土していない。

SP95（Ⅱ - 20 図）

東区南側中央に位置するピットである。遺構の主体部は調査区域外に存在し、また、東側の一部を SK28 に、上部を近代以降の撹乱に切られ、全体の様子は窺えなかった。坑底や壁はおおむね平滑に調整されており、鍋底状の坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がっている。確認された遺構の規模は、東西 20cm、南北 90cm、確認面からの深さは最大 70cm を計測する。覆土は 2 層に分層された。

遺物は、出土していない。

SK96（Ⅱ - 20 図）

西区東側中央に位置する不整形の土坑である。遺構の東側を近代以降の撹乱に切られ、全体の様子は窺えなかった。平面形は「十」字状を呈している。坑底や壁はおおむね平滑に調整されており、フラットの坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がっている。確認された遺構の規模は、東西 160cm、南北

230cm、確認面からの深さは最大 25cm を計測する。覆土は褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SE97（Ⅱ - 21 図）

西区北東隅に位置する円形の井戸である。SB120 と重複関係にあり、SE97 が旧である。平面形は円形を呈し、断面は確認面下約 200cm 付近で、壁がややふくらみを有する。調査は安全を考慮し、確認面下約 250cm 付近までしか行わなかった。壁面はやや凹凸を有している。確認面付近が武蔵野標準層位Ⅶ層であることから、遺構の構築面は確認面より 1m 以上高かったと推定される。規模は径 150cm を計測する。覆土は全体的にしまりが強く、廃絶時あるいはそれ以降に突き固めたと思われる。調査を行ったレベルまでには桶などの痕跡は確認されなかった。

遺物は、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の陶磁器類、石製品、金属製品などが出土している。

SK98（Ⅱ - 21 図）

西区北東側に位置する長方形を呈する土坑である。SB120 と重複関係にあり、SK98 が旧である。土坑主体部分の平面形は東西に主軸を有する長方形を呈し、東側にはテラス状の張り出しを有する。また、東壁付近には円形の小ピットが構築されている。土坑主体部分の規模は、東西 160cm、南北 120cm、確認面からの深さは最大 45cm を計測する。テラスは主体部分より 30cm 東側に張り出すように遺存していたが、上部が削られ特に東側では明確な立ち上がりが認識できなかった。小ピットは、径 40cm、坑底からの深さは 20cm を計測する。主体部の壁や坑底は丁寧に平滑に整形され、壁は坑底から垂直に立ち上がる。覆土は 2 層に分層された。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類を中心にコンテナ 1 箱が出土している。

SK99（遺構Ⅱ - 21 図）

西区北東側に位置するやや変形した長方形を呈する土坑である。SB120 と重複関係にあり、SK99 が旧である。平面形は南北に主軸を有する長方形を呈するが、南壁はやや開いて台形状を呈している。規模は、東西 70cm、南北 130cm、確認面からの深さは最大 10cm を計測する。壁や坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SP100（Ⅱ - 21 図）

西区南東側に位置する楕円形を呈するピットである。規模は、長径 110cm、短径 70cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。壁や坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底からやや開いて立ち上がる。覆土は褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SP101（Ⅱ - 21 図）

西区南東側に位置する円形を呈する 2 基のピットである。北側の大きめのピットを南側の小ピットが切って構築されている。規模は、北側のピットが径 30cm、確認面からの深さは 15cm、南側のピットが径 20cm、確認面からの深さが 10cm を計測する。

両ピットともに遺物は、出土していない。

SP102（Ⅱ - 21 図）

西区東側に位置する方形の小ピットである。規模は一辺 20cm、確認面からの深さは 10cm を計測する。

遺物は、出土していない。

SP103（Ⅱ - 22 図）

西区東側に位置する方形の小ピットである。規模は一辺 25cm、確認面からの深さは 15cm を計測する。

遺物は、出土していない。

SP104（Ⅱ - 22 図）

西区東側に位置する長方形のピットである。規模は長辺 35cm、短辺 25cm、確認面からの深さは 15cm を計測する。遺構の東側に径 10cm の柱痕と思われる土層（1 層）が確認された。

遺物は、出土していない。

SK106（Ⅱ - 22 図）

西区東側に位置する不整長方形の土坑である。東西方向に主軸を有するが、西壁は矩折り状に整形されていない。壁や坑底面は凹凸が激しく、壁の立ち上がりも一定ではない。規模は長辺 140cm、短辺 55cm、確認面からの深さは最大 35cm を計測する。

遺物は、出土していない。

SP107（Ⅱ - 22 図）

西区東側に位置する円形の土坑である。北側は主体部分より 20cm 北東側に張り出すように遺存していたが、上部が削られ明確な範囲が認識できなかった。壁や坑底面はやや凹凸を有し、壁は緩やかに立ち上がる。主体部の規模は径 80cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。

遺物は、出土していない。

SP108（Ⅱ - 22 図）

西区西側に位置する方形の小ピットである。周囲に関連すると思われる遺構は確認できなかった。規模は一辺 30cm、確認面からの深さは 25cm を計測する。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SP109（Ⅱ - 22 図）

西区西側に位置する方形の小ピットである。北側の一部を撹乱によって削平されている。規模は一辺 25cm、確認面からの深さは 40cm を計測する。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SP110（Ⅱ - 22 図）

西区東側に位置する楕円形の小ピットである。規模は長辺 35cm、短辺 20cm、確認面からの深さは 20cm を計測する。坑底や壁は凹凸が激しい。1 層はしまりがなく、柱痕であろうと思われるが、

周囲に関連すると思われる遺構は確認できなかった。
　遺物は、出土していない。

SP111（Ⅱ - 22 図）
　西区東側に位置するやや歪な方形の小ピットである。東側の一部を撹乱によって削平されている。規模は一辺 25cm、確認面からの深さは 20cm を計測する。覆土は黒褐色土単層である。
　遺物は、出土していない。

SK112（Ⅱ - 23 図）
　西区北側に位置する方形を呈する土坑である。SB120 と重複関係にあり、SK112 が旧である。また、土坑の北半が調査区域外にあり、西側の一部を撹乱によって削平されており、全体の様子は窺うことができなかった。遺構の主軸は真北からやや東に振れており、SU83、SU84、SK115 など西区に南北に連なる遺構群よりやや振れは大きい。天井の崩落と思われるローム土が確認されていること、出土遺物の年代がこれら遺構群と同年代であるなど、本遺構が地下室の可能性が高く、地下部分で主軸方位の差異が生じたことも考えられる。遺存している規模は、東西 200cm、南北 100cm、確認面からの深さは最大 130cm を計測する。壁や坑底は丁寧に平滑に整形され、壁は坑底から垂直に立ち上がる。覆土は 6 層に分層された。
　遺物は、18 世紀前葉の陶磁器類を中心にコンテナ 1 箱が出土している。

SK113（Ⅱ - 23 図）
　西区南側に位置するやや歪な方形を呈する土坑である。土坑の東側の一部を撹乱によって削平されており、全体の様子は窺うことができなかった。遺構は東西方向に主軸を有するが、やや南に振れており、SU83、SU84、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。東壁は北側に一段クランク状に張り出しており、西壁南側は半円形の張り出しが構築されている。これらの施設の性格は不明である。規模は、東西 260cm、南北 150cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。壁や坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや角度を持って立ち上がる。覆土は暗褐色土単層である。
　遺物は出土していない。

SK114（Ⅱ - 23 図）
　西区東側に位置するやや歪な方形を呈する土坑である。土坑の東側の一部が調査区域外にあり、全体の様子は窺うことができなかった。遺構は東西方向に主軸を有するが、やや南に振れており、SU83、SU84、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。遺構の南、東側にはテラス状の張り出しがあったが、土層の堆積状況から同一遺構と判断された。また、西壁中央には円形の小ピットが確認できたが、本遺構の付帯施設とは断定できなかった。土坑主体部の規模は、東西 190cm、南北 130cm の長方形を呈しており、確認面からの深さは最大 130cm を計測する。南側テラスは土坑主体部よりやや西側にずれて構築されており、東西 190cm、南北 45cm、深さ 15cm を計測する。東側のテラス部分は北側が調査区域外にあり、最大 40cm、深さ 30cm 程度張り出している。壁や坑底はやや凹凸を有し、主体部の壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。
　遺物は、18 世紀前半の陶磁器類を中心にコンテナ 1 箱出土している。

SK115（Ⅱ - 23 図）

西区中央に位置する土坑である。遺構の形状は北半が方形、南壁が湾曲している形状で、東西方向に主軸を有する。主軸は東西よりやや南に振れており、SU83、SU84、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。土坑の規模は、東西 220cm、南北 180cm の長方形を呈しており、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。壁や坑底は北側が比較的平滑に調整されているのに対し、南側は凹凸を有している。壁は坑底から北側では垂直に、南側ではややオーバーハングして立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、17 世紀末の陶磁器類を中心に 50 点ほど出土している。

SK116（Ⅱ - 24 図）

西区中央に位置する長方形の土坑である。主軸は南北方向よりやや東に振れており、SU83、SU84、SK115 など西区に南北に連なる遺構群と同一方位である。土坑の規模は、東西 90cm、南北 110cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。壁や坑底は比較的平滑に調整されている。壁は坑底からやや角度を持って立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、キセルなどが少量出土している。

SE117（Ⅱ - 24 図）

西区北側に位置する井戸である。SE12、SE77 とほぼ同一軸線上にあり、また、出土遺物も 17 世紀末を中心とした年代であることなどにより、これらは同じ長屋などに同一時期に存在していたと推定している。平面形は円形を呈し、下方は次第に拡がっている状況が窺えた。また、東西方向の壁に相対して足掛かりと思われる堀込みが確認された。規模は、確認面で径 100cm、確認面下 120cm 付近で径 110cm を計測する。壁や坑底はやや凹凸を有している。覆土は調査位置までは 2 層に分層されたが、桶などの痕跡は確認できなかった。

遺物は、17 世紀末の陶磁器類を中心にコンテナ 1 箱ほど出土している。

SK118（Ⅱ - 24 図）

西区中央に位置する土坑である。遺構の形状は北側に方形の南東側に円形の土坑が連結されたような形状を呈しているが、土層の観察から同一遺構であろうと判断された。西側を近代以降の撹乱によって削平されており、遺構全体の様子は窺えなかった。土坑の規模は、東西が北側方形部分で 90cm、南側円形部分で 120cm、南北が 140cm、確認面からの深さは最大 45cm を計測する。坑底や壁面はやや凹凸を有し、壁は方形部分がほぼ垂直に、円形部分がややカーブを持って立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀前葉の陶磁器類を中心に出土している。

SB120（Ⅱ - 25 図）

西区北側に位置する建物基礎群である。基礎は方形を呈するピットが、東西約 120cm、南北約 190cm 間隔で配されており、調査区域内で合計で 25 基確認された。このうち最南列は、それ以北の列と基礎の間隔が異なっており、異なる利用が想定される。SK87、SE97、SK98、SK99、SK112 と重複しており、その全てより新しい。ピットはおおむね一辺約 40cm、確認面からの深さ 30 ～ 50cm の掘込みを有し、掘込み内には多量のレンガが栗石として使用されていた（Ⅱ - 25 図）。レンガの年

代から第一高等学校に関係する建物基礎遺構と推定されるが、現存する図面などに該当する建物は描かれていない。

SK121（Ⅱ - 24 図）

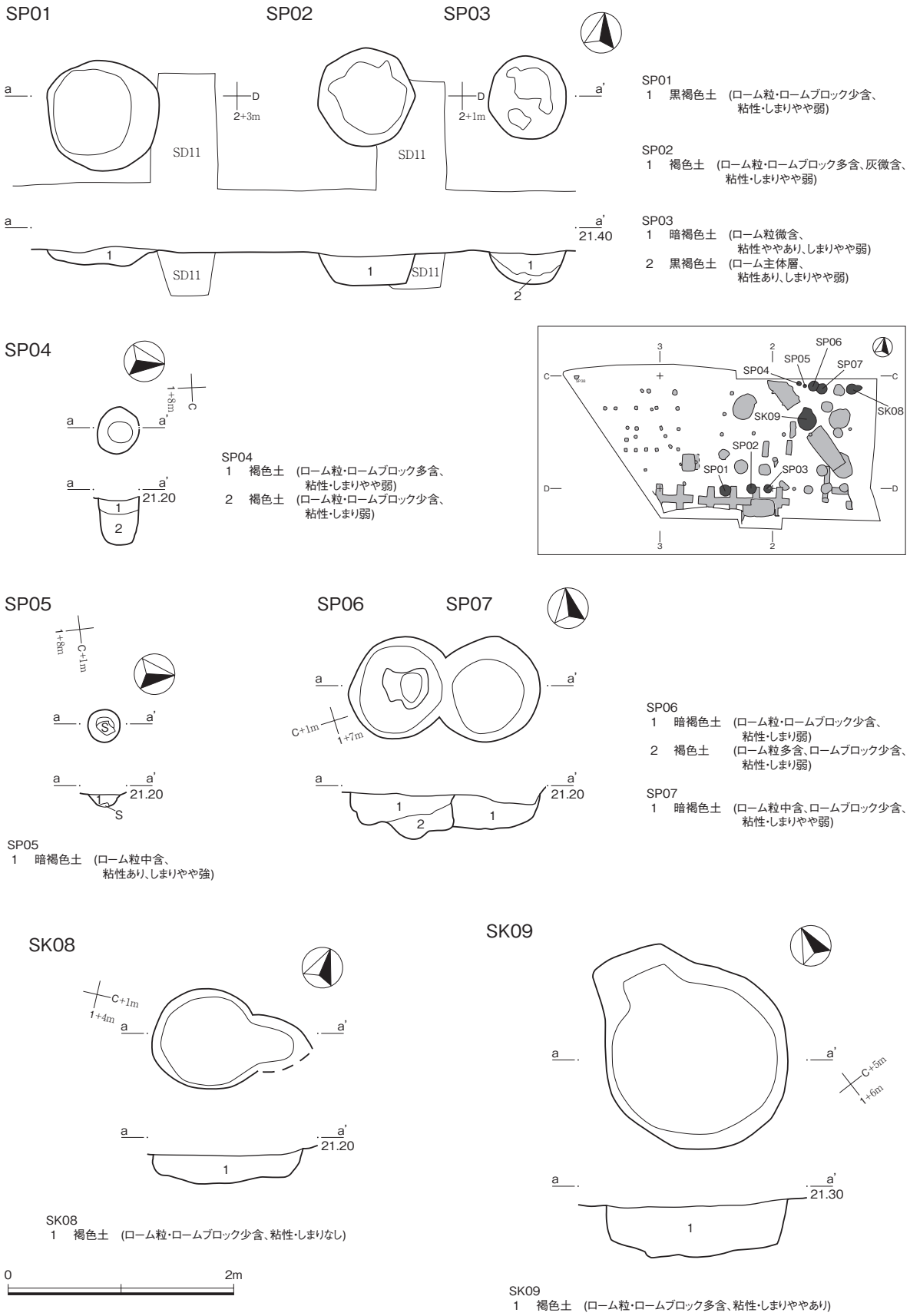
東区中央に位置する溝状の遺構である。遺構の南側を近代以降の撹乱、北側を SP36 に切られ、遺構全体の様子は窺えない。規模は、東西 40cm、南北 50cm、確認面からの深さは最大 10cm を計測する。覆土は黒褐色土単層である。

遺物は出土していない。

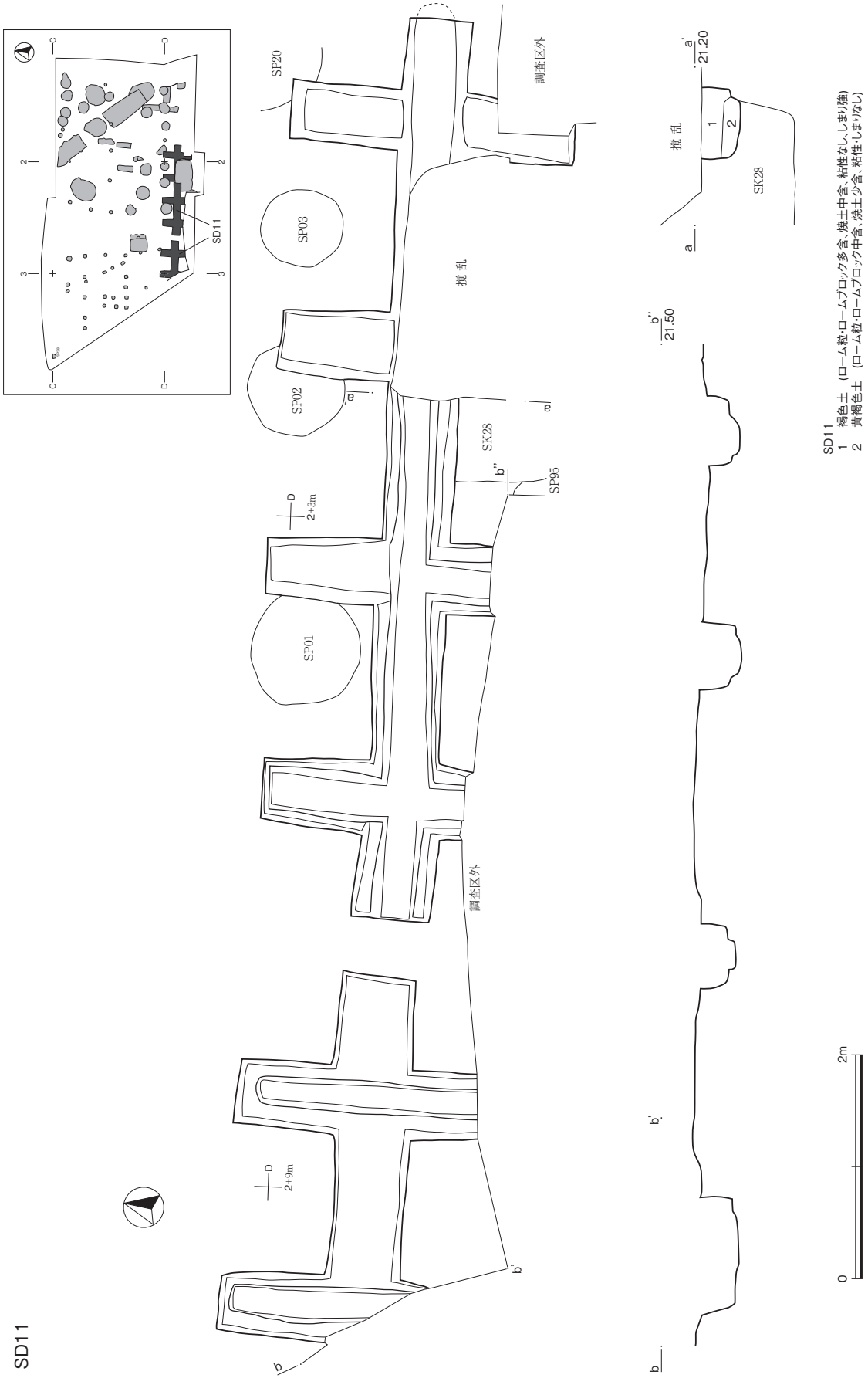
SP122（Ⅱ - 9、24 図）

東区西側に位置する円形の小ピットである。遺構の東側でSU29と重複しており、SP122が新である。規模は、径 30cm、深さは 20cm を計測する。覆土は褐色土単層である。

遺物は出土していない。

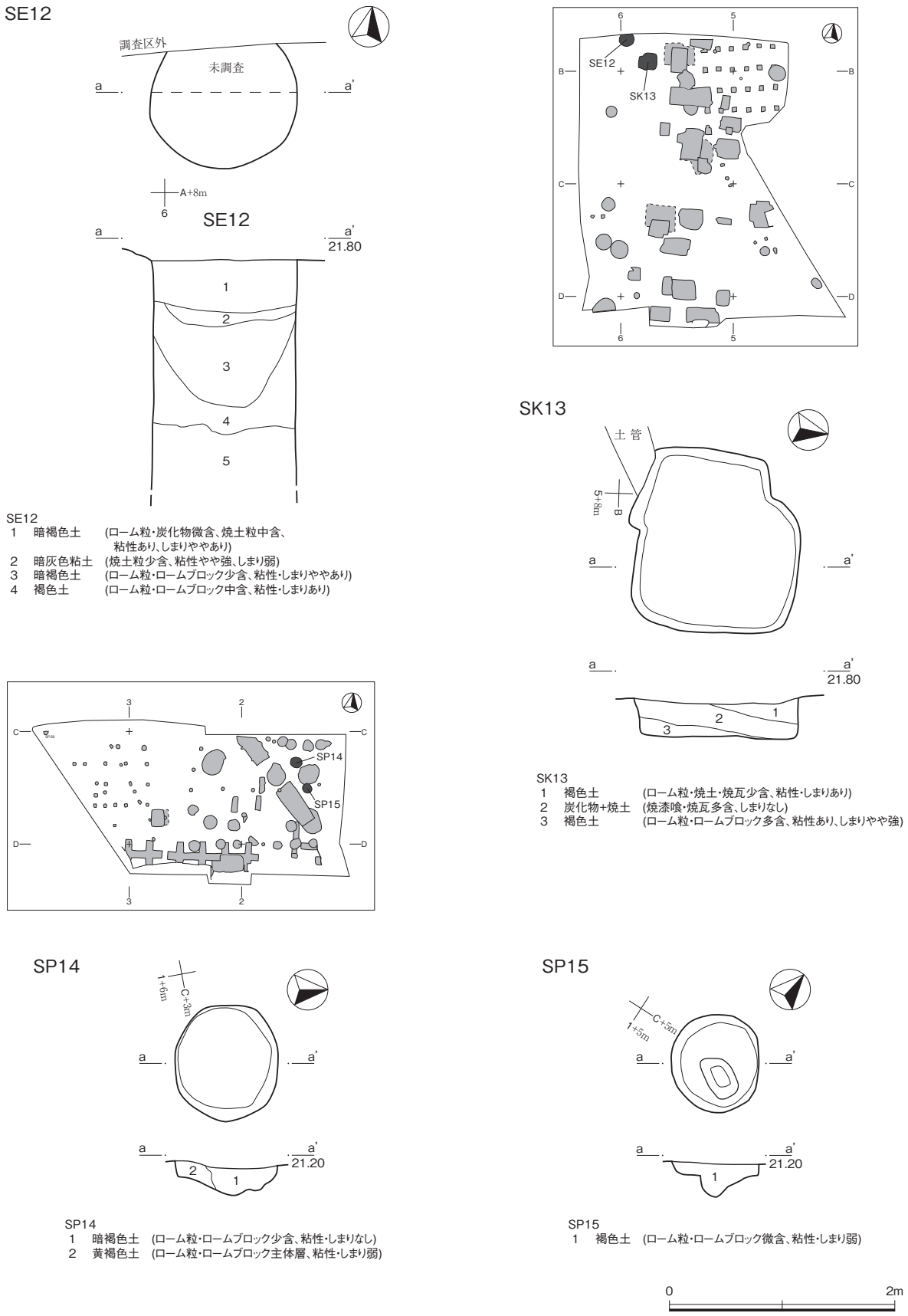


Ⅱ-3図　教育学部総合研究棟地点　SP01～SP07、SK08、SK09　(1/50)



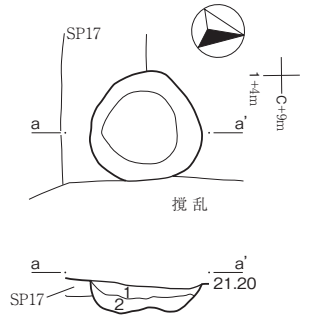
SD11
1　褐色土（ローム粒・ロームブロック多含、焼土中含、粘性なし、しまり強）
2　黄褐色土（ローム粒・ロームブロック中含、焼土少含、粘性・しまりなし）

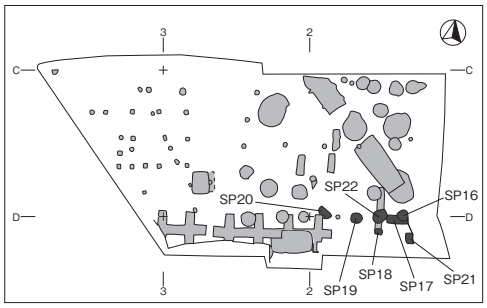
Ⅱ-4図　教育学部総合研究棟地点　SD11　(1/50)



Ⅱ-5図　教育学部総合研究棟地点　SE12、SK13、SP14、SP15　(1/50)

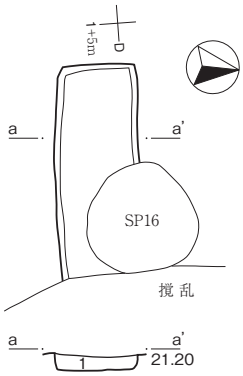
SP16



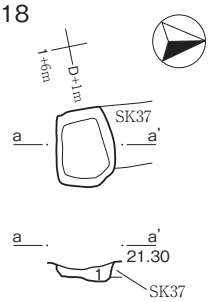


SP16
1　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱)
2　褐色土　(ロームブロック多含、粘性・しまり弱)

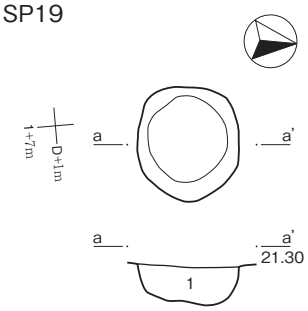
SP17



SP18



SP19

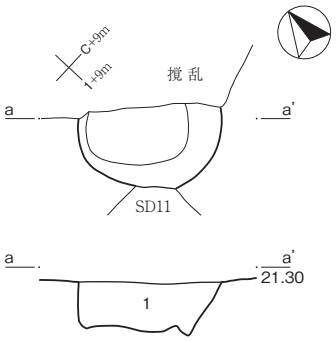


SP17
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性やや弱、しまりややあり)

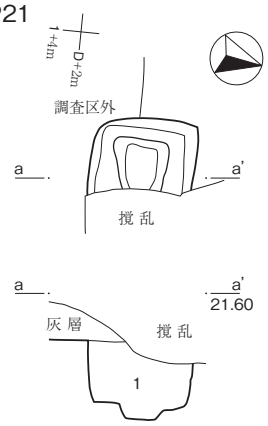
SP18
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりややあり)

SP19
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック微含、粘性・しまり弱)

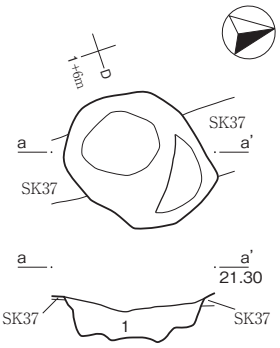
SP20



SP21



SP22



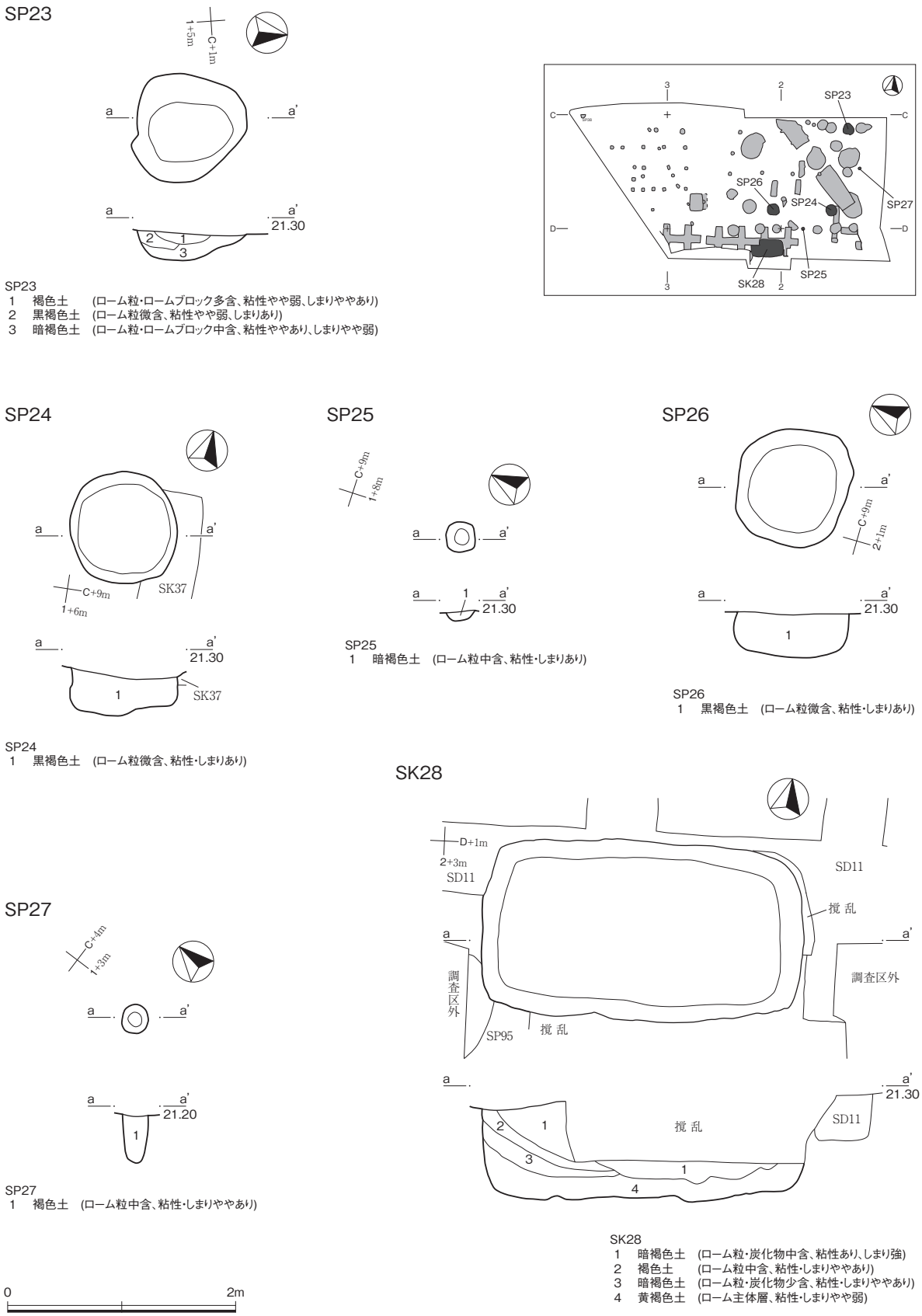
SP20
1　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱)

SP21
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、焼土中含、粘性なし、しまり強)

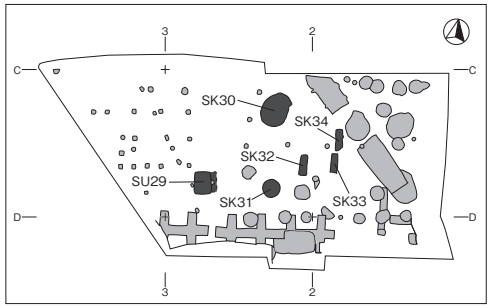
SP22
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック微含、粘性・しまり弱)

0　2m

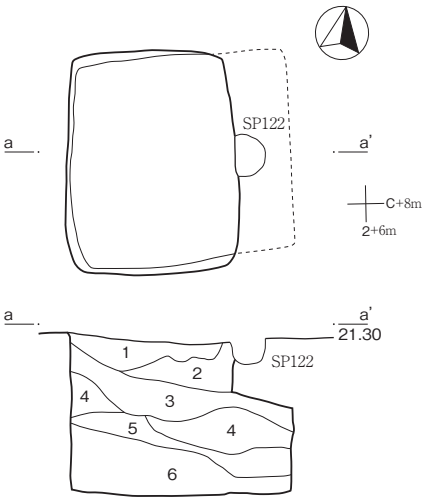
Ⅱ-6図　教育学部総合研究棟地点　SP16～SP22　(1/50)



Ⅱ-7図　教育学部総合研究棟地点　SP23～SP27、SK28　(1/50)

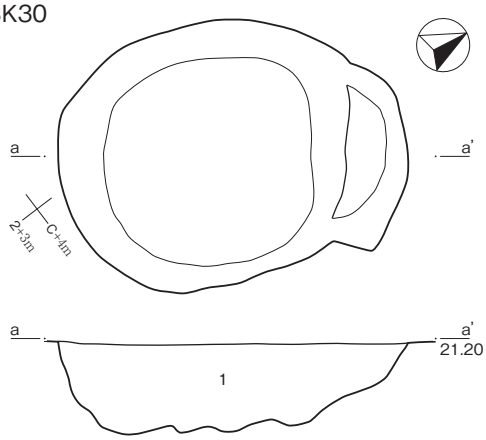


SU29



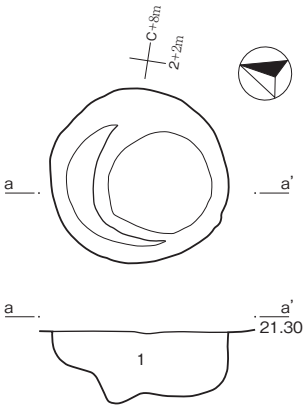
SU29
1　黄褐色土　(ローム粒多含、炭化物少含、粘性あり、しまり極強)
2　褐色土　(ローム粒・炭化物少含、粘性・しまりあり)
3　暗褐色土　(ローム粒多含、炭化物・焼土中含、粘性あり、しまりややあり)
4　褐色土　(ローム粒多含、粘性・しまりややあり)
5　暗褐色土　(炭化物・焼土多含、灰褐色粘土少含、粘性・しまり弱)
6　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりややあり)

SK30



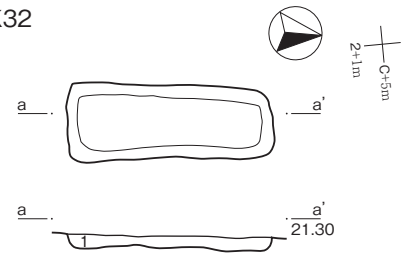
SK30
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりややあり)

SK31



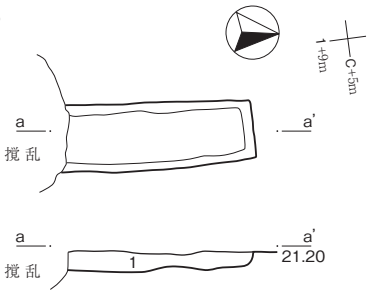
SK31
1　黒褐色土　(ローム粒少含、粘性あり、しまりやや弱)

SK32



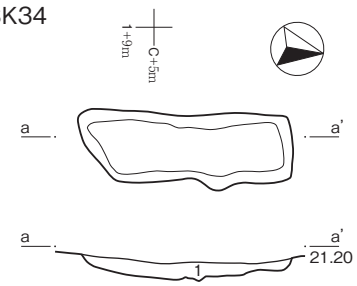
SK32
1　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)

SK33



SK33
1　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)

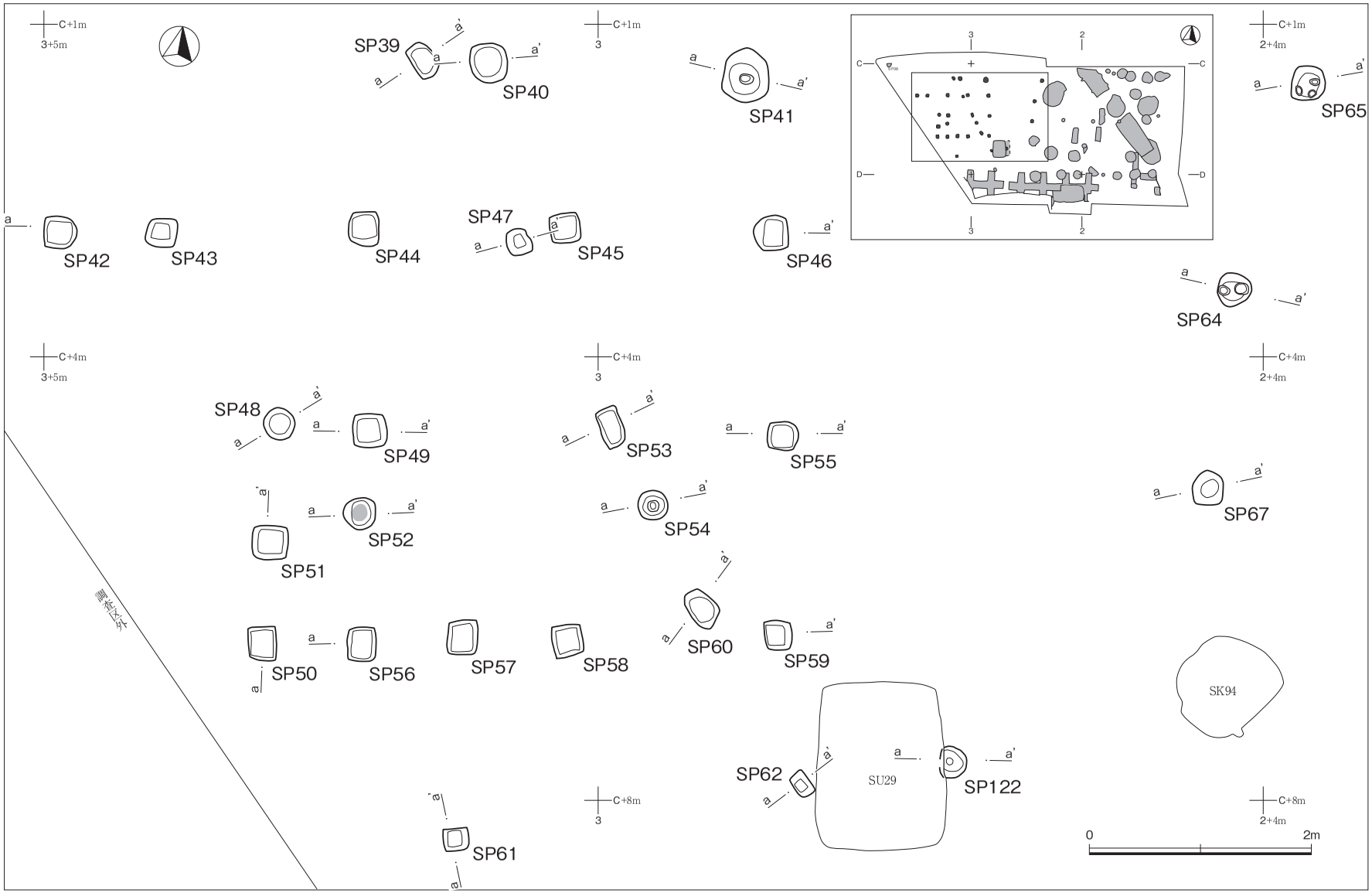
SK34



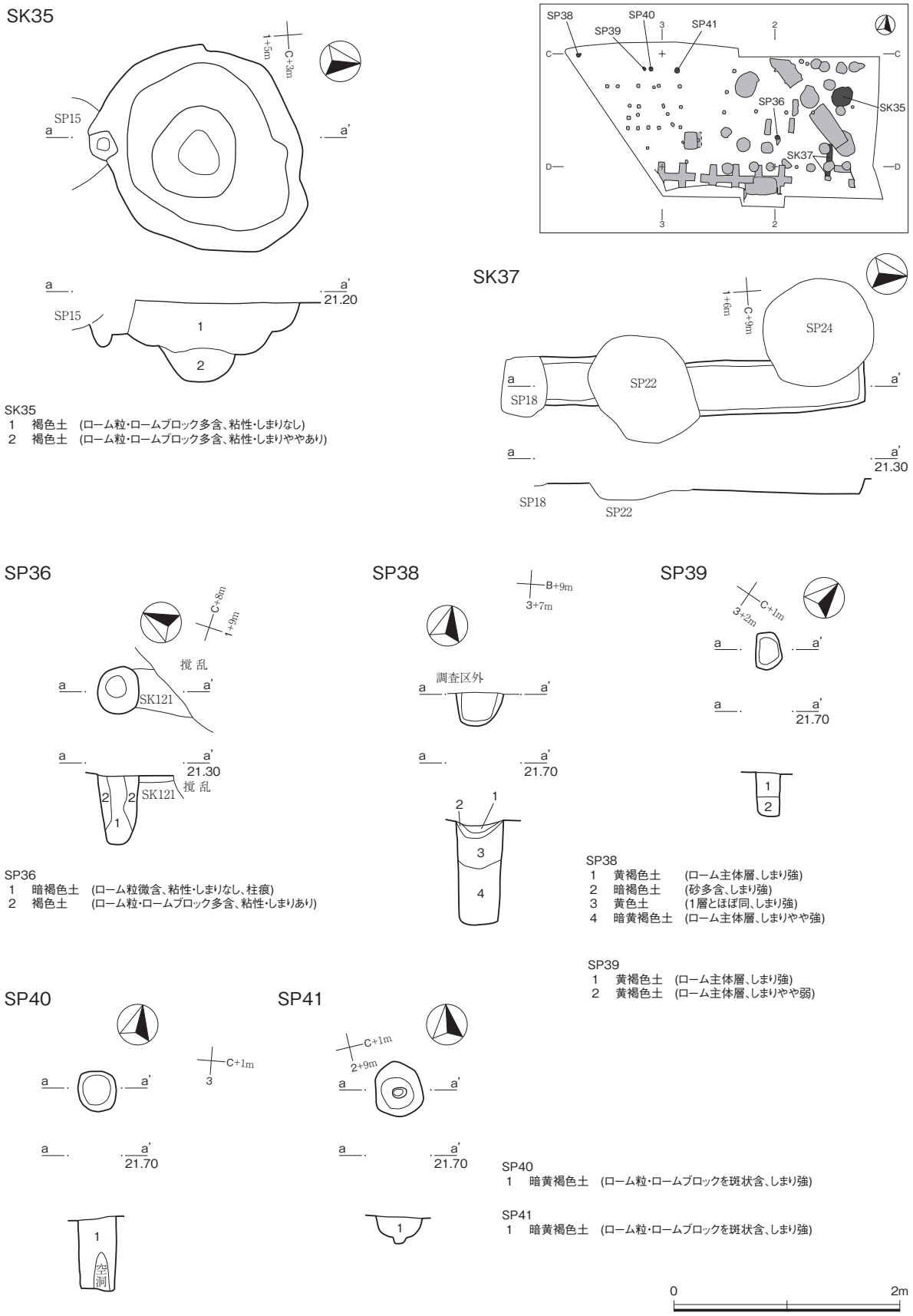
SK34
1　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)

0　2m

Ⅱ-8図　教育学部総合研究棟地点　SU29、SK30～SK34　(1/50)



Ⅱ-9図　教育学部総合研究棟地点　ピット平面図　(1/50)



SK35
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりなし)
2　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりややあり)

SP36
1　暗褐色土　(ローム粒微含、粘性・しまりなし、柱痕)
2　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)

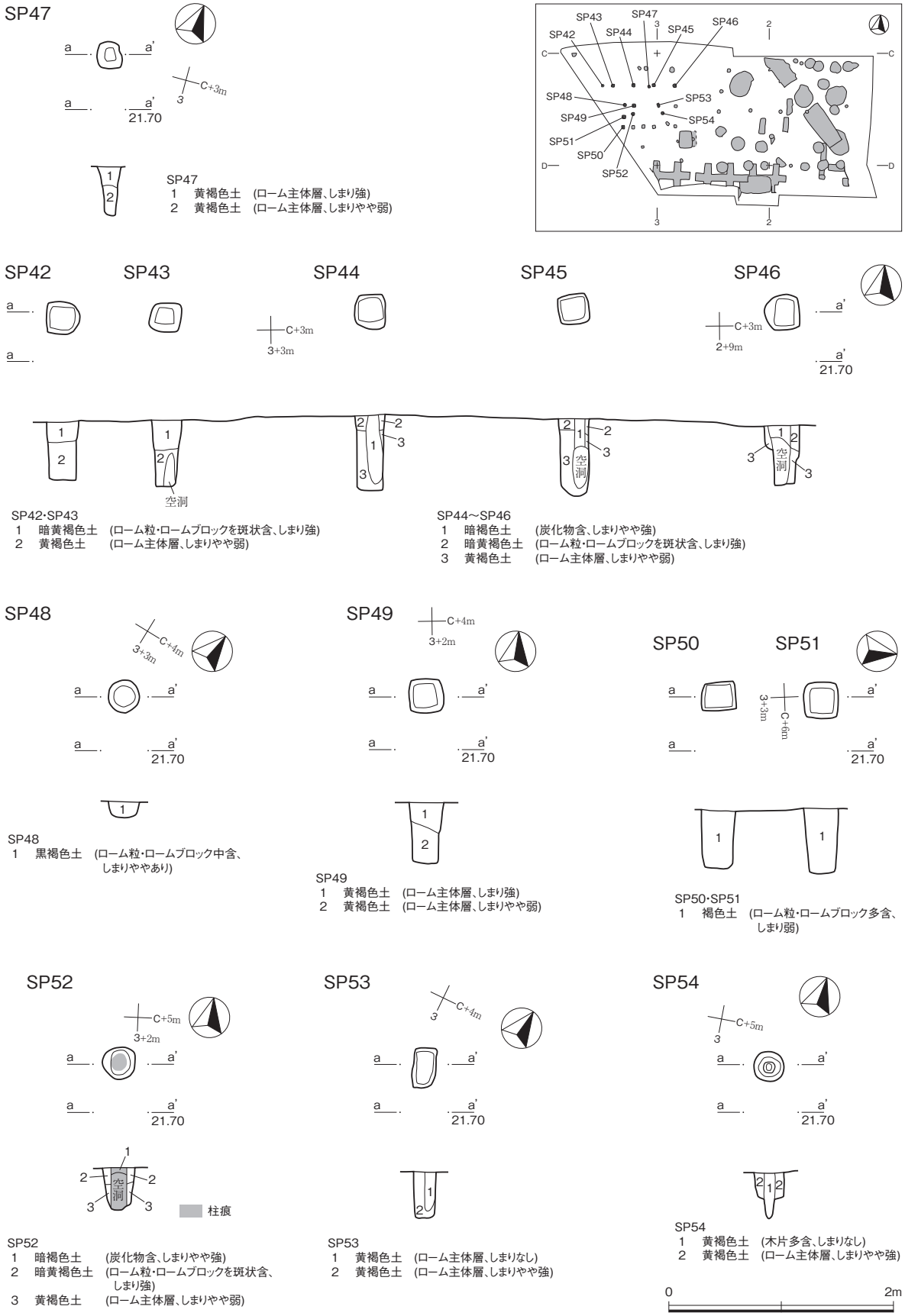
SP38
1　黄褐色土　(ローム主体層、しまり強)
2　暗褐色土　(砂多含、しまり強)
3　黄色土　(1層とほぼ同、しまり強)
4　暗黄褐色土　(ローム主体層、しまりやや強)

SP39
1　黄褐色土　(ローム主体層、しまり強)
2　黄褐色土　(ローム主体層、しまりやや弱)

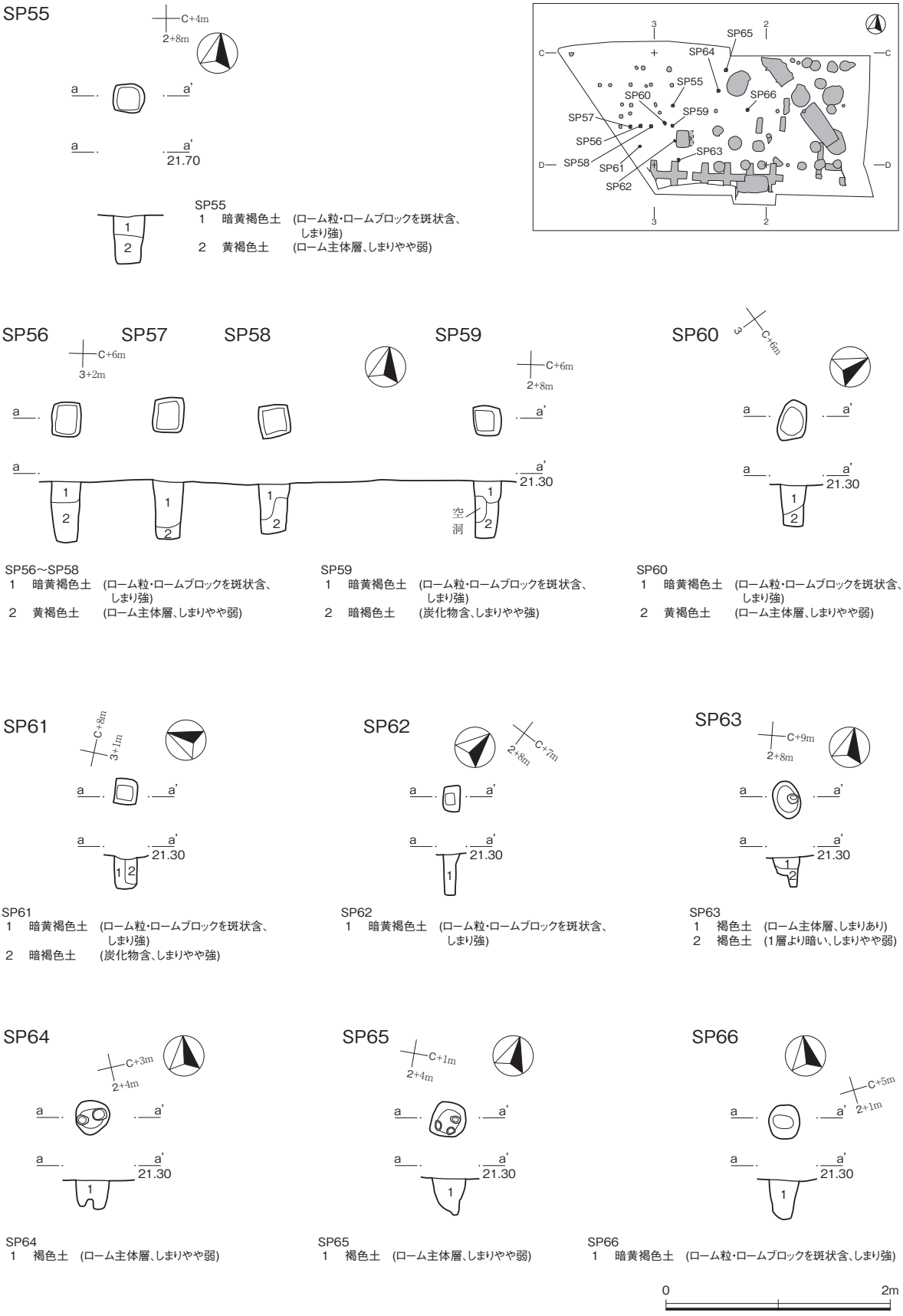
SP40
1　暗黄褐色土　(ローム粒・ロームブロックを斑状含、しまり強)

SP41
1　暗黄褐色土　(ローム粒・ロームブロックを斑状含、しまり強)

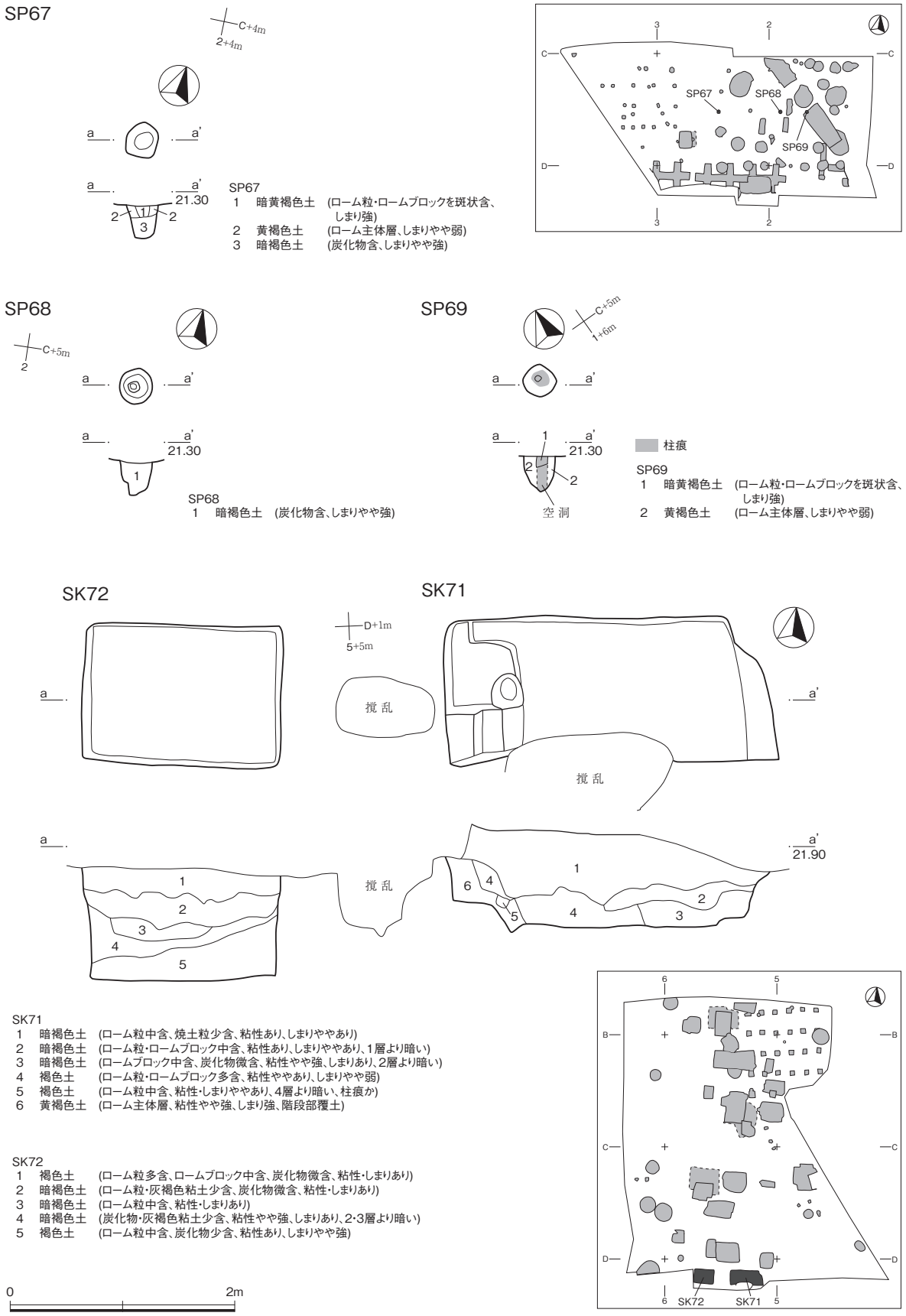
Ⅱ-10図　教育学部総合研究棟地点　SK35、SK37、SP36、SP38～SP41　(1/50)



Ⅱ - 11図　教育学部総合研究棟地点　SP42～SP54　(1/50)

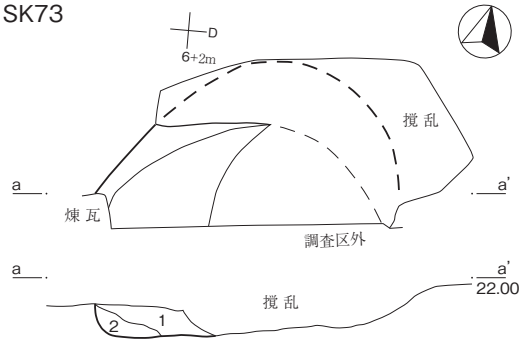


Ⅱ-12図　教育学部総合研究棟地点　SP55～SP66　(1/50)

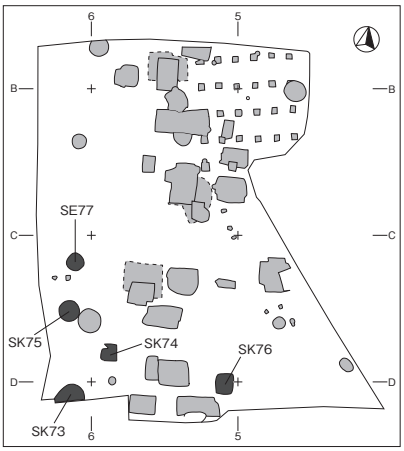


Ⅱ - 13図　教育学部総合研究棟地点　SP67～SP69、SK71、SK72　(1/50)

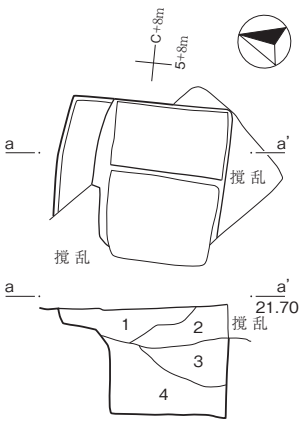
SK73



SK73
1　暗褐色土　(ローム粒微含、粘性あり、しまりややあり)
2　暗褐色土　(粘性あり、しまりややあり、1層より暗い)

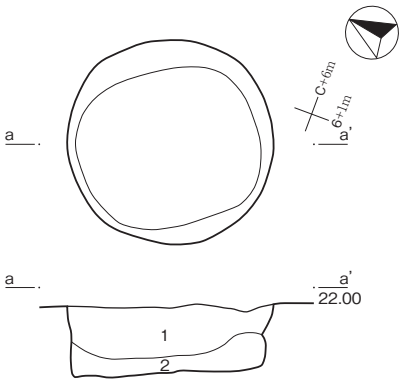


SK74



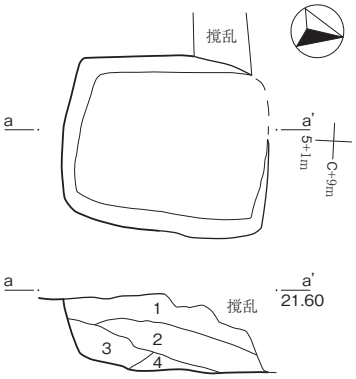
SK74
1　褐色土　(ローム粒中含、炭化物・焼土粒少含、粘性ややあり、しまりやや弱)
2　黄褐色土　(ローム主体層、粘性・しまりやや弱)
3　暗褐色土　(炭化物・焼土粒多含、粘性・しまりやや弱)
4　暗茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック・炭化物少含、粘性・しまりややあり)

SK75



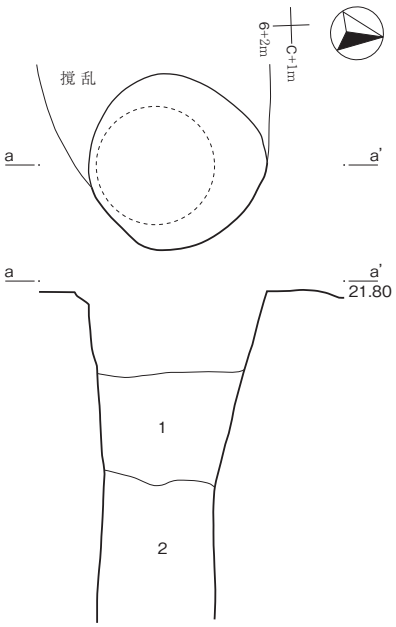
SK75
1　暗茶褐色土　(ローム粒少含、貝微含、粘性・しまりあり)
2　暗褐色土　(ローム粒・炭化物少含、粘性・しまりややあり)

SK76



SK76
1　暗茶褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック・炭化物微含、焼土粒少含、粘性・しまりあり)
2　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性あり、しまりややあり)
3　暗褐色土　(ローム粒少含、炭化物・焼土粒微含、粘性・しまりややあり)
4　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりややあり、3層より明るい)

SE77

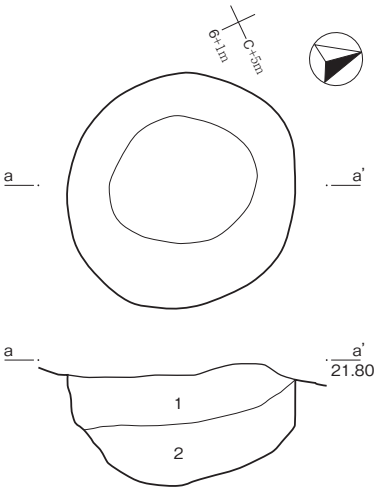


SE77
1　暗褐色土　(ローム粒・小円礫・焼土粒少含、粘性・しまりあり)
2　暗褐色土　(ローム粒含、粘性あり、しまりやや強、1層より暗い)

0　2m

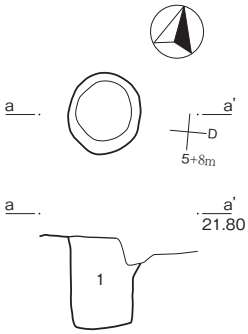
Ⅱ-14図　教育部総合研究棟地点　SK73～SK76、SE77　(1/50)

SK78



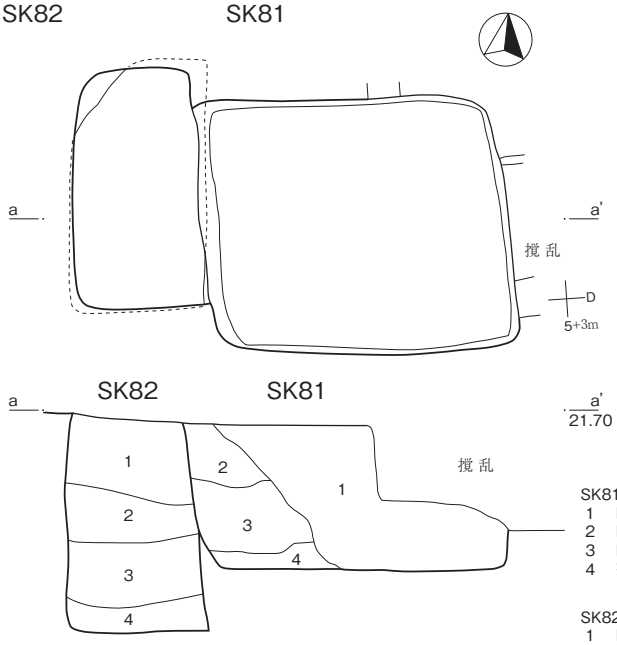
SK78
1　暗褐色土　(ローム粒少含、炭化物中含、遺物含、粘性ややあり、しまりやや弱)
2　褐色土　(ローム粒・灰褐色粘土中含、粘性あり、しまりやや強)

SP79



SP79
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性・しまり弱)

SK82　SK81



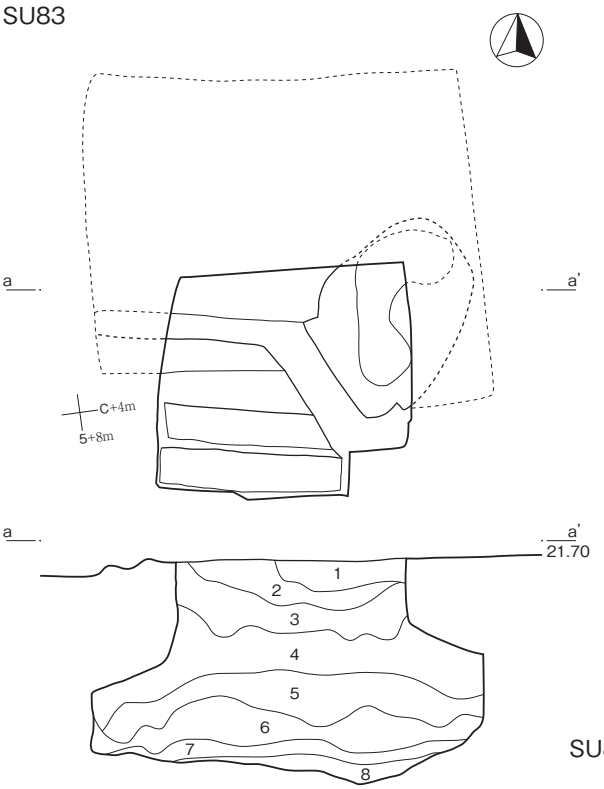
SK81
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、炭化物微含、粘性・しまりややあり)
2　暗褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック少含、炭化物・焼土粒微含、粘性・しまりあり)
3　暗茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)
4　茶褐色土　(ローム主体層、粘性やや強、しまりあり)

SK82
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、炭化物・焼土粒微含、粘性・しまりやや弱)
2　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまり弱)
3　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性・しまり弱)
4　黒褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりあり)

0　2m

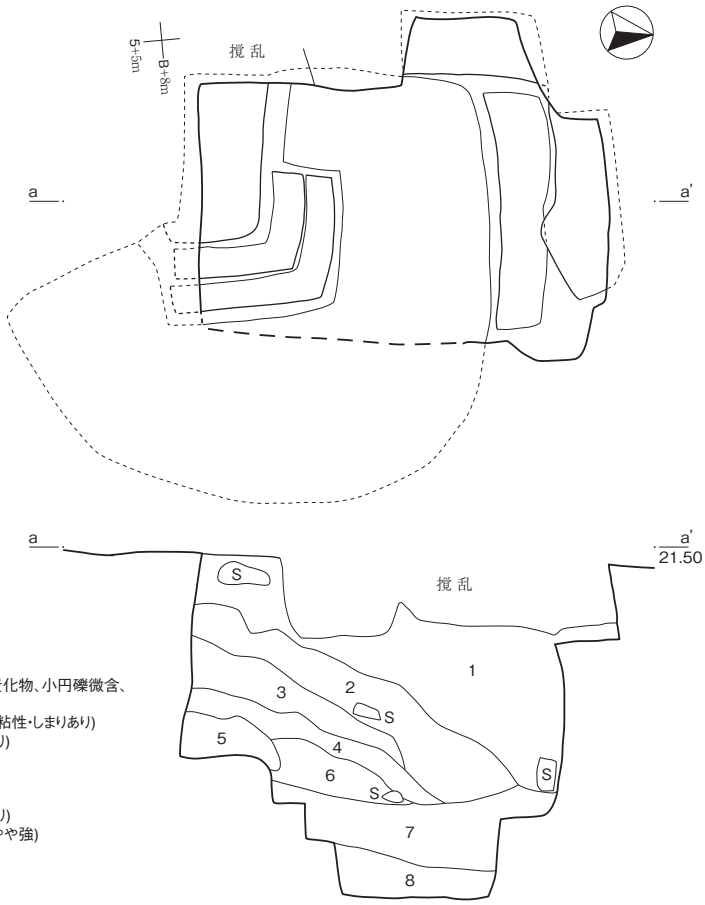
Ⅱ - 15図　教育学部総合研究棟地点　SK78、SK81、SK82、SP79　(1/50)

SU83



SU83
1　褐色土　(ローム粒中含、粘性あり、しまりややあり)
2　灰褐色粘土　(粘性強、しまりあり)
3　褐色土　(ローム粒中含、粘性・しまりややあり)
4　暗褐色土　(ローム粒少含、炭化物・焼土粒微含、粘性・しまりややあり)
5　黒褐色土　(ローム粒・灰褐色粘土少含、粘性やや強、しまりあり)
6　褐色土　(ローム粒多含、粘性・しまりあり)
7　黒褐色土　(ローム粒少含、粘性やや強、しまりあり)
8　暗褐色土　(ローム粒中含、粘性やや強、しまりあり)

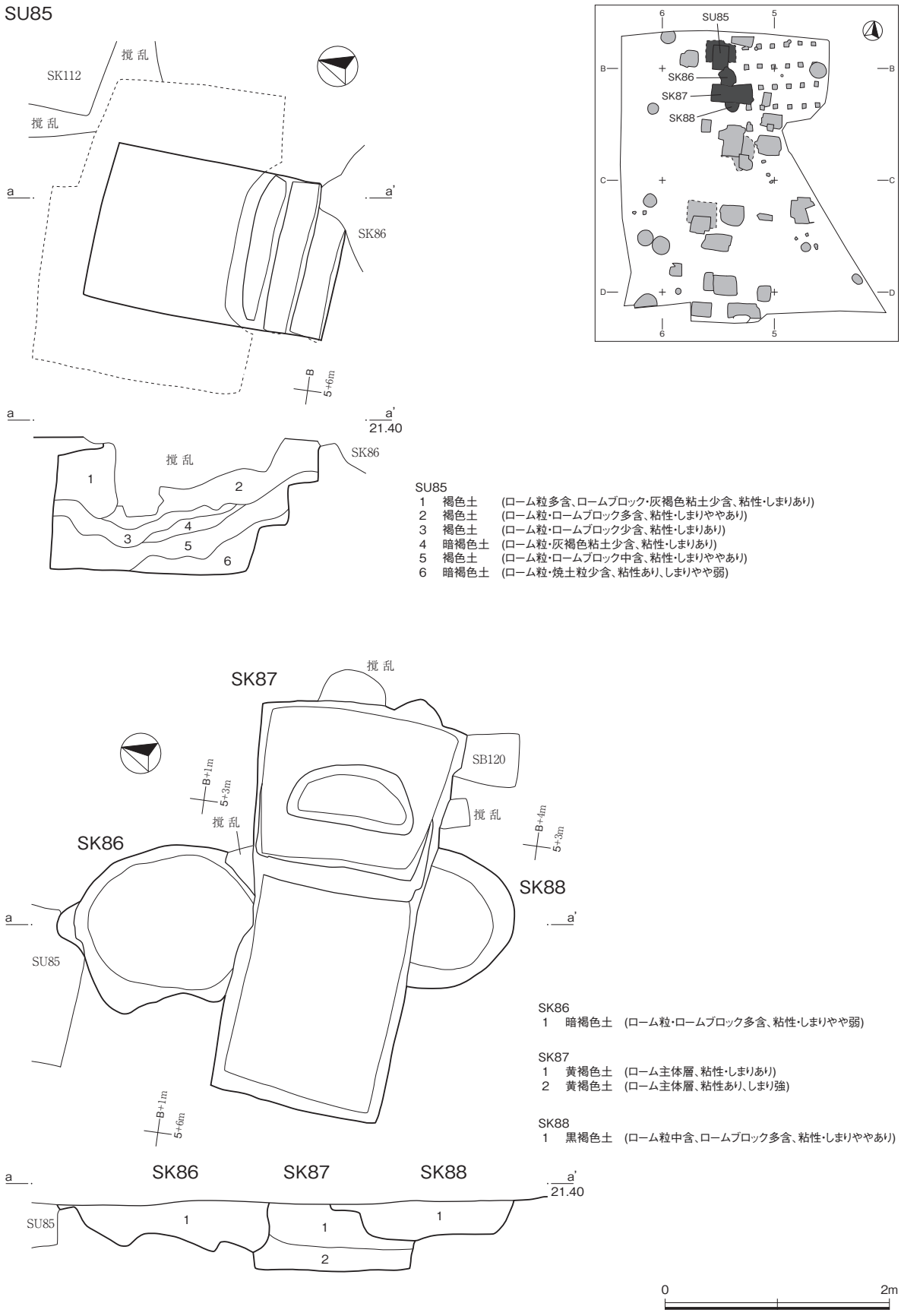
SU84



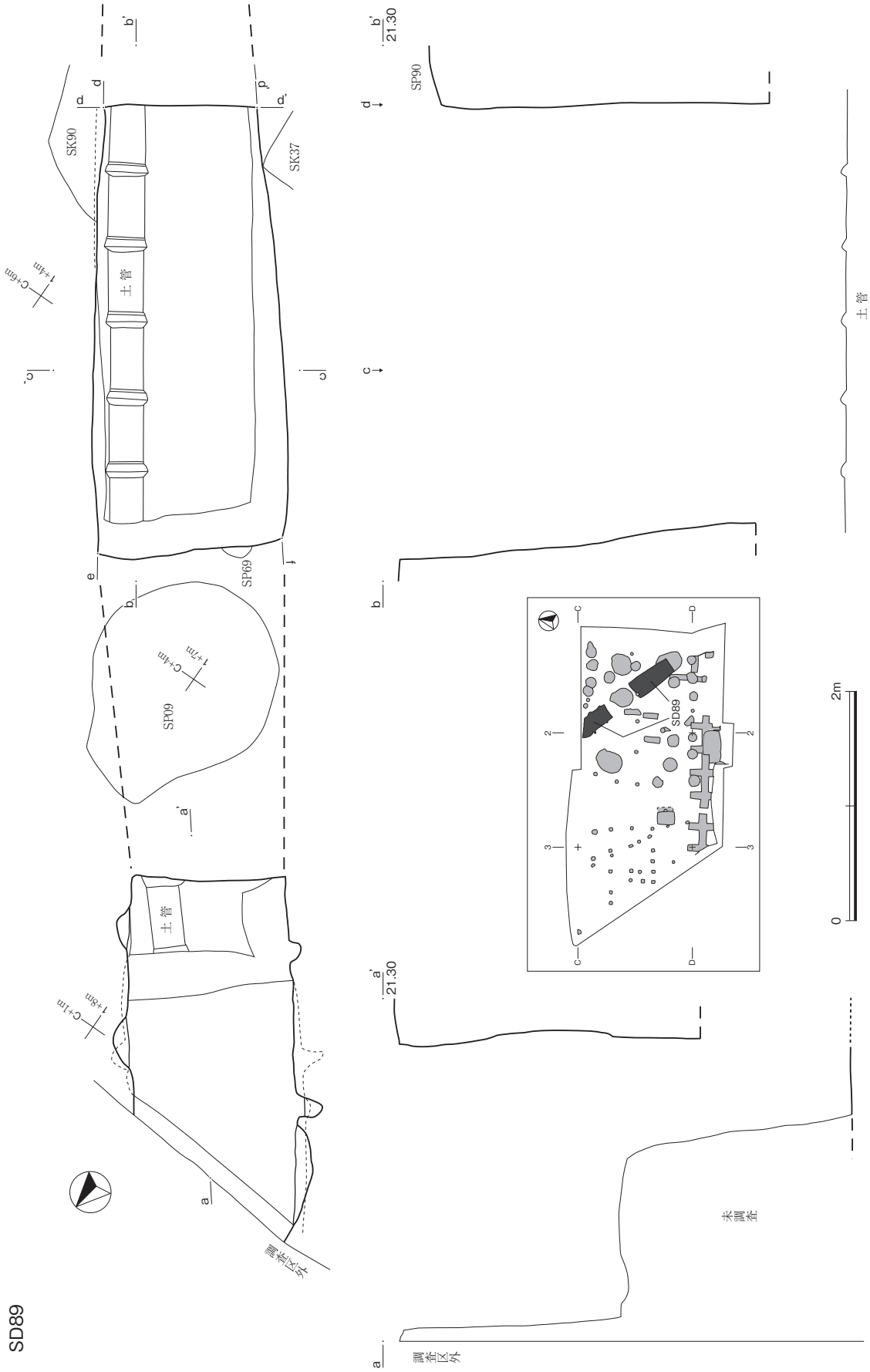
SU84
1　暗褐色土　(ロームブロック・灰褐色粘土、焼土粒少含、炭化物、小円礫微含、粘性・しまりあり)
2　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、炭化物微含、粘性・しまりあり)
3　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性・しまりあり)
4　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりあり)
5　黄褐色土　(ローム主体層、粘性弱、しまりあり)
6　暗褐色土　(ローム粒少含、焼土粒微含、粘性・しまりあり)
7　黄褐色土　(ロームブロック主体層、粘性やや弱、しまりあり)
8　暗褐色土　(ローム粒多含、焼土粒微含、粘性強、しまりやや強)

0　2m

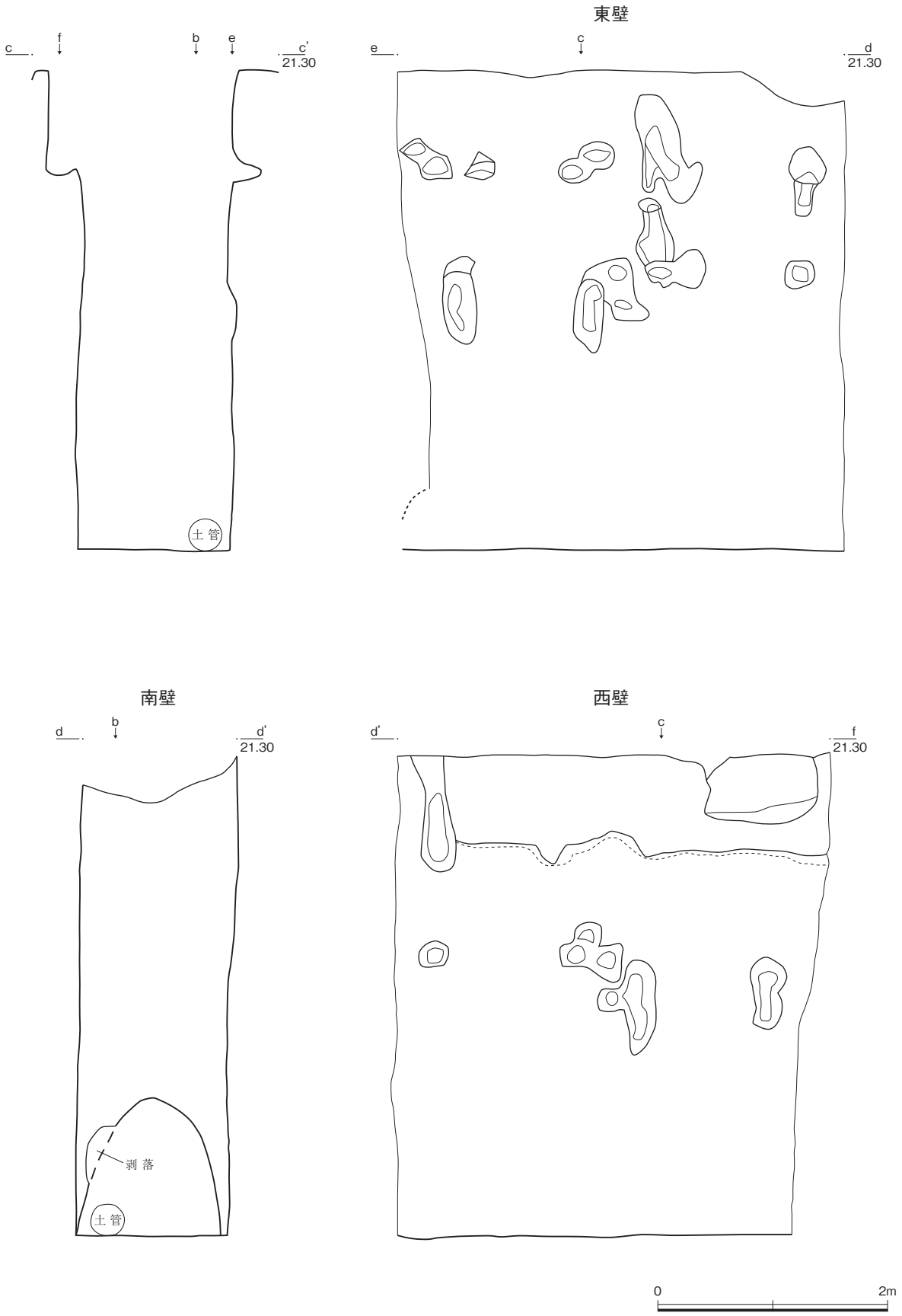
Ⅱ-16図　教育学部総合研究棟地点　SU83、SU84　(1/50)



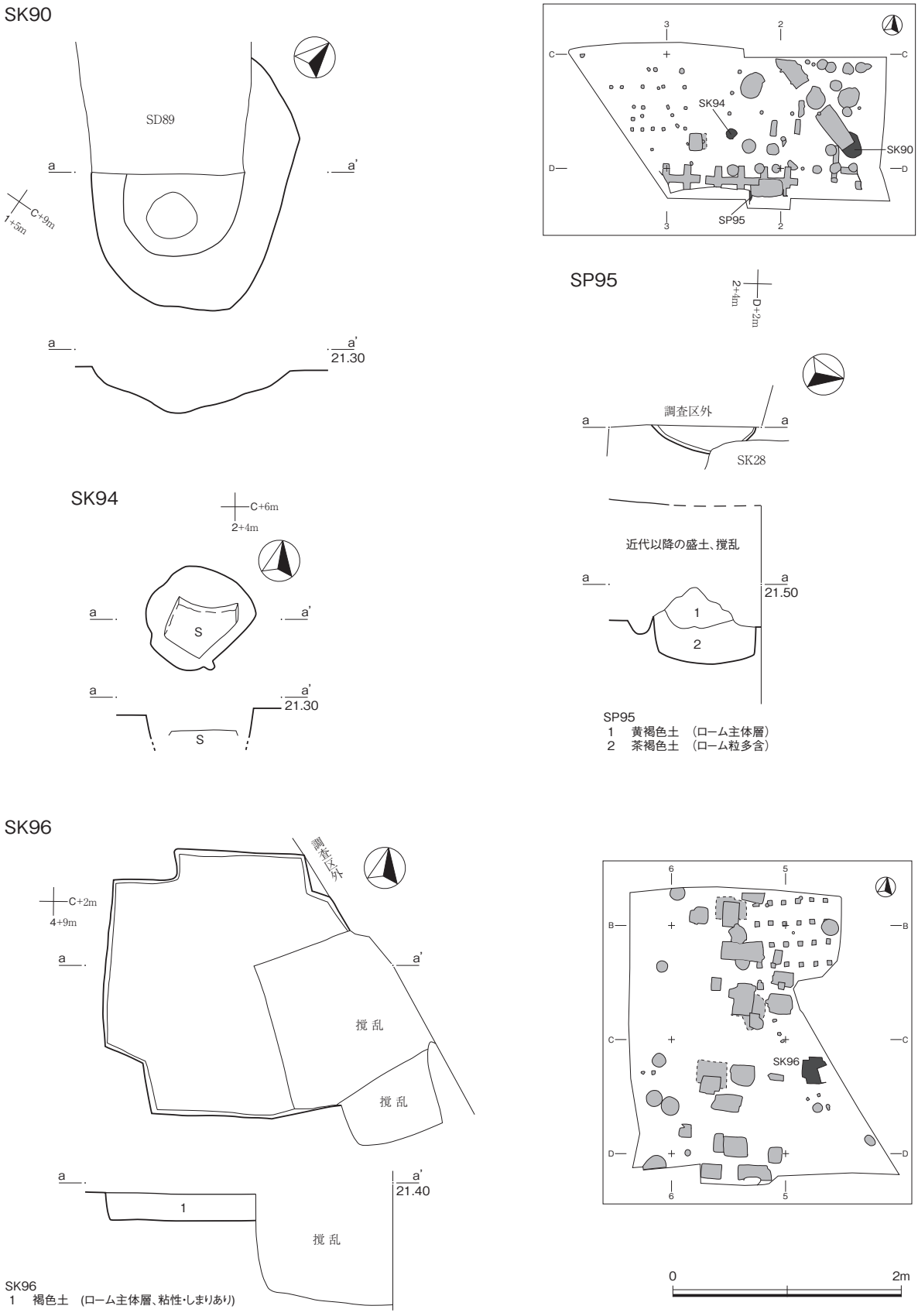
Ⅱ-17図　教育学部総合研究棟地点　SU85、SK86～SK88　(1/50)



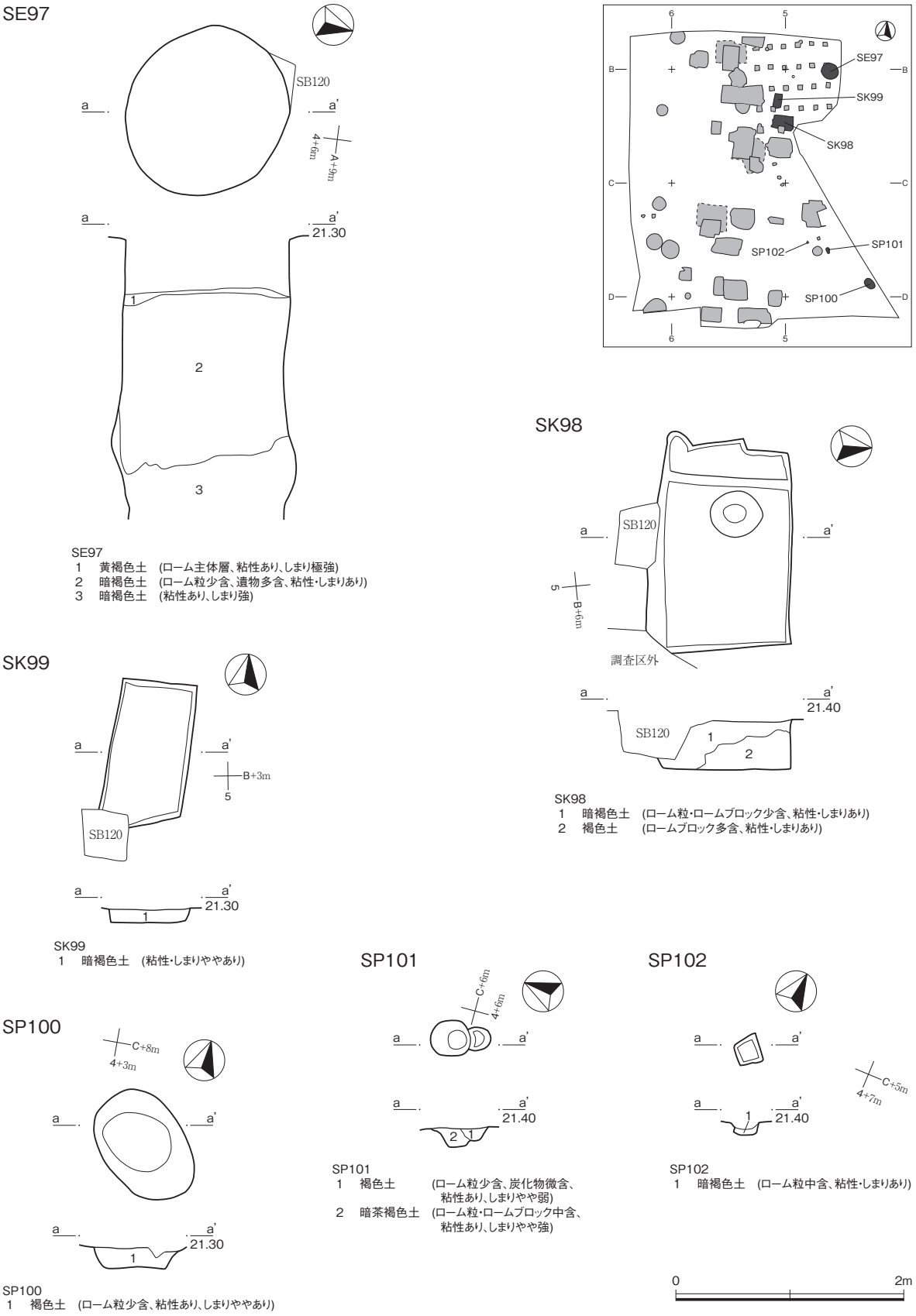
Ⅱ-18図　教育学部総合研究棟地点　SD89(1)（1/50）



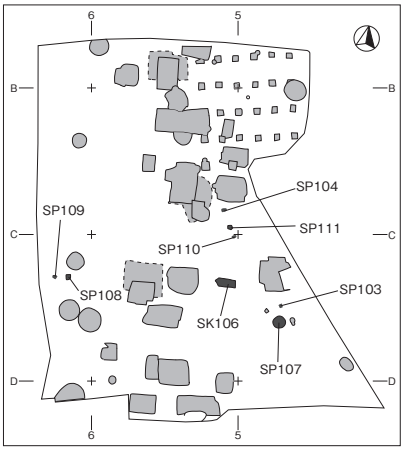
Ⅱ-19図　教育学部総合研究棟地点　SD89(2)　(1/50)



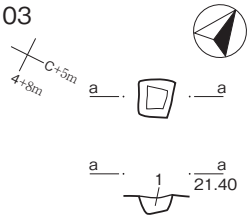
Ⅱ-20図　教育学部総合研究棟地点　SK90、SK94、SK96、SP95　(1/50)



Ⅱ - 21図　教育学部総合研究棟地点　SE97、SK98、SK99、SP100～SP102　(1/50)

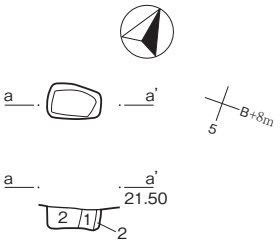


SP103



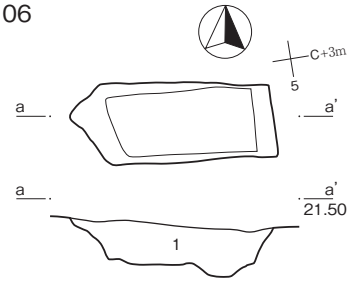
SP103
1　黒褐色土　(ローム粒・小円礫多含、粘性やや弱、しまりあり)

SP104



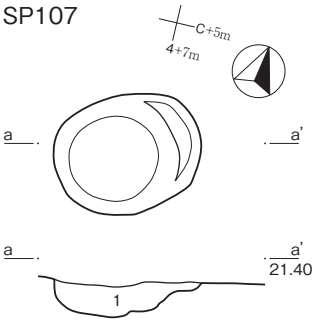
SP104
1　黒褐色土　(灰・礫多含、粘性・しまりなし)
2　黒褐色土　(ローム粒・小円礫多含、粘性やや弱、しまりあり)

SK106



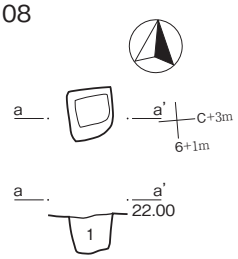
SK106
1　暗褐色土　(ローム粒中含、炭化物・小礫少含、粘性あり、しまりややあり)

SP107



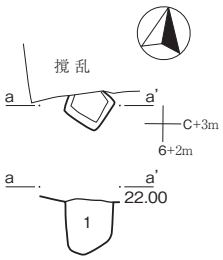
SP107
1　褐色土　(ローム粒少含、炭化物微含、
粘性あり、しまりやや弱)

SP108



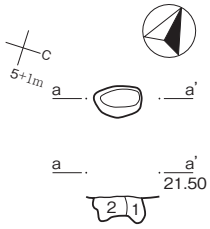
SP108
1　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりあり)

SP109



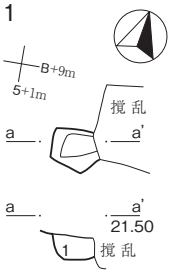
SP109
1　暗褐色土　(ローム粒中含、小円礫微含、
粘性・しまりあり)

SP110



SP110
1　黒褐色土　(灰・礫多含、粘性・しまりなし)
2　黒褐色土　(ローム粒・小円礫多含、
粘性やや弱、しまりあり)

SP111

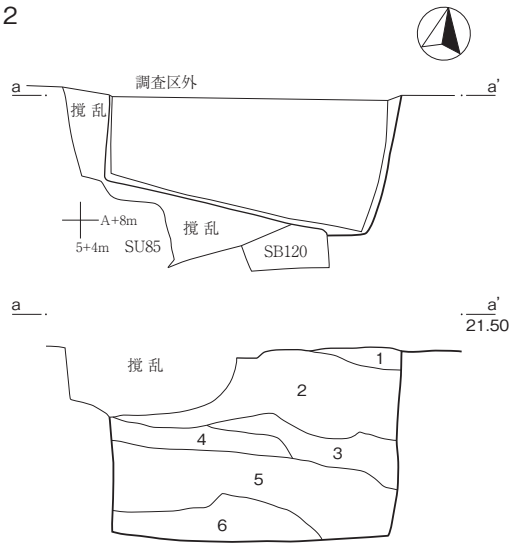


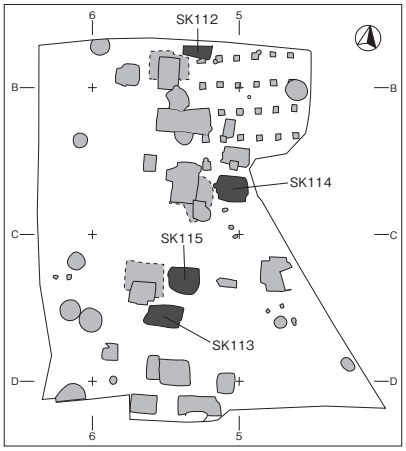
SP111
1　黒褐色土　(ローム粒中含、木片含、
粘性あり、しまりややあり)

0　2m

Ⅱ-22図　教育学部総合研究棟地点　SP103、SP104、SP107～SP111、SK106　(1/50)

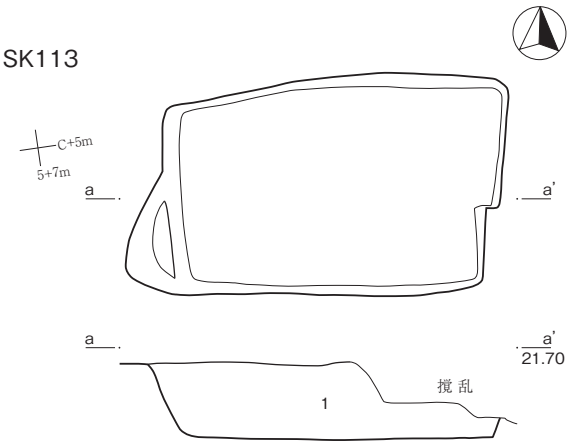
SK112





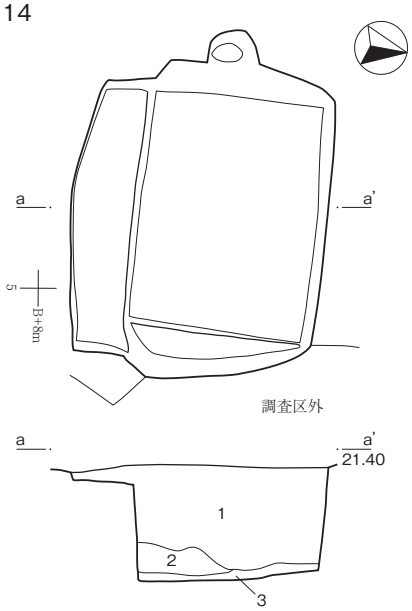
SK112
1　ローム崩落土
2　暗褐色土　(ローム粒・焼土粒・灰褐色粘土少含、炭化物微含、粘性・しまりあり)
3　黒褐色土　(ローム粒中含、粘性あり、しまりややあり)
4　褐色土　(ローム粒多含、炭化物・焼土粒・灰褐色粘土微含、粘性・しまりあり)
5　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、炭化物微含、粘性・しまりややあり)
6　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性弱、しまりやや弱)

SK113



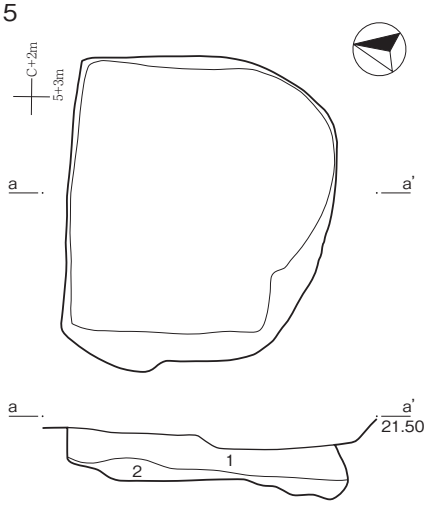
SK113
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、炭化物・灰褐色粘土少含、粘性・しまりあり)

SK114



SK114
1　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性あり、しまりややあり)
2　暗褐色土　(ローム粒、炭化物微含、粘性やや強、しまりあり、1層よりやや暗い)
3　暗灰褐色土　(ローム粒微含、粘性あり、しまり強)

SK115

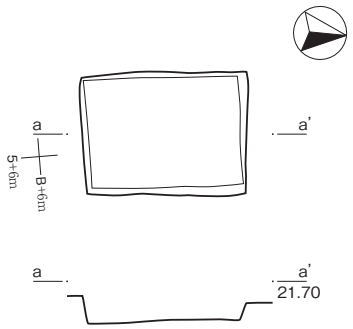


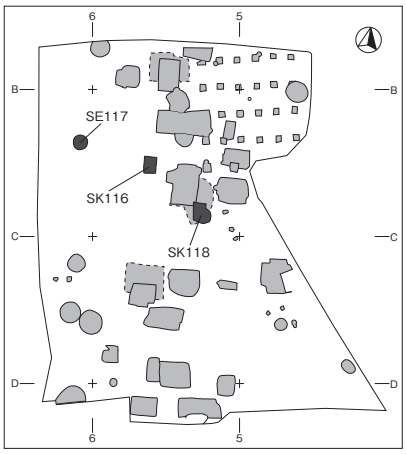
SK115
1　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性あり、しまりややあり)
2　黄褐色土　(ロームブロック主体層、粘性・しまりあり)

0　2m

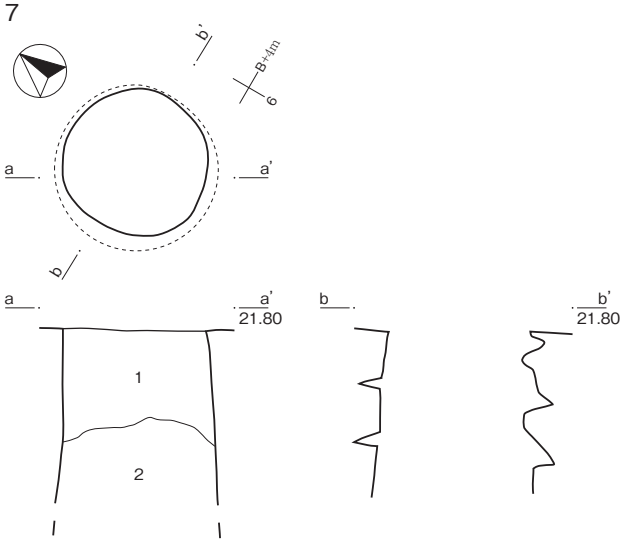
Ⅱ-23図　教育学部総合研究棟地点　SK112～SK115　(1/50)

SK116



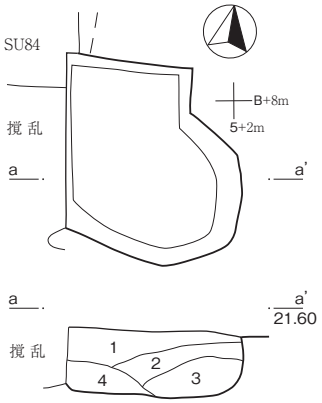


SE117



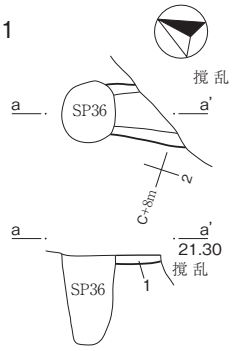
SE117
1　暗褐色土　(ローム粒・炭化物少含、焼土粒中含、粘性あり、しまりややあり)
2　褐色土　(焼土粒中含、粘性ややあり、しまりやや弱、1層よりやや暗い)

SK118

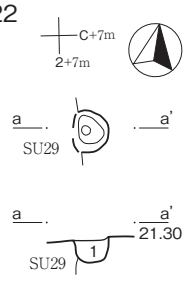


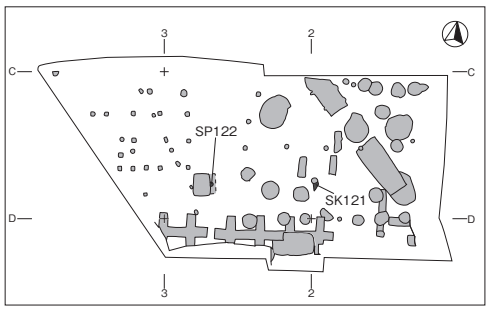
SK118
1　暗褐色土　(灰褐色粘土多含、粘性・しまりあり)
2　茶褐色土　(ローム粒少含、炭化物微含、粘性・しまりあり)
3　茶褐色土　(ローム粒・炭化物少含、ロームブロック多含、粘性・しまりあり)
4　褐色土　(ローム粒中含、粘性・しまりあり)

SK121



SP122



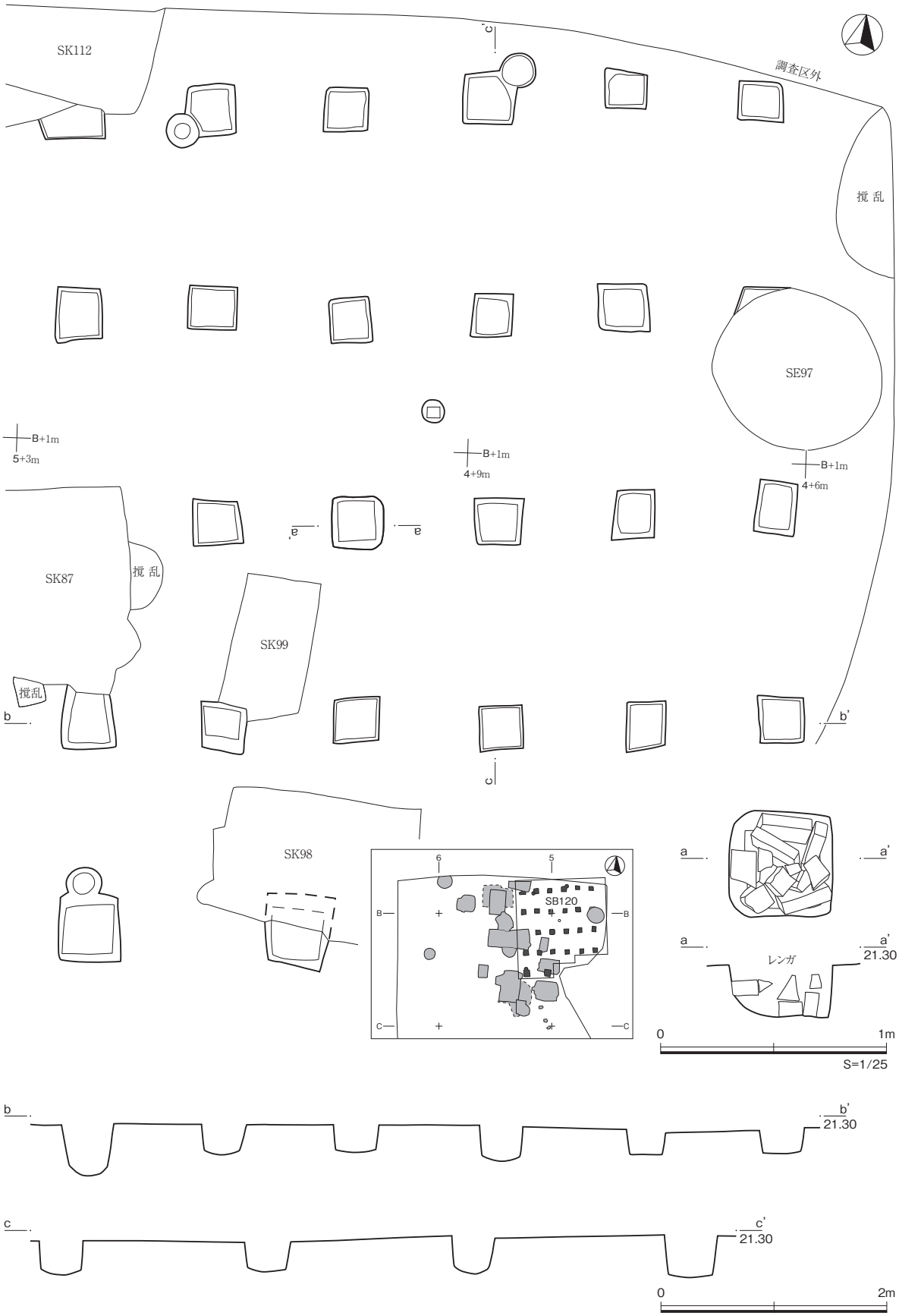


SK121
1　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)

SP122
1　褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりややあり)

0　2m

Ⅱ-24図　教育学部総合研究棟地点　SK116、SK118、SK121、SE117、SP122　(1/50)



Ⅱ−25図　教育学部総合研究棟地点　SB120　(1/50)

第３節　江戸時代・近代の遺物

SE12（Ⅱ - 26 図）

陶磁器、土器、瓦などがコンテナ１箱出土した。これらの多くは二次的な火熱を受けており、火災の後始末に伴う廃棄である可能性が高い。おそらく元禄 16（1703）年の水戸様火事に伴うものと考えられる。

１は肥前系磁器染付坏で、JB-6-b に分類される。２は瀬戸・美濃系陶器のいわゆる腰錆碗で、TC-1-u に分類される。体部中位に凹みがあることや器高が高いことなど初期的な様相が窺える。３は瀬戸・美濃系陶器鉄絵変形皿で、TC-2 に分類される。鉄絵は、隅切り部分に雨だれ状の文様が描かれている。高台は貼り付けられている。見込みに３箇所のピン痕が確認できる。４、５はかわらけで、DZ-2-b に分類される。４は破損もない全くの完形である。共に遺存部にはススは付着していない。６は板作りの塩壺の蓋で、DZ-00-d に分類される。内面には布目の痕跡が明瞭に観察される。

７は軒平瓦あるいは軒桟瓦と推察される資料である。軒平部瓦当部の一部である。紋様はいわゆる「大坂式」（金子 1996）に分類される。赤褐色を呈する。この他、軒丸瓦、軒平瓦あるいは軒桟瓦、丸瓦が出土している。何れも赤褐色の資料が確認される。また平瓦ないし桟瓦の破片と推察される資料も出土している。

SK13（Ⅱ - 26 図）

遺物は陶磁器、土器など約 20 点ほど出土している。遺物の多くは、二次的な火熱を受けている。遺物群の年代観から火災は元禄 16（1703）年の水戸様火事である可能性が高い。

１～３はかわらけで、DZ-2-b に分類される。3 点とも二次的な火熱を受けている。１は破損もない全くの完形である。共に遺存部にはススは付着していない。

SK28（Ⅱ - 26、27 図）

18 世紀後半の陶磁器、土器、瓦などが、コンテナ箱で１箱出土した。

１は染付皿で、JB-2-e に分類される。底部裏には「筒江」の銘款が書かれており、肥前筒江窯で生産された製品と考えられる。２は瀬戸･美濃系色絵鉢で、TC-5 に分類される。釉は白濁した長石釉で、大きな貫入が全面に入っている。色絵は緑、呉須、赤で描かれている。高台は左回転の渦巻高台である。二次的火熱を受けている。３は瀬戸・美濃系鉄釉香炉・火入れで、TC-9-b に分類される。内面下半は無釉である。

４は硬質瓦質の香炉・火入れで、DZ-9 に分類される。外面は丁寧に研磨され、斑状の押型文を地文にしている。底部には実測図のような刻印が確認されるが、判読できなかった。あるいは「∧庄」か？また、体部には菊花文の下半と推定される刻印が確認された。本来の口縁部は敲打痕あるいは、口縁部再調整のため確認できなかった。灰落としとしても利用されていたと推定される。５は土師質の鉢で、DZ-5-a に分類される。欠損もない全くの完形である。６はかわらけで、DZ-2-b に分類される。口唇部にススの付着は確認できない。７はかわらけで、DZ-2 に分類される。表裏全面には、赤色の漆が塗布されている。形態的には見込み体部立ち上がりの凹みや底部脇の小さい段などが確認できないため、いわゆる江戸式のかわらけとは異なるが、胎土の状況は近似している。底部中央には径 3mm ほどの小穴が穿たれているが、焼成前後いずれかは判断できなかった。口唇部には灯心による

ススの痕跡が明瞭に観察できる。8 は間仕切りのある箱状の土師質製品で、DZ-5 に分類される。外面は丁寧に研磨されており、外面と底部は黒く彩色されている。底部にはボタン状の脚がコーナー付近に 4 基取り付けられている。9 は土師質の蓋状の製品である。あるいは七輪の窓か？つまみの取り付けられている面と四縁は磨かれているが、裏面は型成形によるチヂレが確認できる。

10 は珪長岩製の砥石（中砥）である。四面に使用痕、二面が欠損面と思われる。11 は寛永通宝のいわゆる文銭である。

SU29（Ⅱ - 27、28 図）

18 世紀初頭を下限とした陶磁器、土器、瓦などが、コンテナ箱で 2 箱出土した。

1、2 は肥前系染付磁器蓋物で、JB-13-a に分類される。1 は二次的な火熱の痕跡が認められる。3 は瀬戸・美濃系陶器灰釉碗で、TC-1-c に分類される。底部無釉である。二次的な火熱の痕跡が認められる。4、5 は肥前系陶器刷毛目鉢で、TB-5-a に分類される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎにして重ね積みしている。4 は全面打刷毛目、5 は波状の刷毛目の上に鉄絵が描かれている。4 には二次的な火熱の痕跡が認められる。6、7 は同一個体の瀬戸・美濃系陶器水注で、TC-27-c に分類される。器面には菊花文が表裏に二箇所、蓋には一箇所摺絵によって鉄絵されている。二次的な火熱を受けている。

8 は二段角の「泉州麻生」銘の板作りの塩壺で、DZ-51-i に分類される。内面には細かい布目の痕跡が認められる。二次的な火熱による表面の剥落が著しい。9 は板作りの塩壺の蓋で、DZ-00-c に分類される。内面には細かい布目の痕跡が認められる。胎土の色調は 8 に比べて赤色が強い。二次的な火熱による表面の剥落が著しい。

SK71（Ⅱ - 28、29 図）

遺物は、18 世紀前半の陶磁器類がコンテナ 1 箱出土している。

1 は京都・信楽系陶器灰落としで、TD-24 に分類される。器面は銹絵が描かれている。口縁部は敲打痕が顕著に認められる。2 は釜形土製品で、DZ-5-c に分類される。

3、4 は頁岩製の石硯である。四隅の面取り、上下端の幅、海や縁の隅丸の状態などから高島硯と判断できる。3 は細かい斑状のシミが確認でき、いわゆる虎斑石であろう。4 は二次的な火熱の痕跡が認められ、これによって剥離したものを砥石として再利用したものと考えられる。

SK72（Ⅱ - 29 ～ 31 図）

遺物は、18 世紀前半の陶磁器類、土器、瓦、石製品などがコンテナ 4 箱出土している。

1 は肥前系磁器染付碗で、JB-1-g に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。2 は蓋物の蓋で、JB-00-f に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。二次的な火熱を受けている。3 は打刷毛目の碗で、TB-1-h に分類される。二次的な火熱を受けている。4 はいわゆる京焼風陶器の呉須絵平碗で、TB-1-c に分類される。二次的な火熱を受けている。5 は色絵の陶器碗で、TZ-1 に分類される。胎土は白色を呈し、堅緻である。全面に白土を施した後、施釉している。底部にはゴム版を用いて金で「済陶」？と書かれている。昭和以降の製品であろう。6 は蛇ノ目釉剥ぎの皿で、TB-2-a に分類される。嬉野の内野山窯の製品で、薄い青緑釉が表裏面に施されている。7 は灰釉小坏で、TB-6 に分類される。二次的な火熱を受けている。8 は褐釉の二耳壺で、TC-15 に分類される。9 は五合入りのいわゆる尾呂徳利で、TC-10-d に分類される。体部上半にはウノフ釉が流しかけられている。体部上位に釘書きで、相反する側に「イ」、「ろ」と書かれている。釘書きで彫られ

た露胎部には、部分的に墨の痕跡が確認できる。SK118 からも同様の釘書きが確認されている。

10、11、13 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。10 の内面には「十」の字が墨書されている。10、11 の遺存部には灯心によるススの痕跡は認められない。13 の見込みには棒状の製品による掻痕が不規則に確認できる。口唇の一部には灯心によるススの付着が認められる。12 は底部に渦巻き状の沈線が施される磨きかわらけで、DZ-2-c に分類される。見込みには実測図のような幅の異なる平行沈線が二条彫られている。

14 は軒丸瓦である。瓦当紋様は巴紋で、巴の周りに圏線が巡り、その周囲に 16 個の珠紋が巡る。筒部凸面は縦方向のナデ調整が施される。また凹面は全面に布目が確認されるが、右側は布がはだけ、型の表面が直接転写されている。15 は丸瓦である。前端部右角を欠損するが、ほぼ完形品である。凸面には縦方向のナデが施される。凹面は全面に横方向のコビキ痕が確認され、さらにコビキ痕を切る布目が全面に確認される。玉縁に近づくほど低くなり、玉縁部もつぶれて高さ 23mm と低い。16 は丸瓦である。完形品である。凸面には縦方向のナデが施される。また右端寄りに縦長の白く変色した部位が見られるが、これは窯詰めの際重なり合ったことを示す痕跡だと推察される。凹面は全面に横方向のコビキ痕が、コビキ痕を切って布目が全面に確認される。15 と比べ、玉縁の端に向かってすぼまる付近に皺が多く確認される。この他、丸瓦、平瓦ないし桟瓦の破片と推察される資料が出土している。何れも赤褐色の資料が確認される。また軒丸瓦も確認されるが、赤褐色ではない。

17 は砂岩製の砥石で、荒砥であろう。四面を砥面に利用している。18 は頁岩製の石硯である。各部の構造から高島硯であろうと思われる。陸部の一部は、同一部分の高頻度の使用によって、縦方向に深く削られている。裏面は硯として利用するために刻まれた縁や海のアウトラインの沈線とその内側を一部彫った痕跡などが確認できる。

SK74（Ⅱ - 31、32 図）

遺物は、18 世紀前半の陶磁器類、土器、金属製品などがコンテナ 1 箱出土しており、この中には被熱している遺物も多く確認されている。

1 は肥前系磁器染付碗で、JB-1-d に分類される。主文様はコンニャク印判と手で描かれている。碗形や文様から JB-1-d から JB-1-u に変化する過程の製品と思われる。二次的な火熱を受けている。2 はいわゆる京焼風陶器平碗で、TB-1-c に分類される。高台裏には「木下弥」の刻印が押印されている。二次的な火熱を受けている。3 は瀬戸・美濃系陶器灰釉小坏で、TC-6 に分類される。表面は二次的な火熱が顕著である。4 は小型の鉄絵香炉・火入れで、TC-9-c に分類される。器面には相反側に摺絵で文様が施されている。二次的な火熱が顕著である。5 は焼締め擂鉢で、TL-29 に分類される。焼成はいわゆる赤物と称される状態の製品で、その色調は赤褐色を呈するが、所々に黄褐色の粘土塊が混入している。また、胎土には白色の粗砂粒が多く含まれている。内面は使用によって摩耗し、擂目は深さを減じている。二次的な火熱を受けている。

6 ～ 8 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。6、7 は欠損のない全くの完形である。共に灯心痕は認められない。二次的な火熱を受けている。9 は脚付きの油受け皿で、DZ-40-c に分類される。表面にはいわゆる銀彩が顕著に認められる。脚は薄作りで、大きく開いている。二次的な火熱が顕著である。10 は銅製の鋲である。錆が顕著で、身には木部の痕跡も確認できる。

SK75（Ⅱ - 32、33 図）

遺物は、17 世紀後半の陶磁器類、土器、瓦、金属製品などがコンテナ 1 箱出土している。

1 は肥前系磁器染付小坏で、JB-6-a に分類される。二次的な火熱を受けている。2 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。口唇部には灯心痕が確認できる。3、4 は丸底のほうろくで、DZ-47-a に分類される。共に底部には明瞭な被熱痕が確認される。

5 は丸瓦と推察される。ただし前部を欠損しているため、軒丸瓦その他の瓦の筒部である可能性を残す。凸面は縦方向のナデ調整が全面に施される。凹面はコビキ痕が横方向に走り、コビキ痕を切って太紐の圧痕が確認される。布目が転写された痕跡は確認されない。この他、丸瓦、平瓦ないし桟瓦の破片と推察される資料が出土している。6 は寛永通宝のいわゆる文銭である。

SE77（Ⅱ - 33、34 図）

遺物は、17 世紀末を中心とした陶磁器類、土器、瓦、金属製品などがコンテナ 3 箱ほど出土している。

1 は肥前系磁器染付碗で、JB-1-u に分類される。「太明年製」の銘款が書かれている。2 は染付小坏で、JB-6-a に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。3 は染付香炉・火入れで、JB-9-c に分類される。4 は染付蓋物で、JB-13-b に分類される。焼成はやや不良で、所々釉切れがある。5 は灰釉碗で、TB-1 に分類される。高台内にも施釉される。6 はいわゆる京焼風陶器平碗で、TB-1-c に分類される。外面は高台脇際まで施釉される。山水の呉須絵が描かれている。7 は油受け皿で、TF-40 に分類される。口縁部は内側に玉縁状に成形されており、受け部に穿たれている半円形の窓は 3 箇所確認できる。形態から初期的な製品であろうと思われる。表裏面全体にススが付着している。

8 ～ 11 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。8 ～ 10 は口唇部に灯心痕が確認できる。12 は土師質の擂鉢のミニチュアで、DZ-61 に分類される。13 は「御壺塩師堺湊伊織」銘を持つ塩壺で、DZ-51-f に分類される。内面は平滑にナデられている。表面は二次的な火熱の痕跡が認められる。

14 は軒平瓦である。瓦当部はほとんど残存していないが、草花紋だと推察される。筒部は厚く、4.2cm を測る。凹面には格子目状のタタキの痕跡が一面に残る。凸面は瓦当部寄りが横ナデにより平坦に整形されているが、離れた一部分には布目が認められる。側面は横ナデにより平坦に整形されている。中世以前の資料だと推察される。その他、丸瓦、平瓦ないし桟瓦の破片と推察される資料が出土している。何れも赤褐色の資料が確認され、中には被熱により膨張・変形したと見られる破片資料も確認される。また筒部のみの軒丸瓦、左桟の蝋燭桟瓦も出土しているが、これらには赤褐色の資料は確認されない。

15 は真鍮製のキセルの吸口である。補修痕が観察される。

SK78（Ⅱ - 34 図）

遺物は、17 世紀後半を中心とした陶磁器類、土器が出土している。

1 は肥前系磁器色絵鉢で、JB-5-f に分類される。赤、緑、呉須で上絵付けされている。2 はいわゆる初期伊万里の染付皿で、JB-2-a に分類される。口唇部は鉄による口銹が施される。3 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。口唇部の一部に灯心痕が認められる。4 は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-aa に分類される。胴部の過半が欠損しているため、刻印の有無は断定できない。

SK81（Ⅱ - 34 ～ 36 図）

遺物は、19 世紀初頭を中心とした陶磁器類、土器、瓦などが、コンテナ 3 箱出土している。

1、2 は肥前系磁器碗で、JB-1-f に分類される。1 は青磁染付、2 は染付である。1 の見込みには五弁花文、裏には不明の角銘が書かれている。3 は染付仏飯器で、JB-8-c に分類される。

4はいわゆる小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。口径に対して器高がやや高く、絵付けもラフになっており、18世紀後葉の製品と考えられる。5は鉄絵鍋で、TZ-33-aに分類される。底部露胎部にはススが付着している。6は鉄絵鍋のミニチュアで、TZ-61に分類される。底部に被熱の痕跡はない。7、8は二合半の灰釉徳利で、Tc-10-cに分類される。胴部には、7には山に「万」、8には山に「二」の列点状の釘彫りが認められる。9は備前献上徳利のミニチュアで、DZ-61に分類される。底部から体部下半には薄い、上半には濃い鉛釉を掛け分けている。10は瀬戸・美濃系灰釉・緑釉流し水甕で、TC-15-cに分類される。見込みには5箇所のトチンの跡が観察される。11は鉄釉土瓶の蓋で、TZ-00-eに分類される。落とし蓋タイプで、摘みも左右から潰されるように変形している。

12、13はかわらけで、DZ-2-bに分類される。12の裏には、「十」あるいは「久」と推定される墨書が認められる。共にススの痕跡は認められない。14は体部に斜方向の平行沈線が施されたほうろくで、DZ-47に分類される。口縁部には二条の沈線が周回する。胎土は橙褐色を呈し、江戸在地系製品の胎土に類似する。内外面に透明釉が化粧掛けされている。15はロクロ塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。16は器台で、DZ-40-fに分類される。内外面には透明釉が施されている。

17は土鈴で、DZ-58に分類される。胎土は堅緻で、白色系である。18は亀の人形で、DZ-60に分類される。胎土は堅緻である。19は面持である。胎土は赤褐色を呈し、型合わせ中空成形である。溜池遺跡に類例が確認されている（都内遺跡調査会1996）。

20は軒桟瓦である。軒丸部の瓦当紋様は巴紋で、珠紋や圏線は配置されない。軒平部はほとんど残存しておらず、瓦当紋様は右端の子葉がわずかに確認されるのみである。子葉は、加藤晃氏の分類に従えばiに該当する（加藤1989）。21は軒丸瓦である。瓦当部の下半右側のみ残存している。瓦当文様は珠文の巡る巴紋である。珠文と巴紋の間に圏線が巡る。芯が赤灰褐色を呈することから、被熱した可能性がある。

SK82（Ⅱ-36図）

遺物は、18世紀前半を中心とした陶磁器類、土器、金属製品などが、コンテナ1箱出土している。

1は瀬戸・美濃系腰錆碗で、TC-1-uに分類される。器高がやや高く、古手の製品であろう。2は肥前系刷毛目碗で、TB-1-dに分類される。刷毛目は渦巻き状に施され、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。

3、4は真鍮製のキセルの吸口である。5は寛永通宝の猿江銭である。

SU83（Ⅱ-36～40図）

遺物は、17世紀末を中心とした陶磁器類、土器、瓦、石製品、金属製品などが、コンテナ4箱出土しており、その多くが二次的火熱を受けている。

1～3は肥前系磁器染付碗で、JB-1-dに分類される。共に胎土の色調は灰色味がかり、質はあまりよくない。1は「太明年製」の銘が書かれている。1は二次的な火熱を受けている。2は口縁部全周に縦方向の擦痕が顕著に認められる。4、5は染付碗で、JB-1-uに分類される。共に主文様は、コンニャク印判と手で描かれている。4は「大明年製」の崩れた銘が書かれている。4は二次的な火熱を受けている。6はいわゆる半球碗で、JB-1-fに分類される。立ち上がりが深いこと、高台がやや高いことなどこのタイプの初期的な様相が看取される。7は染付猪口で、JB-7-bに分類される。底部には「大明年製」銘が書かれている。二次的な火熱を受けている。8～10は端反小坏で、JB-6-bに分類される。8、9は染付、10は白磁である。8、9は成形、文様とも丁寧であるが、10は高台の削りもラフで、質

的に低い製品である。11 は染付小坏で、JB-6-a に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。12 は型作りの小坏で、JB-6-e に分類される。見込みには松葉の文様が描かれている。紅皿であろう。13 は染付碗のミニチュアで、JB-61 に分類される。羽根つきの文様が描かれている。14 は染付皿で、JB-2-g に分類される。見込み中央にはコンニャク印判で五弁花が描かれている。胎土、呉須の色調などから質的に低い製品である。15 は染付皿で、JB-2-e に分類される。見込み外周の文様には、墨弾きの技法が用いられている。16 は陶胎染付の鉢で、TB-5 に分類される。文様には白土の上に描かれている。17 は白磁の仏飯器で JB-8-b に分類される。18 は型物の色絵の人形で、JB-60 に分類される。欠損しているが、鳥の尾の部分であろう。赤、緑、茶で上絵付けされている。

19、20 は渦巻き状の刷毛目が施された碗で、TB-1-d に分類される。色調は 19 が茶褐色、20 が灰褐色を呈している。19 の内面には降灰が顕著に認められる。21 は打刷毛目の碗で、TB-1-h に分類される。胎土の色調は黒褐色を呈する。刷毛目は内外面に丁寧に施される。22 は鉄釉碗で、TB-1 に分類される。高台裏も全釉される。23 は瀬戸・美濃系灰釉碗で、TC-1-c に分類される。高台は無釉。二次的な火熱を受けている。24 はいわゆる志野織部の型皿で、TC-2 に分類される。高台は付高台と推定される。底部には鉄釉を化粧掛けしており、志野釉は見込みと裏面高台脇まで施され、文様は鍔部分に鉄で描かれている。見込みには小さいピン痕が 3 箇所認められる。25 は志戸呂系鉄釉皿で、TF-2 に分類される。釉は見込み、裏面体部上半に化粧掛けされている。口唇部には灯心によるススの付着が認められる。26 は鉄絵鬢水入れで、TC-25 に分類される。文様は摺絵で描かれている。27、28 は鉄釉・ワラ灰釉流しの水注で、TC-27-a に分類される。28 はヒビも見あたらない完形である。29 は瀬戸・美濃系片口鉢で、TC-23-b に分類される。見込みには 3 箇所のトチンの跡が確認できる。30 は灰釉・ワラ灰釉流しの水指で、TD-5 に分類される。灰釉は内面と外面中～上位に、ワラ灰釉は内外面の上位に施されている。底部にはいわゆる大印の「仁清」が押印されている。口縁部外側は突帯を等間隔にヒダ状に抉っている。体部上位には 2 基の橋状の貼り付けがあったと推定されるが、欠損しており、把手の状況は窺えない。二次的な火熱を受けている。31 は灰釉二合半の徳利で、TC-10-a に分類される。釘書きは確認できない。32 は五合のいわゆる尾呂徳利で、TC-10-d に分類される。頸部下位から胴部上位にはウノフ釉が流し掛けられている。器面は二次的な火熱のために釉の一部が剥落している。

33 ～ 39 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。34 の底部には「大」の字が墨書されている。35、36、38 の口唇部には、灯心によるススが付着している。37 は内外面全体にススの付着が認められる。40 は油受け皿で、DZ-40-d に分類される。内外面全体にススが付着している。41 はひょうそくで、DZ-44 に分類される。やや湾曲したボール状の皿に松をかたどった摘みと皿の見込みに舌状の灯心立てと円筒状の灯心立て？が付けられている。円筒状の施設は底部から孔が貫通している。また、見込みには角印が認められるが、文字の判読はできなかった。全体に透明釉が施されている。42 は土師質の丸火鉢で、DZ-31-a に分類される。口唇部は敲打痕が著しい。43、44 は土師質ほうろくで、DZ-47-a に分類される。44 には内耳が取り付けられている。共に底部には使用による二次的な火熱が確認できる。45 は鍋、46 は鍋蓋のミニチュアで、DZ-61 に分類される。45 は施釉されており、口唇部と把手には列点状に緑釉が施されている。46 は無釉。47 は犬と思われる人形で、DZ-60-i に分類される。手づくねでラフに成形されている。

48 は銅製の定規である。長さは 30.4cm（10 寸）で、中央に木葉をかたどった摘みが貼付されている。目盛りは 0.5 寸ごとに大きな刻みが、その間は細かい刻みで五等分されている。49 はキセルの吸口である。帯は八角形に成形されている。50 は寛永通宝の猿江銭である。51 は中砥である。石材は珪

長岩で、黒斑状の含有物が多く包含される。六面すべてに研磨痕が確認できる。実測図上部中央には、1 条の比較的大きな断面「U」字状の擦痕、小さな数条の断面「V」字状の擦痕が確認できる。

SU84（Ⅱ - 40 ～ 44 図）

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類、土器、瓦、石製品、金属製品などが、コンテナ 2 箱出土しており、その多くが二次的火熱を受けている。

1 ～ 8 は肥前系磁器染付碗で、JB-1-u に分類される。2 は手描き、1、3 ～ 8 はコンニャク印判と手描きで文様が描かれている。高台裏には 1、4 ～ 6 は「大明年製」、3 は「福」銘が書かれている。顕著ではないが、1 は二次的な火熱を受けている。9 は染付半球碗で、JB-1-f に分類される。やや深手で初期的な様相が窺える。10 は染付鉢で、JB-5-b に分類される。高台裏には二重圏線内に「大明嘉靖年製」銘が書かれている。漆継ぎの痕跡が確認できる。11 は白磁、12 は丸碗形の染付小坏で、JB-6-a に分類される。13、14 は端反の染付小坏で、JB-6-b に分類される。13 はコンニャク印判で文様が描かれている。高台裏には「大明年製」銘が書かれている。15 は染付鉢で、JB-5-b に分類される。裏銘はいわゆる渦福である。16 は染付猪口で、JB-7-b に分類される。文様の蓮弁状のタコ唐草文は、型紙刷りで輪郭を書いた上にダミを埋めている。裏銘は「大明年製」である。17、18 は染付皿で、JB-2-d に分類される。絵付けの細部は若干異なるものの揃いの製品であろう。文様は枠線をとって濃淡のダミを使用して、丁寧に描かれており、変形の「福」銘などから有田南川原地区で生産された製品であろうと推定される。高台裏には 3 箇所のハリ支え痕が認められる。19 は染付蓋物の蓋で、JB-00-f に分類される。内外面全体に二次的な火熱が顕著に認められる。20 は染付蓋物の蓋で、JB-00-f に分類される。全く欠損していない。

21 ～ 23 は渦巻き状刷毛目の碗で、TB-1-d に分類される。23 の胎土は 21、22 に比べて明るく、刷毛目もやや丁寧に施されている。24、25 はいわゆる京焼風陶器碗で、TB-1-b に分類される。24 は鉄絵がラフに描かれており、高台裏には「木下弥」の刻印が押印されている。26 は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗で、TC-1-d に分類される。体部にはラフな呉須絵が表裏相対して 2 箇所に描かれている。27 はいわゆる腰錆碗で、TC-1-u に分類される。体部には 2 箇所の凹みがあり、大振りである。28 はいわゆる京焼風陶器鉢で、TB-5-c に分類される。体部には棒状工具で外側から凹みが付けられる。29 は灰釉香炉・火入れで、TB-9 に分類される。高台は幅広で、外周面取りされている。釉は口縁部、外面に施されている。30 は半菊状のシノギが入る香炉・火入れで、TC-9-d に分類される。口唇部は敲打痕が顕著に確認できる。31 は鉄釉片口鉢で、TC-23-b に分類される。内面、体部は錆釉、口縁部には褐釉が施されている。見込みには 3 箇所のトチンの跡が確認できる。32 は備前焼締め徳利で、TE-10 に分類される。器面にはいわゆる火ダスキが認められ、底部には丸に「上」の刻印が押印されている。底部脇は面取りされている。33 は志戸呂系焼締め徳利で、TF-10 に分類される。口縁部に鉄釉、体部には鉄釉が流し掛けされている。全く欠損していない。34 は水注の蓋で、TC-00 に分類される。内外面全体に鉄釉が化粧掛けされている。

35 ～ 42 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。36 は「○」、37 は「キ」？の墨書がされている。38 は底部中央に二次的な穿孔が認められる。35、37、41、42 には灯心痕が確認できる。40 は口唇部がわずかに欠損しているのみである。43、44 は底部渦巻き状の条線が施された磨きかわらけで、DZ-2-c に分類される。43 は口唇部全周、44 は一部に灯心痕の痕跡が確認できる。45 は土師質の丸火鉢で、DZ-31-a に分類される。口縁部内側には敲打痕が顕著に確認できる。46、47 は丸底のほうろくで、DZ-47-a に分類される。底部には使用時についたと推定できる被熱の痕跡が明瞭に認められ

る。48 は釜形土製品で、DZ-5-c に分類される。鍔より上位に 49 と同型の花形の刻印が押印される。セットの可能性が高い。49 は壺形の土製品で、DZ-61 に分類される。48 と同型の刻印が押印され、48 と 49 はセットの飯事道具と考えられる。50 は亀形の人形で、DZ-60 に分類される。中が空洞で、いわゆる浮き人形である。表面には薄い透明釉が施されている。

51 は軒桟瓦あるいは軒平瓦である。左右端が残存していないため断定し難い。草花紋と推察される紋様が配置される。色調は褐色を呈し、火熱した可能性がある。52 は右桟の蝋燭桟瓦である。右端後端よりの破片資料で、桟部凸面には布目とそれを切る縦方向のナデ調整が確認される。ナデにより桟部凸面には稜線が複数作り出されている。その他、軒桟瓦あるいは軒平瓦、丸瓦、平瓦ないし桟瓦の破片と推察される資料が出土している。何れも赤褐色の資料が確認される。また蝋燭桟瓦が出土しているが、これは赤褐色ではない。

53 は銅製の釣り針状製品である。54 はキセルの雁首である。火皿は欠損している。ラウの一部が刺さった状態で確認された。55、56 は寛永通宝の文銭である。

SU85（Ⅱ - 44、45 図）

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀初頭を中心とした陶磁器類、土器、瓦、金属製品などが、コンテナ 1 箱出土しており、その多くが二次的火熱を受けている。

1 は肥前系磁器染付碗で、JB-1-g に分類される。2 は染付端反小坏で、JB-6-b に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。3 は染付筆立てで、JB-14 に分類されるが、口唇部に敲打痕が観察され、灰落としとして利用したと推定される。4 は白磁の合子の蓋で、JB-00-i に分類される。文様は型で、レリーフ状に付けられている。5 は陶胎染付の香炉・火入れで、TB-9-a に分類される。漆継ぎの補修痕が確認できる。6 は内野山窯の青緑釉の鉢で、TB-5-d に分類される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎの中に 4 箇所の砂目積み痕が認められる。7 は壺の蓋で、TC-00-b に分類される。橋状の把手が貼り付けられる。

8 ～ 10 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。9、10 の口唇部には灯心痕が確認される。11 は油受け皿で、DZ-40-d に分類される。受けの切り欠き部とその周囲には、使用時に付着したススが確認できる。欠損のない完形である。

12 は銅製の直方体の分銅である。重量は 42.8g（11.4 匁）を量る。上部中央にはひもなどを通すための、突起が貼り付けられている。13 は鉛製の円盤状製品である。表面は銀化して判読しづらいが、「中村」と線刻されている。重量は 81.0g を量る。用途は不明である。14 は土瓶ややかんなどの持ち手であろうと思われる。銅製で、最上部は輪状の装飾が回転する構造になっている。15 は銅製の鋲である。16 は寛永通宝銭である。

SE97（Ⅱ - 46 ～ 49 図）

遺物は、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の陶磁器類、土器、瓦、石製品、金属製品などが出土している。

1 は瀬戸・美濃系磁器染付碗で、JC-1-e に分類される。帯文は毛彫り、高台脇は木型打込みで印刻した後、ダミを施している。2 は青磁染付の筒形碗で、JB-1-l に分類される。3 は染付端反小坏で、JB-6-b に分類される。幅広高台であるが、文様などから 18 世紀末頃の製品であろう。見込みには「福」が書かれている。4 は粗製の染付皿で、JB-2-l に分類される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。胎土、発色とも不良である。5 は粗製の染付皿で、JB-2-g に分類される。見込みはコンニャク印判五弁花が認められる。6 は染付広東碗の蓋で、JB-00-b に分類される。7 は白磁のミニチュアで、JB-61 に分類

される。型成形で、外面は花弁状の浮文が確認できる。全く欠損のない完形である。

8はいわゆる鎧茶碗で、TC-1-rに分類される。腰が張るタイプで、内面から外面口縁部には緑釉、外面中位以下には灰釉の掛け分けをしている。内面には刺突や引掻などによる釉の剥落が観察される。原因は不明である。9は灰釉呉須絵の半球碗で、TC-1-mに分類される。呉須絵は花弁状の小花が2箇所並んで描かれ、いわゆる「長の」と称されるものである。10、11はいわゆる小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。若杉文様は鉄絵で描かれるが、省略が顕著である。12は蛇ノ目釉剥ぎの鉄釉碗で、TZ-1に分類される。胎土は赤褐色を呈し、不透明な濃茶色の釉を薄く施している。高台は高台脇は直立に、高台内はやや傾斜を有して非常に丁寧に成形されている。13は灰釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。注口部は欠損している。見込みにはトチンの痕跡が確認できる。14はいわゆる赤津ハンドで、TC-15-aに分類される。露胎部は鉄分の吹き出た黒色斑が多く確認できる。底部は穿孔されている。15は小型の灰釉餌入れで、TC-30に分類される。16は碗のミニチュアで、TD-61に分類される。内面は白土、外面は鉄釉の上に白土を施し、文様化している。17～19は灰釉二合半徳利で、17、18は底部釉つけ掛けでTC-10-c、19は拭き取りでTC-10-aに分類される。17は棒状工具によって「高サキ」と彫られた後、施釉されている。18は列点状に「長」、19は「高サキ」と釘書きされている。17、18は全く欠損してない完形である。20は灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。体部には判読はできなかったが、釘書きが彫られている。21は備前系徳利の底部で、TE-10-aに分類される。裏には長方形に浮文の長丸の刻印が押印されている。22、23は柿釉油受け皿で、TC-40-cに分類される。受けの切り欠きは、22が右側縦、左側縦から横の2工程、23が縦、縦、横の3工程である。22は全く欠損のない完形である。24、25は堺系焼締め擂鉢で、TL-29に分類される。24は体部擂目の引き上げ位置が体部と底部の境より内側に入っていること、体部上端の擂目処理が線刻圏線で行われていることから18世紀末頃、25は引き上げ位置はかなり内側であること、体部上端の擂目処理が行われていないこと、体部擂目の密度が上部においても間隙ができるほどではないことなどから、18世紀後半頃の製品であろうと推定できる。26は灰釉土瓶の蓋で、TZ-00-gに分類される。摘みはボタン状のものを三方向から摘み上げた形状をしている。27、28は鉄釉土瓶の蓋で、TZ-00-eに分類される。共に落とし蓋タイプである。27の摘みは菊花状、28はボタン状のものを両方向から摘み上げられた形状を呈している。

29、30は透明釉が施される皿で、DZ-2-hに分類される。口唇部には灯心痕が認められる。表面の釉の剥落は激しい。31は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。32は透明釉が施される脚付油受け皿で、DZ-40-eに分類される。33は透明釉が施されたひょうそくで、DZ-44-bに分類される。見込み中央の筒状部分には灯心痕が明瞭に認められる。34は七輪の風口上部に乗せるもので、炭の燃焼部にあたる部品である。内面は二次的な火熱によって白化している。35は板作りの塩壺蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目の痕跡が明瞭に認められる。また、上面は外周をナデ、中央部は指紋やスノコ？などの弱い痕跡が観察できる。36はいわゆるぶら人形で、DZ-60-fに分類される。頭部欠損している。37は五重塔で、DZ-61に分類される。斜方向の型合わせで成形され、底部は棒状の刺突痕を残す。胎土は白色系で細かく、型の成形も屋根瓦まで表現されている。

38は軒桟瓦である。軒丸部の瓦当紋様は六つ葉葵紋である。先端はハート形の輪郭を呈し、縦の沈線と左右に直径2mmの穴が開く。中心には丸い珠紋が配置されるのみである。軒平部の瓦当紋様は江戸式に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅠ Jiに該当する（加藤1989）。筒部はほとんど残存していない。39は軒丸瓦である。瓦当部の大半と筒部を欠損している。珠紋の巡る三つ巴紋で、巴紋と珠紋の間には圏線が一条巡る。40は伏間瓦あるいは冠瓦の帯状部と推察される。前後面、凸面は

すべて横ナデ整形されている。裏面には12条の沈線が引かれており、筒部との接合部に施されたカキヤブリだと推察される。色調は赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。この他、丸瓦、平瓦ないし桟瓦の破片と推察される資料が出土している。何れも赤褐色の資料が確認される。また軒丸瓦、軒桟瓦、右桟の蝋燭桟瓦、伏間瓦あるいは冠瓦と推察される資料が出土している。

41は真鍮製のキセルの吸口である。竹製ラウの一部が刺さった状態で遺存している。42は玉ずい製の火打石である。方側縁に敲打痕が明瞭に認められる。43は中砥と思われる流紋岩製の砥石である。形状は右方向に捻れており、特殊な刃物用と思われるが、断定はできなかった。

SK98（Ⅱ - 49、50図）

遺物は、17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類、土器を中心にコンテナ1箱が出土している。

1は肥前系磁器染付碗で、JB-1-eに分類される。2は肥前京焼風陶器で、TB-1-bに分類される。外面に山水が描かれている。底部には「木下弥」の刻印が押印されている。二次的な火熱を受けている。3は灰釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。見込みには3箇所のトチンの痕跡が認められる。注口部の一部が欠損しているのみである。4は灰釉・緑釉流しの袴腰の香炉・火入れで、TC-9に分類される。底部の一部に焼成時にできたと思われる裂け目が観察される。口縁部内側には敲打痕が観察される。5はいわゆる尾呂徳利で、TC-10-dに分類される。口縁部から肩部にかけてウノフ釉が流し掛けられている。

6～19はかわらけで、DZ-2-bに分類される。13は裏面に「大」が墨書されている。10、11は全く欠損のない完形である。

SK112（Ⅱ - 50図）

遺物は、18世紀前葉の陶磁器類、土器、瓦などを中心にコンテナ1箱が出土している。

1は褐釉溲瓶で、TC-28に分類される。頂部から開口部にかけてウノフ釉が流し掛けられている。内面にはカルシウムが石化したと思われる白化した付着物が観察される。2はかわらけで、DZ-2-bに分類される。全く欠損のない完形である。

SK114（Ⅱ - 51図）

遺物は、18世紀前半の陶磁器類、土器、瓦などを中心にコンテナ1箱出土している。

1は肥前染付蓋物の蓋で、JB-00-fに分類される。2は円形おはじき状に再整形された磁器製品で、元々は筒形の蓋物であろうと推定される。3は灰釉平碗で、TD-1-hに分類される。遺存部には文様は確認できない。4は五合の褐釉徳利で、TC-10-dに分類される。胴部下半には「佐」が釘書きされている。5は丸底ほうろくで、DZ-47-aに分類される。底部には使用時のススの跡が観察される。

6は左桟の蝋燭桟瓦である。桟部の前端部は一部残存しているが、平部はほとんど欠損している。桟部凸面には布目の転写が見られ、その上から縦方向のナデを施す。ナデとナデの間には稜線が作られている。また桟部裏側に打割による加工の痕跡が見られる。

SK115（Ⅱ - 51図）

遺物は、17世紀末の陶磁器類を中心に50点ほど出土している。

1はかわらけで、DZ-2-bに分類される。口唇部には灯心痕が認められる。

SK116（Ⅱ - 51 図）

遺物は、土器、キセルなど少量出土している。

1 は石製の面子？である。巴文に彫られている。2 は真鍮製のキセルの雁首である。花文が装飾がなされている。3 は吸口である。ラウの一部が刺さった状態で確認された。

SK118（Ⅱ - 52 図）

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀前葉の陶磁器類を中心に出土している。

1 は肥前系磁器染付碗で、JB-1-g に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。欠損もない全くの完形である。2 は染付小坏で、JB-6-a に分類される。3 はいわゆる御室碗で、TC-1-d に分類される。器面には簡単な呉須絵が描かれている。4 は五合入りのいわゆる尾呂徳利で、TC-10-d に分類される。体部上半にはウノフ釉が流し掛けられている。体部上位に釘書きで、相反する側に「イ」、「ろ」と書かれている。釘書きで彫られた露胎部には、部分的に墨の痕跡が確認できる。SK72 からも同様の釘書きが確認されている。

5、6 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。5 は口唇部に灯心痕が認められる。7 は土師質の丸火鉢で、DZ-31-a に分類される。胎土は軟質である。

8 は海鼠瓦である。半分のみ残存している。平坦だが、僅かに湾曲している。左右角に釘穴が設けられる。釘穴の先端は瓦の中央へ向く。

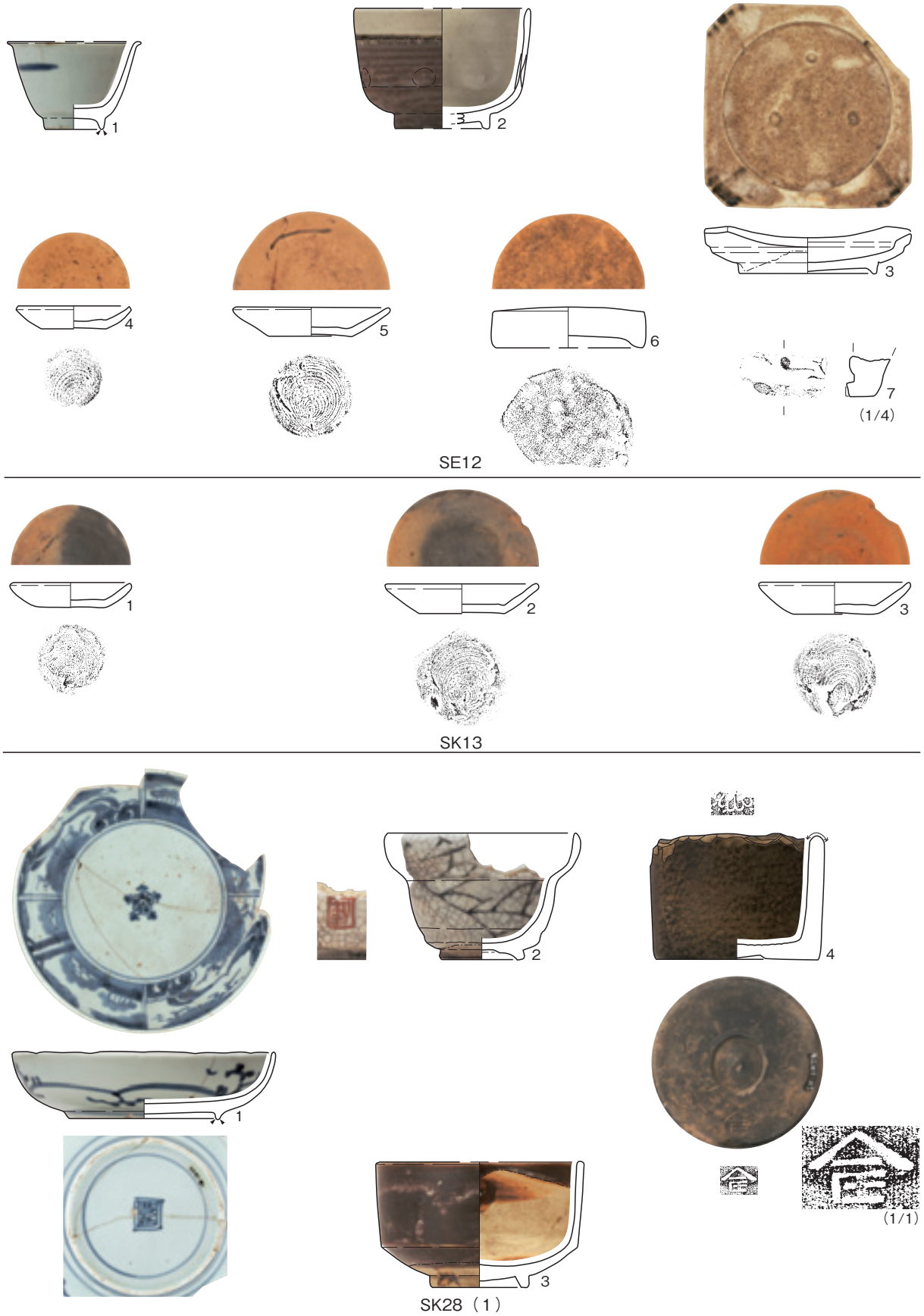
遺構外出土遺物（Ⅱ - 52 ～ 54 図）

1 は軒桟瓦の軒丸部である。瓦当紋様は巴紋で、8 個の珠紋が巡る。表面、裏面の一部に錆と推察される付着物が確認される。2 は寛永通宝の猿江である。3 は粉挽き臼の上臼である。石材は非常に軟質な火山礫凝灰岩で、砂粒の剥落が著しい。粉挽き臼とは異なる機能を有していた可能性もあろう。

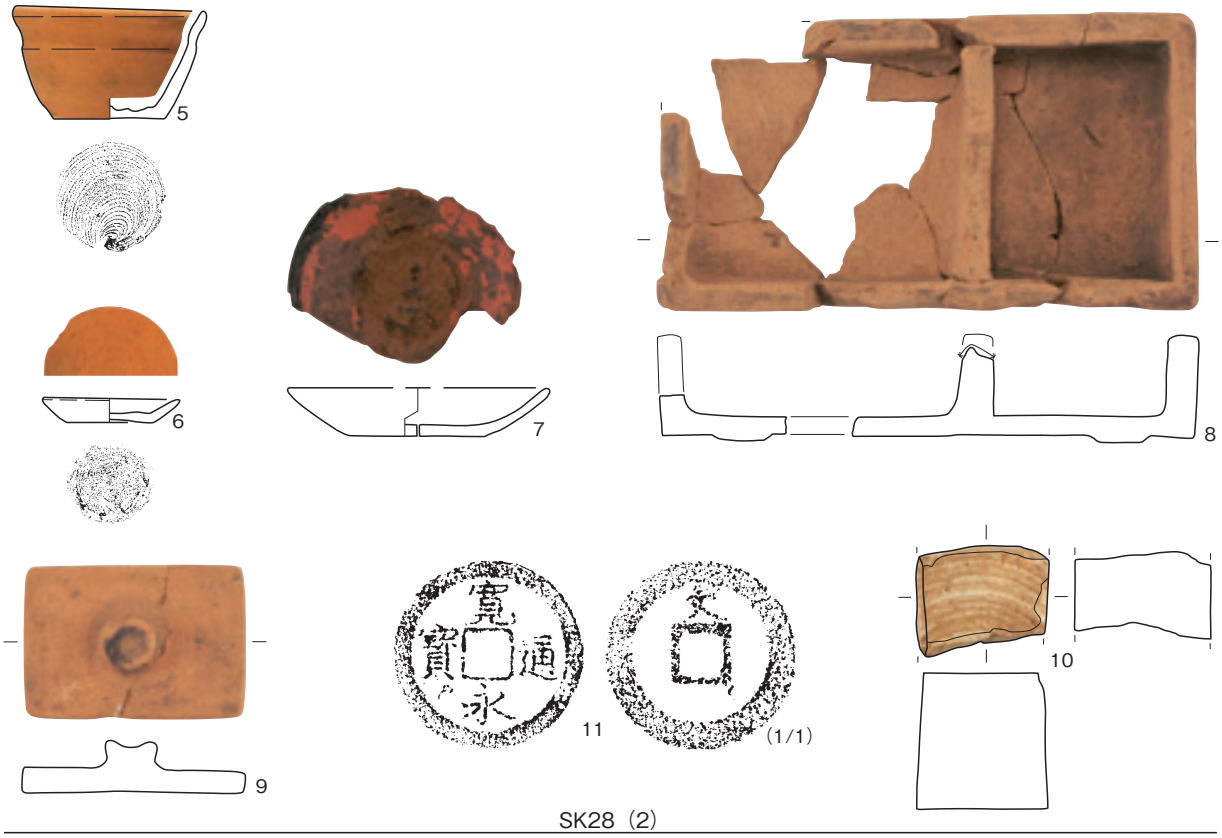
4 ～ 7 は、ガラス瓶である。4 は牛乳瓶である。王冠栓で細身、細口、なで肩である。底部外周にはエンボスが認められ、胴部に「全乳 株式會社 衛生牧場 一合入」と浮文されている。底部に「〇」に「エ」。色調は無色透明。僅かに気泡などが観られる。口縁部下から底部まで左右に金型の合わせ目が観られる。王冠栓は大正時代末頃から、一合瓶が浸透し始めるのが昭和初期頃とされている。また、昭和 10 ～ 15 年頃には広口の牛乳瓶が登場してくるのでその頃までのものであろう。5 は「三ツ矢サイダー」の瓶である。王冠口。底部外周にはエンボスが認められ、底部脇に「登録商標 日本麥酒鑛泉株式會社」と浮文されている。底部に「8・5」。色調は淡緑色透明。日本麦酒鉱泉が大正 11 年から三ツ矢サイダーを売り出す。大正時代末から昭和初期のものである。6 は化学調味料「味の素」の瓶である。スクリュー栓。底部外周にエンボスが観られ、底部に「AJINOMOTO」、「5」。色調無色透明。グラム制の採用で昭和 3（1928）年から使用され、昭和 26（1951）年まで使用された瓶である（桜井 2006）。7 はインク瓶である。コルク栓がつくタイプである。表面に皺。全体にゆがみや泡が観られる。色調は淡青色透明。方形で背が低く安定している。肩部から底部まで対角線に成形の型痕が観られる。淡青色透明でゆがみや泡が観られる瓶は古手で、明治期から昭和初期に多く観られる。8、9 は「マスター白粉」の容器。8 は身。9 は蓋。白色不透明。低い円筒形。底部外周にはエンボスが観られ、蓋に「マスター白粉」。マスターの他製品の広告が昭和 7、8、9 年「婦人の友」や昭和 8 年「読売新聞」、「大阪毎日新聞」に掲載されていることからおそらく、この頃のものであろう。白色不透明の化粧瓶は大正末頃から昭和 20 年代にかけて多く見受けられるものである。

10 ～ 14 はレンガである。胎土は赤褐色。大きさは 225 × 103 × 60mm で、手抜き成形である。

表面にモルタルなどの付着物はほとんど見られない。レンガの大きさは、大正 14（1925）年に JES（日本標準規格）210 × 100 × 60 ｍｍで統一された。10 ～ 13 のレンガは関東大震災のあった大正 12（1923）年以前の層から検出されており、規格化されていない時代のレンガである。片面に楕円形の線で囲まれている「路電」とマークが刻印されている。マークは明治 44（1911）年に東京市が東京鉄道株式会社を買収。東京市電気局を創設して路面電車と電気供給事業を開始したときのものと思われる。昭和 18 年に東京市交通局に改称されたがマークは当時のまま使われている。大正 2（1913）年に本郷三丁目から本郷追分（高等学校前）間に路面電車が開業しており、その頃の路面電車に関するものであろうか。本地点は本郷通りに面してはおらず、路面電車のレンガがこの地点で検出された理由は不明。



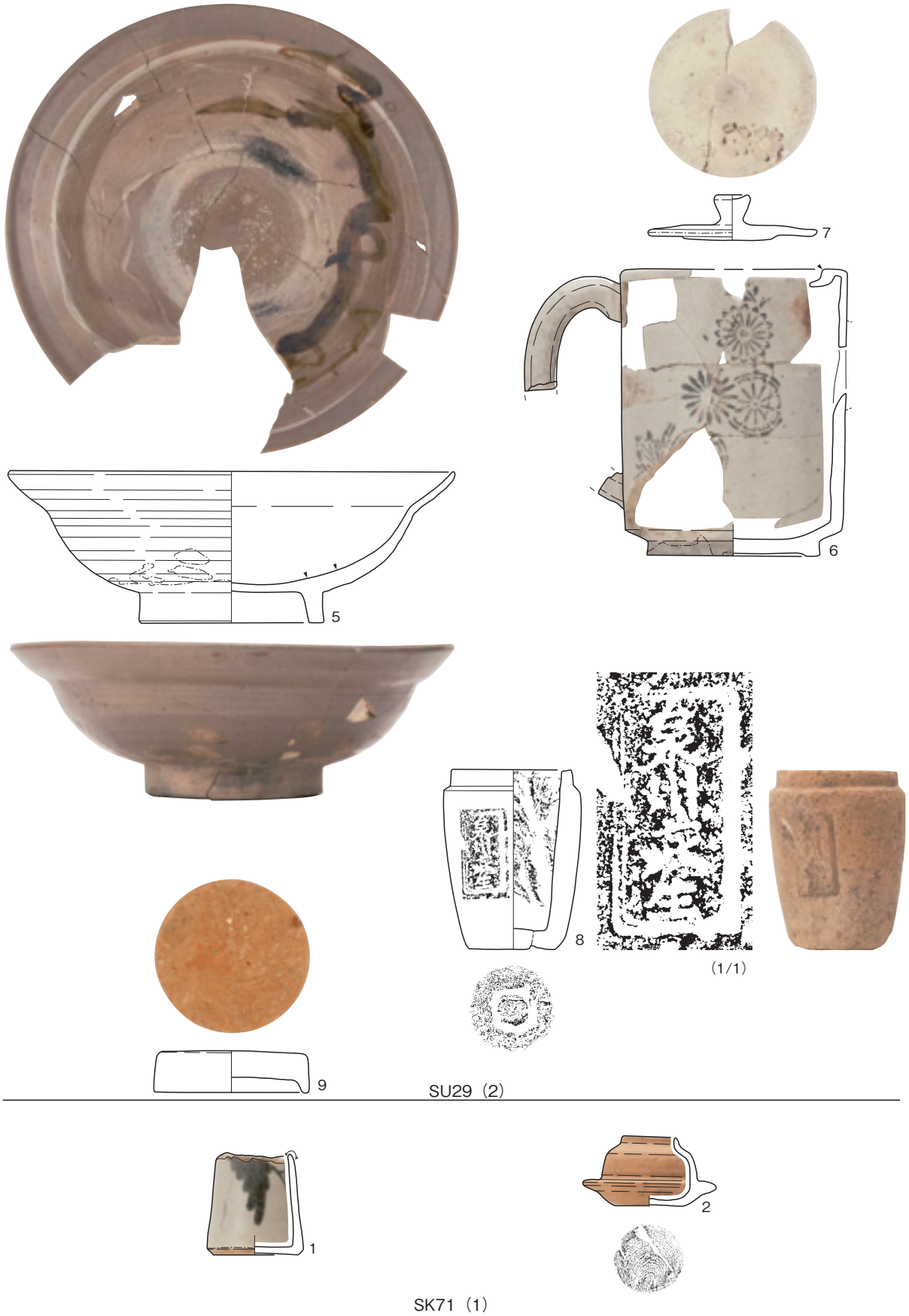
Ⅱ-26図　SE12、SK13、SK28（1）出土遺物



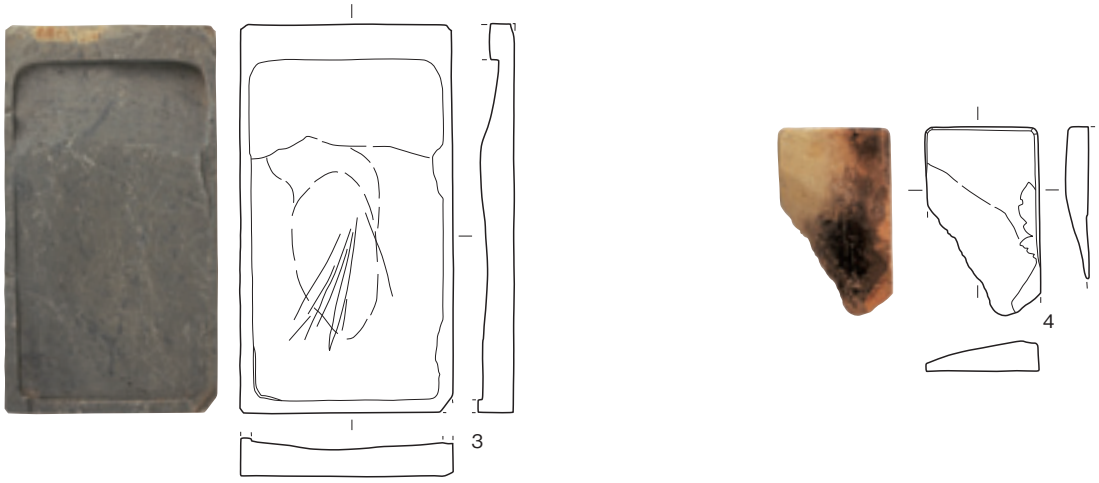
SK28（2）

SU29（1）

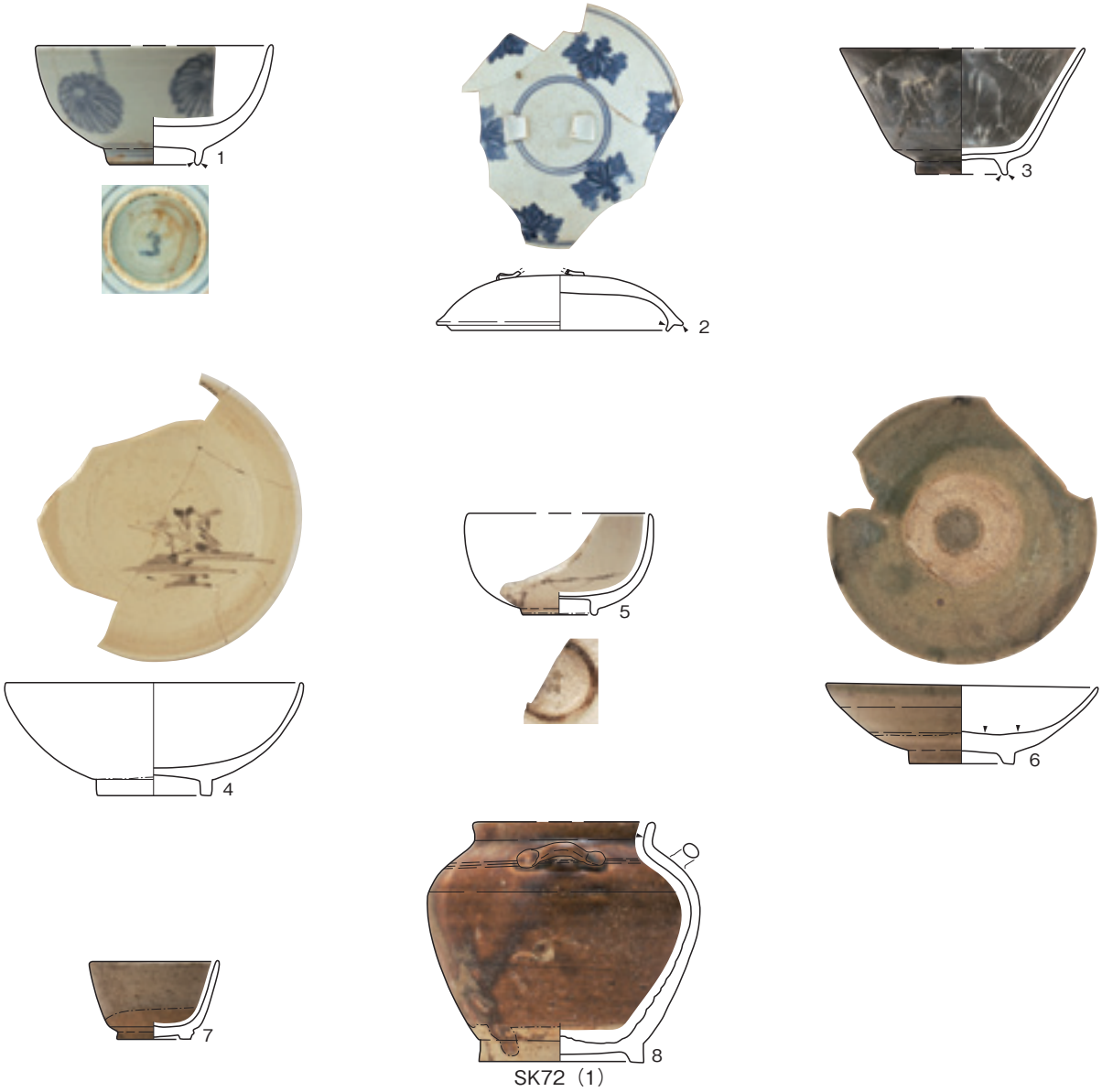
Ⅱ-27図　SK28（2）、SU29（1）出土遺物



Ⅱ-28図　SU29（2）、SK71（1）出土遺物

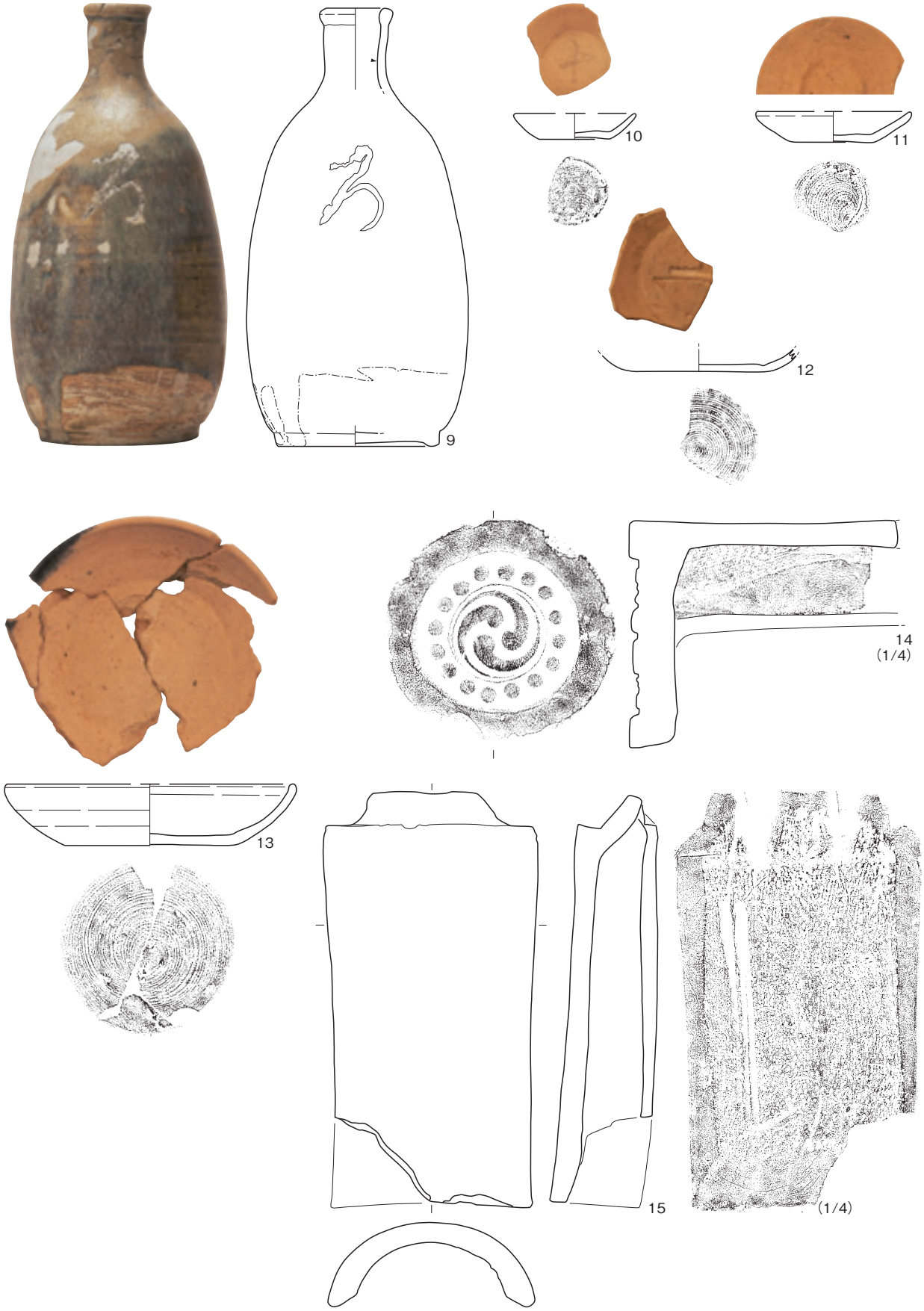


SK71（2）



SK72（1）

Ⅱ-29図　SK71（2）、SK72（1）出土遺物



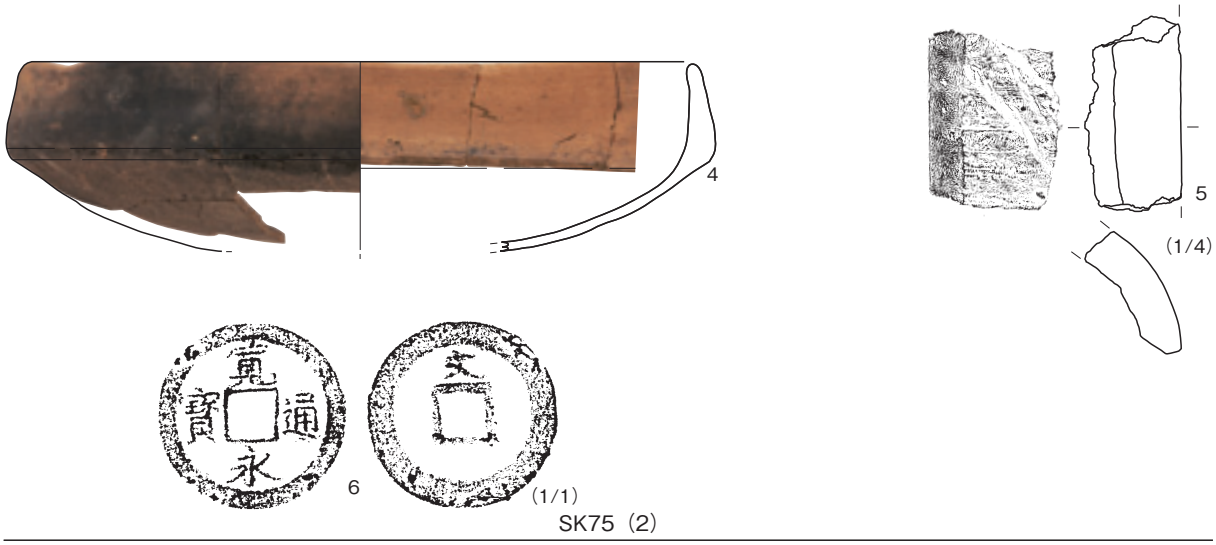
Ⅱ - 30 図　SK72 出土遺物（2）

Ⅱ-31 図　SK72（3）、SK74（1）出土遺物

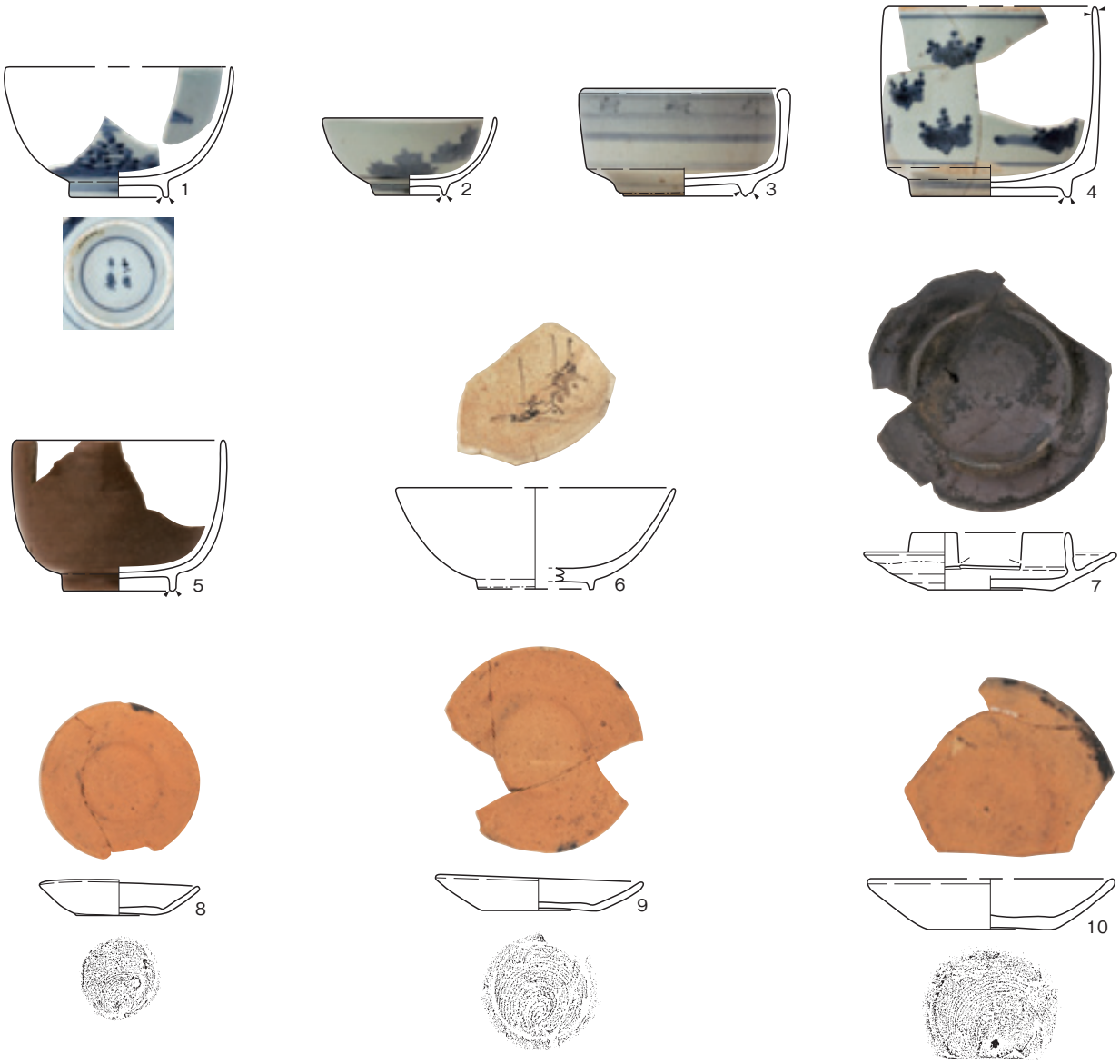
SK74（2）

SK75（1）

Ⅱ-32 図　SK74（2）、SK75（1）出土遺物

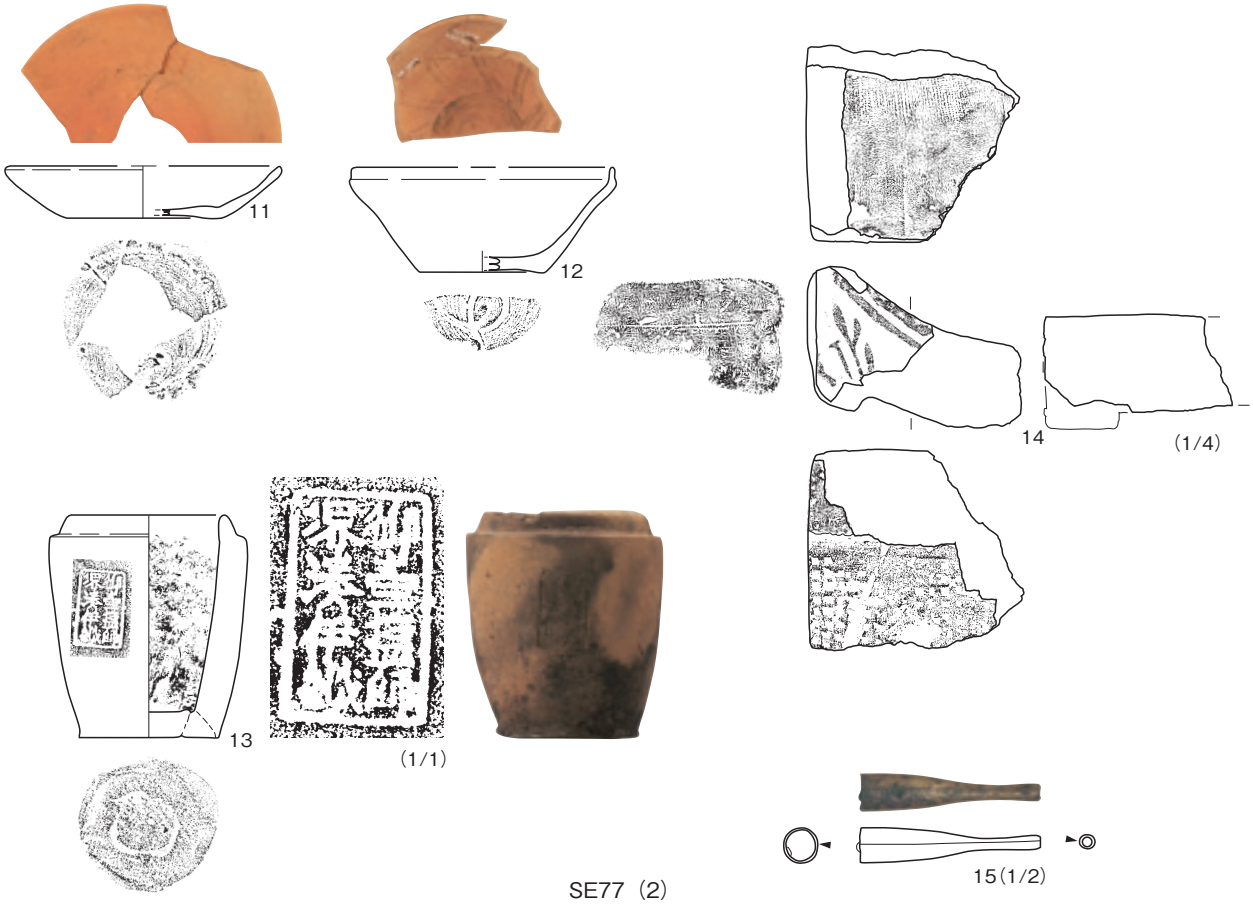


SK75（2）

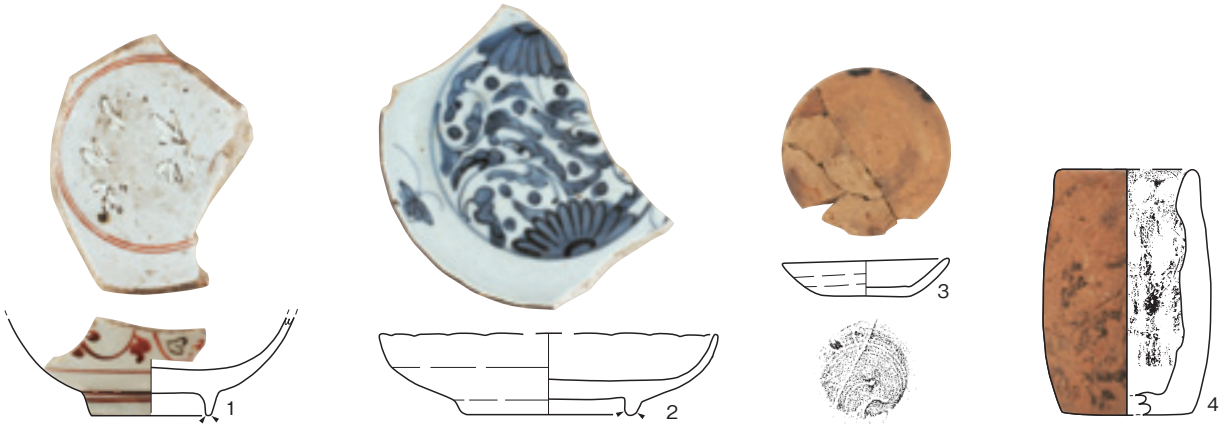


SE77（1）

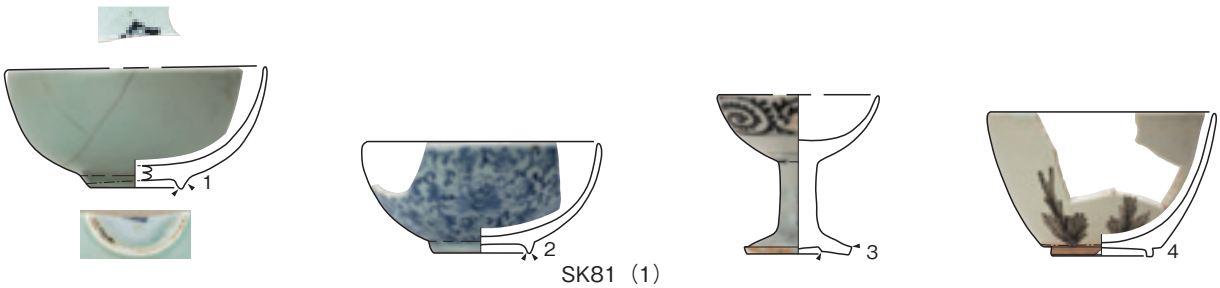
Ⅱ-33図　SK75（2）、SE77（1）出土遺物



SE77（2）



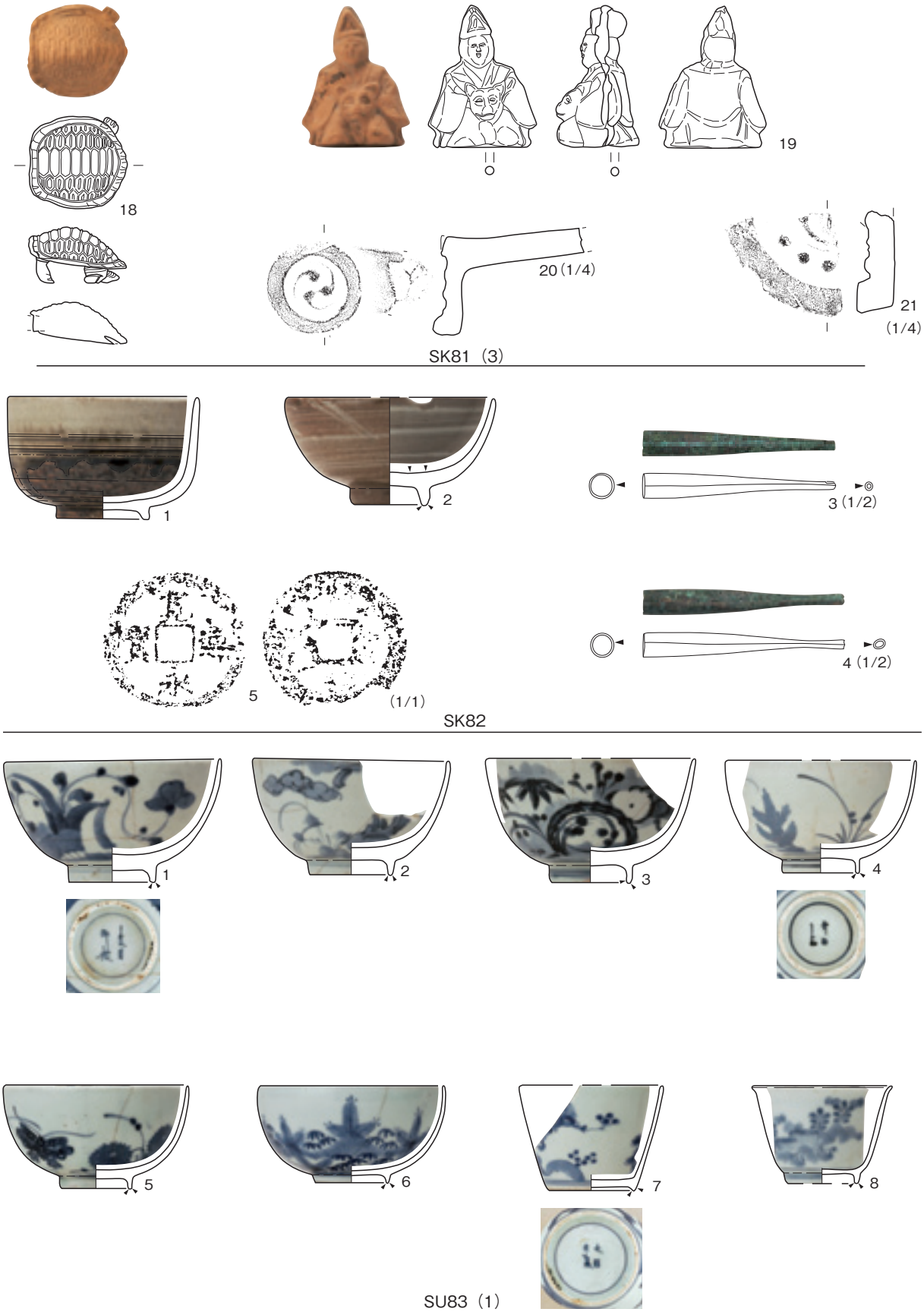
SK78



SK81（1）

Ⅱ-34図　SE77（2）、SK78、SK81（1）出土遺物

Ⅱ - 35 図　SK81 出土遺物（2）

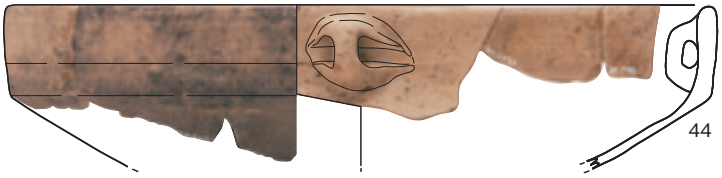


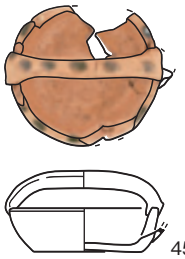
Ⅱ-36図　SK81（3）、SK82、SU83（1）出土遺物

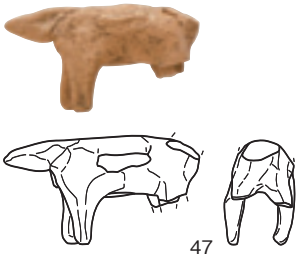
Ⅱ - 37 図　SK83 出土遺物（2）

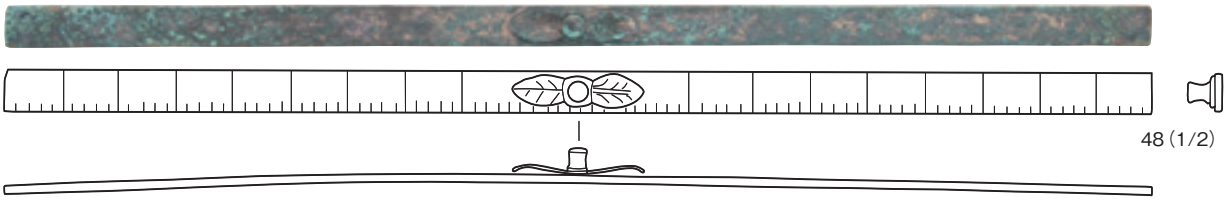
Ⅱ- 38 図　SK83 出土遺物（3）

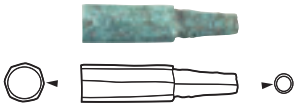
Ⅱ - 39 図　SK83 出土遺物（4）

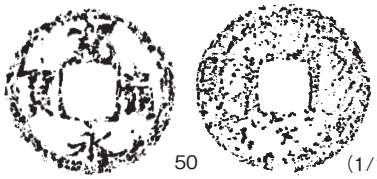


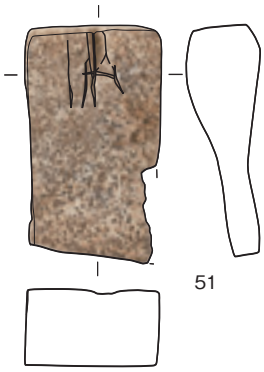




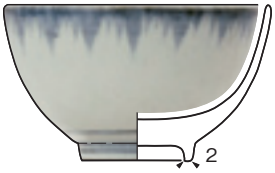


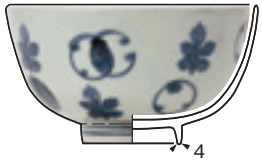


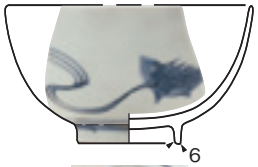


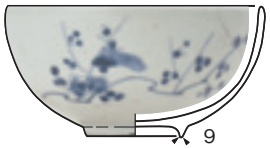


SU83（5）







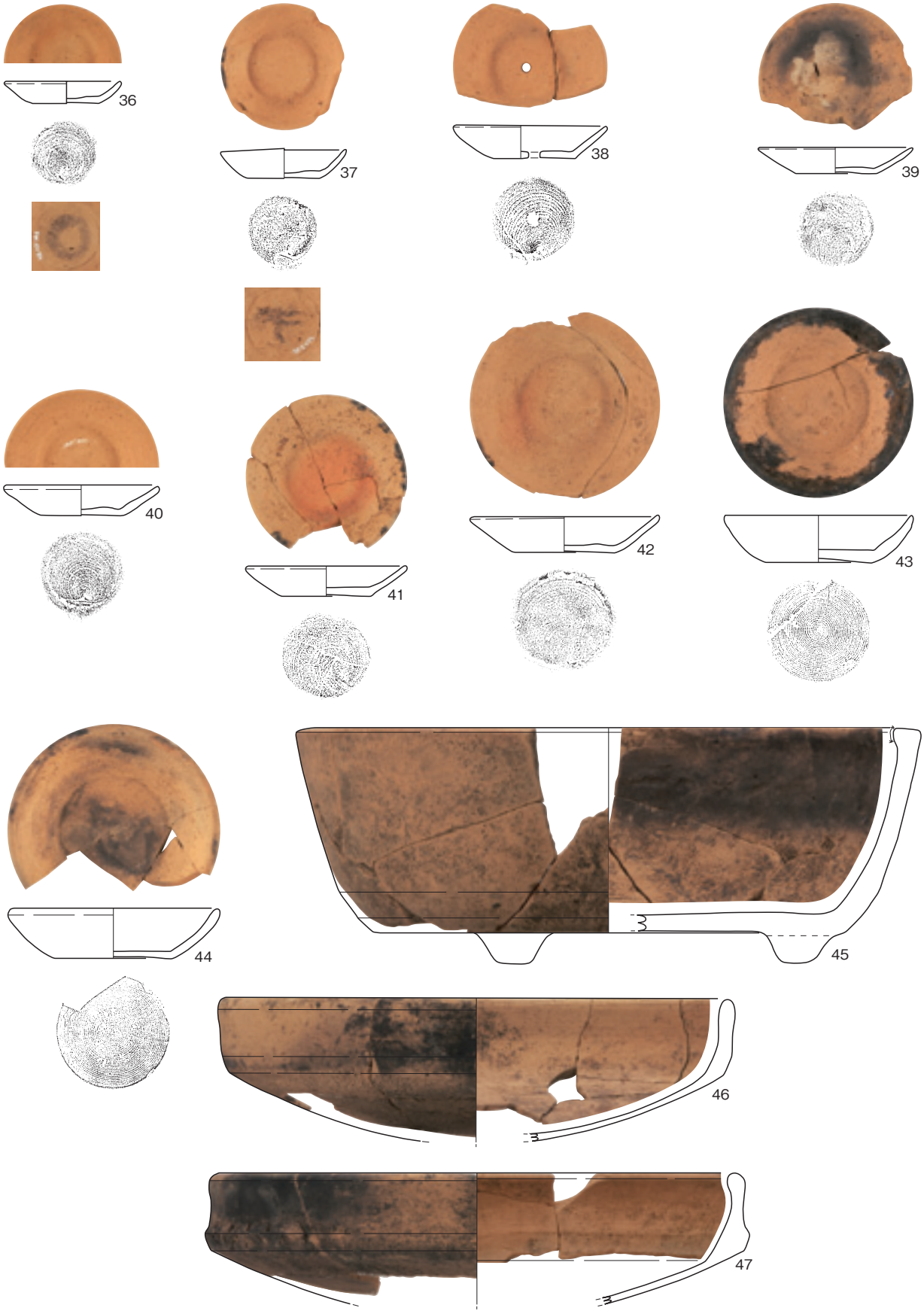


SU84（1）

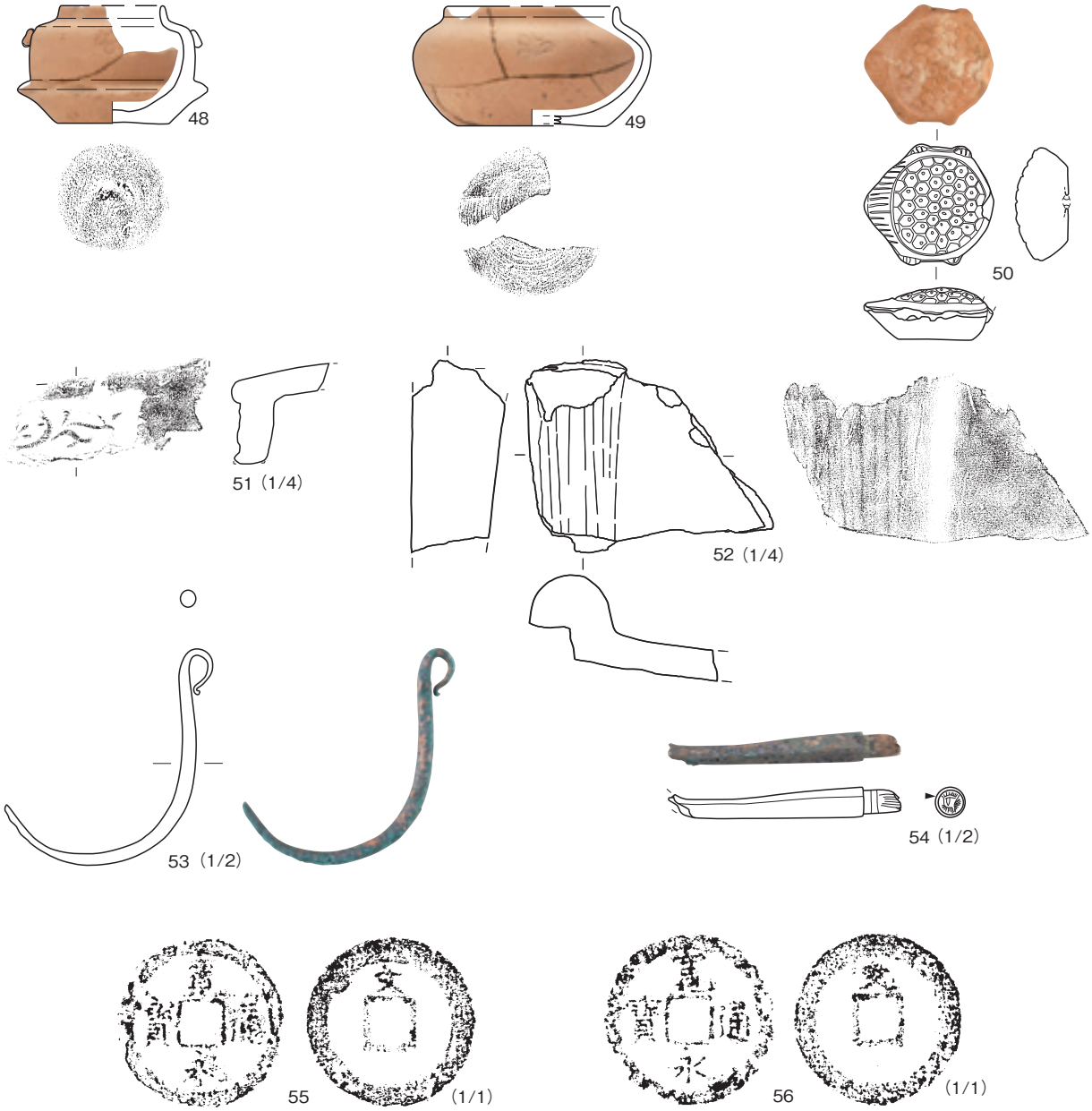
Ⅱ-40図　SK83（5）、SU84（1）出土遺物

Ⅱ- 41 図　SU84 出土遺物（2）

Ⅱ - 42 図　SU84 出土遺物（3）



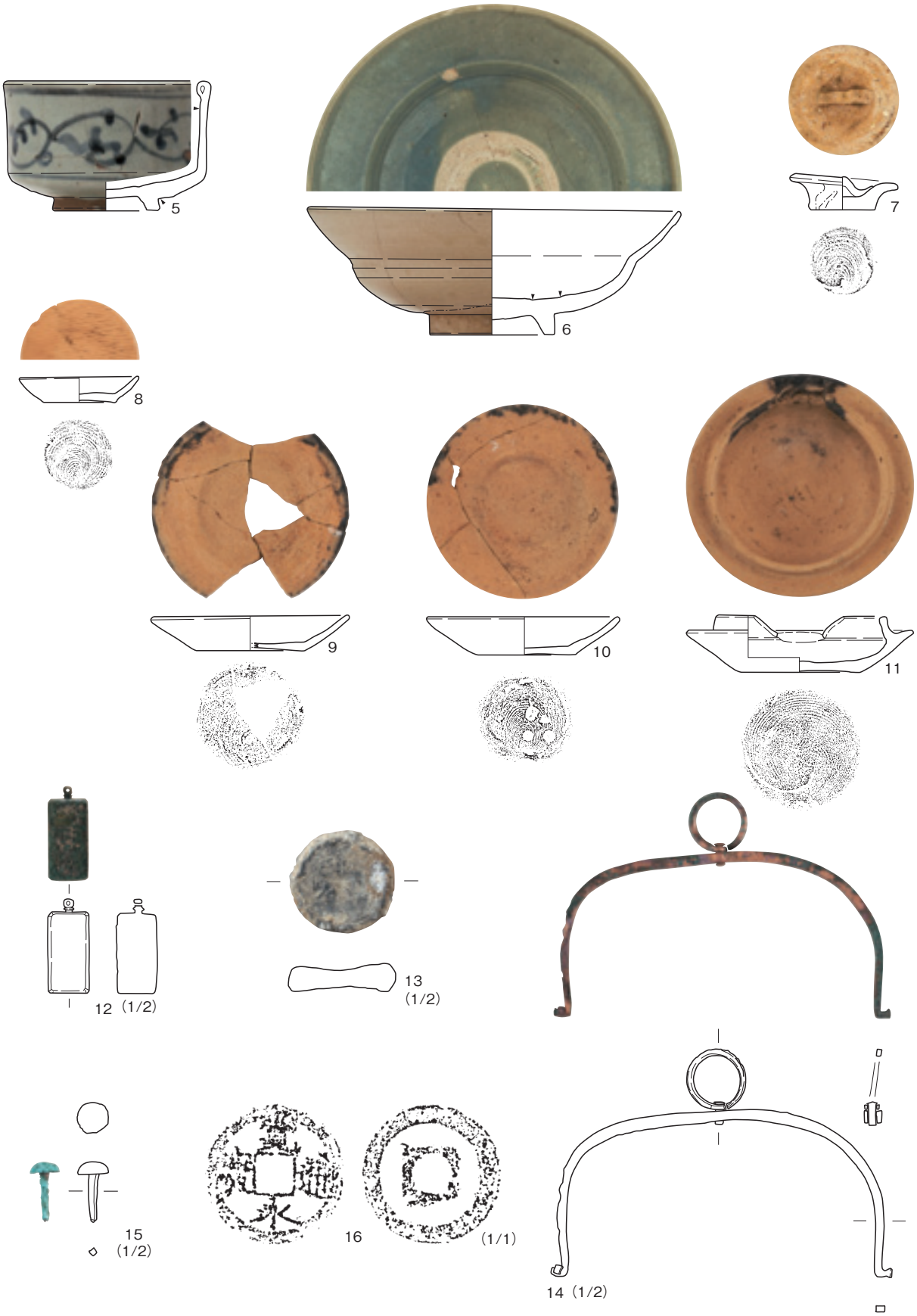
Ⅱ - 43 図　SU84 出土遺物（4）



SU84（5）

SU85（1）

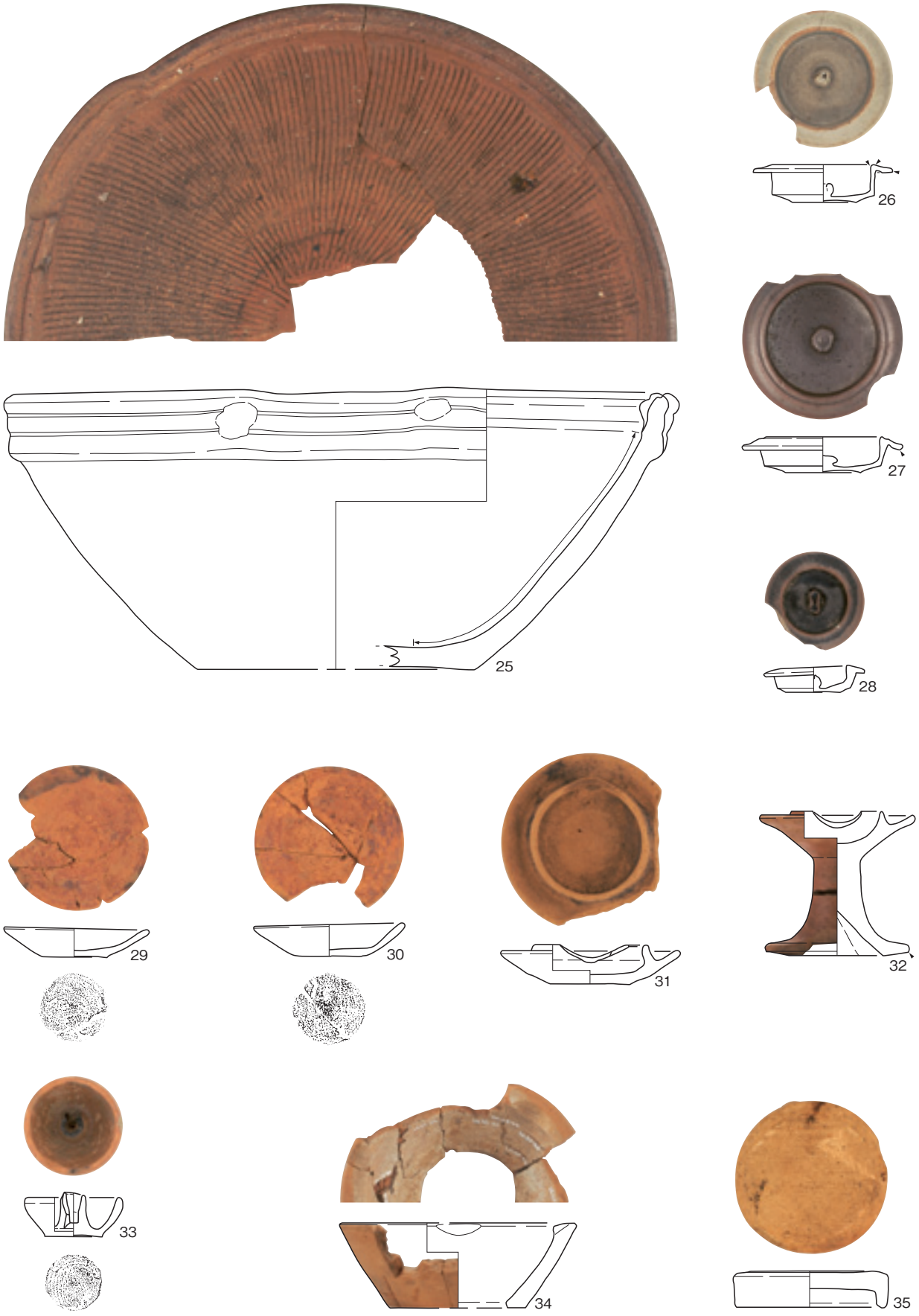
Ⅱ-44図　SU84（5）、SU85（1）出土遺物



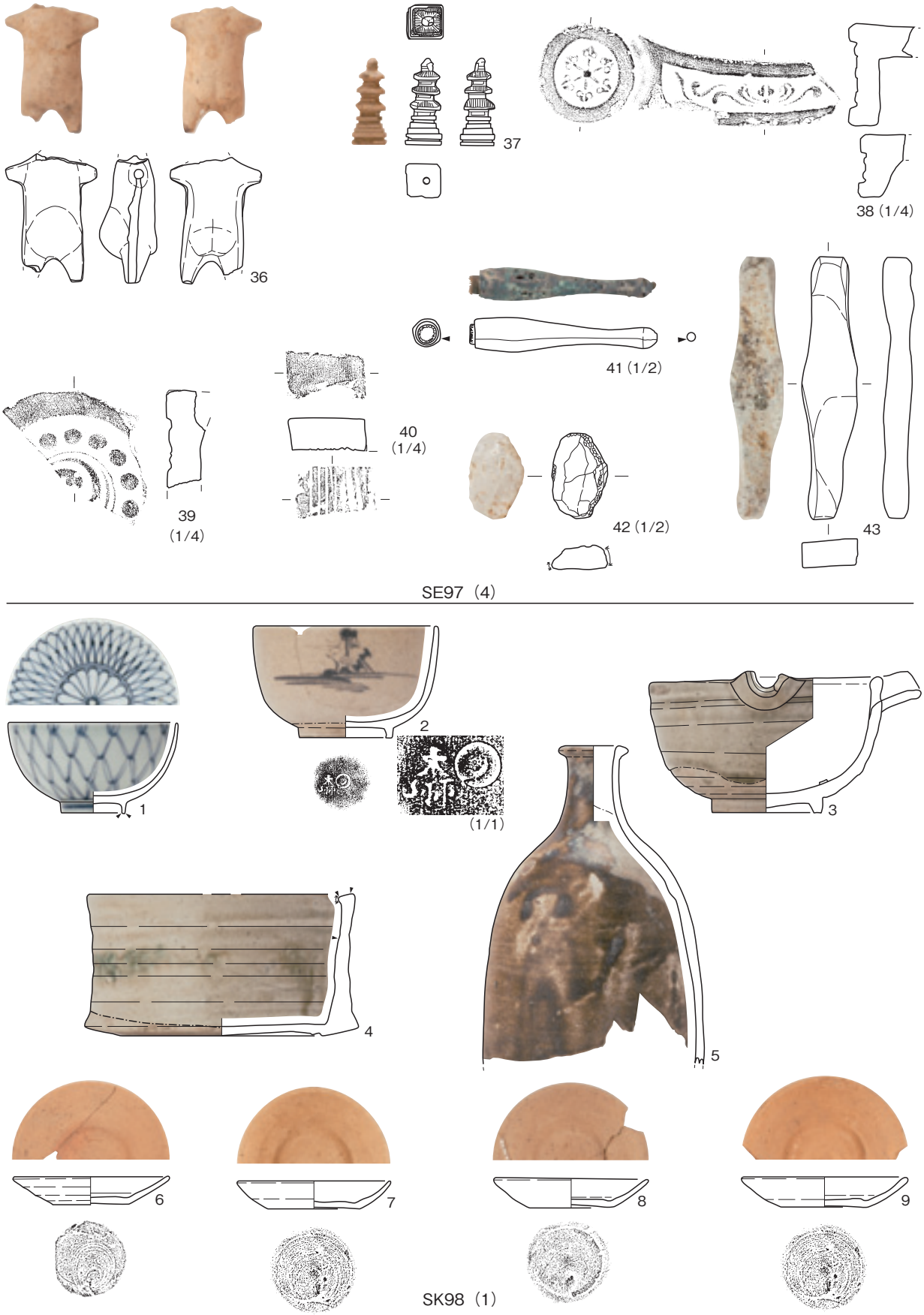
Ⅱ - 45 図　SU85 出土遺物（2）

Ⅱ - 46 図　SE97 出土遺物（1）

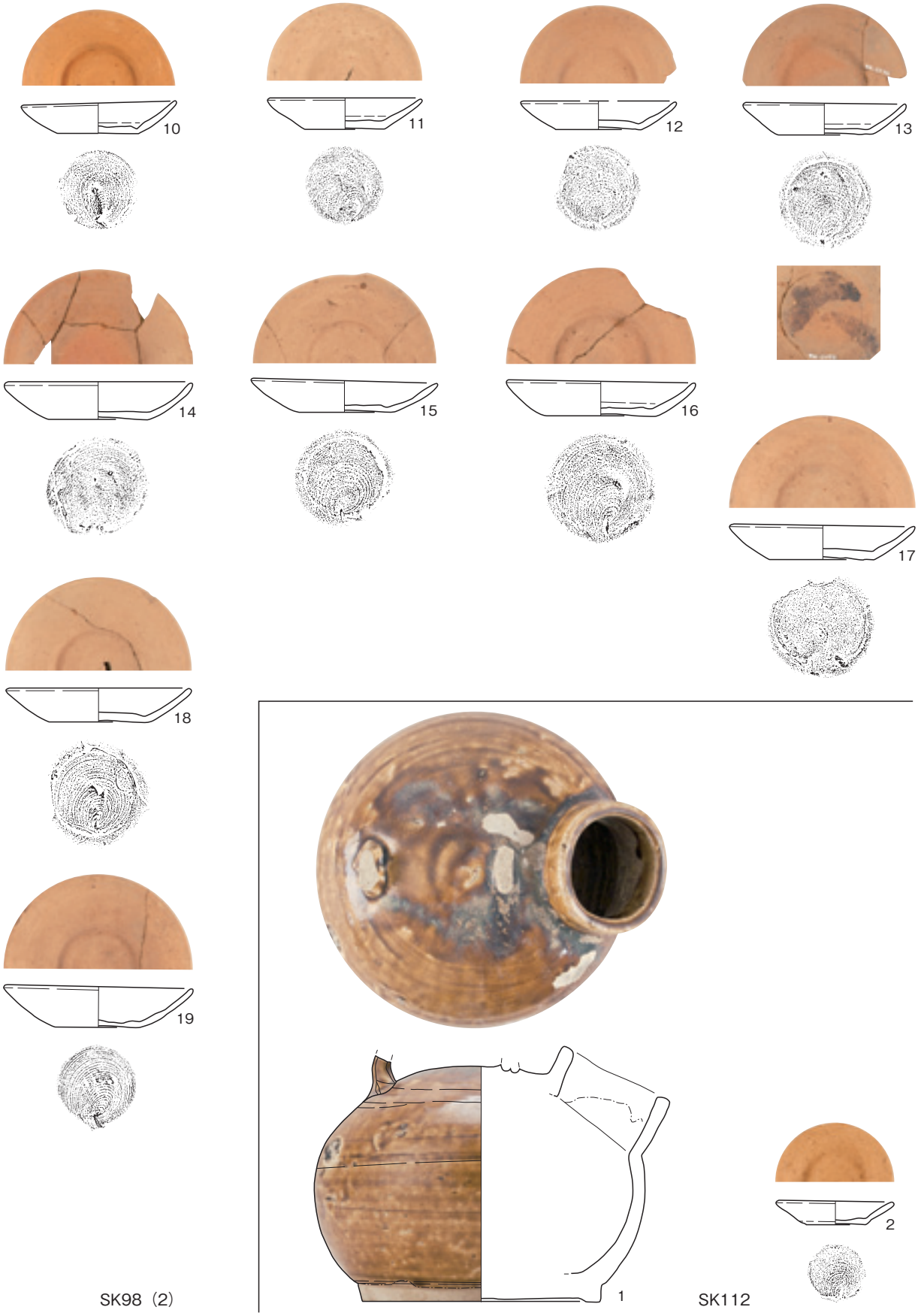
Ⅱ - 47 図　SE97 出土遺物（2）



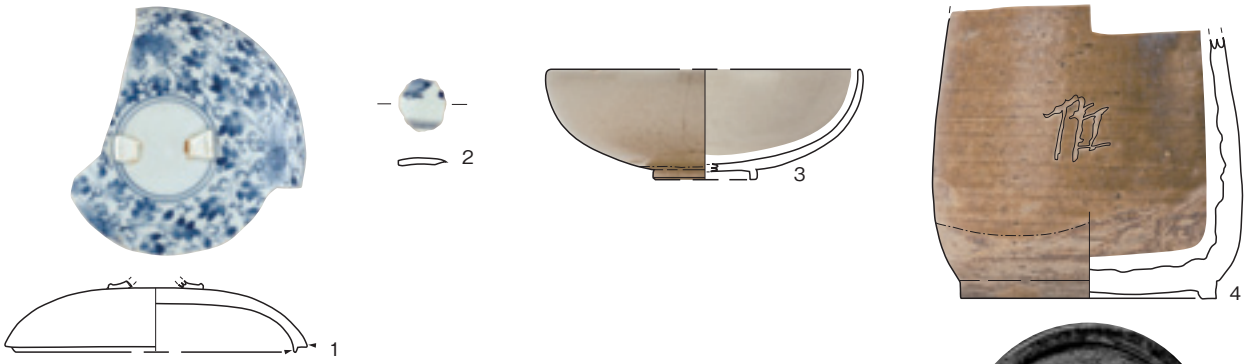
Ⅱ-48 図　SE97 出土遺物（3）

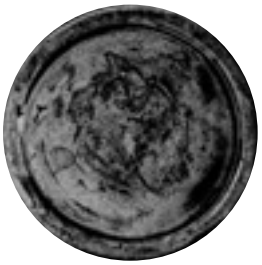


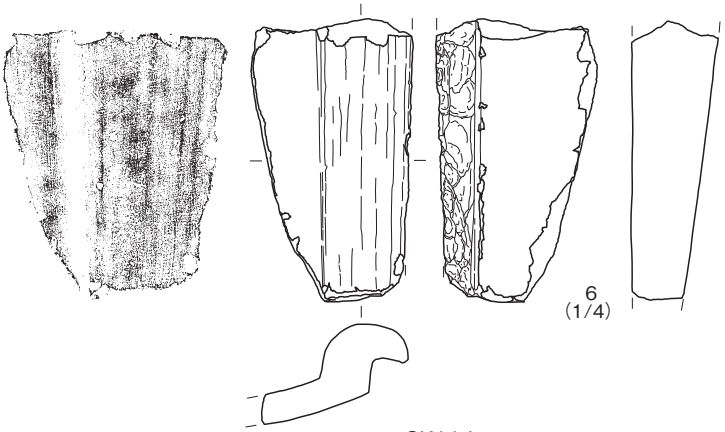
Ⅱ-49図　SE97（4）、SK98（1）出土遺物



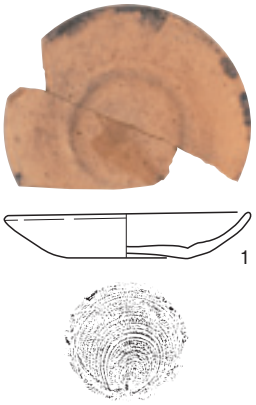
Ⅱ-50図　SK98（2）、SK112出土遺物



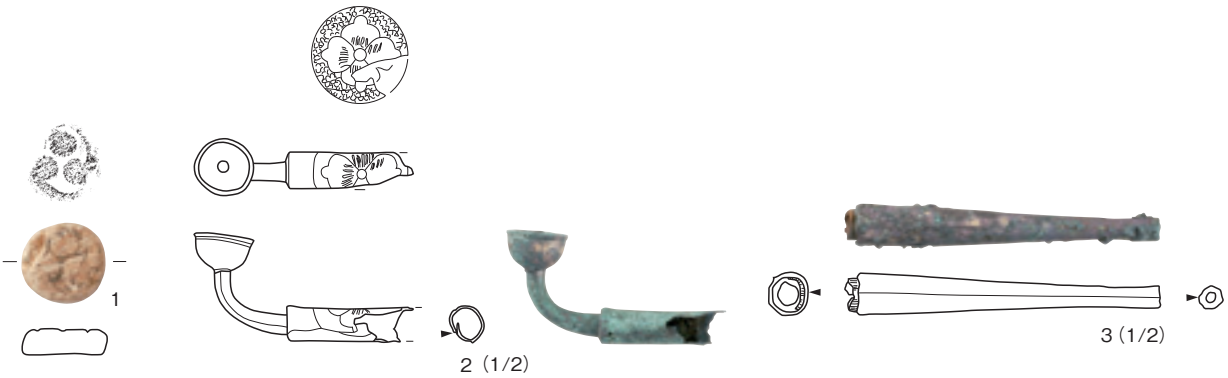




SK114



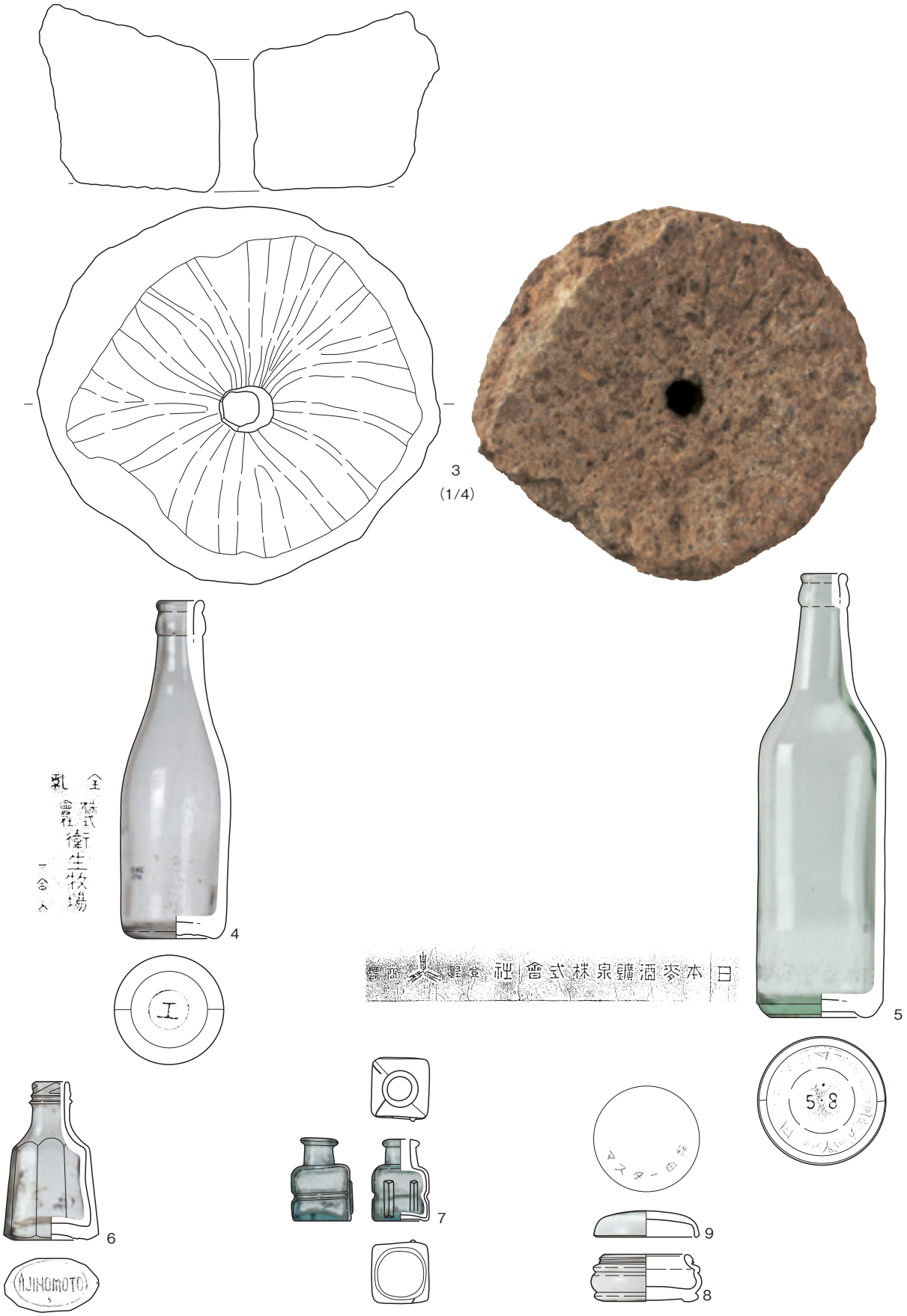
SK115



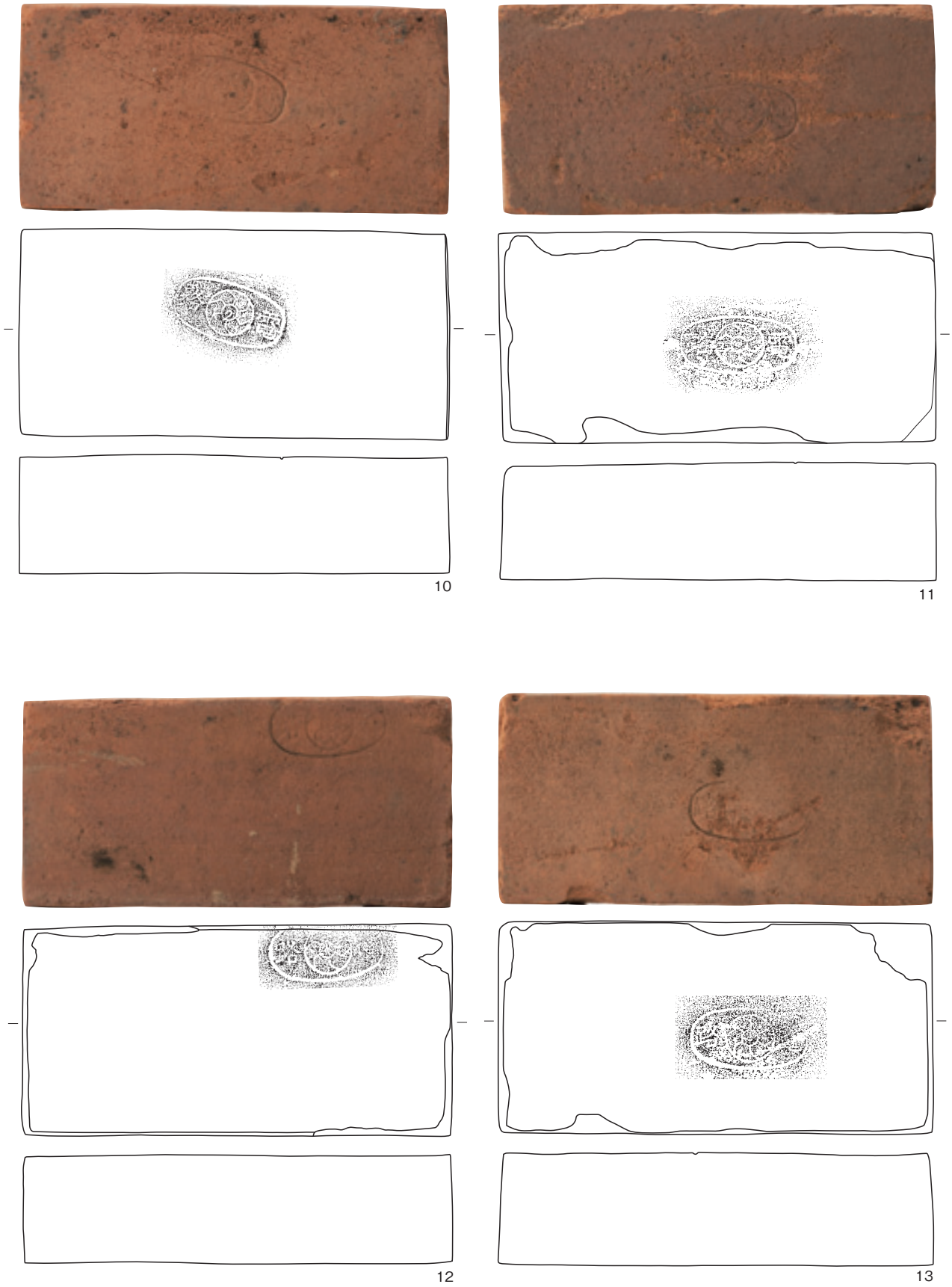
SK116

Ⅱ-51 図　SK114、SK115、SK116 出土遺物

Ⅱ-52図　SK118、遺構外（1）出土遺物



Ⅱ-53図　遺構外出土遺物（2）



Ⅱ-54 図　遺構外出土遺物（3）

第４節　動物遺体

本地点からは、12群の動物遺体が出土している。その内訳は、貝類が８群、魚類が２群、爬虫類が１種、哺乳類が１種である。以下に種名を示す。

軟体動物門　Phylum MOLLUSCA
腹足綱 Class Gastropoda
古腹足目 Order Vetigastropda
ミミガイ科 Family Haliotidae
メガイアワビ *Halitosis (Nordotis) gigantea*
サザエ科 Family Turbinidae
サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
新腹足目 Order Neogastropoda
アクキガイ科 Family Muricidae
アカニシ *Rapana venosa*
エゾバイ科 Family Buccinidae
バイ *Babyronia japonica*
二枚貝綱 Class Bivalvia
フネガイ目 Order Arcoida
フネガイ科 Family Arcidae
アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*
シジミガイ科 Family Cobicalidae
シジミガイ属　*Corbicula* sp.
マルスダレガイ科 Family Veneridae
アサリ *Tapes (Ruditapes) philippinarum*
ハマグリ　*Meretrix lusoria*
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA
硬骨魚綱 Class Osteihthyes
スズキ目 Order Perciformes
タイ科 Family Sparidae
属種不明 gen. et sp. indet.
サバ科 Family Scombridae
カツオ *Katsuwonus pelamis*
爬虫綱 Class Repilla
カメ目 Order Chelonia
スッポン科 Family Trionychidae
スッポン *Trionyx sinensis japonicus*
哺乳綱 Class Mammalia
偶蹄目　Order Artiodactyla
シカ科 Family Cervidae
ニホンジカ *Cervus nippon*

なお、これらの資料は、現場にて発掘担当者が視認できたものを任意で採集したものである。

（１）貝類（Ⅱ - 2、3表・Ⅱ - 55図）

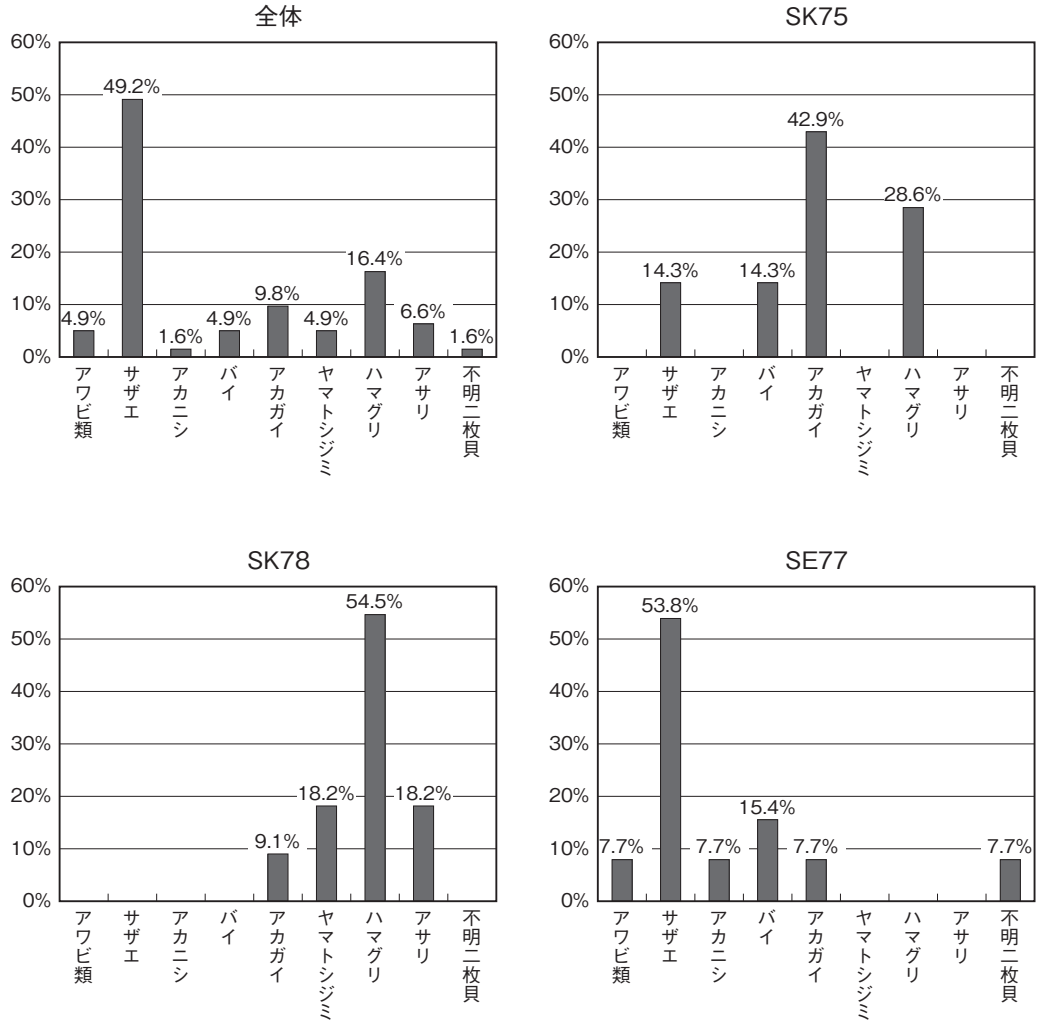
貝類は、最小で61個体出土している。最も多いものはサザエで30個体出土し、全体の49.2％を占める。次いで、ハマグリが10個体で多く16.4％を占め、この２種以外は10％を超えず、個体数も6個体未満ときわめて少ない。なお、この２種以外は、アカガイ（6個体・9.8％）、アサリ（4個体・6.6％）、アワビ類、バイ、ヤマトシジミ（各３個体・4.9％）、アカニシ（1個体・1.6％）が出土している。

傾向として、１個体でも１品の料理として成立しうる種類のものが多い。また、サザエに関しては、出土している遺構数も他に比べて圧倒的に多い傾向にある。具体的には、サザエが10基の遺構から出土しているのに対して、他の種類のものは５基未満である。しかし、以上の傾向に関しては、サザエなどの大型のものが視認しやすかったことによる可能性が高く、資料の取り上げ方法も鑑みて積極的な議論は控えたい。

ハマグリは、SK75のものが殻長50mm以上の大型、SK78のものがそれ未満の中小型である。この２基の遺構の貝種組成をみると以下のとおりである。まず、SK75は、アカガイ、サザエ、バイ、大型ハマグリと１個体でも１品の料理として成立しうるもののみが出土している。それに対して、SK78は、アカガイの１点を除いて、ヤマトシジミ、アサリ、中小型ハマグリと中小型のものが出土

遺構	メガイアワビ	アワビ類	サザエ		アカニシ	バイ	アカガイ		ヤマトシジミ		ハマグリ		アサリ		不明二枚貝	合計（MNI）	備考
			殻	蓋			左	右	左	右	左	右	左	右			
SE12			8	1												8	
SK28			2													2	
SK71	1															1	
SK75			1	1		1	3	3			2	1				7	
SE77		△	7	2	1	2	△								△	13	
SK78							1			2	4	6		2		11	
SU84		○	1				1									3	アカガイ内に物質が充填されている
SU85			3								○					4	
SE97			1													1	
SK112			5													5	
SE117			1													1	
遺構外			1						○							2	
撹乱											1		1	2		3	
合計	3		30		1	3	6		3		10		4		1	61	
(MNI)	4.9%		49.2%		1.6%	4.9%	9.8%		4.9%		16.4%		6.6%		1.6%		

Ⅱ-2表　出土貝類遺体組成表



Ⅱ-55図　出土貝類遺体組成グラフ

しており、これらは、汁物や佃煮など複数個体でしか１品の料理として成立しえない種類である。

アカガイに関しては、殻の部分がほとんど残存しておらず、内部に充填されていた漆によって形状を知ることができる。漆は僅かに貝殻の縁の部分に被さっており、溢れるほど貝殻内に漆が充填されていた様子が観察される。このアカガイは食物残滓ではなく、細工などの作業の際に器（パレット）として用いたものと考えられる。

サザエ

遺構	殻高
SE012	99.33
SE117	91.99

ハマグリ

遺構	左右	殻長	殻高	靭帯
SK75	左			13.35
				13.02
SK78	右	27.85	24.15	7.52
			35.03	15.23
		44.19	34.34	11.64

※靱帯：外靱帯溝長

アサリ

遺構	左右	殻長	殻高
SK78	右	36.57	27.71
		35.74	27.47

ヤマトシジミ

遺構	左右	殻長	殻高
SK78	右	20.77	19.12
		24.05	22.74

Ⅱ-３表　貝類遺体サイズ計測値（単位：mm）

（２）脊椎動物（Ⅱ-４表）

遺構	綱	科・種	部位	左右	数	備考
SK78	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	左	1	
		硬骨魚	同定対象外	―	1	
SK75	硬骨魚	カツオ	尾鰭椎前椎体	―	1	終尾椎との関節部分に切断痕有。
SK74	爬虫	スッポン	背甲骨板	―	1	
SU84	哺乳	ニホンジカ	角	―	1	破片資料。

Ⅱ-４表　出土脊椎動物遺体一覧

本地点からは、脊椎動物は、破片数で５点出土している。

魚類は、タイ科の左前鰓蓋骨、カツオの尾鰭椎前椎体、同定の対象外である鰓蓋骨の破片がそれぞれ１点、計３点が出土している。その内、カツオの尾鰭椎前椎体に関しては、終尾椎に切断面を有する。

魚類の他には、スッポンの背甲骨板、ニホンジカの角の破片が各１点ずつ出土している。なお、ニホンジカの角は、製品に加工した際に廃棄されたものであることが推測される。

遺構	貝類	その他
SE12	サザエ（8）	
SK28	サザエ（2）	
SK71	メガイアワビ（1）	
SK74		スッポン（1）
SK75	アカガイ（3）ハマグリ（2），サザエ・バイ（各1）	カツオ（1）
SE77	サザエ（7），バイ（2），アカニシ（1），アワビ類・アカガイ・不明二枚貝（片）	
SK78	ハマグリ（6），ヤマトシジミ・アサリ（各2），アカガイ（1）	タイ科（1）
SU84	サザエ（1）1，アカガイ（1：漆パレット？），アワビ類（片）	ニホンジカ（1）
SU85	サザエ（3），ハマグリ（片）	
SE97	サザエ（1）	
SK112	サザエ（5）	
SE117	サザエ（1）	
遺構外	サザエ（1），ヤマトシジミ（片）	
撹乱	アサリ（2），ハマグリ（1）	

Ⅱ-５表　本調査地点における動物遺体の出土傾向

謝辞

北野信彦先生には、アカガイに充填されていた内容物（漆）の鑑定をはじめ、それに関する有益なご教示を賜った。厚く御礼申し上げたい。

Ⅱ-56 図　教育学部総合研究棟地点出土の貝類遺体

1 メガイアワビ　2 サザエ　3 アカニシ　4 バイ　5 アカガイ（左）　6 ヤマトシジミ（右）　7 アサリ（右）　8 ハマグリ（右）
（1：SK71　2：SE12　3：SE77　4・5：SK75　6～8：SK78）

Ⅱ-57 図　教育学部総合研究棟地点出土の脊椎動物遺体

1 タイ科（左鰓蓋骨）　2 カツオ（尾鰭椎前椎体）　3 スッポン（背甲骨板）　4 ニホンジカ（角）
（1：SK78　2：SK75　3：SK75　4：SU84）

a. 表面

b. 内面

c. 殻頂部分拡大

Ⅱ-58 図　SU84 出土のアカガイ製漆溜パレット

第Ⅲ章　インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点

第１節　調査の経緯と概要

（１）調査に至る経緯

平成８（1996）年度、東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に弥生構内に予定された図書館（当時は、「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー」と呼称）新営に伴う、埋蔵文化財の調査に関する照会があった。新営予定地は東京都遺跡地図によると文京区 47 本郷台遺跡群（本郷七丁目･弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、［平］住居・［近］礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣［旧］［縄］［弥］［古］［平］［近］）内に位置しており、また、隣接する教育学部総合研究棟地点（第Ⅱ章参照）では、江戸時代の水戸藩徳川家中屋敷に関連すると推定される遺構・遺物が良好な状態で確認され、埋蔵文化財発掘調査が行われた経緯があった。当該地区においても埋蔵文化財が遺存している可能性が高く、建築予定地域内全域について埋蔵文化財発掘調査を行うことが確認された。

（２）調査の方法と経過

調査の方法（Ⅰ - 2 図、Ⅲ - 1 図）

発掘調査は、建物建築に伴って根切りを行う範囲を対象にした。対象面積は 626㎡である。調査は、グリッド法を用いて行い、調査区全域を周囲の建物軸に合わせて 10 × 10 mでグリッドを設定した。軸は世界測地系に対して N-10° 35’ 48.2” -W 振れている。グリッドの名称は、南北をアルファベット、東西をアラビア数字で表し、それぞれ東から西へ、北から南へ若い番号から付した。この交点に対して、A1、A2・・・とし、交点より南西の 10 × 10 mの範囲を A1 区、A2 区・・・のようにグリッドの設定を行った。

調査の経過

発掘調査は、平成８（1996）年４月 15 日から開始した。調査対象レベルまでの機械掘削は、調査区西側より開始した。調査区全域に現代までの生活面は確認できず、現表下約 20 ～ 50cm のレベルで関東ローム層上面が確認された。ローム上面においては西から東にかけて傾斜が認められた。５月 17 日には、調査区全域の機械掘削が終了した。

遺構の確認は、近代以降の盛土層を除去した下から確認された関東ローム層上面（武蔵野標準層位Ⅲ層）にて行った。その結果、調査区中央には、近接する東京大学農学部校舎建設に関連した戦後の大きな撹乱が確認されたが、調査区全域から近代から江戸時代の遺構がやや散漫に確認され、５月 17 日から発掘調査を開始した。江戸時代の遺構の一部は、近代の帝国大学、第一高等学校、東京癲狂院などに伴う遺構に撹乱されていたが、おおむね遺存状態は良好でであった。５月 28 日には武蔵野標準層位Ⅳ層中より礫群と思われる焼礫が確認され、即日調査を開始した。その後、ナイフ形石器なども確認されたが、６月 20 日には現地調査は全て終了した。

（3）調査の概要

出土した埋蔵文化財は、旧石器時代の遺物、江戸時代水戸藩下・中屋敷に関連する遺構・遺物、近代東京府癲狂院あるいは第一高等学校に関連する遺構・遺物である。

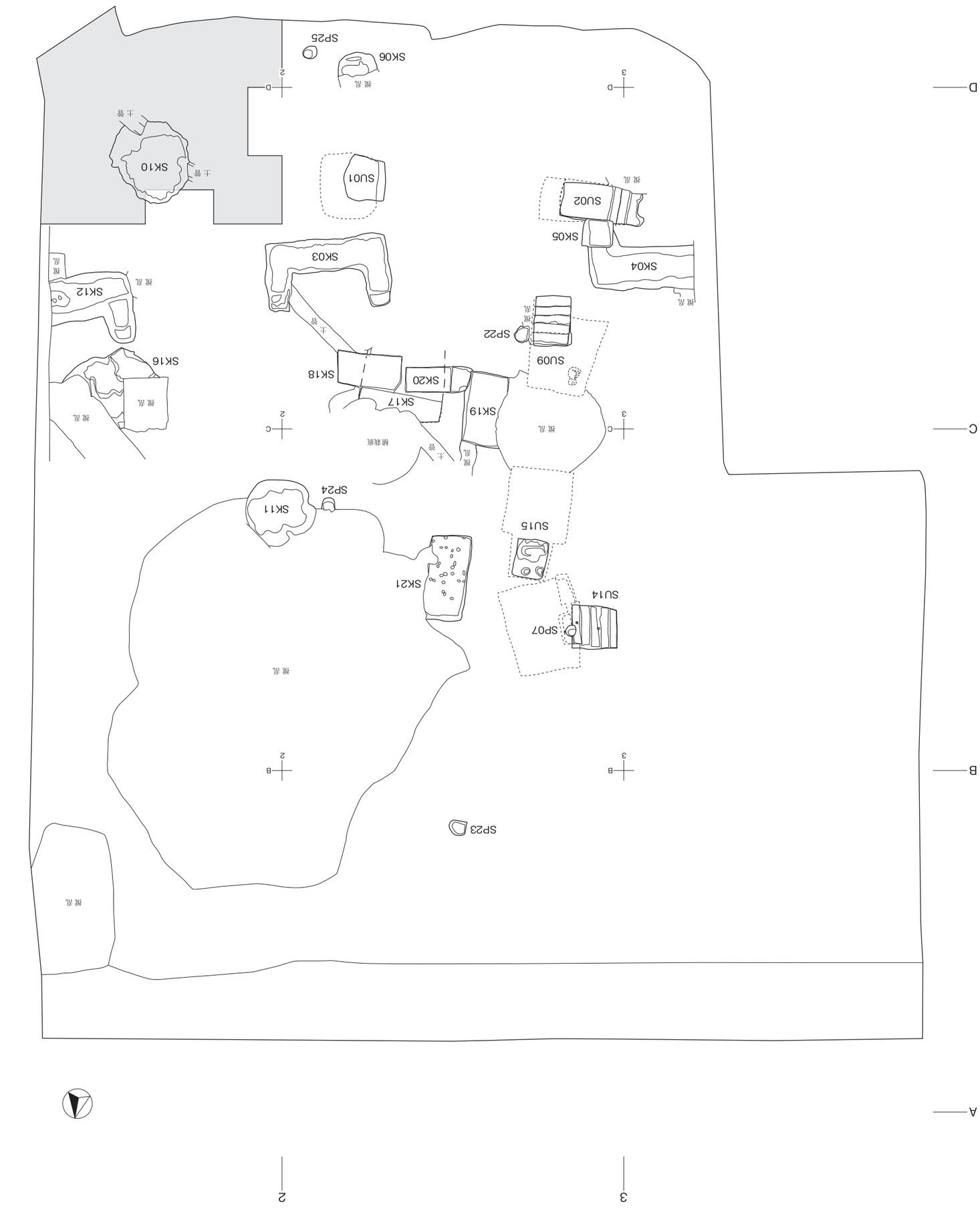
旧石器時代の遺物は、調査区東南隅の西から東に緩やかな傾斜を有するエリアから確認された。遺物は、ナイフ形石器１点、使用痕のある剥片１点、剥片９点、礫群が１群であった。

江戸時代の遺構・遺物は、水戸藩下・中屋敷に関連する可能性が高いもので、地下室、土坑、ピットなどが検出された。これら多くの遺構の種類や年代、主軸方位は、隣接する教育学部総合研究棟地点西区中央に並ぶ遺構群とほぼ同様であり、同じ方位に主軸を持つ長屋建物の存在を想起させる。

近代以降の当該地は、版籍奉還以降、東京府癲狂院（明治 14 ～明治 19）→第一高等学校（明治 22 ～昭和 10）といった経緯を有する。一方、調査で確認された SK03、SK04、SK12、SK16 などの近代の所産と考えている遺構から出土した遺物には、銅版転写以降の技術を使用した磁器類が含まれておらず、東京府癲狂院に伴う遺構であろうと考えている。

種別	番号	遺構図版（Ⅱ - @）	遺物図版（Ⅱ - @）	動物遺体	遺物年代	切り合い	火災	備考
SU	1	1、6	13、14、15		17 末～ 18 前			
SU	2	1、6				05 より旧		
SK	3	1、7			近代			
SK	4	1、7				05 より旧		
SK	5	1、7				02,04 より新		
SK	6	1、7						
SP	7	1、8				14 より新		柱痕あり
欠番	8							
SU	9	1、8	16、17		17 末～ 18 初			
SK	10	1、9			近代			
SK	11	1、9				20 と重複		
SK	12	1、9			近代（型紙）			
欠番	13							
SU	14	1、10	17		17 末～ 18 初	7、15 より旧		
SU	15	1、11	18 ～ 21		17 末～ 18 初	14 より新		
SK	16	1、11			近代			
SK	17	1、12	21		17 末～ 18 初	18,20 と重複		
SK	18	1、12			近世	17 と重複		
SK	19	1、11			近世	20 より旧		
SK	20	1、12				19 より新、11,18 と重複		
SK	21	1、12						
SP	22	1、12						
SP	23	1、12						
SP	24	1、12						
SP	25	1、12						

Ⅲ - 1 表　遺構一覧



旧石器時代調査区

0　　10m

Ⅲ−1図　IML地点　全体図（1/120）

第２節　旧石器時代

（１）遺跡の層序

本地点の層序は、隣接する教育学部総合研究棟地点とおおむね変化はない（Ⅱ - １図、Ⅲ - ２図参照）。現表土下は 100 ～ 120cm の深さで近代～現代の盛土や撹乱層が堆積しており、以下に立川ローム層が確認される。近代～現代の盛土層中には、Ⅲ - ２図で示したように現表下約 50cm 付近に灰を多く含む硬化面とその下には破砕したレンガやコンクリートを砕石として利用した撒石層が確認された。これらの事業は一連のものと考えられ、図中１～６層は工程差によるものと推定している。教育学部総合研究棟地点、IML 地点から確認された近代の遺構群は、この層群にパックされており、これら以前に廃絶されたものと考えられる。

これら層群以下には、立川ローム層が確認され、この間に他時期の自然堆積層や人為的堆積層などは確認できなかった。両地点全面において江戸時代～近代前期に人為的に切り土、盛り土によって現在の地表面が構築されたものと考えられる。本地点では、基準層位として現表土をⅠ層、近代～現代に至る盛り土や撹乱層をⅡ層とし、以下、立川ローム層に対する武蔵野標準層位を利用した。ローム層の説明は、Ⅲ - ２図に示した。Ⅲ層ソフトローム層、Ⅴ層第一黒色帯、Ⅵ層 AT 包含層、Ⅶ層第二黒色帯上部、Ⅸ層第二黒色帯下部である。

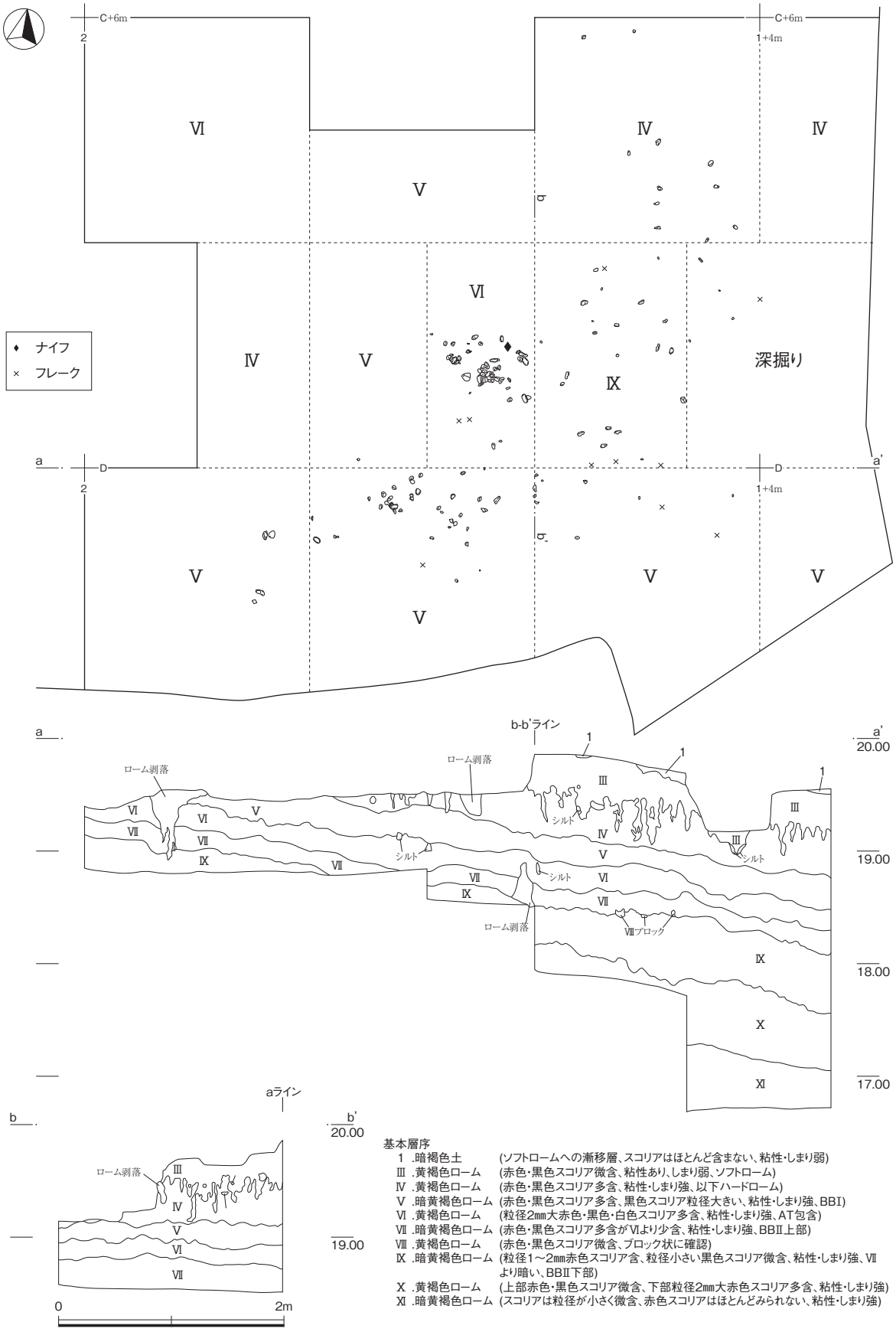
旧石器時代の遺物が出土した IML 地点全域で立川ローム層上部が削平されており、調査区東端付近では武蔵野標準層位Ⅲ層から確認できたものの、調査区中央から西側では武蔵野標準層位Ⅴ層～Ⅵ層が江戸時代～近代前期の遺構確認面となった。また、江戸時代～近代にかけて大形の撹乱や遺構などにより、立川ローム層上部は全体的にはいわば虫食い状態で遺存していたにすぎない。

第Ⅰ章でも略説したが、調査地点は南北に延びる本郷台東面に位置しており、台地頂部から東に下る斜面の地形変換点にあたる。ローム層の堆積状態も調査区東側で傾斜が顕著で、旧石器時代の遺物が出土した C1 区、D1 区では、調査を行った東西幅 7m に対して、第二黒色帯上部で 1m の傾斜が観察された（Ⅲ - ２図）。

（２）調査の概要

旧石器時代の遺物は、江戸時代の遺構の調査中に確認された。C1 区に存在する SK10 の調査中に焼礫が出土した。江戸時代の調査終了後、本格的に調査を開始した。調査は、上記のように立川ローム層上部の遺存状態が不良であったため、確認された SK10 南側ローム層の遺存状態の良好なエリアにおいて２× 2m の調査区を適宜設定して行った。遺物の出土は、Ⅳ層下層～Ⅴ層最上層において確認され、Ⅲ - ２図で示したような層位までの調査を行った。

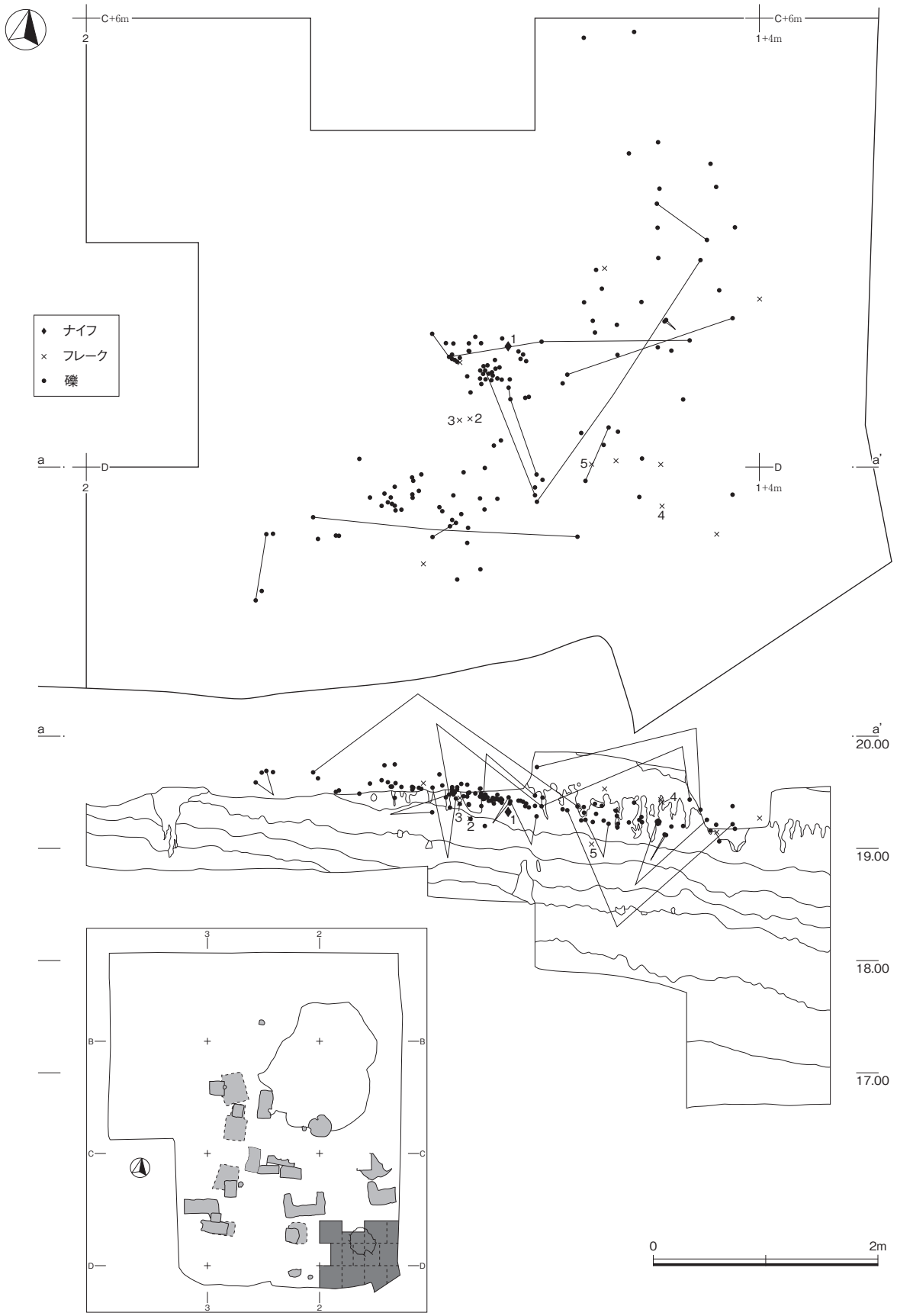
調査の結果、焼礫の集中区が１箇所の他、剥片、ナイフ形石器などが検出された。出土層位は礫群、剥片、石器ともⅣ層上～中位が中心であった。礫群は、大半が熱を受け割れているものであったが、８例に接合関係が認められた。本地点の他に本郷構内では、これまで文学部３号館地点（本郷 2）、医学部附属病院設備管理棟地点（本郷 4）、同外来診療棟地点（本郷 10）、同看護師宿舎Ⅲ期地点（本郷 74）、同病棟地点（本郷 23）、薬学部資料館地点（本郷 28）など、台地東縁部を中心に旧石器時代の遺物が出土している。これらの遺跡の規模は、台地西斜面にある真砂遺跡などと対比するといずれも小さく、当該地域での活動と相関していると考えることができる。



基本層序

1	暗褐色土	(ソフトロームへの漸移層、スコリアはほとんど含まない、粘性・しまり弱)
Ⅲ	黄褐色ローム	(赤色・黒色スコリア微含、粘性あり、しまり弱、ソフトローム)
Ⅳ	黄褐色ローム	(赤色・黒色スコリア多含、粘性・しまり強、以下ハードローム)
Ⅴ	暗黄褐色ローム	(赤色・黒色スコリア多含、黒色スコリア粒径大きい、粘性・しまり強、BBⅠ)
Ⅵ	黄褐色ローム	(粒径2mm大赤色・黒色・白色スコリア多含、粘性・しまり強、AT包含)
Ⅶ	暗黄褐色ローム	(赤色・黒色スコリア多含がⅥより少含、粘性・しまり強、BBⅡ上部)
Ⅷ	黄褐色ローム	(赤色・黒色スコリア微含、ブロック状に確認)
Ⅸ	暗黄褐色ローム	(粒径1～2mm赤色スコリア含、粒径小さい黒色スコリア微含、粘性・しまり強、Ⅶより暗い、BBⅡ下部)
Ⅹ	黄褐色ローム	(上部赤色・黒色スコリア微含、下部粒径2mm大赤色スコリア多含、粘性・しまり強)
Ⅺ	暗黄褐色ローム	(スコリアは粒径が小さく微含、赤色スコリアはほとんどみられない、粘性・しまり強)

Ⅲ - 2図　基本層序・旧石器時代 遺物出土状況図　(1/50)



Ⅲ - 3図　IML地点　旧石器時代 遺物分布図　(1/50)

（3）出土遺物

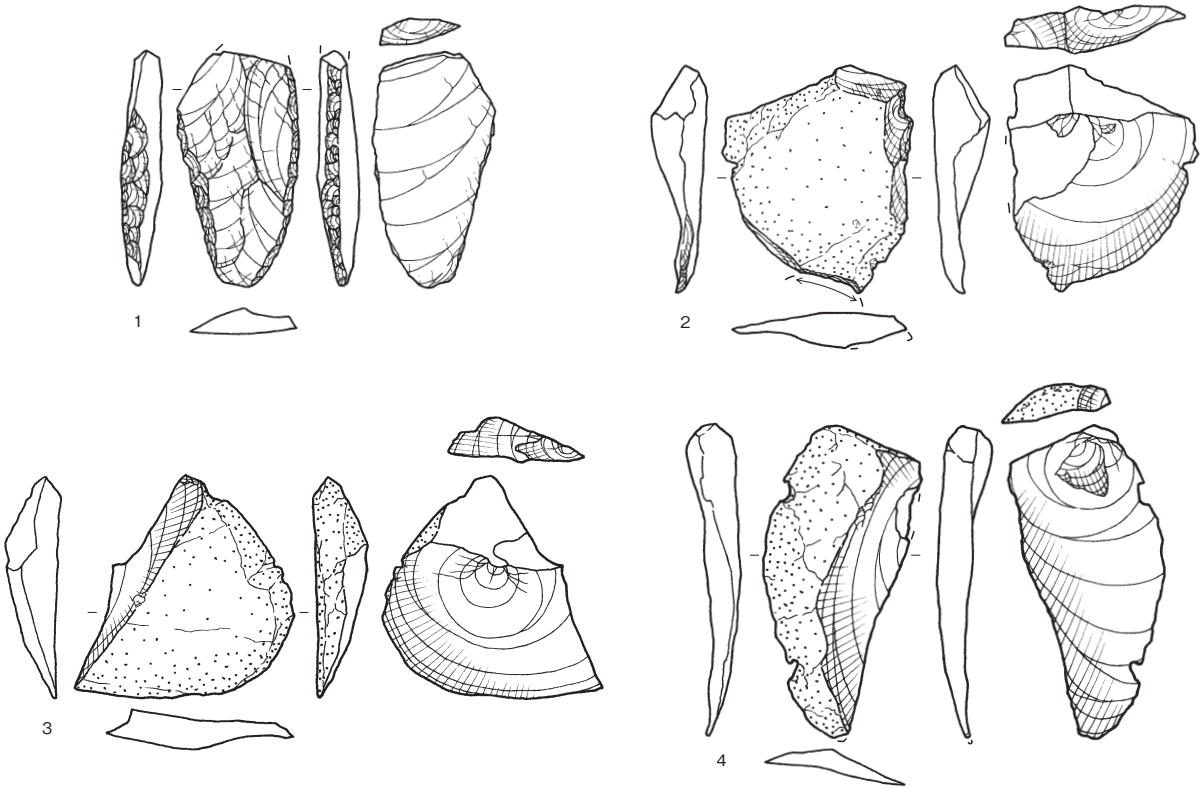
出土した遺物は、礫群１群と黒曜石、チャートの剥片、石器類である。

礫群は、砂岩を中心に134点からなり、その全てに被熱の痕跡が認められた。礫は、熱による破損が頻度高く認められ、500gを超えるような大形のものは確認できなかった（Ⅲ - 2表）。出土範囲はC1区南側、D1区北側から確認された。平面的にはやや散漫なものの、層位はⅣ層中位を中心に集中している。平面的にはやや集中していると判断される範囲もあったが、接合関係からはその範囲を超えて接合しており、これらは単群と判断した（Ⅲ - 3図）。礫は、完形68点、破片は66点で、破片の接合は12群、26例確認され、その頻度は高い。

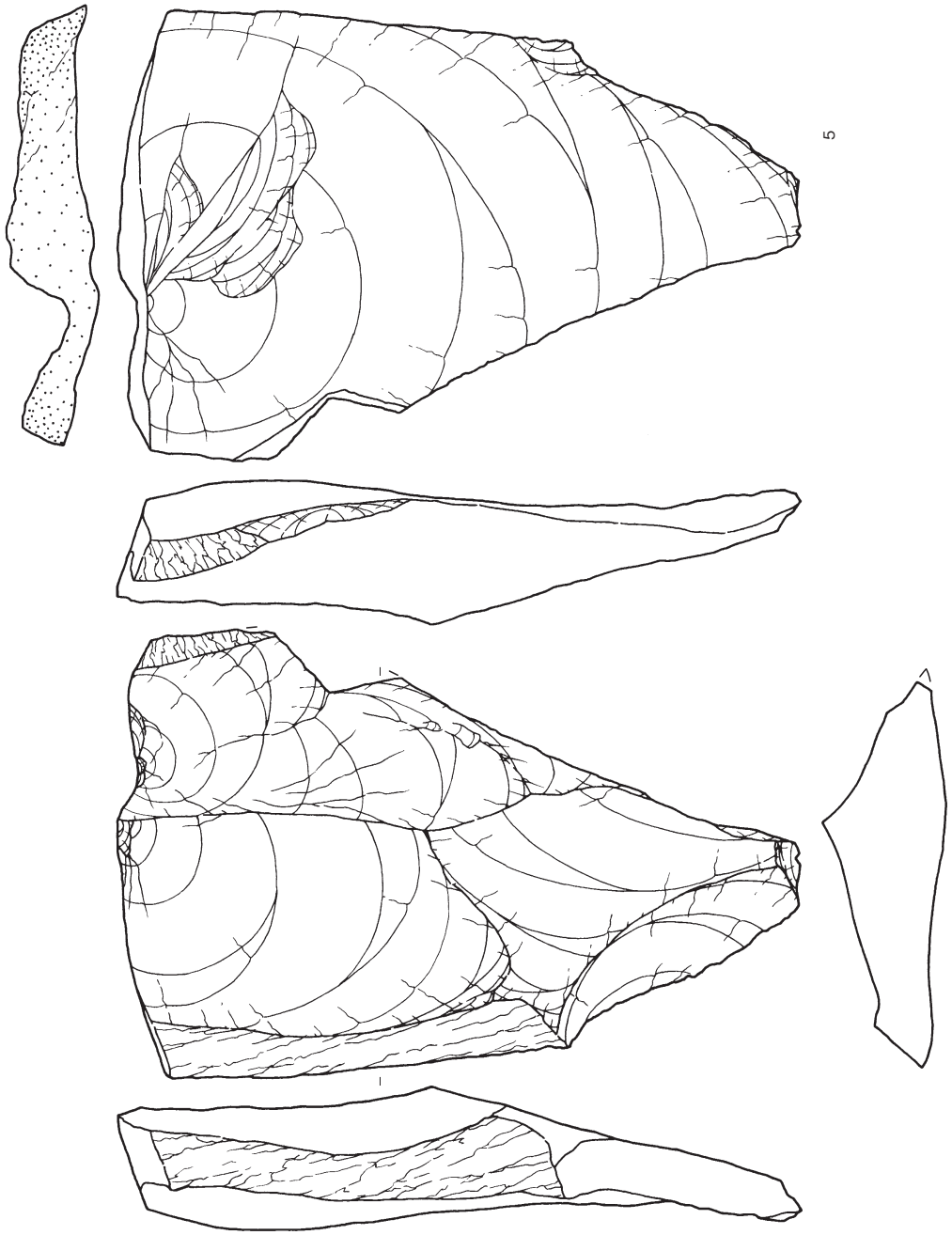
実測図１～５は、石器、剥片類である。１は二側縁加工のナイフ形石器である。先端部は欠損している。縦長剥片の打点部を先端として加工を行っている。２～４は黒曜石の剥片で、同一母岩の可能性がある。２は端部に使用時のものと思われる微細剥離が確認できる。３は自然面を多く残す剥片である。５は砂岩の縦長剥片である。

No.	Gr	層位	時代	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	C1	Ⅳ	旧石器	ナイフ形石器	3.11	1.6	0.52	2.5	Ho	
2	C1	Ⅳ～Ⅴ	旧石器	U・F	3.02	2.54	0.72	3.79	Ob	
3	C1	Ⅳ	旧石器	剥　　片	2.93	2.9	0.71	4.02	Ob	
4	D1	Ⅳ	旧石器	剥　　片	4.14	2.08	0.71	2.65	Ob	
5	C1	Ⅴ	旧石器	剥　　片	9.6	6.28	1.99	96.57	Sa	

Ⅲ -2表　石器観察表



Ⅲ−4図　IML地点　旧石器時代 出土遺物



Ⅲ−5図　IML地点　旧石器時代 出土遺物

第３節　江戸時代・近代の遺構

SU01（Ⅲ - 6 図）

調査区南側に位置する地下室である。やや歪んだ方形の入り口から断面袋状の室部が北、東側に拡がっている。室部の平面形は歪な隅丸方形を呈する。調査区内の位置は、SU02、SU09、SU14、SU15 などほぼ同一列で並ぶ遺構群から 1 間半ほど東にずれている。規模は、開口部で東西 130cm、南北 135cm、室部で東西 170cm、南北 200cm、確認面からの深さは最大 120cm を計測する。坑底や壁面はおおむね平滑に整形され、坑底はフラットである。覆土は 7 層に分層され、遺物は上層に多く包含されていた。

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀前葉の陶磁器類、瓦、金属製品などコンテナ 5 箱程度出土している。

SU02（Ⅲ - 6 図）

調査区南西側に位置する階段を伴う地下室である。北側で SK05 と重複しており、SU02 が旧である。東西方向に主軸を有する室部から、室と同じ幅で階段が 4 段西方に構築されている。階段は室部から深さ 120cm 付近で最下段があり、使用時にははしごなどの利用が想定される。室部奥はテラス状に一段高くなっており、また、奥壁の天井部も上方に抉り込むように構築されている。SU02 の位置は、SU09、SU14、SU15 などほぼ同一列で並ぶ遺構群上にあり、これらが同一の長屋建物に伴う可能性が考えられる。規模は、開口部で東西 140cm、南北 100cm、坑底で東西 150cm、南北 110cm、テラスは高さ 30cm、奥行き 60cm、階段は幅 100cm、各ステップの奥行きは約 25cm、比高差約 25cm、確認面からの深さは最大 200cm、坑底から天井までは 110cm を計測する。坑底や壁面はおおむね平滑に整形されるが、各面はやや湾曲している。覆土は 9 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK03（Ⅲ - 7 図）

調査区南側に位置する平面形かすがい状を呈する土坑である。東側の一部を土管の埋め込み穴に切られている。調査区西から SK04、SK03、SK12 と同形態の遺構が主軸を一にして連続し、これらは同一時期に機能していたと考えられる。遺構の平面形は、東西に主軸を有する長方形の遺構から東、西端が北方に突き出し、「コ」の字状を呈している。突き出している部分は東、西側共に端部に約 20cm の比高差を有する段が設けられている。規模は、東西 360cm、南北は東側突き出し部で 210cm、西側突き出し部で 200cm、中央で 90cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。壁面や坑底は凹凸を有している。覆土はロームを主体とする褐色土単層で構成される。

遺物は、近代の陶磁器類が数点出土している。

SK04（Ⅲ - 7 図）

調査区南西側に位置する矩形を呈する土坑である。西側が調査区域外であるため、全体の様子は窺えない。しかし、主軸を一にして連続して確認されている SK03、SK12 と同様の平面形であると思われる。突き出し部の方向については SK03、SK12 が北方に張り出しているのに対し、本遺構は南方に張り出しを有しており、相違がみられる。遺構の東側で SK05 と重複しており、SK04 が旧である。遺存している規模は、東西 300cm、南北は東側突き出し部で 180cm、中央で 130cm、確認面からの

深さは最大60cmを計測する。壁面や坑底は凹凸を有している。覆土は2層に分層されるが、共にロームを主体とする土層である。

遺物は、出土していない。

SK05（Ⅲ - 7図）

調査区南西側に位置する方形の土坑である。遺構の北側でSK04、南側でSU02と重複しており、両遺構よりSK05が新である。遺構の様子は確認時に明確に遺構と判断できなかったため、東壁の一部を除き、土層の堆積状況などから推定せざるを得なかった。推定される規模は、東西90cm、南北80cm、確認面からの深さは最大20cmを計測する。壁面や坑底は凹凸を有している。覆土は褐色土単層である。遺構の新旧関係から遺構の廃絶は近代に比定される。

遺物は、出土していない。

SK06（Ⅲ - 7図）

調査区南側中央に位置する円形を呈すると思われる土坑である。遺構の北側は近代以降の撹乱によって削平されており、半円形の部分が遺存しているにすぎない。遺存している規模は、東西120cm、南北70cm、確認面からの深さは最大50cmを計測する。壁面や坑底は凹凸が著しく、坑底は鍋底状を呈している。覆土は4層に分層される。

遺物は、出土していない。

SP07（Ⅲ - 8図）

調査区中央に位置する円形の小ピットである。SU14と重複しており、SP07が新である。遺構はSU14の天井部上に構築されており、調査時に天井の一部の崩落のためピット下半の土層の観察が行えなかった。規模は、径30cm、確認面からの深さは50cmを計測する。ピット中央には四寸の円形の柱痕が確認された。

遺物は、出土していない。

SU09（Ⅲ - 8図）

調査区南西側に位置する階段を伴う地下室である。遺構の北側を近代以降の撹乱によって削平されている。SU09の位置は、SU02、SU14、SU15などほぼ同一列で並ぶ遺構群上にあり、これらが同一の長屋建物に伴う可能性が想定される。開口部は、南北に長軸を有する長方形を呈し、階段は南から北に向かって降下するように構築され、室部は階段から北、西方向に拡がっている。室部の形状は、奥壁に向かってすぼまり、台形状を呈する。階段は合計で5段あり、下3段は室内に突き出すように構築されている。また、室部坑底の北西側には浅い2基のピットが確認されたが、これは天井補強の可能性も考えられる。規模は、室部が南壁際東西220cm、北壁際170cm、南北は230cm、階段は幅110cm、各ステップの奥行き30cm、比高差は25～30cmで比較的緩やかな勾配を持つ。壁面や坑底は、平滑に整形され、階段のステップや室の壁面は矩折り状に構築されている。覆土は階段から室部に向かって堆積しており、全体的に遺物が包含されていた。

遺物は、17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類、自然遺物、瓦、金属製品、石製品などコンテナ4箱出土している。

SK10（Ⅲ - 9 図）

調査区南東側に位置する不整形の土坑である。南側を土管溝が東西に横断しており、これに切られている。規模は、東西 230cm、南北 240cm、確認面からの深さは最大 60cm を計測する。壁面や坑底は凹凸が激しい。覆土は 5 層に分層されるが、中央には大きなブロックが確認された。坑底、壁面の状況や覆土の堆積から樹木の植栽に関連する遺構であろうと考えられる。

遺物は、近代の陶磁器類が 7 点出土している。

SK11（Ⅲ - 9 図）

調査区ほぼ中央に位置する不整形の土坑である。遺構の上部を近代以降の撹乱によって切られている。規模は、東西 200cm、南北 200cm、確認面からの深さは最大 20cm を計測する。壁面や坑底は凹凸が激しい。覆土はロームを主体とする褐色土単層である。坑底、壁面の状況や覆土の堆積から樹木の植栽に関連する遺構であろうと考えられる。

遺物は、出土していない。

SK12（Ⅲ - 9 図）

調査区南西側に位置する矩形を呈する土坑である。東側が調査区域外であるため、全体の様子は窺えない。しかし、主軸を一にして連続して確認されている SK03、SK04 と同様「コ」字状を呈すると思われる。また、突き出しは北側にあり、北に向かってテラス状の段が二段作られている。遺存している規模は、東西 240cm、南北は突き出し部で 210cm、中央で 140cm、確認面からの深さは最大 90cm を計測する。壁面や坑底は凹凸を有している。覆土は 5 層に分層されるが、レンガ片などが含まれている。

遺物は、陶磁器が 3 点出土している。このうちの 1 点は型紙刷りで絵付けされた磁器皿であった。

SU14（Ⅲ - 10 図）

調査区中央に位置する階段を伴う地下室である。遺構の南側上部を近代以降の撹乱によって削平されている。SP07、SU15 と重複関係にあり、新旧は SP07 が新である。また、SU15 とは地中で重複しており、覆土の堆積状態からおそらく SU15 が新しい時期の廃絶であろうと推定された。SU14 の位置は、SU02、SU09、SU15 などほぼ同一列で並ぶ遺構群上にあり、これらが同一の長屋建物に伴う可能性が考えられる。開口部は、東西に長軸を有する長方形を呈し、階段は西から東に向かって降下するように作られ、室部は階段から北、東、南の三方向に拡がっている。室部の形状は、南方に長いやや歪な長方形を呈する。やや室部が北方に振れているのは、SU15 との重複を避けるためと思われる。階段は合計で 6 段あり、下 2 段は室内に突き出すように構築されている。このうち最下段は南側がカットされ、それ以上のステップより幅が短い。また、室部階段脇には一段高いテラスがあり、照明具やものなどを置くような場所であったと推定される。規模は、室部が南壁際東西 220cm、南北 260cm、階段は幅 120cm、各ステップの奥行き 25cm、比高差は 25 ～ 35cm である。階段脇のテラスは東西 40cm、南北 90cm、坑底からの高さは約 70cm を計測する。壁面や坑底は平滑で、階段のステップや室の壁面は矩折り状に、ステップなどの角は小さく面取りされ、全体に丁寧に整形されている。覆土は 8 層に分層されたが、ロームが主体の土が階段から室部に向かって傾斜を有して堆積していた。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類、金属製品、石製品などが 30 点ほど出土している。

SU15（Ⅲ - 11 図）

調査区中央に位置する入り口部を伴う地下室である。遺構の南側上部を近代以降の撹乱によって削平されている。SU14 とは地中で重複しており、覆土の堆積状態からおそらく SU15 が新しい時期の廃絶であろうと推定された。SU15 の位置は、SU02、SU09、SU14 などほぼ同一列で並ぶ遺構群上にあり、これらが同一の長屋建物に伴う可能性を考えている。入り口部の開口は、南北に長軸を有する長方形を呈し、おそらくはしごなどを利用して垂直に降下するように室部坑底と同じレベルに作られている。室部は入り口部から東、南、西の三方向に拡がっており、その形状は、南方に長い長方形を呈する。入り口部は北側を SU14 と地中で重複していたことで、埋め戻し後に SU14 側に張り出したと思われる。また、入り口部坑底には、不整形の浅い凹みが確認され、はしごなどの昇降具類設置に関連するものであろう。規模は、開口部が東西 90cm、南北 110cm、室部が東西 180cm、南北 210cm、坑底からの深さは最大 200cm を計測する。入り口部、室部の坑底は平滑で、丁寧に整形されていたが、室部壁面には角形平刃の工具痕が明瞭に確認された。覆土は 16 層に分層されるが、遺物は下層を中心に出土した。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類、瓦、金属製品、石製品などがコンテナ 6 箱出土している。

SK16（Ⅲ - 11 図）

調査区東側に位置する不整形の土坑である。遺構の東側、西側一部を近代以降の撹乱によって切られ、遺存度は悪い。遺存している規模は、東西 290cm、南北 230cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。壁面や坑底は凹凸が激しい。覆土はロームを主体とする黄褐色土単層である。坑底、壁面の状況や覆土の堆積から樹木の植栽に関連する遺構であろうと考えられる。

遺物は、近代の陶磁器が 2 点出土している。

SK17（Ⅲ - 12 図）

調査区南側中央に位置する方形と思われる土坑である。遺構の北側、南側上部を近代以降の撹乱によって大きく切られ、SK18、SK20 と重複していたと思われるが、新旧は確認できなかった。遺構の主軸方位は、SU02、SU09、SU15、SK21 など調査区中央部に位置する遺構軸と同様で、おそらく同時期に存在していたと思われる。遺存している規模は、東西 240cm、南北 80cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。壁面や坑底は比較的平滑に整形され、北壁はフラットな坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類を中心に十数点出土している。

SK18（Ⅲ - 12 図）

調査区南側中央に位置する長方形の土坑である。遺構の上部、および南東から北西に貫く土管溝に撹乱され、遺存状態は不良である。SK17 と重複していたと思われるが、新旧は確認できなかった。遺構の主軸方位は、SU02、SU09、SU15、SK21 など調査区中央部に位置する遺構軸と同様で、おそらく同時期に存在していたと思われる。規模は、東西 180cm、南北 110cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。壁面や坑底は比較的平滑に整形され、フラットな坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、年代不明の近世陶磁器が 3 点、ほうろくが 1 点出土している。

SK19（Ⅲ - 11 図）

調査区中央に位置する長方形の土坑である。遺構の西側と北側の一部を近代以降の撹乱によって切られ、全体の様子は窺えない。遺構の主軸は SU02、SU09、SU15、SK21 など調査区中央部に位置する遺構軸と同様で、おそらく同時期に存在していたと思われる。東側で SK20 と重複しており、SK19 が旧である。規模は、東西 130cm、南北 210cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。壁面や坑底は比較的平滑に整形され、壁はフラットな坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は 7 層に分層される。

遺物は、江戸時代のかわらけなどが数点出土している。

SK20（Ⅲ - 12 図）

調査区南側中央に位置する長方形の土坑である。遺構の上部を近代以降の撹乱に削平されており、遺存状態は不良である。遺構の西端で SK19 と重複しており、SK20 が新である。また、SK17 と重複していたと思われるが、新旧は確認できなかった。遺構は長方形を呈する土坑の西側に一段浅いテラスが構築されている。規模は、長方形土坑部分が東西 130cm、南北 75cm、確認面からの深さは最大 30cm、西側の張り出しは東西 60cm、深さは 10cm を計測する。壁面や坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SK21（Ⅲ - 12 図）

調査区中央に位置する長方形の土坑である。遺構の東側を近代以降の撹乱に削平されており、遺存状態は不良である。遺構の主軸方位は、SU02、SU09、SU15、SK21 など調査区中央部に位置する遺構軸と同様で、おそらく同時期に存在していたと思われる。坑底には径 5 ～ 10cm 程度の多くの小ピットが不規則に確認された。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。遺存している規模は、東西 120cm、南北 250cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。覆土は褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SP22（Ⅲ - 12 図）

調査区南側に位置するピットである。西側上部を一部撹乱されている。平面形はやや不整な円形を呈している。規模は、東西 40cm、南北 50cm、確認面からの深さは最大 60cm を計測する。覆土は 4 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SP23（Ⅲ -12 図）

調査区北側に位置するピットである。平面形はやや不整な円形を呈している。規模は、東西 50cm、南北 40cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。覆土はロームを主体にする黄褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SP24（Ⅲ - 12 図）

調査区中央に位置するピットである。遺構の北側を撹乱され、全体の様子は窺えない。規模は、東

西 40cm、南北 40cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。覆土はロームを主体にする黄褐色土単層である。

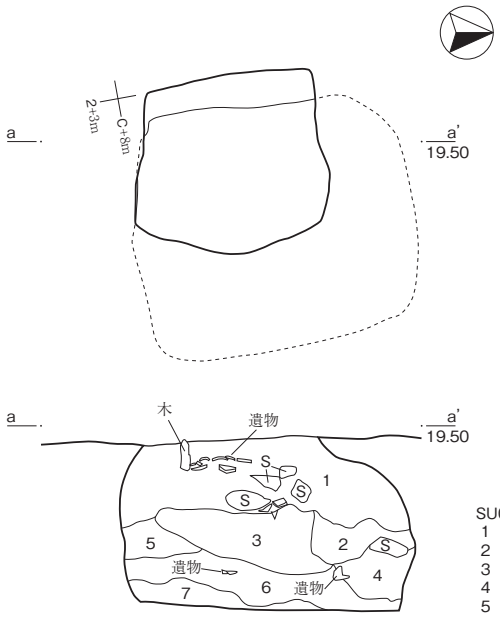
遺物は、出土していない。

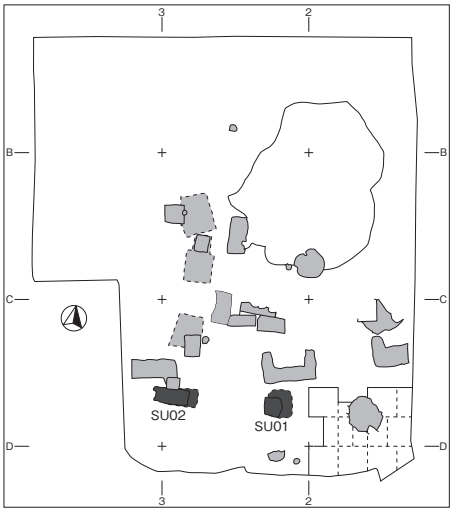
SP25（Ⅲ - 12 図）

調査区南端中央に位置する円形のピットである。規模は、径 40cm、確認面からの深さは最大 90cm を計測する。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

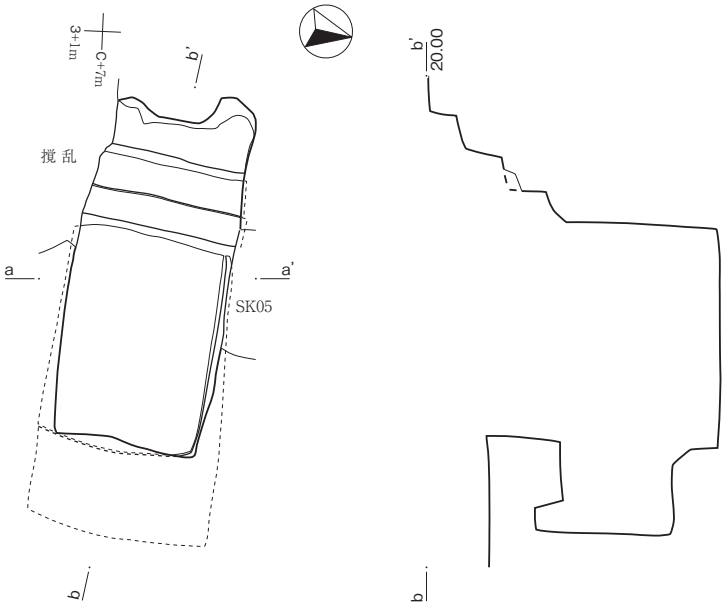
SU01

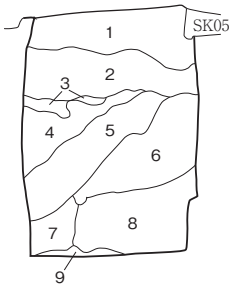




SU01
1　暗褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック少含、石・磁器・土器・瓦等含、粘性ややあり、しまりあり)
2　暗褐色土　(ローム粒少含、粘性ややあり、しまりなし)
3　褐色土　(ローム粒多含、粘性・しまりややあり)
4　茶褐色土　(ローム粒中含、粘性あり、しまりやや弱)
5　茶褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック少含、粘性やや強、しまりややあり)
6　暗褐色土　(ローム粒少含、炭化物・灰褐色粘土微含、粘性あり、しまりややあり)
7　茶褐色土　(ローム多含、粘性・しまりあり)

SU02



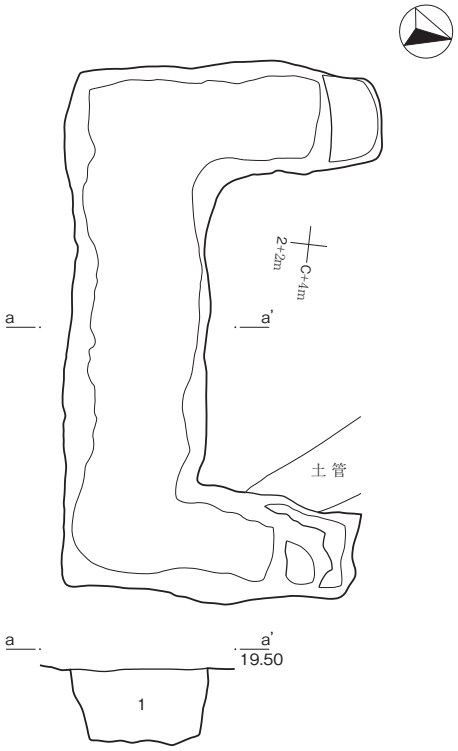


SU02
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性・しまりややあり)
2　褐色土　(ローム粒・ロームブロック極多含、灰褐色粘土微含、粘性あり、しまりややあり、1層より暗い)
3　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性あり、しまりやや弱)
4　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性ややあり、しまりやや弱)
5　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性ややあり、しまりやや弱、4層より暗い)
6　茶褐色土　(ローム粒多含、粘性あり、しまりややあり)
7　暗茶褐色土　(ローム粒少含、粘性あり、しまり弱)
8　褐色土　(ロームブロック主体層、ローム粒多含、粘性やや弱、しまりややあり)
9　茶褐色土　(ローム粒少含、粘性あり、しまり弱)

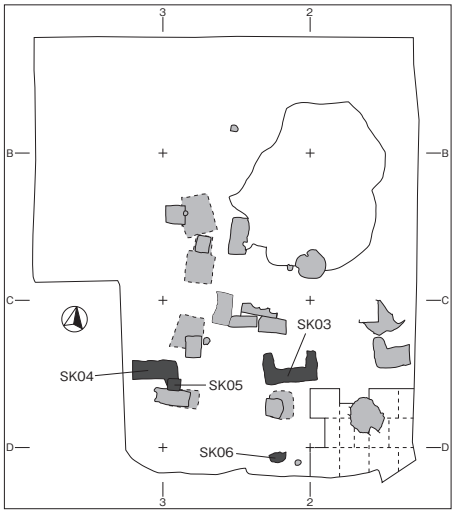
0　2m

Ⅲ - 6図　IML地点　SU01、SU02　(1/50)

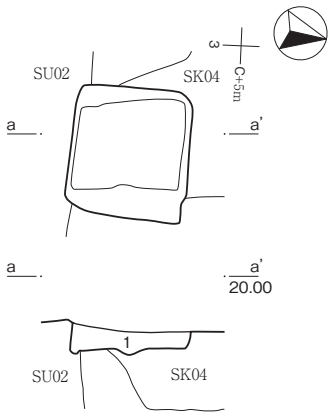
SK03



SK03
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性・しまりやや弱)

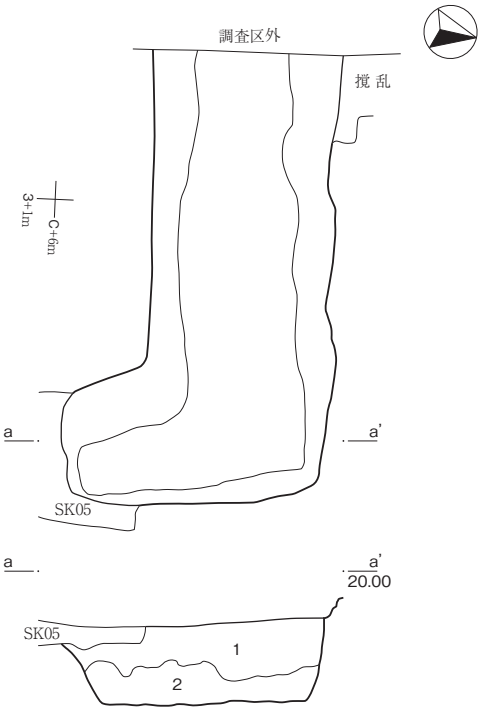


SK05



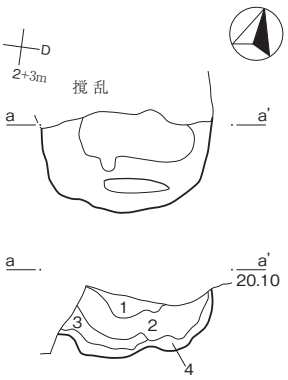
SK05
1　褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック・黒色土ブロック中含、
粘性ややあり、しまりあり)

SK04



SK04
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性ややあり、しまりあり)
2　黄褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性弱、しまりややあり)

SK06

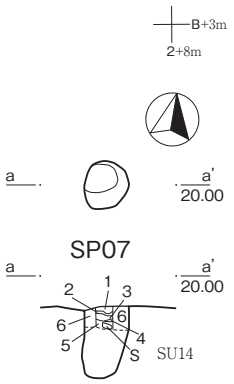


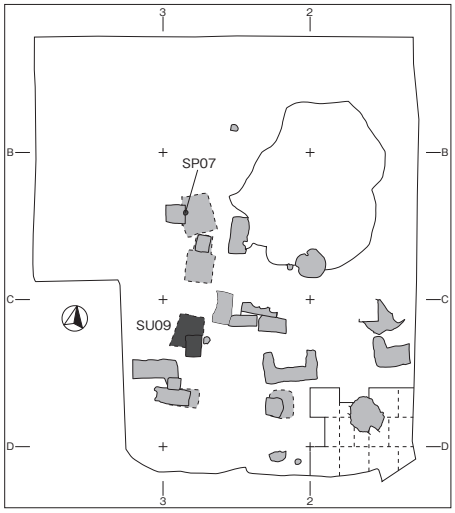
SK06
1　暗褐色土　(ローム粒・炭化物・小円礫微含、粘性・しまりややあり)
2　茶褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりややあり)
3　黒褐色土　(ローム粒・炭化物・小円礫微含、粘性ややあり、しまりあり)
4　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり)

0　2m

Ⅲ - 7図　IML地点　SK03～SK06　(1/50)

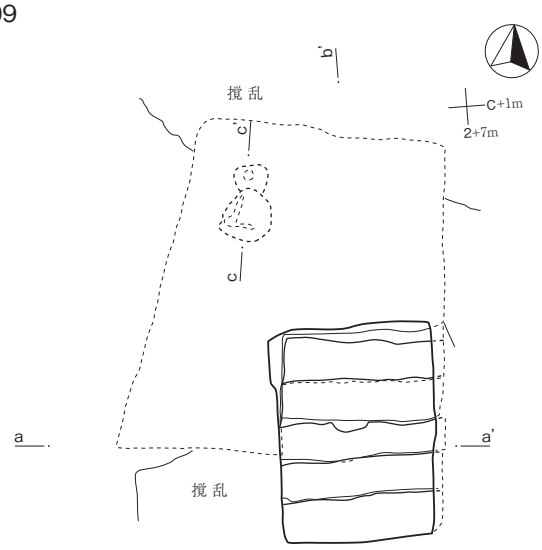
SP07

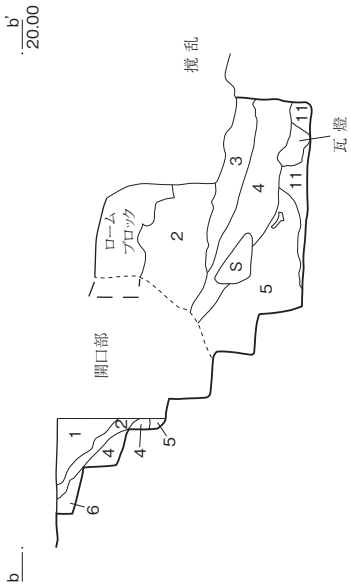


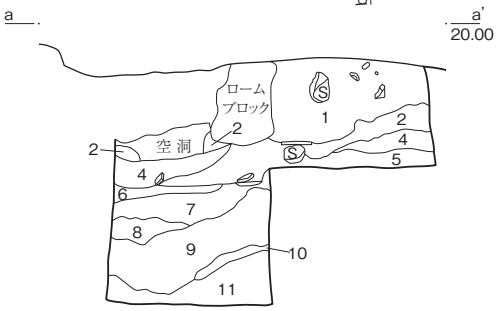


SP07
1　茶褐色土　(ローム粒少含、黒色土ブロック含、粘性・しまり強)
2　黒灰色砂　(粘性なし)
3　茶褐色土　(黒色土ブロック含、1層と類似)
4　黒灰色砂　(粘性なし、2層と類似)
5　灰褐色土　(ローム少含、粘性強)
6　茶灰褐色土　(ローム主体層、黒色土ブロック含、粘性・しまり強)

SU09







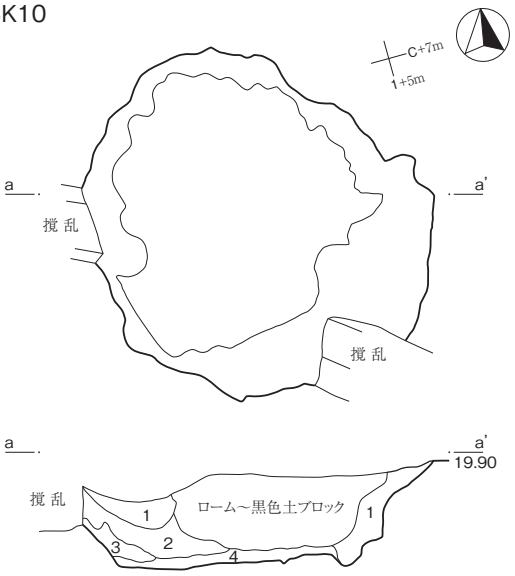
SU09
1　褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック少含、粘性ややあり、しまりあり)
2　黒褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、炭化物微含、粘性・しまりやや弱)
3　暗褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱)
4　褐色土　(ローム粒極多含、ロームブロック少含、粘性・しまりややあり)
5　茶褐色粘土　(炭化物微含、粘性極強、しまりあり)
6　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりややあり)
7　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、灰褐色粘土・炭化物微含、粘性・しまりややあり)
8　茶褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック少含、炭化物・灰褐色粘土微含、粘性・しまりややあり)
9　暗褐色土　(ロームブロック・炭化物少含、粘性・しまりあり)
10　褐色土　(ローム粒極多含、ロームブロック少含、粘性ややあり、しまりあり)
11　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりややあり)

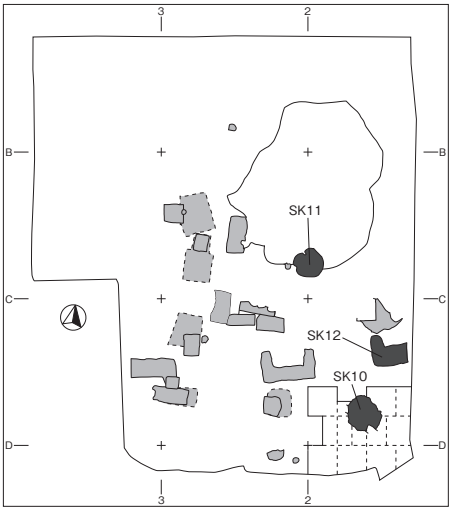
SU09床面ピット

SU09床面ピット
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性・しまりややあり)

Ⅲ - 8図　IML地点　SP07、SU09　(1/50)

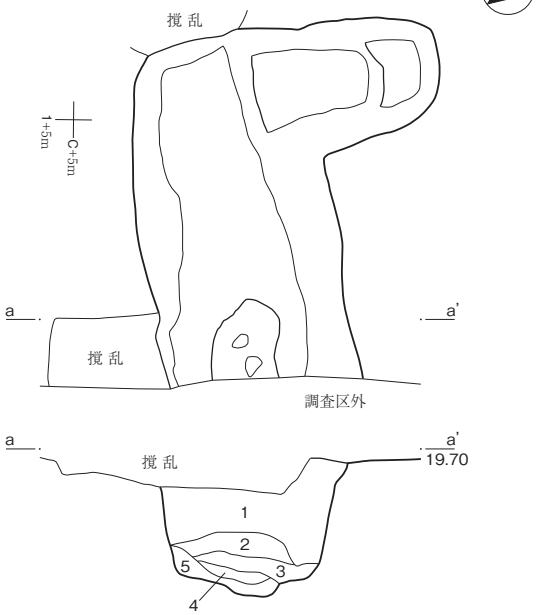
SK10





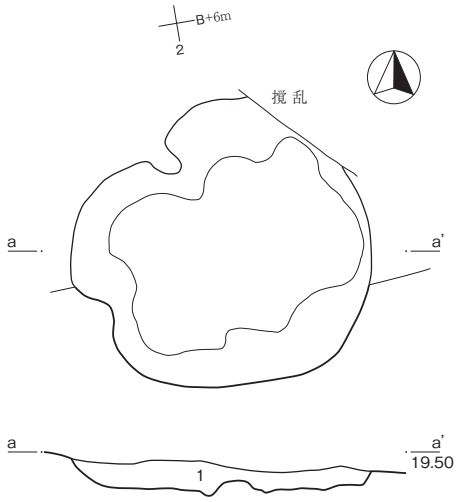
SK10
1　褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック少含、粘性・しまりあり)
2　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、灰褐色粘土中含、粘性あり、しまりややあり)
3　黄褐色土　(ローム主体層、灰褐色粘土少含、粘性・しまり弱)
4　黄褐色土　(ローム主体層、粘性あり、しまりやや強)

SK12



SK12
1　茶褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック中含、粘性・しまりあり)
2　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性ややあり、しまりやや弱)
3　黄褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック極多含、粘性ややあり、しまりやや弱)
4　黒褐色土　(ローム粒少含、粘性やや強、しまりやや弱)
5　黄褐色土　(ローム主体層、粘性ややあり、しまりやや弱)

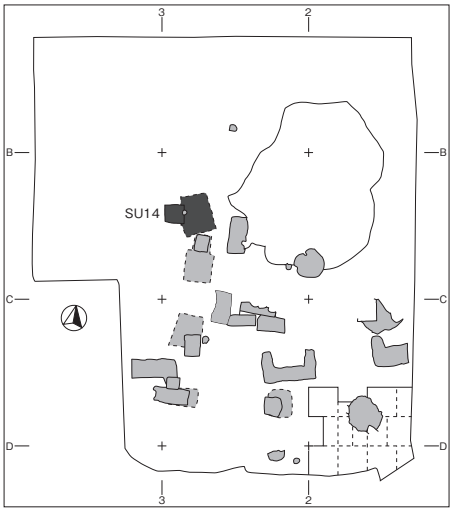
SK11



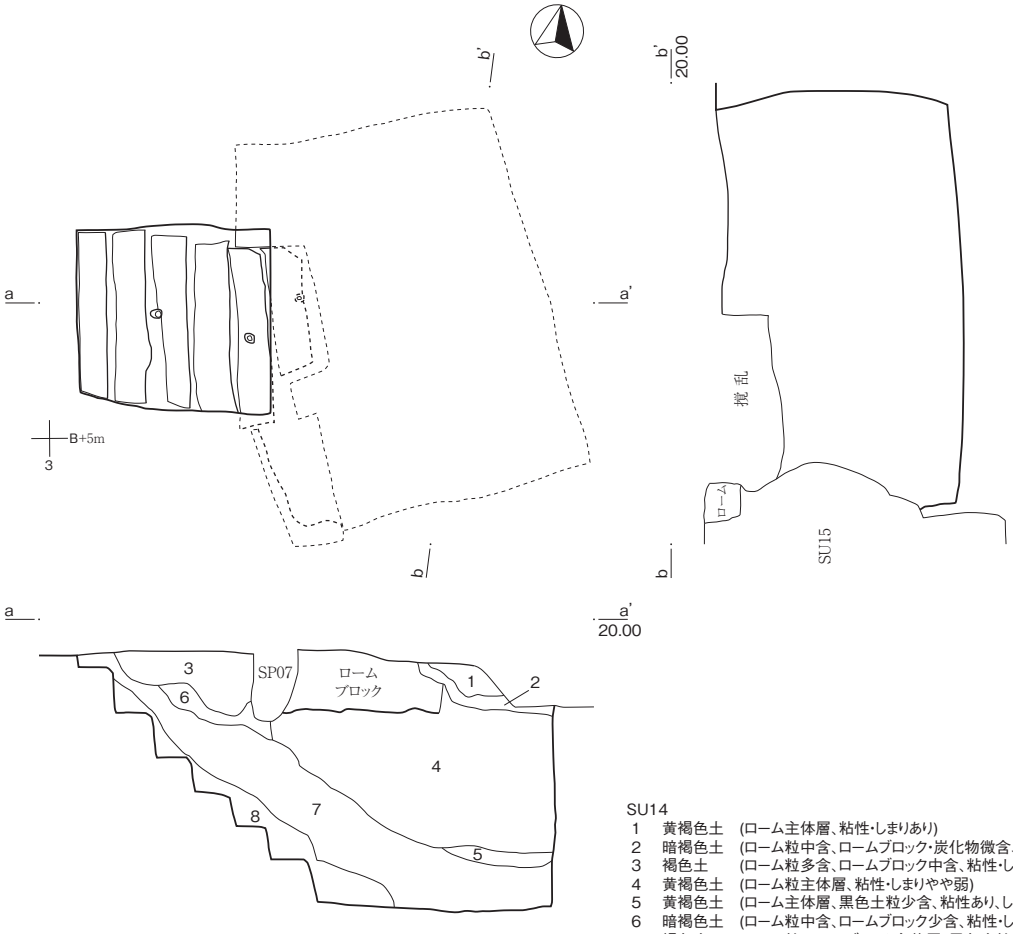
SK11
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性・しまりややあり)

0　2m

Ⅲ - 9図　IML地点　SK10～SK12　(1/50)



SU14

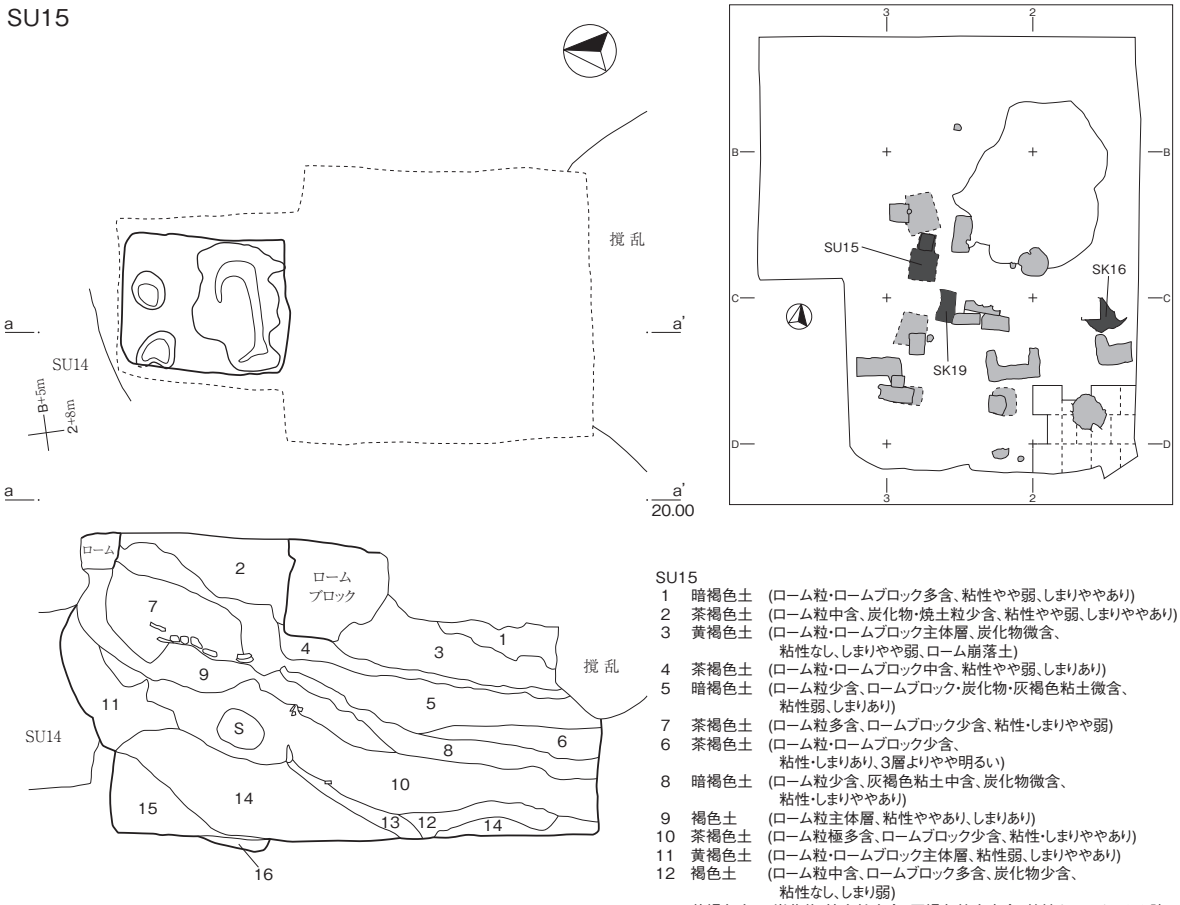


SU14
1　黄褐色土　(ローム主体層、粘性・しまりあり)
2　暗褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック・炭化物微含、粘性・しまりあり)
3　褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック中含、粘性・しまりあり)
4　黄褐色土　(ローム粒主体層、粘性・しまりやや弱)
5　黄褐色土　(ローム主体層、黒色土粒少含、粘性あり、しまりやや強)
6　暗褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック少含、粘性・しまりあり)
7　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、黒色土粒中含、粘性・しまりあり)
8　黄褐色土　(ローム主体層、粘性・しまりあり)

0　2m

Ⅲ - 10図　IML地点　SU14　(1/50)

SU15



SU15
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性やや弱、しまりややあり)
2　茶褐色土　(ローム粒中含、炭化物・焼土粒少含、粘性やや弱、しまりややあり)
3　黄褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、炭化物微含、粘性なし、しまりやや弱、ローム崩落土)
4　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性やや弱、しまりあり)
5　暗褐色土　(ローム粒少含、ロームブロック・炭化物・灰褐色粘土微含、粘性弱、しまりあり)
7　茶褐色土　(ローム粒多含、ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱)
6　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりあり、3層よりやや明るい)
8　暗褐色土　(ローム粒少含、灰褐色粘土中含、炭化物微含、粘性・しまりややあり)
9　褐色土　(ローム粒主体層、粘性ややあり、しまりあり)
10　茶褐色土　(ローム粒極多含、ロームブロック少含、粘性・しまりややあり)
11　黄褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性弱、しまりややあり)
12　褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック多含、炭化物少含、粘性なし、しまり弱)
13　茶褐色土　(炭化物・焼土粒少含、灰褐色粘土中含、粘性あり、しまりやや強)
14　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりあり、10層より明るい)
15　黄褐色土　(ローム主体層、粘性やや弱、しまりやや強)
16　黄褐色土　(ローム主体層、粘性・しまりあり)

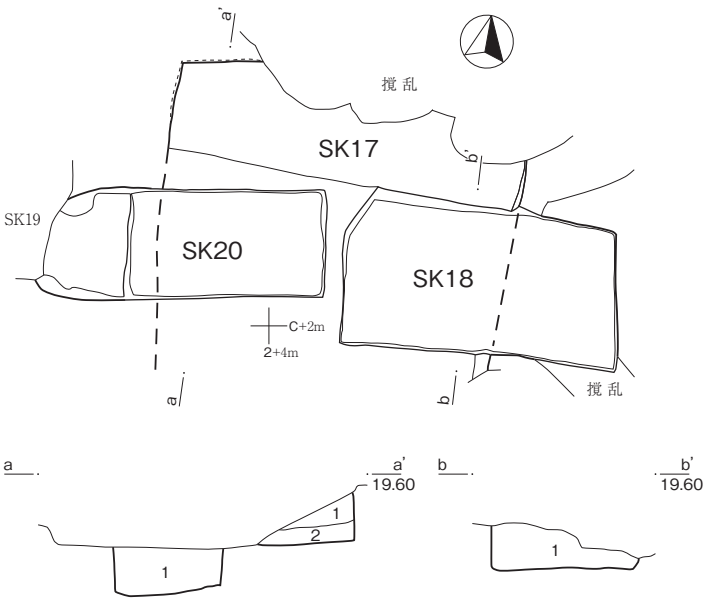
SK16

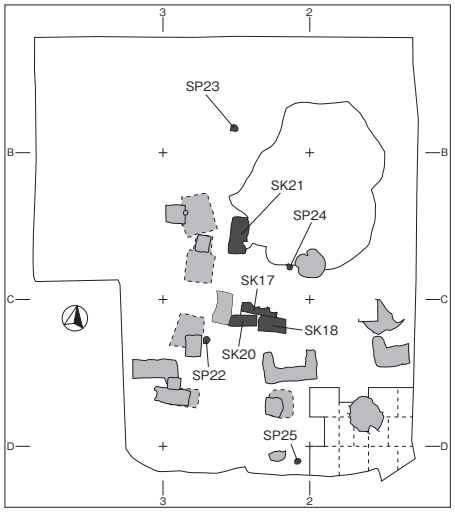
SK16
1　黄褐色土　(ローム主体層、炭化物微含、粘性ややあり、しまりやや強)

SK19

SK19
1　褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック少含、炭化物微含、粘性・しまりややあり)
2　暗褐色土　(ローム粒少含、ロームブロック・炭化物微含、粘性ややあり、しまりやや弱)
3　茶褐色土　(ローム粒中含、ロームロームブロック・炭化物微含、粘性・しまりややあり)
4　暗褐色土　(ローム粒・炭化物微含、灰褐色粘土中含、粘性ややあり、しまりやや弱)
5　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、粘性・しまりやや弱)
6　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりやや弱)
7　茶褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりやや弱)

Ⅲ - 11図　IML地点　SU15、SK16、SK19　(1/50)



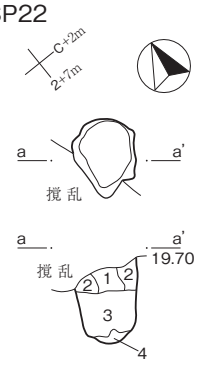


SK17
1　黄褐色土　(ローム主体層、炭化物微含、粘性・しまりややあり)
2　茶褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック・炭化物微含、粘性ややあり、しまりやや弱)

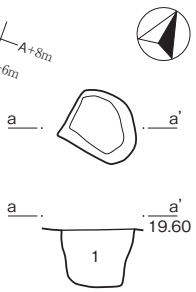
SK18
1　暗褐色土　(ローム粒・ロームブロック中含、灰褐色粘土微含、粘性・しまりややあり)

SK20
1　褐色土　(ローム粒中含、ロームブロック多含、粘性弱、しまりなし)

SP22



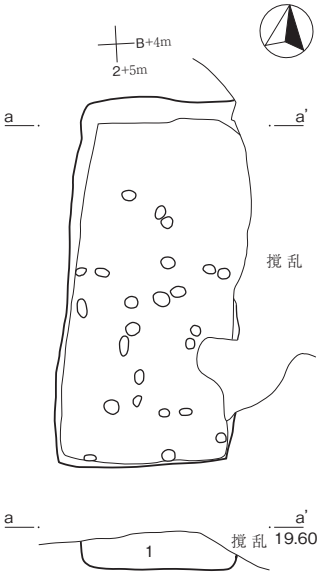
SP23



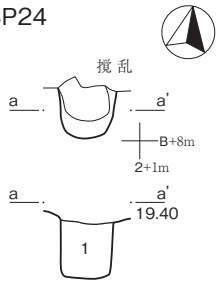
SP22
1　褐色土　(ローム粒多含、粘性ややあり、しまりあり)
2　黄褐色土　(ローム主体層、粘性ややあり、しまりやや強)
3　褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性・しまり弱)
4　黄褐色土　(ローム主体層、粘性・しまりあり)

SP23
1　黄褐色土　(ローム粒・ロームブロック主体層、粘性・しまりやや弱)

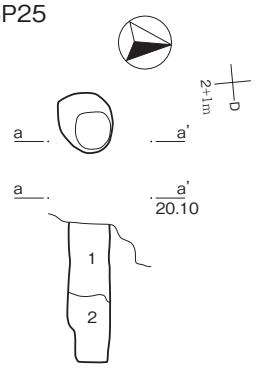
SK21



SP24



SP25



SK21
1　褐色土　(ローム粒・ロームブロック多含、粘性ややあり、しまりやや強)

SP24
1　黄褐色土　(ローム主体層、粘性・しまり弱)

SP25
1　褐色土　(ローム主体層、粘性・しまりやや弱)
2　黄褐色土　(ロームブロック主体層、粘性・しまりやや弱)

0　2m

Ⅲ - 12図　IML地点　SK17、SK18、SK20、SK21、SP22～SP25　(1/50)

第４節　江戸時代・近代の遺物

SU01（Ⅲ - 13 ～ 15 図）

遺物は、17 世紀末～ 18 世紀前葉の陶磁器類、瓦、金属製品などコンテナ５箱程度出土している。

1、2 は肥前系染付碗で、JB-1-u に分類される。1 はコンニャク印判、2 は型紙刷りの技法が用いられている。1 の高台裏には「大明年製」の銘が書かれている。3 は肥前系染付磁器のいわゆるくらわんか碗で、JB-1-v に分類される。梅樹文が主文様に描かれている。4 は白磁の碗で、JB-1 に分類される。5 は染付小坏で、JB-6 に分類される。判読は出来ないが、実測図のような銘が書かれている。口唇部は小さい玉縁状をしている。

6 はいわゆる御室碗で、TC-1-d に分類される。体部にはラフに呉須絵が描かれている。底部中央には「〇」に「吉」の刻印が押印されている。7 は天目茶碗で、TC-1-a に分類される。口唇部はほぼ全周敲打痕が確認できる。灰落としなどに利用したのだろうか？ 8 は脚付の褐釉香炉・火入れで、TC-9-b に分類される。欠損の全くない完形である。9 は灰釉片口鉢で、TC-23-b に分類される。見込みには 3 箇所のピン痕が認められる。10 は丹波系の焼締め擂鉢で、TK-29 に分類される。口縁の縁帯が発達し、外部には二条の凹線が施されている。17 世紀末～ 18 世紀初頭の製品であろう。胎土に白色の粗砂粒が多く含まれている。

11 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。12 は DZ-2 に分類される。全体的にいわゆる銀彩が確認され、ススが付着している。外面体部下端や内面底部外周の成形は、いわゆる江戸式の製品とは異なっている。13 は土師質の油受け皿で、DZ-40-d に分類される。受けと口唇の一部にススが付着している。14 は脚付きの油受け皿で、DZ-40-c に分類される。皿部と油受け部には銀彩が施されている。15 は小型の土師質手焙りで、DZ-38 に分類される。正面にはやや大きい楕円形、相対して小さい円形の孔が穿たれている。16 は土師質の懐炉（温石）で、DZ-54 に分類される。欠損のため全容は窺えないが、角枠銘が押印されている。二次的な火熱を受けている。17 は土師質の鍔付き角火鉢で、DZ-31-c に分類される。内面上位には被熱の痕跡が確認できる。18 は土師質火消壺で、DZ-31-i に分類される。19、20 は「泉州麻生」銘の板作りの塩壺で、DZ-51-i に分類される。共に内面には明瞭な布目の痕跡が確認できる。小川氏の器形分類 4 類に該当する（小川 2008）。

21 は軒丸瓦である。瓦当紋様は珠紋の巡る三つ巴紋である。珠紋と三つ巴の間には細い圏線が巡る。この他、実測図は掲載しなかったが、丸瓦は筒部の直径が 145mm、118mm を測るものと大小２種類確認される。なお小型の丸瓦には玉縁寄りに釘穴が設けられていた。何れも前端部を欠損しており、軒丸瓦の筒部である可能性もある。

22 は金属製の燭台である。薄い銅製の受け皿の中央に鉄製の蝋燭立てがはめ込まれている。23、24 は銅製の寛永通宝銭で、23 は御蔵銭、24 は不旧手である。25 は流紋岩製の中砥石である。三面に使用痕が確認できる。

SU09（Ⅲ -16 ～ 17 図）

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類、瓦、金属製品、石製品、自然遺物などコンテナ 4 箱出土している。

1 は肥前系染付碗で、JB-1-e に分類される。2、3 は染付碗で、2 は JB-1-g、3 は JB-1-u に分類される。文様はラフに描かれている。4 は染付小坏で、JB-6-b に分類される。主文様はコンニャク印判で描か

れている。5 は染付皿で、JB-2-e に分類される。二次的な火熱を受けている。

6 は京焼風陶器鉢で、TB-5-c に分類される。見込みには山水が呉須でラフに描かれている。体部には凹みがつけられている。底部裏には「清水」の刻印が押印されている。7 は肥前系陶器仏花器で、TB-22 に分類される。江戸遺跡での出土は珍しい。8 は茶入れで、TZ-26 に分類される。激しく二次的に火熱を受けており、本来の状況が窺えない。外面には鉄釉の痕跡が認められる。底部はロクロ右回転の糸切り離しである。9 は壺の蓋で、TB-00 に分類される。内面はロクロ右回転の糸切り離しである。

10、11 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。口唇部にススの付着はない。12 は丸底のほうろくで DZ-47-a に分類される。底部には二次的火熱の痕跡が確認される。13 は瓦燈の下部で、DZ-45 に分類される。胎土は軟質で、表面は粉っぽくなっている。14 は「泉州麻生」銘を持つ板作りの塩壺で、DZ-51-i に分類される。内面には布目の痕跡が確認できる。15 は平鉢型の塩壺で、DZ-51-z に分類される。小川氏による鉢形焼塩壺分類では、鉢形③類に該当しよう（小川 2008）。器面には鉄分と思われる黒斑が確認できる。16 は箱庭道具の塔の基部で、DZ-61 に分類される。

17 は平瓦と推察される破片資料である。凹面に大きな刻印が押される。一般に平瓦の場合、刻印は狭端部に押されるものが多く、大形の刻印が押される例は 19 世紀以降に登場し、桟瓦の裏面側に押されるとされる（金子 1997）。本資料は例外的なものだといえよう。色調は赤褐色を呈し、被熱したものと推察される。この他、蝋燭桟瓦の桟部破片、丸瓦、海鼠瓦が出土している。

18、19 は寛永通宝四ッ宝銭である。20 は珪長岩製の中砥石である。三面に使用痕が確認できる。21 は大型扁平な脈石英である。製品かどうかは不明である。

SU14（Ⅲ - 17 図）

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類、金属製品、石製品などが 30 点ほど出土している。

1 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。底部中央に二次的な穿孔が認められる。ススの付着はない。

SU15（Ⅲ - 18 ～ 21 図）

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類、瓦、金属製品、石製品などがコンテナ 6 箱出土している。

1 は肥前系染付碗で、JB-1-d に分類される。底部には崩れた「大明年製」銘が書かれている。2 は染付碗で、JB-1-u に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。3 はやや粗雑な染付碗で、JB-1 に分類される。波佐見町高尾窯の製品に類似した文様が出土している。4、5 は染付小坏で、JB-6-a に分類される。6 は見込み蛇ノ目釉剝ぎされた染付皿で、JB-2-k に分類される。欠損が全くない完形である。底部は無釉で、文様はラフに描かれている。7 は青磁釉が施された陶胎の火入れ・香炉で TB-9 に分類される。青磁釉が施された部分は、白泥を掛けた上から施されている。8 は青磁の火入れ・香炉で、8 が蛇ノ目凹形高台で JB-9-b に分類される。8 は内面にも青磁釉が化粧掛けされている。9 は白磁仏飯器で、JB-8-b に分類される。焼成が不良である。

10、11 はいわゆる腰錆碗で、TC-1-u に分類される。10 は 11 と対比して、体部に凹みが付けられないこと、高台や器壁の器厚を有すること、下半の釉が光沢を有することなど後出的な様相が窺える。11 は体部中央部に凹みを有し、下半の釉調も光沢がない錆釉が施されている。また、底部裏には「〇」に「清」の刻印が押印されている。12 はいわゆる絵唐津で、TB-1 に分類される。見込みには簡単な花文の鉄絵が施されている。13 は鉄絵摺絵皿で、TC-2-e に分類される。文様は菊文、高台

は付高台である。見込みには三箇所のピン痕が確認できる。14 は鉄絵摺絵の鬢水入れで、TC-25 に分類される。二次的な火熱を受けている。15、16 は鉄釉油受け皿で、TF-40 に分類される。受け下部にはかまぼこ形の孔が、15 は２箇所、16 は１箇所穿たれている。16 は欠損のない全くの完形である。17 は褐釉五合徳利で、TC-10-d に分類される。肩部以上は欠損しているが、欠損面を再調整しており、二次的に利用したと考えられる。釘書きは確認できない。18 は壺の蓋で、TC-00-a に分類される。中央には小型の摘みが取り付けられている。

19 ～ 22 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。20 は底部中央に径 5mm の二次的穿孔がされている。21 には灯心によるススの付着が確認できる。23 は土師質の油受け皿で DZ-40-d に分類される。器面全体にスス状の付着物が認められる。24 は丸底のほうろくで DZ-47-a に分類される。底部には二次的火熱の痕跡が確認される。25 は土師質瓦燈の外側覆い部分で、DZ-45 に分類される。頂部中央には器壁を貫く径約 6mm の孔が穿たれている。26 は「泉州麻生」銘の刻印を持つ板作りの塩壺で、DZ-51-i に分類される。内面には布目の痕跡が明瞭に観察できる。小川氏の器形分類４類に該当しよう（小川 2008）。底部には二次的に浅い平行沈線が確認できる。

27 は泥面子で DZ-55 に分類される。完形である。28 は小型の釜形土製品で、DZ-5-c に分類される。

29、30 は軒丸瓦である。瓦当紋様は何れも珠紋の巡る三つ巴紋である。29 は直径 109mm を測る小形の軒丸瓦で、30 は破片資料であり全形は不明だが 29 よりも大形だと推察される。巴、珠紋ともに形が崩れている。なお何れも SU01 出土の軒丸瓦（21）よりも小形である。31 は蝋燭桟瓦である。桟部は全形が確認される。後端部は破損しており、全長は桟部より長い可能性がある。平部は一部のみ残存し、全幅は不明である。平部の右端に桟が付く。桟部凸面側には全周に布目が確認される。さらに布目を切って縦方向のナデが施されて細かい稜線を作り出し、横断面は多角形を呈している。平部と桟部は別作りになっている。32 は丸瓦である。但し前端部を欠損しており、軒丸瓦の筒部である可能性もある。玉縁寄りに釘穴が設けられる。裏面には横方向のコビキ痕と、転写された布目が確認される。表面は風化しており、製作痕跡は判然としない。33 は平瓦である。狭端部左角を欠損するが、全形のうかがえる資料である。狭端面の中央部よりやや左側に刻印が確認される。四つ菱を丸い圏線で囲っている。34、35 は瓦を用いた再加工品である。円盤状製品と呼ばれる。SU15 からは大小２種類が出土しており、34 は直径 7.5cm の小形品、35 は破片資料だが、直径 30cm 近い大形になると推察される。35 には一部に炭化物が付着しており、火災に伴うゴミであった可能性がある。この他、実測図は省略したが、磨り面のある瓦の小破片が出土している。瓦を転用し砥石としたものと推察される。

36 は玉ずい製の火打石である。図化した位置から見て右側縁部と左稜部に敲打痕が顕著に認められる。37 は頁岩製の砥石であるが、規格などから硯の転用品の可能性も考えられる。38 は流紋岩製の中砥石である。長方向の四面に使用痕が認められる。39 は砂岩製の墓前香炉である。正面に逆卍がレリーフ状に彫られ、凹んでいる部位に金泥が確認される。

SK17（Ⅲ - 21 図）

遺物は、17 世紀末から 18 世紀初頭の陶磁器類を中心に十数点出土している。

1 は肥前系染付碗で、JB-1-u に分類される。主文様はコンニャク印判で描かれている。高台裏には「大明□製」銘が書かれている。2 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。遺存部にススの付着は確認できない。

SK18（Ⅲ - 21 図）

遺物は、年代が不明の近世陶磁器が 3 点、ほうろくが 1 点出土している。

1 は丸底のほうろくである。DZ-47 に分類される。見込みには「〇」に「一」の刻印が押印されている。底部から体部は二次的火熱を受けている。

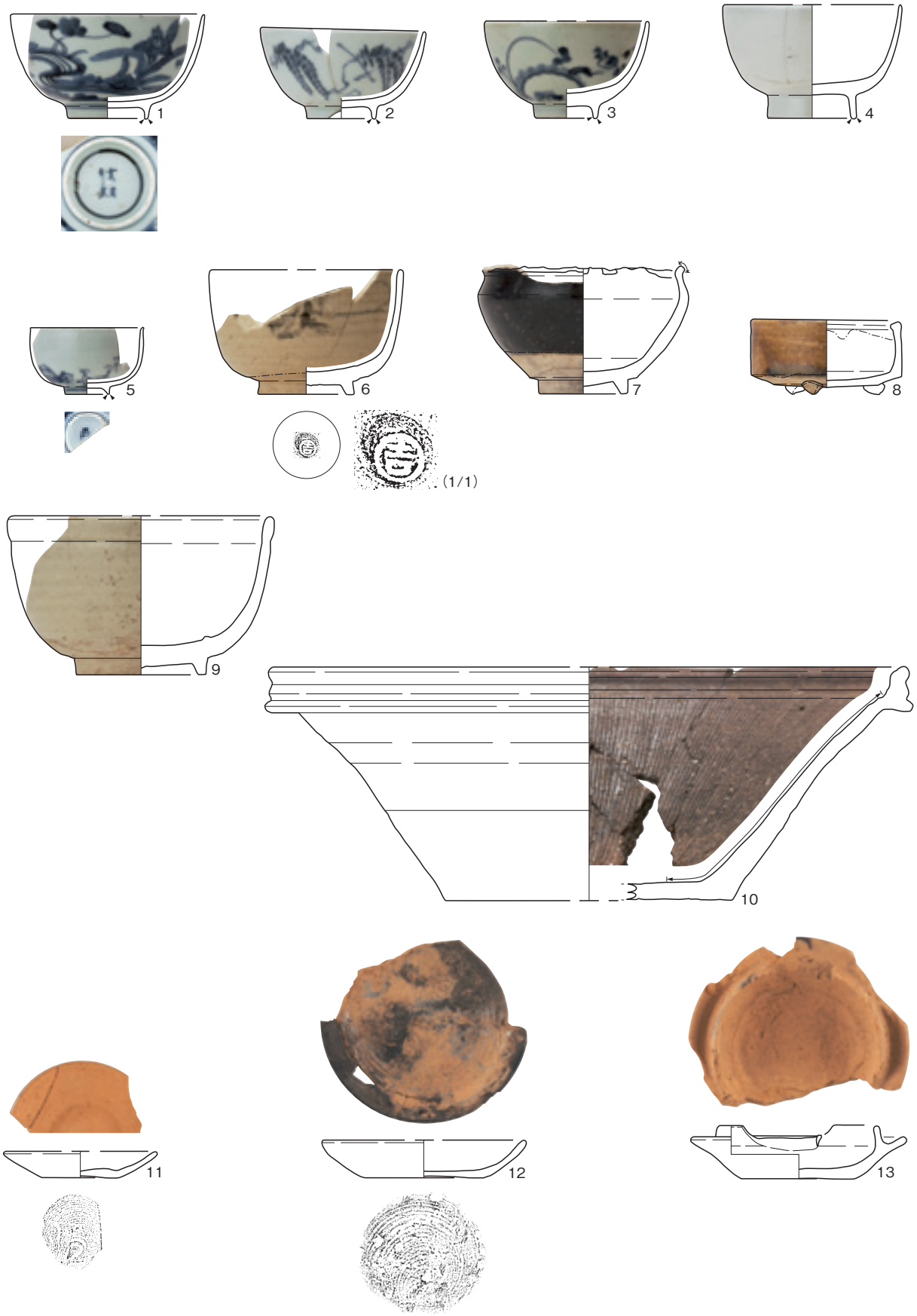
遺構間接合（Ⅲ - 22 ～ 23 図）

本地点出土遺物には、遺構間接合事例が 7 例確認できた。SU01 と SU15 間が 1 例、SU09 と SU15 間が 6 例であった。

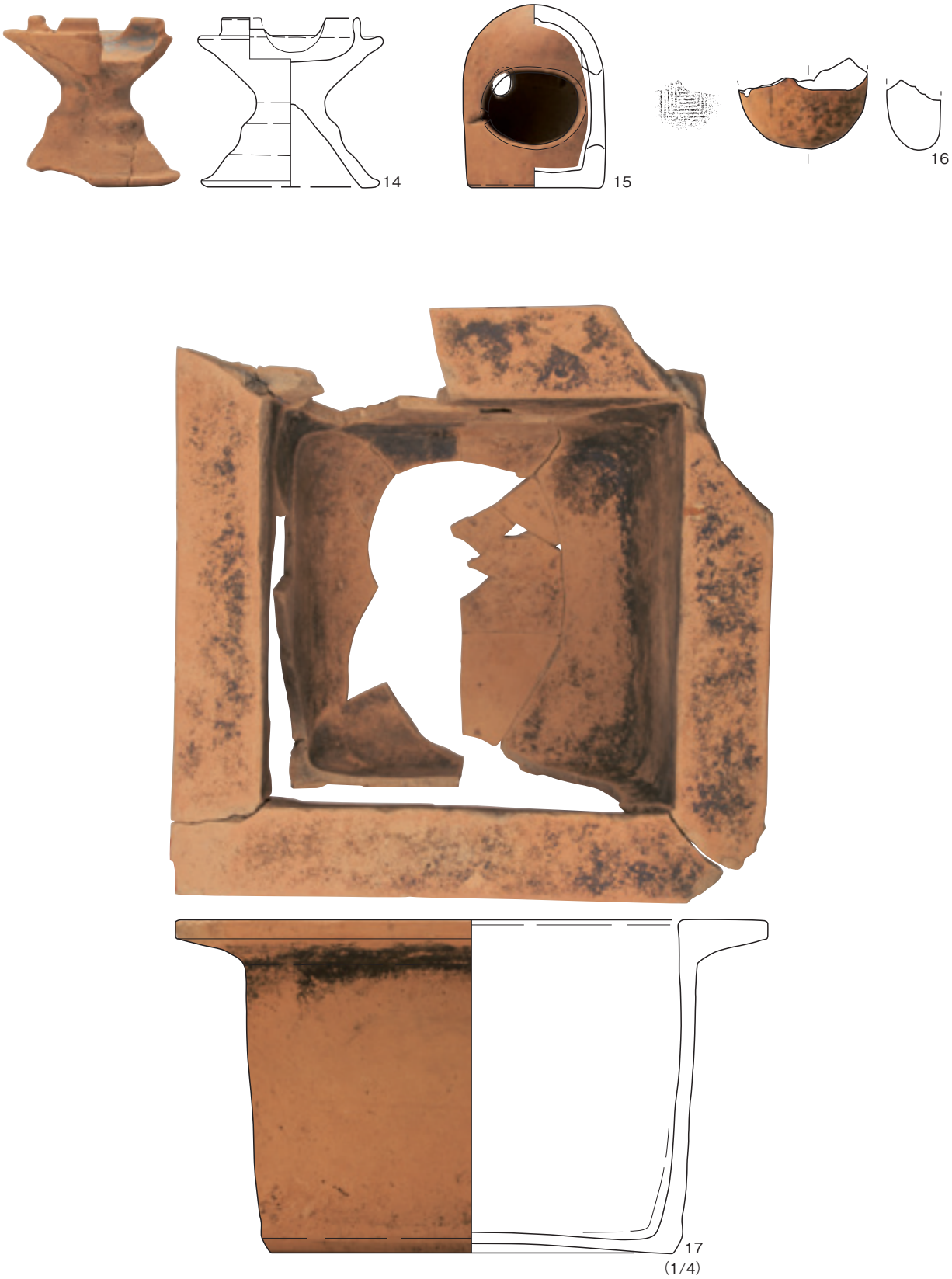
1 は肥前系青磁染付鉢で、JB-5 に分類される。外面下位に脚が剥落した痕跡が確認できる。SU01 と SU15 との接合である。2 は蛇ノ目凹形高台の大型青磁鉢で、JB-5-d に分類される。見込みには草花文が片ヘラ彫りされている。波佐見の三ノ股青磁窯の製品であろう。SU09 と SU15 の接合である。3 は染付碗で、JB-1-u に分類される。高台裏には「大明年製」銘が書かれている。SU09 と SU15 の接合である。4 は白磁の坏で、JB-6-a に分類される。型で作られている。SU09 と SU15 の接合である。5 はいわゆる御室碗で、TC-1-d に分類される。外面にはラフな呉須絵が描かれている。SU09 と SU15 の接合である。6 は刷毛目の片口鉢で、TB-23-a に分類される。SU09 と SU15 の接合である。7 は海鼠瓦である。SU09 と SU15 の接合である。左右角に釘穴が設けられる。釘穴の先端は中央側を向く。

遺構外（Ⅲ -23 図）

1 は高橋東洋堂の化粧品ガラス瓶である。色調は白色不透明。スクリュー栓。底面にエンボスで「IDEAL」。器高が低く、やや肩が張る。おそらくクリームが入っていたものであろう。高橋東洋堂は明治 25（1892）年に創業された。白色不透明のこのような化粧瓶は大正末頃から昭和 20 年代にかけて多く見受けられるものである。



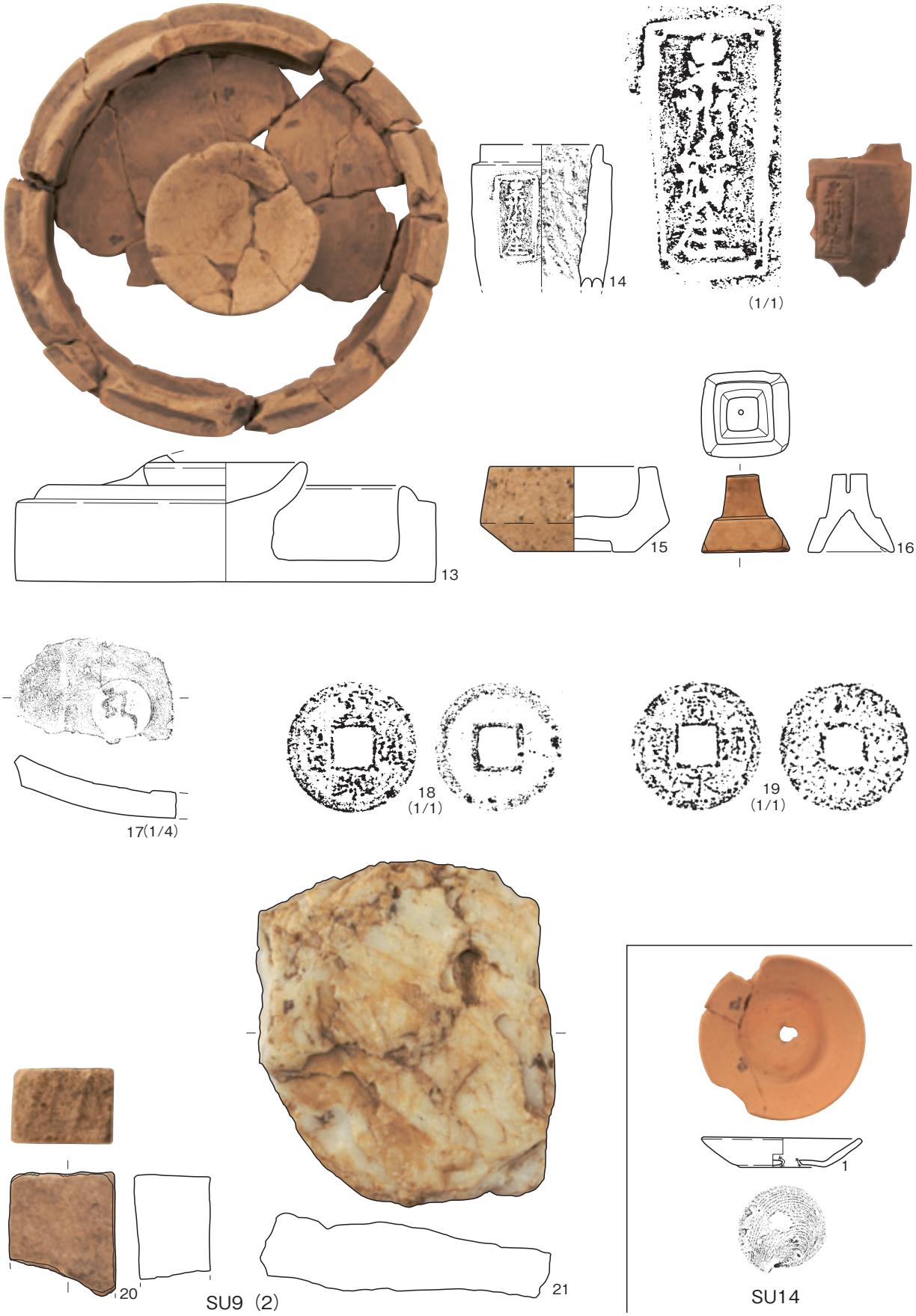
Ⅲ-13図　SU01（1）出土遺物



Ⅲ- 14 図　SU02 出土遺物（2）

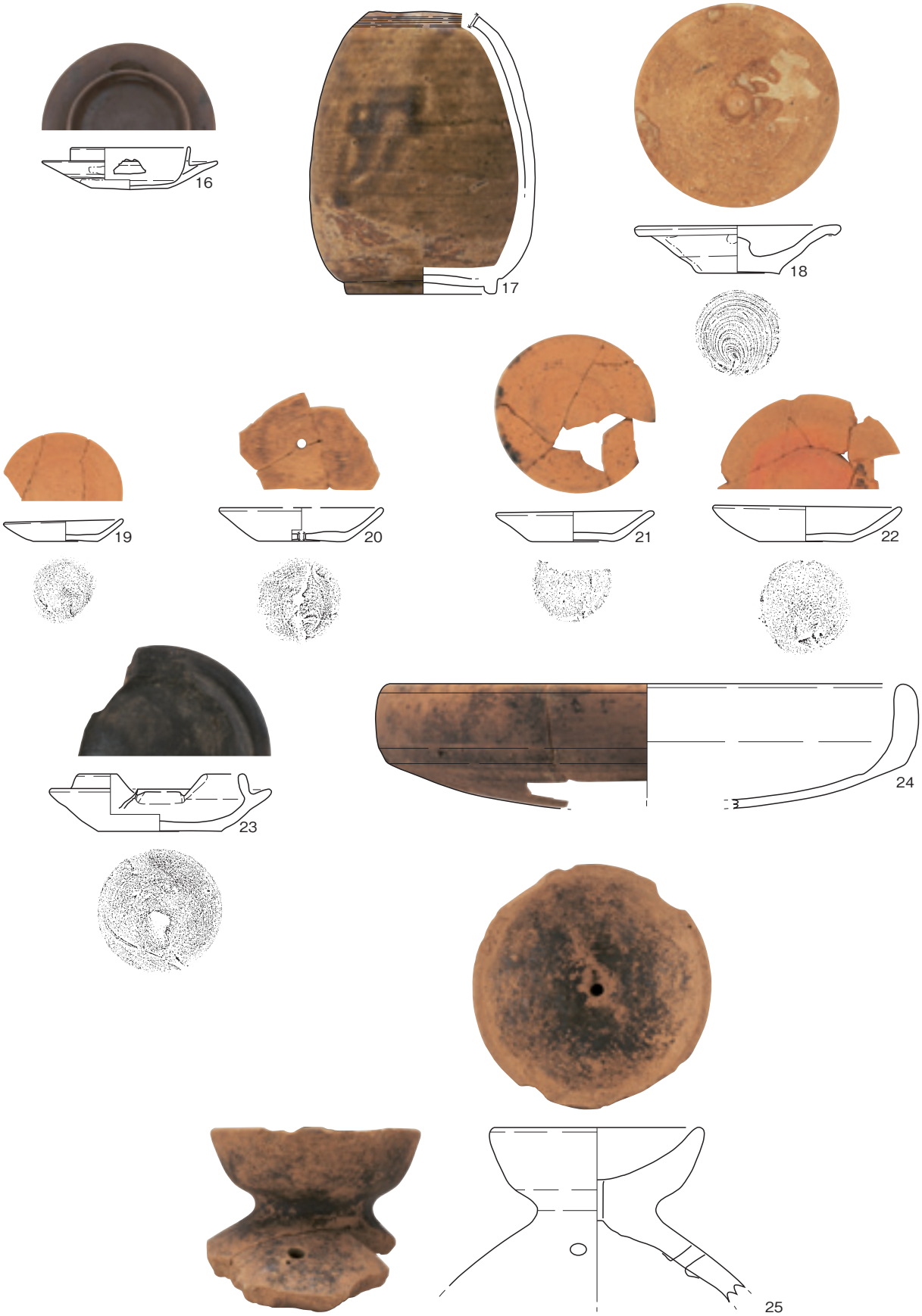
Ⅲ- 15 図　SU01 出土遺物（3）

Ⅲ- 16 図　SU09 出土遺物（1）

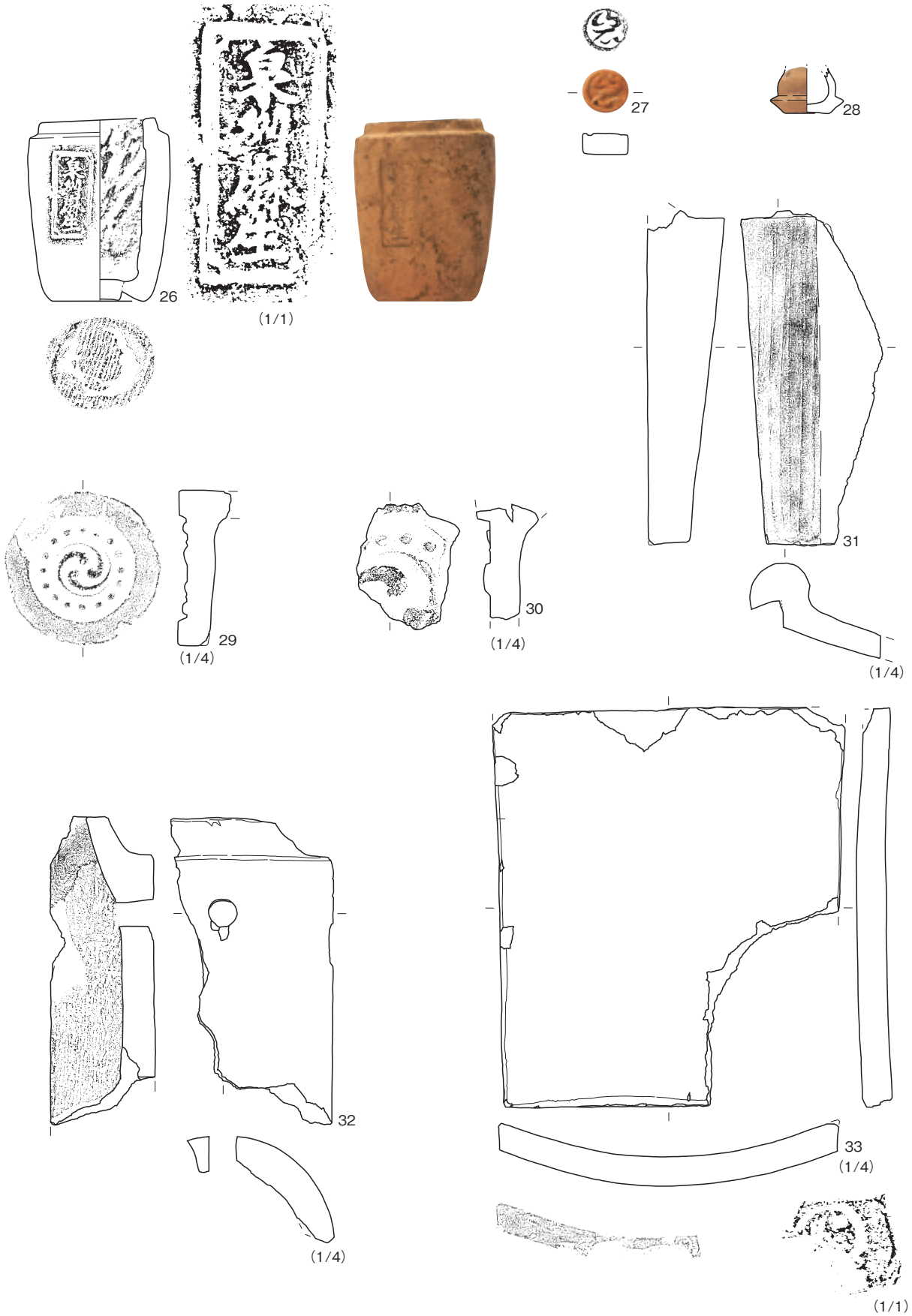


Ⅲ- 17 図　SU09（2）、SU14 出土遺物

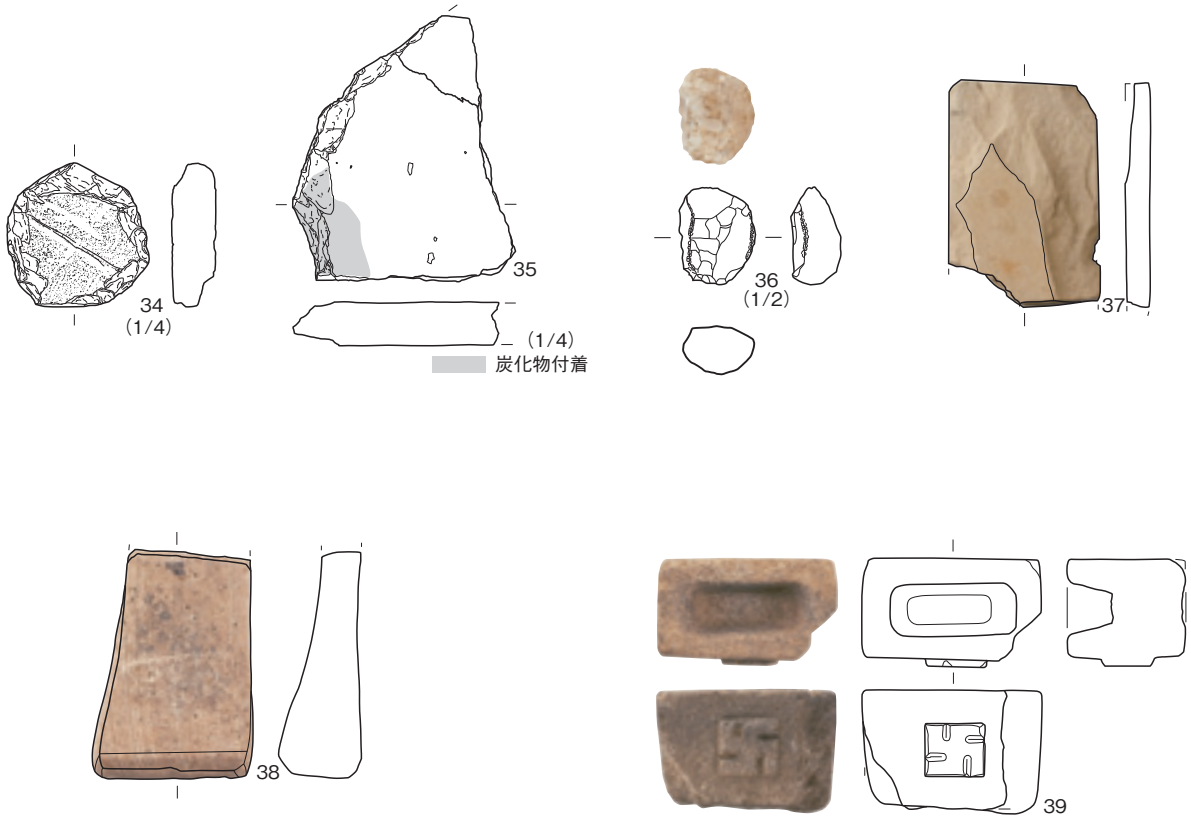
Ⅲ- 18 図　SU15 出土遺物（1）



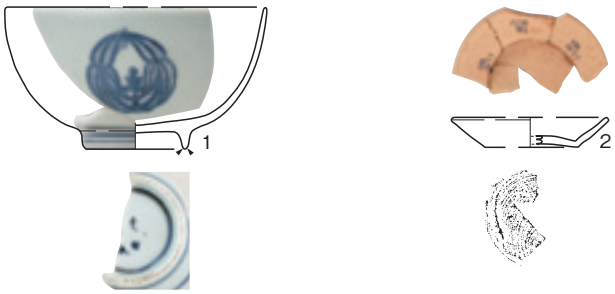
Ⅲ- 19 図　SU15 出土遺物（2）



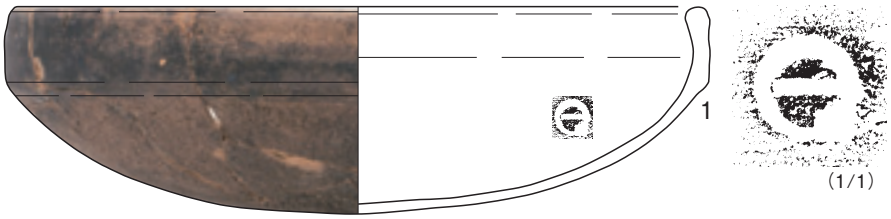
Ⅲ- 20 図　SU15 出土遺物（3）



SU15（4）



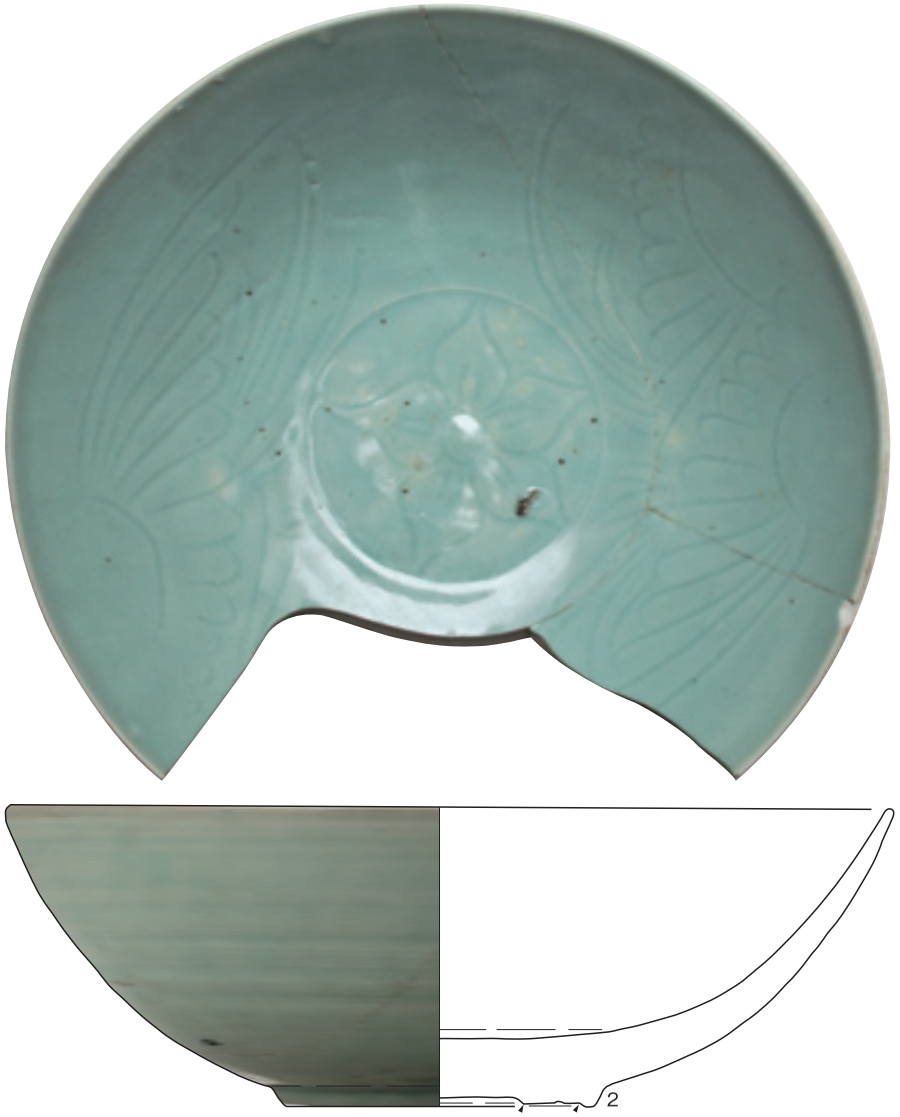
SK17



SK18

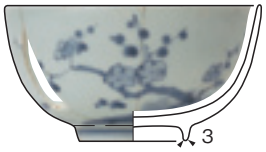
Ⅲ-21 図　SU15（4）、SK17、SK18 出土遺物

SU09+SU15



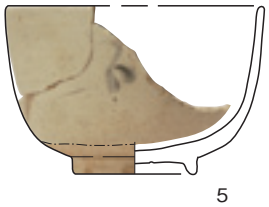
SU09+SU15

Ⅲ- 22 図　遺構間接合（1）

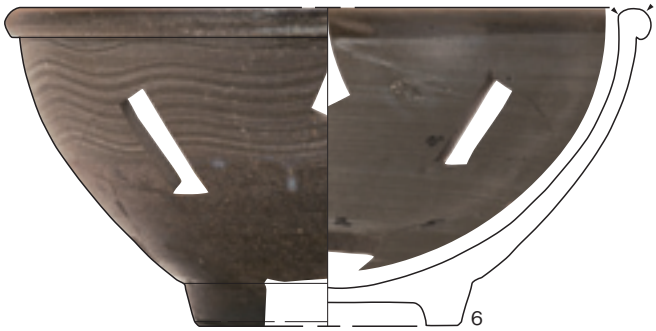


SU09+SU15

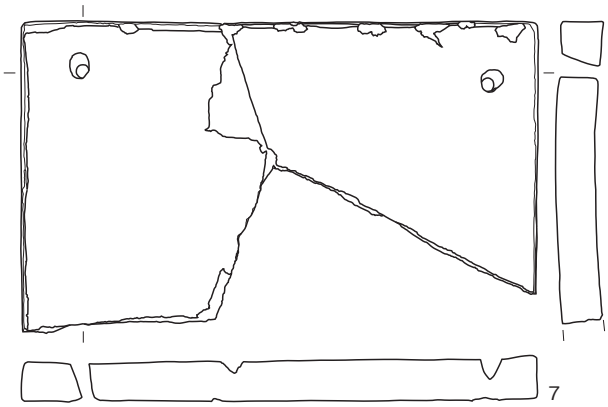
SU09+SU15



SU09+SU15

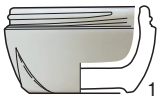


SU09+SU15



SU09+SU15

遺構間接合（2）



遺構外

Ⅲ - 23 図　遺構間接合（2）、遺構外出土遺物

第５節　動物遺体

本調査地点からは８群の動物遺体が出土した。その内訳は、貝類７群、魚類１科である。以下に種名を示す。

二枚貝綱 Class Bivalvia
　フネガイ目 Order Arcoida
　　フネガイ科 Family Arcidae
　　アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*
　　サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*
　　マルスダレガイ科 Family Veneridae
　　ハマグリ *Meretrix lusoria*
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA
　硬骨魚綱 Class Osteihthyes
　　スズキ目 Order Perciformes
　　タイ科 Family Sparidae
　　属種不明 gen. et sp. indet.

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA
　腹足綱 Class Gastropoda
　　古腹足目 Order Vetigastropda
　　ミミガイ科 Family Haliotidae
　　マダカアワビ *Haliotis (Nordotis) madaka*
　　サザエ科 Family Turbinidae
　　サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
　　新腹足目 Order Neogastropoda
　　アクキガイ科 Family Muricidae
　　アカニシ *Rapana venosa*
　　エゾバイ科 Family Buccinidae
　　バイ *Babyronia japonica*

なお、これらの資料は、現場にて発掘担当者が視認できたものを任意で採集したものであり、実際に埋蔵していた資料の組成を必ずしも反映しているものではない。

貝類は、最小で 111 個体出土している。最も多いものはサザエで 96 個体出土し、全体の 86.5％を占める。サザエ以外は５個体以下である。内訳は、バイ５個体、アカガイとハマグリが３個体、アワビ類が２個体、アカニシとサルボウガイが１個体である。大型で且つ上物とされるものが主体である。なお、遺構別の組成は、Ⅲ - ３表を参照されたい。

魚類は、SU15 からタイ科が３点と同定対象外としたもの１点が出土しているのみである。同定対象外とした鰓蓋骨破片もタイ科のものと推測される。

遺構など	分類群		部位	左右	数	備考
	綱	綱より下位				
SU01	巻貝	アワビ類	殻		片	少量
		サザエ	殻		16	
	二枚貝	アカガイ	殻		片	少量
SU09	巻貝	サザエ	殻		22	
		バイ	殻		1	
SK11	巻貝	サザエ	殻		1	
SU14	巻貝	サザエ	殻		2	
SU15	巻貝	マダカアワビ	殻		片	
		サザエ	殻		54	
			蓋		3	
		バイ	殻		4	
		アカニシ	殻		1	
	二枚貝	アカガイ	殻	左	2	
				右	1	
		サルボウガイ	殻	左	1	
		ハマグリ	殻	左	2	大型・中小型
				右	3	大型
	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	左	1	
			方骨	左	1	
			尾椎		1	
		同定対象外	鰓蓋骨		1	
遺構外	巻貝	サザエ	殻		1	

Ⅲ-３表　IML 地点出土動物遺体

Ⅲ-24 図　IML 地点出土動物遺体（SU15）

1. マダカアワビ　2. サザエ　3. アカガイ（右）　4. サルボウガイ（左）　5. ハマグリ（右）　6 ～ 8. タイ科（6. 尾椎　7. 方骨（左）　8. 前鰭蓋骨（左））

第Ⅳ章　教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点の成果

第１節『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読と描かれた施設の検討

はじめに

近世考古学の大名屋敷研究では、調査を行った藩邸の絵図が不可欠である。絵図は近世考古学と文献史学を繋げるための存在であるが、これまでの水戸藩駒込邸の研究では、絵図が存在しなかったため遺跡の評価が出来なかった。そこで､駒込邸関連史料と「明治 16 年陸軍参謀本部測量原図」（註１）を用いて、遺跡の立地と地形、土地利用状況について検討を行ってきた（註２）。検討の結果「明治 16 年陸軍参謀本部測量原図」は江戸時代から一部が改変されているものの、江戸時代の駒込邸の地形を示している可能性を指摘した。しかし、絵図が存在しないために検討結果を実証することが出来なかった。しかし、2007 年 11 月の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』発見によってこれまで絵図を抜きに行ってきた駒込邸研究の方向性が間違っていなかったことが確認でき、新たな研究課題が与えられた。

本論では、『東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』（註 3）で本報告に関連する『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読、施設を検討する。

（１）『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』は４つ折りの絵図で、広げた寸法は 70 × 90cm、表書きに「向陵彌生町舊水戸邸繪図面」､裏書きに「東京市本郷区根津宮永町　渡邊家藏」（Ⅳ -2-1 図）と記されている。向ヶ岡弥生町の町名は明治５（1872）年に名付けられたことから、表書きと裏書きは明治時代以降に書かれたと考えられる。「根津宮永町」は駒込邸の東側で、現在は文京区根津に含まれる。

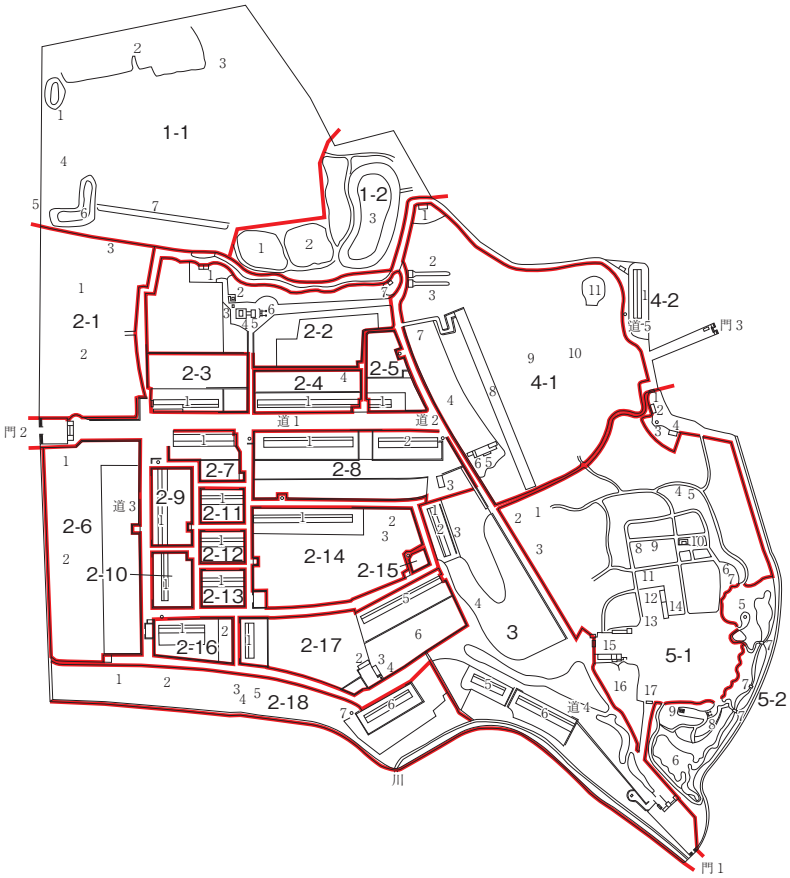
絵図には「向陵彌生町舊水戸邸繪図面　駒込屋敷惣絵図面　文政九年　御改ニ相成候大絵図面之写」と記され「北」「西」「南」「東」の方角が記されている。絵図に描かれた施設は塗り分けされており、建物（黄色）、稲荷・加賀藩と駒込邸の地境（朱色）、道（鼠色）、池・川（紺色・水色）、建物のある区画内（水色）、建物の周辺（未彩色）、屋敷の縁辺部（緑色）、厩など（橙色）で彩色されて

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』

「東京市本郷区根津宮永町　渡邊家蔵」

Ⅳ - 1 - 1 図　『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（筆者蔵）表書・裏書区画」

Ⅳ-１-２図『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』



Ⅳ-１-３図　『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読と区画

区域	NO.	種別	色調	形状	墨書	付箋
1	1-1-1		緑色	土手		三十間三尺小笠原（朱）
	1-1-2		緑色	島状		
	1-1-3		墨書	階段状		
	1-1-4		墨書	四角形		墨三間ニ二間半門□所　△（朱）　瓦五坪
	1-1-5	門	墨書	門	九尺ニ二間半 （○に一　朱）三坪	
	1-1-6		緑色	L 字型土手		
	1-1-7		緑色	土手状、点線		
	1-1-8		緑色	不整形		
	1-1-9		緑色	不整形		
	1-1-10	池	緑色・紺色・水色	不整形		
2	2-1-1	建物		長方形		三間半ニ三拾間　○（朱）柿　百五坪
	2-1-2	建物		長方形		三間半拾壱間半　○（朱）柿　四拾坪二分五厘
	2-1-3	付箋				十一間残り（朱）or 土間残り（朱）
	2-1-4	出入口？	黒	長方形		
	2-2-1	建物	黄色	長方形		
	2-2-2	建物	朱色	四角形		
	2-2-3	建物	朱色	四角形		
	2-2-4	稲荷（本殿）	朱色	四角形		二間ニ二間　（二重四角　朱）　四坪　柿
	2-2-5	稲荷（拝殿）	黄色	凸形		
	2-2-6	鳥居	朱色			
	2-2-7	建物	黄色	四角形		三間半ニ三間　（▽に｜　朱）七坪半　萱
	2-3-1	建物	黄色			三間半ニ三十六間　○（朱）柿　百弐拾六坪
	2-4-1	建物	黄色	長方形		無し
	2-5-1	建物	黄色	長方形		三間ニ五間　○（朱）　弐壱坪　萱
	2-6-1					加賀境　三十間
	2-6-2					
	2-7-1	建物	黄色	無		
	2-8-1	建物	黄色	長方形		無し
	2-8-2	建物	黄色	長方形		無し
	2-8-3	建物	黄色	長方形		
	2-9-1	建物	黄色	長方形		七尺御手先三十一間（朱）
	2-10-1	建物	黄色	長方形		
	2-11-1	建物	黄色	長方形		九尺二十間（朱）
	2-12-1	建物	黄色	長方形		十尺二十間（朱）
	2-13-1	建物	黄色	長方形		十一尺二十間（朱）
	2-14-1	建物	黄色	長方形		十二尺二十九間半（朱）
	2-14-2	建物		長方形	長方形縦横に　三、十□間	
	2-14-3					二間半ニ三間半　○（朱）萱苫付　八坪七分五厘
	2-15-1	建物	墨書	長方形	□□	
	2-15-2	建物	墨書	長方形	長方形縦横に　ニ半、六半	□□
	2-15-3	建物	墨書	長方形		
	2-16-1	建物	黄色	長方形		十九尺二十間（朱）
	2-16-2					三間弐拾間　○（朱）　六十坪柿
	2-17-1	建物	黄色	長方形	十九□□（朱）、少□□（墨書）、六間（朱）	
	2-17-2	建物	黄色	長方形		二間六間　板蔵　□（朱）拾弐間
	2-17-3	建物	黄色	長方形		
	2-17-4	便所？	白色	□		
	2-17-5	建物	黄色	長方形		十三尺三十間（朱）
	2-17-6					十四尺二十六間
	2-18-1					□□（朱）□□長屋十五間
	2-18-2					三間拾五間　○（朱）　四拾五坪　萱
	2-18-3			長方形	長方形内に「□（密？）」	四間二五間　四尺五寸　瓦二拾四坪（□に－　朱）
	2-18-4			長方形の組み合わせ		四間五間（□に｜　朱）柿弐拾坪
	2-18-5	井戸？	白色	丸形		
	2-18-6					三間半四間半　□所　□□□十五坪　七分五厘

Ⅳ-1-1 表『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読（1）

区域	NO.	種別	色調	形状	墨書	付箋
3	3-1	建物	墨書			
	3-2	建物	黄色	長方形	長方形縦横に三間、二十間	
	3-3					九尺ニ四間　柿七□□□　一間九尺　苔付ケ　△（朱）
	3-4		墨書	長方形	長方形縦横に、二、六　瓦	
	3-5					十八尺十三間（朱）
	3-6					十七間二十八間（朱）
4	4-1-1	建物	黄色	長方形		
	4-1-2		黄色・橙色			
	4-1-3		黄色・橙色			
	4-1-4		水色	長方形		
	4-1-5	建物	黄色	長方形		
	4-1-6	建物	墨書	長方形		三間二五間　○（朱）　柿　拾五坪
	4-1-7	不明	橙色	長方形		
	4-1-8	建物	墨書	正方形	正方形横に、九、正方形内に二	九尺□間土蔵　×（朱）　三坪」
	4-1-9	建物	墨書	正方形	正方形横に、四半、正方形内に二	二間ニ四間半土蔵　×（朱）　九坪
	4-1-10	不明	橙色	帆立貝形		
	4-2-1	建物	黄色	長方形		
5	5-1-1	建物	墨書			三間七間半　○（朱）瓦　弐十二坪半
	5-1-1	建物	墨書			九尺弐間半□付ケ　一間二間□付ケ　瓦　五坪七分五厘　板
	5-1-2	建物	墨書			
	5-1-3	建物	墨書	長方形	長方形横に、三、六瓦	三間六間　板蔵　瓦　拾八坪
	5-1-4	建物	墨書	長方形	長方形に×	
	5-1-5	建物	墨書	長方形	長方形に×	
	5-1-6	建物	黄色	正方形		二間半十間弐十五坪　土蔵
	5-1-7	建物	黄色	長方形		二間五間　板蔵　○（朱）十坪瓦（記号？朱）
	5-1-8	建物	墨書	長方形、正方形		
	5-1-9	建物	墨書	長方形、正方形		長局多聞廻り　三拾八坪半（○に×朱）
	5-1-10	建物	黄色	長方形		
	5-1-11	建物	墨書	長方形		三間六間土蔵　二拾五坪　×（朱）
	5-1-12	建物	墨書	長方形		
	5-1-13	建物	墨書	長方形		
	5-1-14	建物	黄色	長方形		
	5-1-15	門関連施設	黄色			二間拾二間半（○に－朱）中門　弐拾五坪
	5-1-16					十六尺十二間　かはらや？（朱）
	5-1-17	門	黄色	長方形		
	5-2-1	門	黄色	長方形		
	5-2-2	建物	黄色	長方形		
	5-2-3	井戸？	白色	丸形		
	5-2-4	建物	黄色	長方形		
	5-2-5	井戸？	白			
	5-2-6	池	水色			
	5-2-7	橋（3ヶ所）				
	5-2-8	鳥居	朱色			
	5-2-9	祠	朱色	○		
門	門１	関連施設、門は二重で、内側に２つの門、便所			切手御門	
	門２	関連施設			御裏御門	
	門３	関連施設			清水御門	
道	道１		墨書		大名小路通り	
	道２		墨書		中西通り	
	道３		墨書		崖下通り	
	道４					藩邸を東西に区画する道、切手御門から殿舎の中門に至る道に繋がる
	道５		墨書		山下通り	
川		加賀藩心字池の排水	水色			
井戸		○	白抜き○			道の脇や長屋の横

Ⅳ-１-１表『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の解読（2）

いる。建物等には付箋が貼り付けられ、建物に張り付けられた付箋には建物の有無、間取り・坪数・屋根の種別（瓦、柿、萱など）が記載される。「長局」「土蔵」などの建物が加筆されている。絵図は大きく５の区画に分けることができることから、各区域の施設に番号を付して解読を行った（Ⅳ - 1-3 図、Ⅳ - 1-1 表）。

（２） 各区画の分析

1-1 は安志藩下屋敷、1-2 は抱屋敷に該当する。1-1-1 に「三十間三尺小笠原（朱）」の付箋が貼り付けられている。『切絵図』に描かれる安志藩と駒込邸の位置関係を示す記述である。安志藩下屋敷部分に建物は描かれていないが、1-1-5 に門が加筆されている。1-2-3 は池と道が描かれている。

2-1 ～ 2-18 は「長屋・役所の区域」と推定している。2-6-1 は付箋に「加賀境」と書かれている。加賀藩上屋敷と駒込邸の地境は朱色で描かれており駒込邸の南側の形状は加賀藩邸の形状と一致する。水色の細長い帯は川で加賀藩の「心字池」からの排水の位置と駒込邸南側の川の位置が一致し、２の区画から門１の「切手御門」へ地境に沿って描かれている。門２は「御裏御門」と書かれている。屋敷名・寺社名を表門の向きを頭にして記すことから『切絵図』では、本郷通り側の門が正門とされ藩邸の西側が殿舎（御殿）の区域と推定されていたが、門２は「御裏御門」で３の区域に位置する門１は「切手御門」と記載されている。2-2 は稲荷の区域で、東西に延びる参道は藩邸を東西に区画する道と接続する。稲荷の建物は朱色で描かれている。2-2-6 は「鳥居」、2-2-5 は拝殿、2-2-4 は主殿で主殿は柿葺きである。

道１は「大名小路通り」で、道４に接続する。道２は「中西通り」と書かれている。長屋と考えられる建物の屋根の種別はすべてが記載されていないが「萱」「萱苫付」「柿」「瓦」の記述がある。2-9-1 に建物には「七尺御手先三十一間（朱）」とあり、役職に関連する記述は 2-9-1 のみである。

３は２と５の間の広場で、門１は「切手御門」で門は二重になっている。門の西側には便所と考えられる施設が描かれる。３の東側２との境目は直線に点線が描かれる。一方、5-2 の回遊式庭園の区域との境目は直線で描かれる。点線は長屋のある建物の区域を囲う部分線に沿って書かれている。

4-1 は緑色に彩色された区域である。帯状の施設 4-1-2、4-2-3、4-1-4・5、4-1-7 が描かれている。施設の性格は不明である。4-1-4・5、4-1-7 は道で他の区域と接続、5-1 とは南側の道で接続されている。4-1-7･8 は「土蔵」､4-1-9 は橙色に彩色された帆立貝形の施設で性格は不明である。4-2 内の道３は「山下通り」、門３は「清水御門」で根津清水町に隣接していることから町名から名付けられたと考えられる。

5-1-15 は「中門」である。5-1-9 は「長局多聞廻り　三拾八坪半（○に×朱）」と記載され、長方形の建物が加筆されている。5-1-1 ～３は数寄屋風の建物で「瓦」「板」と書かれている。5-2 は回遊式庭園と東側の寺社地との地境には白い帯が描かれている。白い帯は 2-6 西側に描かれている。寺社地を目隠しする土塀と考えられ。5-2-6・7 は３つの橋が架けられた池で庭園には 5-2-5 井戸、5-2-8 鳥居、5-2-9 祠、5-2-6 井戸が描かれる。庭園へは 5-1-15「中門」、5-1-17 の門をいったん潜ってから入るよう道が造成されている。北側の 5-2-1 は門である。2､4-1､4-2､3 と 5-1･2 は北側の道で接続されているが、5-1-15「中門」と 5-2-1 の門によって他の区域とは明確に区画されている。また、「長局」、数寄屋風の建物、回遊式庭園が配置されていることからこの区域は「殿舎（御殿）の区域」と考えられる。

まとめ

Ⅳ - 1-4 図は現在の地形図に明治 16（1883）年の等高線と絵図の区画を重ねた図で、Ⅳ - 1-2 表に区

画と地形、施設と機能を示した。「小笠原」「加賀境」の記述は隣接する「安志藩小笠原家下屋敷」「加賀藩上屋敷」の位置関係を示し、1-1・2 区域は「安志藩小笠原家下屋敷」、「抱屋敷」（原 2010）の範囲を示すと考えられる。加賀藩邸と接する南側は加賀藩邸の形状と一致、心字池からの排水と考えられる川が描かれている。

藩邸内は「御裏御門」から東に延びる「大名小路通り」、「中門」へ至る道と路地によって区画されている。「稲荷」の参道から「中門」へ至る道の東側、5-1、5-2 区域には「長局」、数寄屋風の建物、回遊式庭園があり中門と 5-2-1 の門によって他の区域と明確に区画されている。「中門」へ至る道の西側、2-1 ～ 18 区域には長屋と考えられる建物が記述されている。

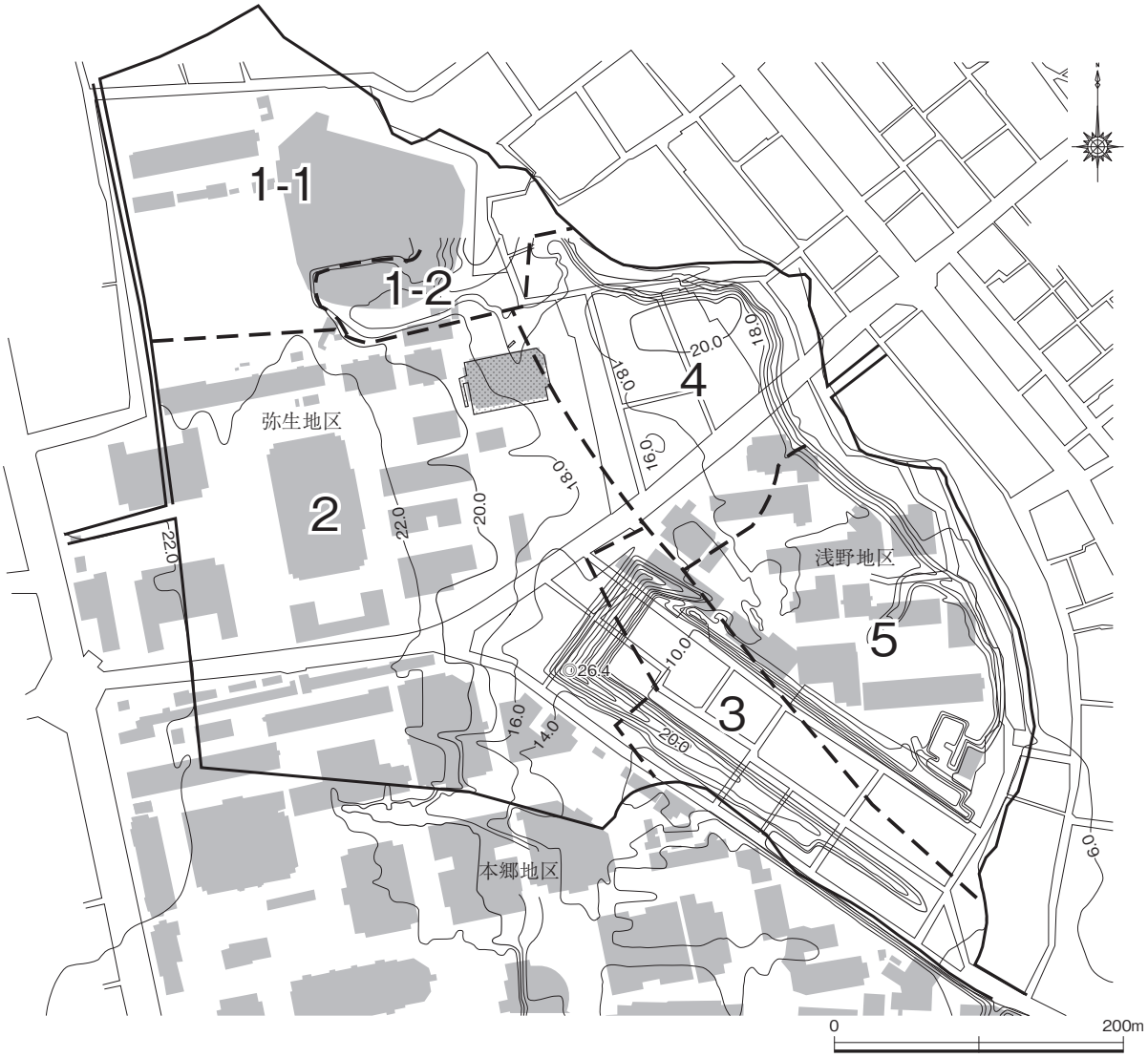
門は西側の「御裏御門」、東側の「清水御門」、南側の「切手御門」の 3 箇所である。『御府内寺社備考　第四冊古義真言宗･真義真言宗･臨済宗』の「東淵寺」絵図には「正慶寺境」「水戸殿御屋鋪境」「水戸殿表門通り」と記述されていることから（註 4）、この部分に駒込邸に隣接し「水戸殿表門通り」と記されていることから「切手御門」が表門に該当する。また、正門とされてきた本郷通り側の門は「御裏御門」と記述されている。一般に藩名の記述の向きは正門の位置を示すとされる。『尾張屋板　江戸切絵図』と『寛永江戸全図』（臼杵市立図書館蔵）とも現在の本郷通り側が頭になっているが、駒込邸にこれらの一般的な記述と門の位置関係が異なる。

「稲荷」の参道から「中門」へ至る道で区画される 5-1・2 区域は「長局」等の建物配置、門で明確に区画されていること、「切手御門」に近いことから「殿舎（御殿）の区域」、2-1 ～ 18 区域は「長屋と役所の区域」と推定した。3 区域については、2 区域とは路地で接続されているため明確に区画されていないが、塀等の施設で長屋のある 2 区画側を目隠しする形で区画されていると考えられる。3 区域の奥には建物が建てられ、道と道で囲まれた部分の形状が曲線で庭園風となっていることから「殿舎（御殿）の区域」に訪れた来訪者の従者などの休憩所のあった区域と推定される。4-1 区域は帯状の施設がある。道で「殿舎（御殿）の区域」と接続されているがこの区域の性格は不明だが 2 区域のように建物は描かれていない。

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の分析を行った。この絵図の発見によって絵図の時点の空間構成が明らかになった。考古資料の検討が可能になり、当地点では建物配置の検討が可能になった。農学部生命科学総合研究棟地点では SR1（道）が、2 と 3、4 と 5 を区画する道であることが明らかになった。今後考古資料の再検討を行い、絵図の年代だけでなくこれ以前について、文献史料と合わせて検討を行っていきたい。

区画		屋敷	施設・機能等	地形
1	1-1 ～ 7	安志藩		西側台地
	2-8 ～ 10	抱屋敷	池	谷
2	1-1 ～ 17	駒込邸	駒込邸長屋・役所	西側台地
3	1 ～ 6		切手御門から殿舎（御殿）の中門へ至る区域。邸内を東西に区画する道に接続	谷
4	1-1 ～ 10			東側島状台地北側
	2-1			東側島状台地下
5	1-1 ～ 17		殿舎（御殿）	東側島状台地南側
	2-1 ～ 9		回遊式庭園	東側島状台地下

Ⅳ - 1-2 表　『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の区画と機能、施設、地形



Ⅳ-1-4 図　駒込邸の区画

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』「明治 16 年陸軍参謀本部測量原図」（註 1）より作成

註

1. 建設省国土地理院所蔵、（財）日本地図センター複製　1984「明治 16 年第一測期第二測図　参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』
2. 原　祐一、堀内秀樹　2006「水戸藩駒込邸の土地利用状況－発掘調査の成果と文献史料の検討－」『文京ふるさと歴史館特別展　徳川御三家江戸屋敷水戸黄門邸を探る』pp.32-41
3. 東京大学埋蔵文化財調査室　2009『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書９　東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ　情報基盤センター変電室１地点　工学部風工学実験室地点　工学部風工学実験室支障ケーブル地点　工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点　工学部武田先端知ビル地点』
4. 「北　水戸殿御屋敷境　西」「西　水戸殿表門通り　南」 註　名著出版 1986『御府内寺社備考　第四冊古義真言宗・真義真言宗・臨済宗』pp.216-218

参考文献

茨城県　1970『茨城県史料　近世政治編Ⅰ』

第２節　教育学部総合研究棟地点・インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点の土地利用の変遷

（１）発掘調査によって確認された遺構・遺物

遺構

今回の発掘調査によって確認された江戸時代～近代に比定される遺構は、教育学部総合研究棟地点（以下、「SK 地点」と略す）で 114 基、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点（以下、「IML 地点」と略す）で 24 基の合計 138 基である。両地点は調査期間が異なっているものの、位置は隣接しており、土地利用に関してほぼ同じ歴史的経緯を持つ。

両地点で確認された江戸時代水戸藩邸に伴うと推定された遺構は、17 世紀後葉～ 19 世紀前葉の廃棄年代を持っていた。このうち比較的多く遺物が出土した遺構の多くが 17 世紀後半～ 18 世紀前葉であったことは、当該地域の土地利用を考える際に重要である。

遺物

出土した遺物は合計でコンテナ 80 箱であり、これは弥生構内の調査では比較的多い出土量である。年代的には遺構の分布同様に 17 世紀後半～ 18 世紀前葉にかかる段階の量が多く確認されている。これらには火災によって被熱した資料も含まれており、火災による一括廃棄が想起される。陶磁器群の内容は、基本的に日常生活に必要な器種で構成されているが、SU83 の「仁清」印の水指、SU84 の雲竜文染付皿なども含まれており、上級階層の居住が想定される。当該期は他の時期に比べて消費活動の痕跡が顕著であるものの、隣接する加賀藩本郷邸の出土量と対比すると明らかに量は少ない。これは土地利用が加賀藩本郷邸ほど濃密ではないことによるものであろう。

（２）両地点の年代別景観

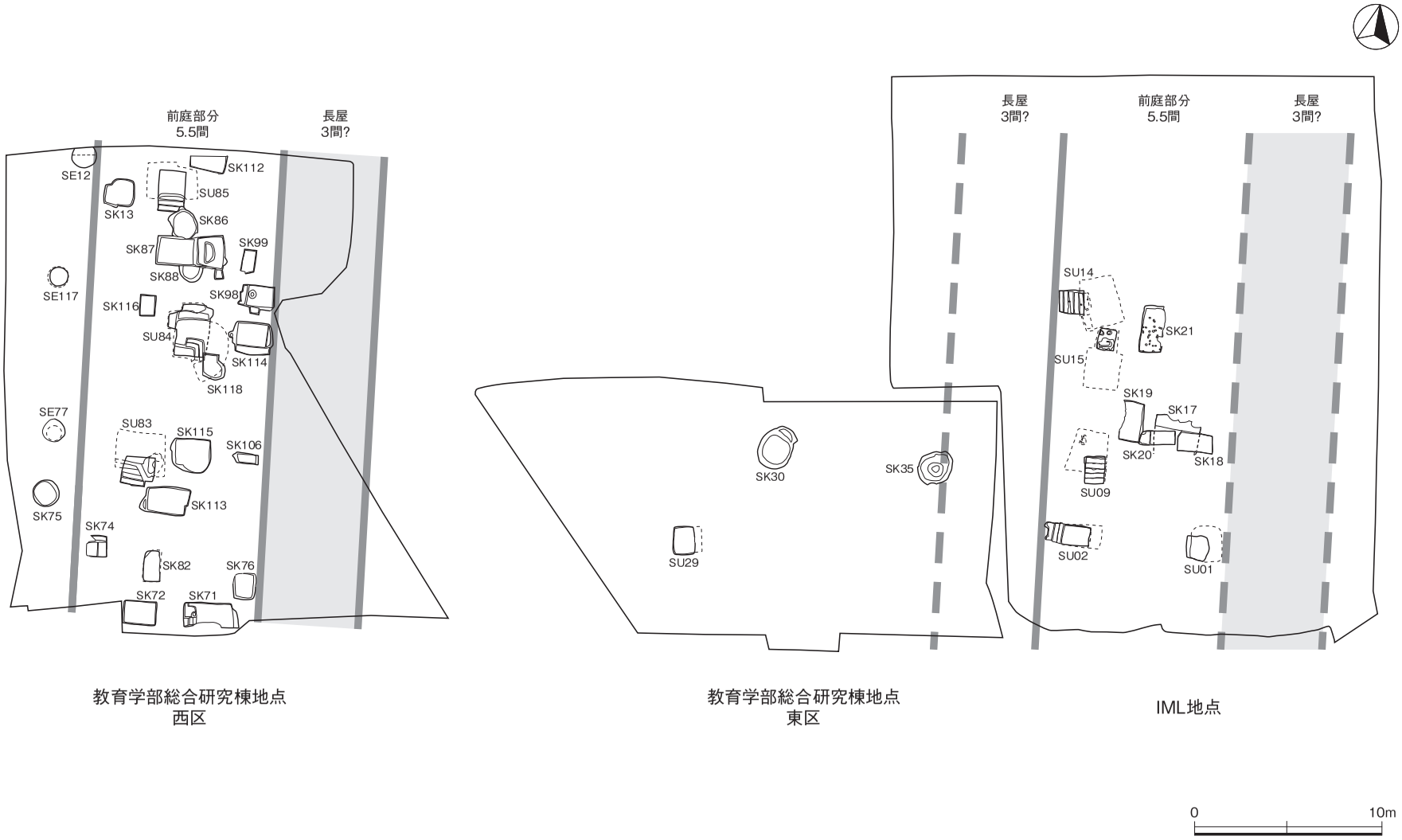
Ⅰ -1 期（水戸藩邸）（Ⅳ - 2-1 図）

17 世紀後半から 18 世紀前葉の段階である。遺構は SK 地点西区、IML 地点に多く分布する。

・SK 地点西区

SK 地点西区では、南から地下室 SU83、SU84、SU85、方形土坑 SK71、SK72、SK74、SK76、SK82、SK115、SK114、SK98、SK87、SK13、SK112、円形土坑 SK78、SK75、SK88、SK86、井戸 SE77、SE117、SE12 が該当する。その他、遺物が出土していない SK113、SK118、SK106、SK116、SK99 など主軸方位が同じで方形を基本形とした遺構群も当該期に含めて考えたい。

これら遺構群はほぼ南北方向に主軸を有しており、一時期に有機的に機能していた可能性が高い。これら遺構群を列としてみた場合、たとえば井戸 SE77、SE117、SE12 はほぼ同一軸に並んでいる。また、地下室 SU83、SU84、SU85 では、SU84 が若干東に触れているが、そのピッチは井戸とほぼ同じで、SE77 の東側やや南に SU83、SE117 の東側やや南に SU84、SE12 の東側やや南に SU85 が構築されている。地下室は全て階段を伴う入り口が具備されていること、構築方向も入り口が南側、室部が北側に構築され、共通性が高い。一方、方形土坑は井戸列と地下室列の中間に SK74、SK13 があるものの数は少ない。数が多いのは地下室列とほぼ同じ幅内で構築されているもので、SK72、SK82、SK113、SK115、SK116、SK88、SK87、SK86、SK112 などがある。地下室列の東側にも SK71、SK76、SK106、SK114、SK98、SK99 などの土坑群が列状に分布している。これらの遺構群同士は切



教育学部総合研究棟地点
西区

教育学部総合研究棟地点
東区

IML地点

Ⅳ-2-1図　　Ⅰ-1 期の遺構と想定される建物配置

り合い関係をあまり持たず、その多くは同時期に存在していた可能性が強いと推定される。この間、最も西側の井戸列と東側の土坑列ではおよそ7間の幅があり、土坑列のさらに東側に南北方向に主軸を有する長屋建物が存在していた可能性が考られる。以上のような遺構の構成やレイアウトは、加賀藩本郷邸では詰人空間の状況と類似している。詳細は後述したい。

・SK 地点東区

SK 地点東区の状況を概観したい。東区で当該期の遺構はSU29が存在するのみである。東区の遺構は総じて遺物の出土が少なく、考古学的に年代を比定することが困難である。植栽痕と推定しているSK30、SK35からは、18世紀の遺物が出土しており、18世紀を含む年代に樹木の植栽などが行われたエリアであったと判断される。

・IML 地点

IML 地点では、出土遺物の年代から当該期に比定できる遺構が確認されている。南から地下室SU01、SU09、SU15、SU14、方形土坑SK17である。この他、同一主軸方位を有する地下室SU02、方形土坑SK19、SK18、SK21なども当該時期の可能性が高い。これらを含めて遺構の配置を考えたい。IML 地点から確認された遺構は地下室や方形土坑は存在するものの井戸は確認されていない。また、遺構配置もSK 地点西区ほど明確な列状を呈していないが、SU02、SU09、SU15、SU14の主体部の位置は、直線的である。入り口部の位置はややズレが認められるが、SU02、SU14とSU09、SU15ではほぼ同一列に構築されている。しかし、SK 地点西区の地下室と異なる点は、階段の有無と部屋の構築方向である。SU09は入り口部はあるもののステップ状の施設は確認できなかった。しかし、はしごを固定したと思われる不整形のピットが入り口直下に存在することから入り口部と室部の区別はあったと思われる。これに比べてSU01は明らかに室部の上部に入り口部が構築されており、他の地下室とは構造的に異なる。これらの違いは構築時期などによるものか。方形土坑は明瞭に列状を呈さないが、いずれもSU01を除く地下室群の軸よりも東側に構築されている。

上記限定された状況で、長屋建物の位置を推定することは難しいがSU02とSU14の入り口部が構築されたラインの西側か、SU01とSK18の東側を可能性として考えている。

・出土遺物の状況

以上の分析に対し、遺物の出土状況を概観してみたい。まず、SK 地点西区、IML 地点出土の遺物群は頻度高く被熱している。火災によって火を受けた陶磁器類を鎮火後に廃棄した可能性が高いと思われるが、遺構群の覆土には焼土を多量に含む層が確認できない。被熱による器面の損傷もそれほど顕著ではないので、土壁、瓦葺きの建物が倒壊して熾き火状態になっていた可能性は低い。焼土が多量に発生しないことも建物の構造と関係していると考えている。次に火災の年代であるが、SK 地点西区SE77、SU83、SU84、SK72、SK74、SK118、IML 地点SU01、SU09、SU15、SK17などからコンニャク印判を伴う肥前系磁器碗JB-1-uが出土している。JB-1-uは東京大学構内出土陶磁器編年Ⅳb期の指標器種で、Ⅳb期の推定実年代は1690～1700年代と考えている。したがって、火災の年代は当該時期もしくはそれと大きく離れない時期と推定できる。

・文献史料による駒込邸

水戸藩駒込邸に関する文献調査は、原祐一氏の研究によるところが大きいので、詳細は参照されたいが（原・堀内2006、原2009、原2010など）、このうち本節で関連する部分を略年表にまとめたのがⅣ - 2-1表である。

水戸藩が駒込邸を拝領するのは、元和8（1622）年である。その後、明暦3（1657）年にいわゆる明暦の大火によって消失した上屋敷として使っていた小石川邸から藩主徳川頼房が一時駒込邸に移っ

		事項
元和 8	1622	駒込邸拝領
明暦 3	1657	小石川邸火災によって頼房、光圀駒込邸に移る
		駒込邸内に史館を置く
万治元	1659	小石川邸再建し、頼房、光圀小石川邸に移る
寛文 12	1672	史館を小石川邸に移す
元禄 16	1703	地震と火災により小石川邸、駒込邸とも被災
正徳 4	1714	駒込邸長屋火災、宮殿以下は別状なし
享保 2	1717	小石川邸全焼、藩主宗堯駒込邸に移る
享保 5	1720	駒込邸長屋 3 棟火災
		小石川邸再建、宗堯小石川邸に移る
享保 7	1722	小石川邸書院 10 軒類焼、宗堯とその夫人駒込邸に避難
享保 8	1723	美代姫（綱條孫）宗堯と成婚、駒込邸より小石川邸に移る
宝暦元	1751	駒込長屋の火事
宝暦 6	1756	駒込邸火事、長屋 7、8 棟延焼
明和 9	1771	「目黒行人坂火事」、駒込邸中士の連屋焼亡
安永 7	1778	駒込邸火事、見付部屋他を悉く消失
安永 9	1780	長屋 1 棟焼失
天明元	1781	長屋 1 棟焼失
		長屋 1 棟焼失
天明 2	1782	長屋 1 棟焼失

Ⅳ-2-1 表　駒込邸略年表

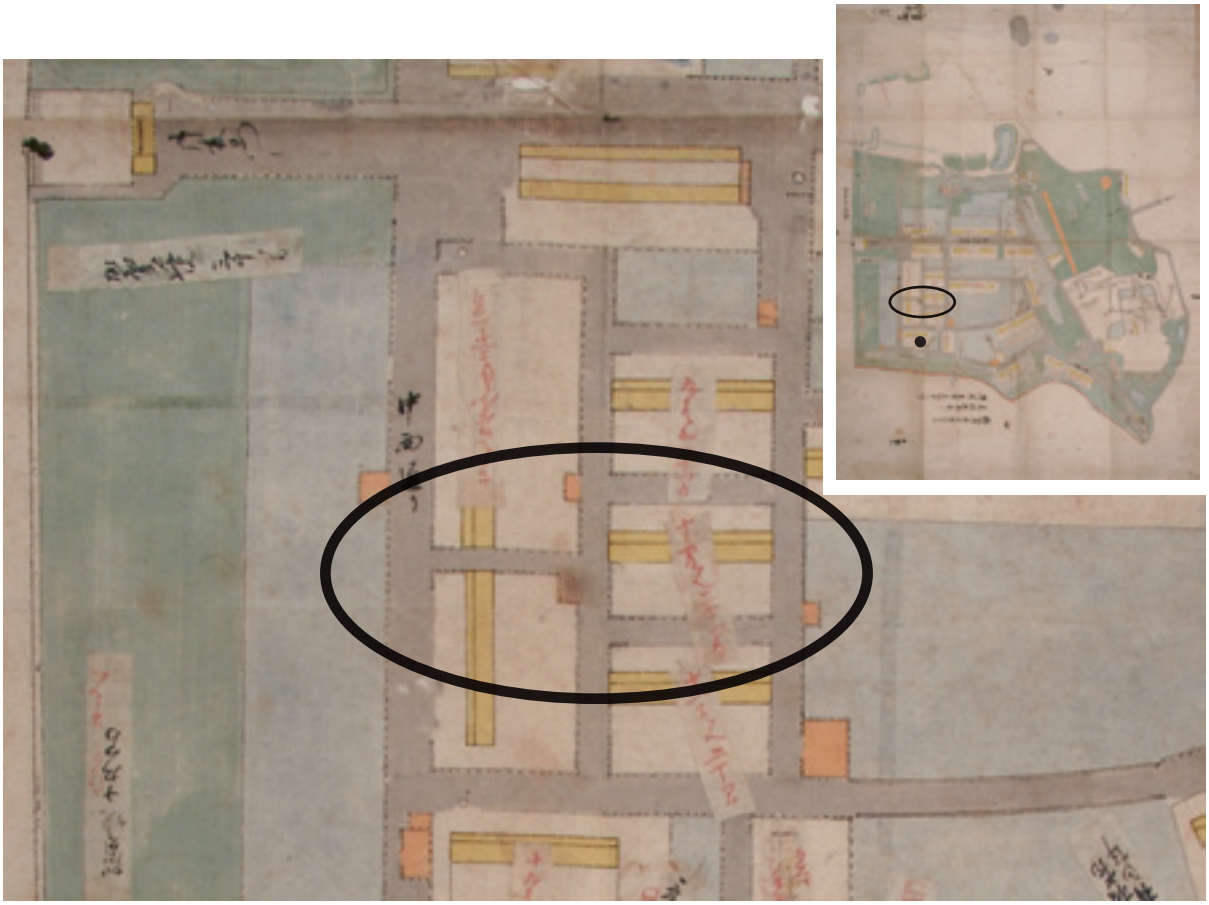
てくる。また、この年、邸内に「史館」を設け、「天下ノ俊才ヲ招キ」（茨城県 1970）修史事業が開始される。万治元（1658）年頼房と光圀は新築落成した小石川邸に戻るが、史館と事業は寛文 12（1672）年に「彰考館」と名を変え小石川邸に移されるまで駒込邸で継続される。

小石川邸との関係を見ると、元禄 16（1703）年、享保 2（1717）年、享保 5（1720）年、享保 7（1722）年と短い間に上屋敷である小石川邸が火災に見舞われるが、こうした際に駒込邸はいずれも避難所として利用されていることが判る。また、享保 7（1722）年には、四代藩主宗堯の婚姻があるが、夫人となる美代姫は、三代藩主綱條の孫で、駒込邸に居住していたらしい。以上のことから駒込邸には藩主やその家族などの居住するに相応しい殿舎が存在していたと考えられる。

・絵図による駒込邸

水戸藩駒込邸を描いた絵図は、個人蔵の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』一枚が知られるのみである（Ⅳ-2-2 図）。絵図には「文政九年」（1826）年の但し書きがあり、19 世紀前半の藩邸の状況が看取される。藩邸の構成は原氏によって詳細に分析されているが、東南に庭園を含む御殿の空間が存在し、長屋建物と推定される棒状の建物は御殿より西側に散漫に分布している。

調査地点である SK 地点、IML 地点付近では西側に南北に延びる長い長屋建物と東側に東西に延びるやや短い長屋建物が存在している。これらの建物の周囲にはそれを取り囲むように何も書かれていない矩形のおそらく空閑地とそれを区画する道が描かれている。絵図には朱や墨書で但し書きの付箋が貼付されており、これが大きな手がかりとなっている。すなわち西側の南北に長い長屋建物には、「七尺御手先三十一間」、東側の東西に主軸を持つ長屋建物には「十尺二十間」と書かれており、やや南北を主軸に持つ長屋建物が長いように思われるが、図上でのおおまかな比率は整合している。また、長屋周囲の空閑地は、東側長屋建物ではおおむね正方形に近い区画に描かれており、区画自体が 20



Ⅳ-２-２図　駒込邸遺跡位置

間程度の幅を有していたことが推定される。

また、●の長屋建物には、「三間ニ二十二間／六十坪柿」と書かれており、長屋の幅が三間であり、屋根が柿葺きであったことが知られる。この他の長屋には「三間半ニ三十六間／柿 百弐拾六坪」、「三間ニ五間／弐拾壱坪 萱」などの記載も見られ、この時代の長屋建物は幅おおむね３間から３間半、屋根は萱葺きあるいは板葺きであったことが推定される。

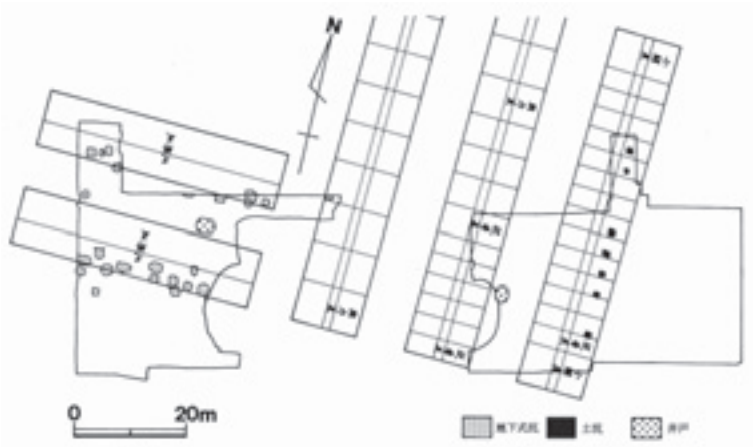
・当該地点付近の景観

ここに描かれている空間構成が17世紀から変化していない確証はないが、SK、IML両地点の遺構の配置は先述のように南北に主軸を持つ長屋建物の可能性が高い。17世紀前半にさかのぼる遺構がないことから、17世紀後半以降に長屋建物が建築された可能性が高い。それは明暦の大火以降に多頻度に及ぶ小石川邸の被災と藩主らの駒込邸への避難、修史編纂の場としての史館の設置など駒込邸の利用法と無関係ではないと思われる。SK地点SU83から「仁清」銘の水指が出土している。もちろん水指は単体で使用するものではないので、仁清の水指と見合う茶道具の存在が想定され、そうしたものを利用する階層が当該地区付近かどうかは判らないが、駒込邸を利用していた証左と考えられる。

先述したようにSK地点西区、IML地点から列状に連なる遺構群が確認され、南北に主軸を持つ長屋建物の可能性とその位置を推定した。加賀藩邸の発掘調査の成果から長屋建物が存在する詰人空間からは井戸、地下室、小型の廃棄土坑などが確認されている。Ⅳ-2-3図は法学部４号館・文学部３号館地点で検出された元禄期の遺構に元禄元(1688)年の藩邸の様子を描いたとされる『武州本郷第図』

を重ねたものである（成瀬 1990）。この絵図面と実際の調査で確認された遺構群は非常によく整合している。西の法学部４号館側には「足軽並」と書かれた東西に長い長屋建物が二棟並んでいる。地下室は長屋建物の南側前庭部分に多く分布しており、井戸は長屋建物の北側に２基存在する。このあたりは既に成瀬氏が指摘している（成瀬 1990、同 2000 など）ここで注意したいのは井戸が共同利用される性格を有す施設であったことである。この二棟の長屋には部屋割りが描かれていないが、隣接する南北方向の「与力並」、「従者並」、「小頭並」と描かれた長屋建物には部屋割りが描かれ、間口と思われる寸法がそれぞれ「四間」、「二間」、「四間」と書かれている。おそらく足軽の間口はこれらより広いことはないであろうことから、二間程度の間口を持つ部屋であったと推定できる。こうした詰人空間の長屋建物の遺構配置や遺構の構成などは水戸藩駒込邸との類似点が高く、大名藩邸共通の様相として捉えられる可能性がある。

『武州本郷第図』では長屋の配置は、加賀藩本郷邸の長屋間は「五間」と書かれているが、『向陵彌



Ⅳ-２-３図　法学部４号館・文学部３号館地点遺構配置

生町舊水戸邸繪図面』をみると長屋建物がかなり散漫に描かれており、先述のように空閑地を含めて 20 間程度の間隔が認められる。一方、調査区では SK 地点西区における遺構群は、先述のように 7 間程度の幅を有し、これに長屋建物の幅 3 間程度を合わせると、これだけで 10 間になる。井戸列のさらに西側の状況は不明であるが、地下室などはいずれも階段を伴うものであり、先に挙げた法学部 4 号館地点の地下室がいずれも袋状のものであることを勘案すれば、ゆとりを持って構築されているとも言える（成瀬晃司氏ご教示）。また、東側を見ると地下室や土坑が集中している地域は IML 地点まで拡がりをみせないことから、おそらく SK 地点西区から IML 地点までの 25 間程度の間には長屋建物は存在しなかった可能性が強く、SK 地点西区と IML 地点に南北に長い長屋建物がⅣ - 2-1 図の様に展開していたと考えている。

次に部屋の間口であるが、礎石建てでないことから推定は難しい。山上会館龍岡門別館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）や医学部附属病院病棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）検出の長屋建物のように絵図面との整合や礎石で間仕切りが確認されている例などはそれができた好例であろう。SK 地点西区の井戸と地下室は位置関係が類似しており、ほぼ一定に構築されている。SU83、SU84、SU85 の入り口部分の距離は 7.5m 程度で、これの東方に井戸が存在する。こうした状況から、あるいは間口 4 間もしくは 2 間など、4 間程度を単位とした区割りがあった可能性が考えられる。

ここで取り上げた遺構群はいずれも 17 世紀末～ 18 世紀初頭の遺物群が廃棄されていたことは、既

に指摘した。当該地の被災記録から年代を推定すると元禄16(1703)年、正徳4(1714)年、享保5(1720)年がある。典型的なJB-1-uが既に一定量存在すること（SK74-1、SE77-2、SU83-6、SU84 1～8など）、黒褐色の胎土を持つ打刷毛目の肥前系陶器碗（TB-1-h、SK72-3、SU83-20など）があることなどから、元禄16（1703）年の火災よりも若干下がる可能性があると思われる。現段階では正徳4（1714）年あるいは享保5（1720）年の蓋然性が高いと思われる。

Ⅰ-2期（水戸藩邸）

18世紀中葉以降の遺構は極端に減少する。SK地点西区のSK81、SE97、東区のSK28のみである。SK81、SE97の出土遺物を見ると、小広東碗（JB-1-i）、広東碗（JB-1-m）、筒形碗（JB-1-l）、青磁染付などが含まれ、図示はしていないがSK81では肥前系磁器八角鉢（JB-5-e）、SE97では瀬戸・美濃の磁器端反碗（JC-1-d）が少量混じるなど18世紀後葉～19世紀初頭の様相を示している。この陶磁器様相は唯一残る絵図面『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の文政9（1826）年には降らないと思われる。西区ではこの他に当該期の遺構が確認されていないので判断は難しいが、SK81が長方形の廃棄土坑であり、その主軸方位はⅠ-1期の遺構軸や『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に描かれたものとほぼ変化がないことから、この間は基本的な主軸は変化していないと推定できる。

では、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に描かれている建物は、いつ造られたものであるのか？享保年間以降の屋敷の火災をⅣ-2-1表から拾ってみると、宝暦元(1751)年、宝暦6(1756)年、明和9(1771)年、安永7（1778）年、安永9（1780）年、天明元（1781）年、天明2（1782）年に記録されている。このうち安永7年は「見付部屋他を悉く焼亡」と記載されており、これ以降の屋敷構成が基本となっていると思われる。

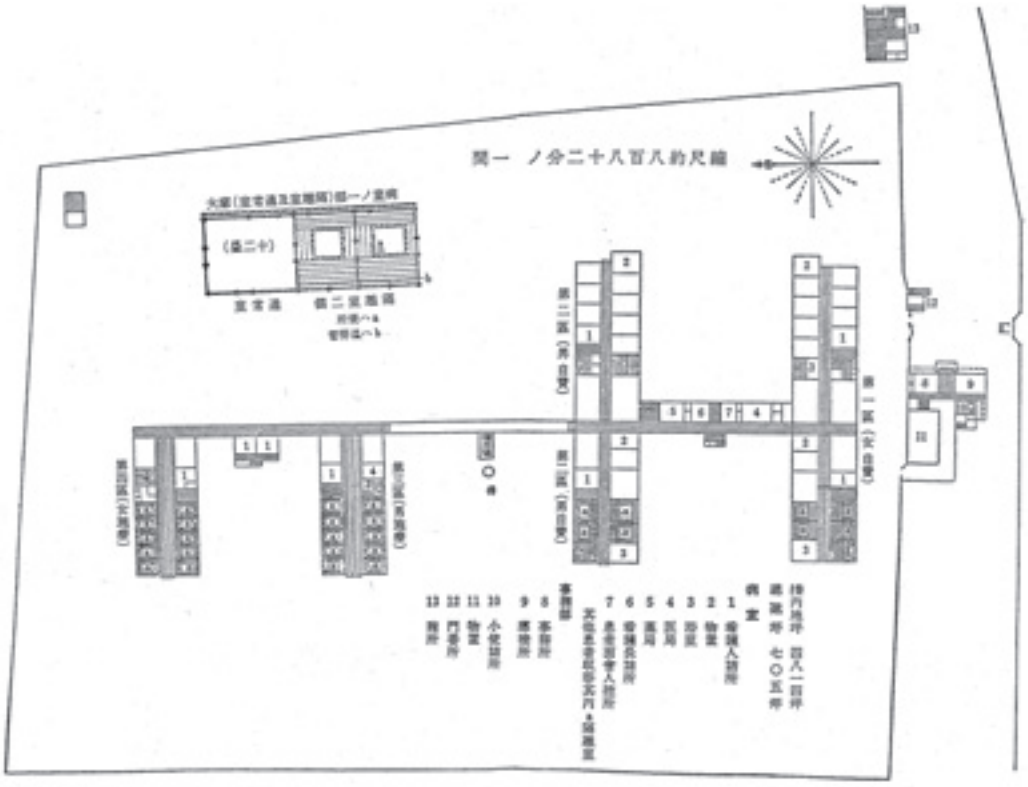
本地点付近にも「七尺御手先三十一間」、「十尺二十間」と朱書きされた長屋建物が描かれている。しかし、文政9年以降の廃棄年代を有する遺構が確認されていない。あるいは朱書きが建築予定建物に付けられたものか？現段階では確認できない。

Ⅱ期（近代）

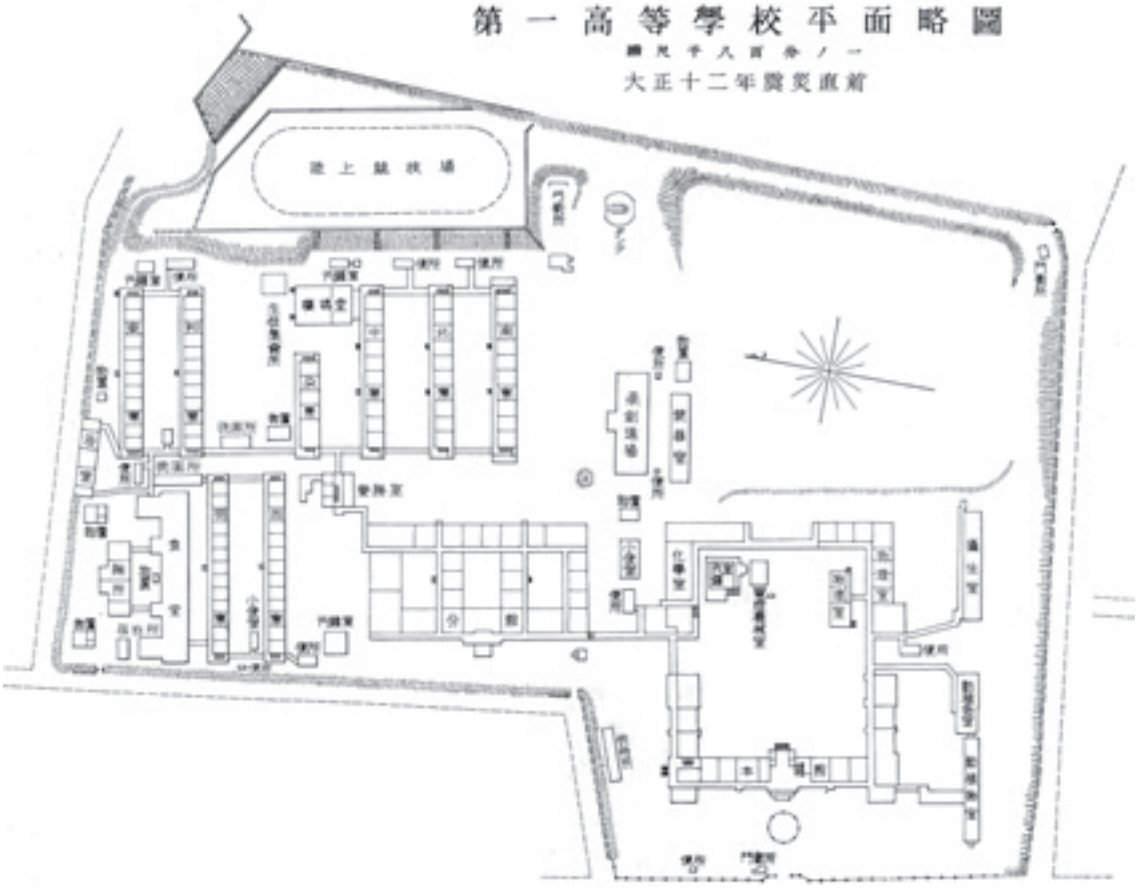
近代の遺構、遺物については、調査の主眼ではなかった関係で、建築遺構と近世の可能性のある遺構として調査したものに限られた。

両調査地点で確認された帝国大学以前の近代に比定される遺構は、SK地点西区ではSB120と遺構として調査はしていないが、土管の埋設溝、東区ではSD11、東西に列状に並ぶSP01、02、03、19、22、16や2×2間あるいは2×3間程度の掘立柱建物の存在が推定できる一辺25～30cm程度の方形ピット群（SP42～59）、IML地点ではかすがい状を呈するSK04、03、12などである。これらの遺構から出土する遺物は少ないので、遺物から年代比定が行うことができなかったが、SK地点東区では灰を多く含む硬化面にパックされており、包含されている遺物からこの灰層が大正12（1923）年の関東大震災によるものと考えられることから、それ以前に機能していたと思われる。また、SK地点西区SB120の基礎栗石に使用しているレンガは付けられているマークから明治44（1911）年に東京市が東京鉄道株式会社を買収し、東京市電気局を創設して路面電車と電気供給事業を開始した以降のものであることから、SB120は明治44年から大正12年の間である可能性が高い。

一方、文献史料から明治2(1868)年に水戸藩駒込邸が明治政府に収公され、その後、当該地点付近は、東京府用地→東京府癲狂院(明治14～明治19)→第一高等学校(明治22～昭和10)→東京帝国大学(昭和10～）と変遷していることが確認されている。Ⅳ-2-4、5図は東京癲狂院と大正12年関東大震災



Ⅳ-２-４図　東京府癲狂院　（S=1/1,500）



Ⅳ-２-５図　第一高等学校　（S=1/3,000）

直前の第一高等学校の建物配置である（岡田靖雄 1981、島連太郎 1939）。これらには両地点から確認されている遺構群に対応できるものが存在しない。東京府癲狂院では当該地付近は「第一區（女 自費）」と書かれている病棟から門番書、物置、事務所と書かれている入り口付近であろうと推定される。また、第一高等学校では「攝生室」と書かれた東側、広場の東南部分であろうと思われる。SD11 は運動に使用されたと思われる遊具の痕跡と考えており、位置的にもこうした施設が存在することに齟齬はない。SD11 と類類似した形態を持つ例は、明治 7（1874）年に設立した陸軍戸山学校（東京都埋蔵文化財センター 2008）、明治 24 年から使用された駒場練兵場（加藤建設株式会社 2006）などから確認されている。以上のような経緯から SK 地点西区 SB120 や東区掘立柱建物などは図面に書かれた時代とは異なる存在期間を有する建物であろうと推定される。

（3）小結

確認されている遺構、遺物について年代別に景観を概観した。この他発掘調査によって確認されなかった時代を含めて当該地点の状況について再確認したい。

駒込邸は拝領が元和 8（1622）年であるとされている。しかし現時点では考古学的調査によって両地点以外にも 17 世紀前半にさかのぼる遺構は確認されていない。遺構・遺物が確認されるのは 17 世紀中葉以降であり、17 世紀後葉～ 18 世紀前葉にかけての時期が最も多く確認されている。これは、文献史料で明暦の大火の待避、史館の設立とそれに伴う学者などの居住などとリンクするものと推定できる。現状では御殿やその付近の考古学的調査を踏まえていないので、明確な言及を避けたいが当該期に駒込邸内の利用が活発化したことは間違えないだろう。当該地点においても長屋建物が建築され、「仁清」の水指などを使える階層の人間が付近に居住していたことも推定できた。

18 世紀中葉以降には、極端に遺構・遺物数共に減少する。数は少ないながら台地上の他の調査地点にも同じような傾向が認められることから、東側台地上は活発な活動がされていなかったと推定される。また、19 世紀の駒込邸における土地利用を考える点で『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』は重要な情報を提供してくれる。17 世紀後葉～ 18 世紀前葉を含めて台地上は継続的に長屋空間であったことが確認できたことは、今回の大きな収穫であった。

【引用・参考文献】

岡田靖雄　1981 『私説 松沢病院史－ 1879 ～ 1980 －』岩崎学術出版社

小川　望　2008 『焼塩壺と近世の考古学』同成社

小川夕子・岩渕令治　2000 「第Ⅳ章　水戸藩邸関係文献調査の成果」『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点』文京区役所・文京区遺跡調査会

加藤建設株式会社　2006 『騎兵山遺跡』

加藤　晃　1989「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』第 14 号　國學院大學日本史学専攻大学院会

金子　智　1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』第 101 号　早稲田大学考古学会

坂詰智美　1996 「第 10 章　記録に見られる遺跡の環境」『春日町遺跡・菊坂下遺跡・駒込追分町遺跡・駒込浅嘉町遺跡・駒込富士前町遺跡』地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会

桜井準也　2006 『ガラス瓶の考古学』六一書房

島連太郎　1939 『第一高等学校』三秀舎

鈴木正章　1989 「第 3 章　遺跡の層序と地質学的調査・分析」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7 号館地点』東京大学遺跡調査室

東京大学遺跡調査室　1989 『東京大学本郷構内の遺跡　理学部 7 号館地点』

東京大学遺跡調査室　1990a 『東京大学本郷構内の遺跡　法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』

東京大学遺跡調査室　1990b 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

東京大学構内雨水調整池遺跡調査会　1994 『本郷追分』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990 『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

東京大学埋蔵文化財調査室　1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1)』東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊

東京大学埋蔵文化財調査室　2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2005a 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2005b 『東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2006 『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

東京大学埋蔵文化財調査室　2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

成瀬晃司　1997 「医学部附属病院看護婦宿舎地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室

細川　義　1989 「江戸時代における理学部 7 号館地点の変遷」『東京大学本郷構内の遺跡　理学部 7 号館地点』東京大学遺跡調査室

堀内秀樹　1996 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室

東京都埋蔵文化財センター　2008 『新宿区 尾張藩徳川家下屋敷跡Ⅴ』

常盤神社・水戸史学會編著　1978 『徳川光圀関係資料水戸義公傳記逸話集』

都内遺跡調査会　1996 『溜池遺跡』

成瀬晃司　1990 「江戸藩邸内土地利用の研究の一指針」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室

成瀬晃司　2000 「考古学からみた加賀藩本郷邸「詰人空間」」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館

橋本真紀夫　2009 「東京大学浅野地区の方形周溝墓」『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』東京大学埋蔵文

化財調査室
原　祐一・堀内秀樹　2006 「水戸藩駒込邸の土地利用の状況－発掘成果と文献史料の検討－」『水戸黄門邸を探る』文京ふるさと歴史館
原　祐一　2009 「向ヶ岡弥生町の研究」、「徳川齊昭と水戸藩邸」『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』東京大学埋蔵文化財調査室
原　祐一　2010 「水戸藩駒込邸の研究　藩邸内外の景観と造園の検討」『東京大学史紀要』第 28 号 pp.41-63 東京大学史史料室

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき　きょういくがくぶそうごうけんきゅうとうちてん いんてりじぇんと　もでりんぐ　らぼらとりー　ちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡　教育学部総合研究棟地点、ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄ・ﾓﾃﾞﾘﾝｸﾞ・ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ地点							
副書名								
巻次	10							
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	堀内秀樹、小林照子（編）、原　祐一、阿部常樹、石井龍太、大貫浩子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室			所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 ☎ 03-5452-5103			
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
東京大学本郷構内の遺跡（本郷台遺跡群）教育学部総合研究棟地点	東京都 文京区 弥生1丁目 1番1号	13105	47	35° 42′ 56″	139° 45′ 39″	1993年 11月18日～ 12月28日	1007㎡	教育学部総合研究棟地点新営に伴う事前調査
東京大学本郷構内の遺跡（本郷台遺跡群）インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点	東京都 文京区 弥生1丁目 1番1号	13105	47	35° 42′ 57″	139° 45′ 40″	1996年 4月15日～ 6月20日	626㎡	ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄ・ﾓﾃﾞﾘﾝｸﾞ・ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ新営に伴う事前調査
所収地点名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
教育学部総合研究棟地点	武家屋敷（水戸藩駒込邸） 学校（第一高等学校）	近世 近代	地下室、井戸、土坑、小穴、溝		陶磁器、土器、金属製品、石製品、瓦（近世・近代）、ガラス製品、レンガ			
インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点	包蔵地 武家屋敷（水戸藩駒込邸） 学校（第一高等学校）	旧石器 近世 近代	地下室、土坑、小穴、溝		陶磁器、土器、金属製品、石製品、瓦（近世・近代）、ガラス製品			

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 10
東京大学本郷構内の遺跡

教育学部総合研究棟地点
インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点

2011 年 3 月 31 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4-6-1
印　　刷　能登印刷株式会社